

日本語とフィンランド語の動詞の意味範囲の対照研究

あげる — NOSTAA

千葉大学大学院
社会文化科学研究科
平成10年度 博士論文
ペトリ・ニエメラ
96AD1009

目次

序論

(1) 研究の目的	1
(2) 対照研究について(対照研究の意味と目的を説明する)	2
(2.1) 言語を対比すること	2
(2.2) 比較の対象範囲(Object of contrast)	4
(2.3) 対照の目的である「同価値」	5
(2.4) 同価値の段階	6
(3) 語の意味の対照について	7
(3.1) 意味とは何か	7
(3.2) 脳の中の言語	8
(3.3) 語と概念の関係	9
(3.4) 語の意味の分類	10
(3.5) 語の多義性	11

本論

第1章 動詞「あげる」と「NOSTAA」について

第1節 「動詞」とは何か	13
(1) 世界と概念と動詞の関係	13
(2) 動詞の定義	13
(3) 日本語とフィンランド語における動詞	16
(4) 動詞の意味範囲	18
(5) 動詞の対照の基準	22
第2節 研究対象「あげる」	23
(1) 辞書の中の「あげる」	23
(1.1) 研究社の新和英中辞典	24
(1.2) 小学館プログレッシブ和英辞典	26
(1.3) 外国人のための基本語用例辞典	29
(1.4) 新明解国語辞典	30
(1.5) 広辞苑	31
(1.6) 大辞林	34
(2) 辞書における「あげる」の意味分類のまとめ	36
(3) 多義語の意味分類	39
(4) 機械翻訳用「日本語意味辞書」	41

(5) 『動詞の意味・用法の記述的研究』の分類	45
第3節 研究対象「NOSTAA」	69

第2章 意味記述の方法について

第1節 辞書記述と意味記述の相違点	74
第2節 格構成による意味記述	75
(1) 格文法による深層構造の記述	75
(2) 格文法の問題点	76
(3) 結合価理論と格文法の統合	78
(4) 機能文法の例	79
第3節 意義素分析による意味記述	82
(1) 意義素	82
(2) 意義特徴	82
(3) 意味特徴の特定	83
(4) 意義素分析の例	85
(5) 同音異義語と多義語の区別	86
第4節 意味素成による意味記述	89
(1) 概念意味論の理念	89
(2) 概念意味論の概念構造	90
(3) 概念意味論による意味記述	93
(4) 概念意味論に関する疑問点	95
第5節 「あげる」の記述	98
(1) 「あげる」の用法を分解する	98
(2) 「あげる」の意味の意義素分析での記述	98
(3) 「あげる」の概念意味論による記述	99
(4) 「あげる」の特徴の束と意味派生と意味構造	100

第3章 「あげる」の意味記述

第1節 多義語の意味記述	101
(1) 動詞の多義性の記述	101
(2) 基本的な意味と派生的な意味	103
第2節 「あげる」の意味構造	109
(1) 対象が具体物	109
(1.1) 基本的な上昇	109
(1.1.1) 基本的な上昇の換喩表現	109
(1.1.2) 基本的な上昇の比喻表現	111

(1.1.3) 基本的な上昇の生産性の高い比喩表現	111
(1.1.3.1) 「神に捧げることを連想させる比喩表現	112
(1.1.3.2) 「人に与えることを連想させる比喩表現	112
(1.1.3.2.1) 動作を与える「助動詞」の場合	112
(1.1.3.2.2) 「あげる」から転じた「丁寧」の意味の「複合動詞」	113
(1.1.3.3) 油で煮る場合	113
(1.1.3.4) 物の完成を連想させる比喩表現	114
(1.1.3.4.1) 「終わらせる」あるいはほか意味から更に比喩表現に変わったもの	114
(1.1.3.4.2) ある金額内におさめる場合	114
(1.1.3.4.3) 物の完成を連想させる比喩表現からの複合動詞	115
(1.2) 到着点が遠い場合の基本的な上昇	115
(1.3) 基本的に「水から地面へ」と移動する場合	115
(1.4) 対象が動作主とつながっている場合	116
(1.4.1) 動作主とつながっている対象の比喩表現	117
(1.5) 動作主の部分である対象	117
(1.5.1) 対象が動作主の一部である場合の換喩表現	118
(1.5.2) 対象が動作主の一部である場合の比喩表現	118
(1.6) 対象が具体物でない場合	119
(1.6.1) 数えられない対象の比喩表現	120
(1.6.2) 特殊な数えられない物の場合	120
(1.7) 想像の中にある対象の場合	120
(1.8) 基本的な上昇の複合語	121
(2) 対象が意志をもつ具体物	121
(2.1) 意志をもつ具体物が動物である	121
(2.2) 意志をもつ対象が子供など動作主と対等でないものである	121
(2.2.1) 対象が子供であるが、到着点がない場合	122
(2.3) 意志をもつ対象が大人である	122
(2.3.1) 意志をもつ対象の換喩表現	123
(2.3.2) 意志をもつ対象の比喩表現	123
(2.4) 意志をもつ対象が群集である	124
(2.4.1) 「群集をあげる」意味からの生産性の高い比喩表現	124
(2.5) 意志をもつ対象が犯罪者である	124
(3) 対象が抽象的なものである場合	125
(3.1) 抽象的な対象が声である	125
(3.1.1) 「声をあげる」場合の換喩表現	126
(3.1.1.1) 換喩表現からの対象がはっきりした言葉になった場合	126

(3.1.1.2) 換喩表現からさらに連想した比喩表現	127
(3.1.1.3) 換喩表現から派生した複合動詞	128
(3.1.2) 声をあげることからの比喩表現	128
(3.2) 抽象的な対象が高低で判断される次元のものである場合	128
(3.2.1) 抽象的な対象の換喩表現	130
(3.2.1.1) 換喩表現からの比喩表現	131
(3.2.2) 抽象的な対象の比喩表現	131
(4) 「あげる」の意味のまとめ	132

第4章 フィンランド語との対比

第1節 対照の基礎	134
(1) 「あげる」とフィンランド語との対照の出発点	134
(2) 本研究の対照方法	136
第2節 「あげる」の意味構造のフィンランド語との対照	139
(1) 対象が具体物	139
(1.1) 基本的な上昇	139
(1.1.1) 基本的な上昇の換喩表現	140
(1.1.2) 基本的な上昇の比喩表現	143
(1.1.3) 基本的な上昇の生産性の高い比喩表現	144
(1.1.3.1) 「神に捧げること」を連想させる比喩表現	144
(1.1.3.2) 「人に与えること」を連想させる比喩表現	145
(1.1.3.2.1) 動作を与える「助動詞」の場合	146
(1.1.3.2.2) 「あげる」から転じた「丁寧」の意味の「複合動詞」	147
(1.1.3.3) 油で煮る場合	148
(1.1.3.4) 物の完成を連想させる比喩表現	149
(1.1.3.4.1) 「終わらせる」あるいはほか意味から更に比喩表現に変わったもの	150
(1.1.3.4.2) ある金額内におさめる場合	150
(1.1.3.4.3) 物の完成を連想させる比喩表現からの複合動詞	151
(1.2) 到着点が遠い場合の基本的な上昇	152
(1.3) 基本的に「水から地面へ」と移動する場合	152
(1.4) 対象が動作主とつながっている場合	153
(1.4.1) 動作主とつながっている対象の比喩表現	155
(1.5) 動作主の部分である対象	156
(1.5.1) 対象が動作主の一部分である場合の換喩表現	158
(1.5.2) 対象が動作主の一部である場合の比喩表現	160
(1.6) 対象が具体物でない場合	160

(1.6.1) 数えられない対象の比喩表現	164
(1.6.2) 特殊な数えられない物の場合	164
(1.7) 想像の中にある対象の場合	165
(1.8) 基本的な上昇の複合語	165
(2) 対象が意志をもつ具体物	166
(2.1) 意志をもつ具体物が動物である	166
(2.2) 意志をもつ対象が子供など動作主と対等でないものである	166
(2.2.1) 対象が子供であるが、到着点がない場合	167
(2.3) 意志をもつ対象が大人である	168
(2.3.1) 意志をもつ対象の換喩表現	169
(2.3.2) 意志をもつ対象の比喩表現	170
(2.4) 意志をもつ対象が群集である	171
(2.4.1) 「群集をあげる」意味からの生産性の高い比喩表現	171
(2.5) 意志をもつ対象が犯罪者である	172
(3) 対象が抽象的なものである場合	173
(3.1) 抽象的な対象が声である	173
(3.1.1) 「声をあげる」場合の換喩表現	175
(3.1.1.1) 換喩表現からの対象がはっきりした言葉になった場合	177
(3.1.1.2) 換喩表現からさらに連想した比喩表現	180
(3.1.1.3) 換喩表現から派生した複合動詞	181
(3.1.2) 声をあげることからの比喩表現	181
(3.2) 抽象的な対象が高低で判断される次元のものである場合	182
(3.2.1) 抽象的な対象の換喩表現	187
(3.2.1.1) 換喩表現からの比喩表現	189
(3.2.2) 抽象的な対象の比喩表現	190
(4) 翻訳対照の結果	191
(5) 「あげる」と「NOSTAA」などの対照	200
結論	
(1) 「あげる」の多義性	203
(2) 「あげる」の意味と格の関係	204
(3) 二言語間の動詞の対照	206
参照文献	210
用例作品	213

記号の説明

N=Noun,Pronoun 名詞・代名詞

V=Verb 動詞

Adj=Adjektive 形容詞

Adv=Adverb 副詞

Num=Numeral 数字

Intp=Interrogative Pronoun 疑問詞

Conj=Conjunctive 接続詞

Postp=Postposition,Particle 後置詞・不変化詞

Prep=Preposition,Particle 前置詞・不変化詞

nom=nominative 主格 (主語)

gen=genetive 属格 (何々の)

acc=accusative 対格 (目的語全体)

part=partitive 分格 (目的語の部分)

ess=essive 様格 (何々として)

trans=tranlative 変格 (変化の結果に)

ines=inessive 内格 (場所で)

elat=elative 出格 (場所から)

ill=illative 入格 (場所へ)

ades=adessive 所格 (場所で・何かで)

abl=ablative 離格 (場所から)

all=allative 向格 (場所へ)

abes=abessive 欠格 (何々なしで)

ins=instrutive 具格 (方法で)

com=comitative 共格 (誰かと共に)

sg=singular,possesive suffix 単数・所有接尾詞

pl=plural,possesive suffix 複数・所有接尾詞

1,2,3,4inf=first,second,third,fourth infinitive 動詞の不定形 1・2・3・4

past=past form 過去形

prt.prs=preesens partisiple 現在分詞

prt.prf=perfect partisiple 過去分詞 (「olla」動詞と共に現在完了・過去完了)

imp=imperative form 命令法

pot=potential form 可能法

cond=conditional form 条件法

pas=passive 受け身

日本語とフィンランド語の動詞の意味範囲の対照研究 あげる—NOSTAA 等

序論

(1) 研究の目的

ある一定の言語を使うすべての人間の集団のなかで、それぞれの個人は、自分自身の特有の言語習慣をもち、他人と個性的に区別されている。しかし、同じグループの中でコミュニケーションが成り立つためには、個人差は互いに分かる範囲内に限る。同じようにどの言語も世界のあらゆる物や事を分割し、範疇化する固有の形式をもっている。しかし、固有の言語は地理的に遠く離れているほど差異が多くなるにもかかわらず、人間の使う言語活動は、どの言語の場合でも非常に似ているともいえるだろう。どの言語の話者も、人間という生き物に特有の音しか出せないし、われわれの誰もが、その気になれば、他人の言語を習得できるのである。ただし、自分にとって新しい言語、特に遠い国の言語の習得は容易なことではない。例えば、日本語をならう外国人が直面する問題は、「アクセントはどこに置くか」(発音の区別)や「どの助詞を使えばいいか」(文法的な要素の区別)や「形容詞は動詞と区別するか」(語彙の意味の区別)などのようにさまざまである。しかし、このような問題はすべて、それぞれの言語の固有の発展の結果である。現在のグローバル化された世界の中では、特に先進国の間では、情報は国境を問わず猛烈なスピードで広がり、世界的に共通の概念が次々と誕生する。また、数ある言語の中には、その発展に必要な時間が与えられずに消えていくものもある。このように言語の同化が進んでも、そして共通の概念が増えなくても、生き残る言語の固有性は完全になくなることはないだろう。

では、固有性は、言語のどの分野まで及ぶかという点、音韻・語彙・形態・統語のすべての文法的な要素だけでなく、語用論を含む言語生活の全面に見られている。しかし、それが最も目立つのは、語彙の意味のなかである。ある言語の語意を他言語の類似の語意と対応させたときに、それは、明らかになる。例えば、日本語の「できる」という動詞の意味を大雑把にフィンランド語の動詞に比較すると(a-d¹)、その「できる」に相当する動詞の機能はだいぶ違うことが分かる。

- a) Osaan tulla sinne. = 来ることができる。「行く道が分かる」(osata)
- b) Voin tulla sinne. = 来ることができる。「都合がいい」(voida)
- c) Kykenen tulemaan sinne. = 来ることができる。「体の調子がいい」(kyetä)
- d) Saan tulla sinne. = 来ることができる。「許可をもらった」(saada)

このように見て、語意の対照言語的な比較は、言語の語意の固有性を明確に取り出すために有用な方法であり、類型論的な語意の比較にも道を開くものではないかと思う。この研究の第一の目的は、「あげる」とフィンランド語の「NOSTAA」等の移動動詞を対比し、それぞれの動詞の意味から特有の要素と類似的な要素を特定し、類似点はどの程度普遍的であるか、固有の要素は

¹ 動詞の機能の違いを分かるために、助動詞「られる」や名詞「可能」を含めた詳しい意義素分析が必要であるが、ここでは表面的に単純な例を出しただけである。

どの程度個別言語的であるかを考察することである。

もちろん本格的な語意の類型論的記述を行うためには、多言語的な語意の比較を行う必要があるが、本論で行うような二言語的な語意対照は、そのための基礎的な作業であるといえるだろう。以下の記述によって明らかになるように、二言語的な語意比較においてさえ言語の意味研究に関する本質的な問題が多く現れ、その多くは未だに解決できない。従って、この論文の第二の目的は、日本語の基本的な語の一つを取り上げ、それをフィンランド語に対応すると思われる語に当てることによって、二カ国語間の語意対照における本質的な問題を表面化し、その問題を解決するための方法論的な考察を行うことにある。本論は、将来にわたる日本語・フィンランド語の対照研究のための基本的な土台を確立するための礎石をなすものである。

(2) 対照研究について

(2.1) 言語を対比すること

どの学問でも新しい発見をするために、あるいはあるものの特徴を探るために、周辺の同類のものと比較することは頻繁に使われる方法の一つである。言語学という学問の原点もこういった比較に基づいていると言えるだろう。18世紀の終わり19世紀の初め頃、言語研究が本格的に始まったきっかけも、言語の比較によって発見された言語の歴史的な関連である。当時のヨーロッパを中心とした研究は、最初はキリスト教の「バーベルの塔」神話に基づいて進められたが、次第に世界が広くなるに連れ、言語にはさまざまな形があり、全てが同類のものから分類したのではないことが分かった。このような発見から、言語の歴史的な研究は、以下に述べる類型論的な研究などに発展してきた。

言語比較は、どの言語が人間のコミュニケーション能力にとって一番適切であるか、といったような基準で行うことはけっしてできない。例えば、日本語のほうがフィンランド語より語の変化が少ないから効率的である、あるいは日本語のほうが歴史的な文献が多いので価値が高い、というような言語の比較は無意味である。なぜなら、どの言語もそれぞれの地域社会に適用し、発展してきたからである。言語を全体として対比するのは、人間の言語行動に特有の特徴を研究するときだけである。このような特徴は、例えば Edwards の述べる、人間の言語が動物のコミュニケーション能力と異なる要素、(displacement)場所と時間と関係なく話すこと、(productivity)常に新しい前に述べたことのない発話を限りなく生産できること、(traditional transmission)言語を次の世代に伝えられること、そして(pattern duality)少ない数の音の組み合わせで多くの意味の異なった単語を形成できることなどである(Edwards 1995/18)。

上述のように言語の諸相を全体的に比較するのではなく、部分的にも、言語は比較することができるし、その比較の結果は、それぞれの研究分野の観点によって、さまざまな形で役に立っている。今現在、このような言語の対比に基づく研究分野は、大きく分けて次の5種ある。

- a)「歴史・比較言語学」は、言語の比較によって言語の親族関係を明らかにし、語族を形成しようとする。

- b)「言語類型論」は、構造上の特徴を比較することによって、言語を範疇に分類することを目指している。
- c)「言語地理学」は、名前とおりに地理的に近い言語を対比させて、互いの影響関係などを明らかにしようとする。
- d)「翻訳学」は、言語学と区別される学問であるが、その中では、言語の比較によって同価値の訳を研究する分野もある。(Koller 1979/103)
- e)「対照研究」は、二つの言語を対照し、両言語における表面化しない要素を明らかにしようとする。

第一の研究分野は、比較を道具とする研究の中でもっとも古いもので、主に音韻の規則的な変化によって言語の歴史的な関係を明らかにしようとする。上述のように、特に印欧語族の歴史の研究では、この方法が多く使用された。

次の類型論は、歴史言語学の音韻論に限る制限を越え、言語をもっとグローバルに関連づけようとする。その目的は、世界の言語における普遍性とそれぞれの言語(言語グループ)の特徴性を明らかにすることである。伝統的に最も有名な分類は、19世紀のドイツの言語学者によって作られた、4つの大きなタイプ屈折語・膠着語・孤立語・抱合語であるが、これほどおおざっぱなタイプは、言語の普遍性について何も語らない。今世紀の初め頃サピアはこの分類をより詳しく応用したが(Sapir 1921/142)、60年代から発達してきた最近の類型論的研究(Greenberg 1978)は、語順や格などの一定の文法現象によって言語を分類し、研究を進めている(角田 1990/Croft 1990)。

言語地理学は、ドイツのヴェンガーによって方言の発音における境界線の研究から始まった。そのあとフランスのジリエロンは、今世紀の初めごろフランス言語図巻を発表し、言語地理学の基礎を確立した。この研究分野は、伝統的に主に語彙の面である言語の方言差を研究するが、隣接する二つの言語の間の語彙や文法的な要素に関する「借用・影響関係」も研究されている(Bechert 1998/40)。

翻訳学は、現象としてはロゼッタストーンよりも古いものであるが、学問として割と新しく1950年代からナイダによって発展してきた(Nida 1964)。翻訳学の基本的な考えは、チョムスキーなどの生成文法と同じように、言語間には共通の意味構造があるという。つまり翻訳できるような文の意味は、別の文法構造や語彙を使用しても、意味構造が同じであると推測するのである。深層構造の中で使われている、核文と派生文という概念も頻繁に使われている。翻訳学は主に3つの分野、翻訳の普遍的な法則を研究する分野、2つの特定の言語に限って生じる翻訳問題を扱っている分野、そして翻訳プロセスの学習を研究する分野に別れている(Ingo 1990/15)。最近は、特に機械翻訳では翻訳学が発展している。

最後の応用言語学の研究分野として発展してきた「対照研究」も、2つの言語を対比し、その違いを主に語学教育で活躍した。伝統的に対照研究では、言語の学習は母語と外国語の差の発見に基づく、と考えられていた。例えばラドは、「外国語を学習する学生は、ある特徴は別の特徴より簡単に学習できると感じている。母語と同じ特徴は学生にとって簡単であるが、異なった特徴

は難しい。」(Lado1957)。ただしこのような出張は、ながくは通用しなかった。誤用分析で明らかになったように、異なった特徴は学習者にとって必ずしも習得が難しいというわけでもない。現在「対照研究」は、翻訳学とほぼ同一の目標で研究を進め、応用言語学における言語教育という「対照研究」だけには限らないようである。翻訳学と対照研究との間の一番大きな違いは、対照研究はラング (langue) の研究であるのに対し、翻訳学はパロール (parole) の研究である (Duteil 1998/125)。

このように言語比較はさまざまな形で言語学の中で応用されている。今回の研究でも2つの全く異なった言語の動詞を対比し、その意味を比較する。この研究は、二カ国語辞書を出発点とし、外国語の語意を理解するための取り組みであるので、対照研究と断定することができる。もちろん類型論あるいは地理学的な言語研究として、この研究の範囲は小さすぎるが、多数の言語の語意を対比するための方法論的な基礎研究として何らかの貢献ができると思う。現在、語の意義素分析は個別言語内では発達しても、普遍的な言語間の意味記述は実現されていないのである。この研究は、新しい記述方法を提案しないが、現在存在する方法でどこまで記述ができるかを明らかにする。いずれにせよ、本研究の一番重要な課題は、異なった言語の単語における語意の共通点と・差異点を特定することであるので、この研究を「動詞の意味範囲の対照研究」と名づけた。

(2.2) 比較の対象範囲

先ほども述べたように言語は、全体として一遍に対比することができない。比較するために、どの対象範囲 (例えば音韻論・形態論・統語論・意味論・語用論) を中心に研究が進められるかを決定しなければならない。一般に比較を目的とする研究の対象は、これらの対象範囲の中で、言語の中のある一定の機能に限る。例えば、「移動動詞」を比較する場合、「移動」という意味機能の観点から研究を進める。また、「格」を比較する場合、主に統語論上の観点からの研究になる。この場合は、補語の数や格マーカ―も異なってくるので、形態論と意味論的な機能の観点からの比較ももちろん考えられる。これについては、2.3 でより詳しく検討する。

研究対象は、辞書のように単語と単語の一対一的な比較に限る場合、対照研究などよりも翻訳学の範囲として考えなければならない。なぜなら、二つの単語を比較するとき、その単語の言語システムの中の働きや位置が明らかにならないからである。しかし、本研究と同様に、システム全体を背景において、単語の意義素を対比し研究を進めれば、二つの単語の比較も少なくとも対照研究の重要な一分野と考えることができるのではないかと思う。

次に重要なのは、対照するための共通点が存在することである。ワグナーが対照研究についていうように、「対照の基盤として働く共通の要素をもっている場合だけ、対象物は、対照的に比較することができる」(Wagner1974/375)。つまり、比較の対象を設定する前にその対比の可能性を計らなければならない。例えば、本研究で扱っている「あげる」と「NOSTAA」の場合、その意味機能では、同じ基本的な意味要素「上昇」と統語機能の「他動詞性」が存在する。共通点の有無は、いくつかの例文を訳して並べばわかるものである。このほかに「あげる」と「NOSTAA」の

共通する点として、文の中で動詞(V)として働くことが取上げられる。

(2.3) 対照によって明確にされる「同価値」

対照研究の目的は、先ほどでも取上げたように、共通点を持っている2つ以上の言語の要素から、その要素の共通の働きと異なった働きを見つけ、その差異をはっきりさせることである。基本になるのは、「同価値」という概念である。この概念の元になるのは、ドイツ語の *Äquivalenz* そして英語の *equivalence* という(=equi-「等しい」+valence「価値」)概念で、日本語では「同等・同量・同価値・同意義」などのように訳されている。同意義は「同義語」と間違えやすいので、ここでは「同価値」と呼ぶことにする。

同価値を求める対照研究の出発点として、三つの立場が考えられる(Duteil 1998/128)。①もっとも使われている対照の設定基準は、同じ機能を推定し、その機能の両言語における出現(同価値の表現)を明らかにする、という方法である。この場合、対照の出発点は、客観的で両方の言語の外にある。例えば、「名詞句が移動の到着点であることをあらわす要素」を対照する場合、日本語とフィンランド語はおおよそ次の通りになる。

(1)	到着点
(日本語) /	\ (フィンランド語)
に・へ・まで	[-Vn],[hVn],[-seen],[-lle],[saakka],[asti]

②次によく使われている設定基準は、ある言語の範疇または構造などを取上げ、その機能を別の言語に記述し、同価値の範疇・構造がどう表面化するかを解明するものである。本研究もこの立場から研究を進める方針である。この場合、出発点は、ある一定の言語現象である。例えば、日本語の「に格」をフィンランド語に対照する場合、次のようになるだろう。(対照は筆者の直感によるものである)。

(2) に(いる)	inessiv	-ssA
に(いる)	adessiv	-llA
に(入れる)	illativ	-Vn/-hVn/-seen
に(置く)	allativ	-lle
に(変わる)	translativ	-ksi
に(与える)	dativ	-lle
に(教わる)	agentiv	-/-A/-tA

③最後にもっとも批判されるべき基準であるが、同じように命名された範疇が2カ国語の中でどのように実現されるかを調べ、それぞれの同価値の出現を求めるものである。この場合、範疇はただ同じ名前を持ち、実際に対照できるような根拠はない。しかし、伝統的に同じ名前をつけた理由として、共通点があることが取上げられるので、一種の(あまり推薦できないが)対照研究は可能であろう。例えば、ドイツ語と日本語の「dative」と呼ばれる格を対照すると、次のような結果になるかも知れない。(例は対照の基準を明確にするために、筆者による。)

(3)	「dative」
-----	----------

(日本語)	／	＼	(ドイツ語)
に在る		lokativ	?
に変わる		translativ	?
に与える		dativ	geben, helfen
に教わる		agentiv	?
?		objectiv	befehlen, folgen,
⋮		⋮	⋮

(2.4) 同価値の段階

二つの言語を対照するとき、その対照されるものはどれほど「同価値」をもっているかによって三つの段階が区別されている(Duteil1998/132)。①「機能上では同価値である」と判断された際に、その機能は、文法的であるか語義的であるかを区別されている。文法的な機能の場合、対照された要素は、両方の言語の中で文法的に同じ機能を持っていると判断される。例えば、日本語では、動作の進行形を表わすのに動詞の語尾「～ている」が使われるのに対し、フィンランド語では、動詞の不定形に内格の語尾、あるいは目的語の語尾の区別が使われる。この場合、前者は動詞につくことではっきり文法的に同価値のものであると判断できるだろうが、後者は「現存するものの部分を」という意味で間接的にしか文法的な同価値をもたない。

(例) 食べている。	Ole-n syö-mä-ssä.
	V:1sg+V:3inf:inessiv.
パンを食べている。	Syö-n leipä-ä.
	V:1sg+N:partitiv.
パンを食べる。	Syö-n leivä-n.
	V:1sg+N:accusativ.

語義的な機能で同価値であると判断される場合、研究対象は通例単語または意味場である。比較の対象が両言語の単語である場合、単語の意義素が別の単語の意義素と対照され、単語全体は一つの構造として観察される。例えば、本研究の場合は、「あげる」と「NOSTAA」の意味の中から同価値の意義素を求めている。それが意味場になると、単語は構造の中の要素として観察される。例えば、「移動」という意味場は、より細かく「上昇」などのグループに分類され、それぞれの動詞は、これらのグループの一員として機能する。文法的な機能の場合、出発点は主に形態・統語論にあるのに対し、語義的な機能の場合、出発点は語彙・意味論にある。

二つの文の要素が、両機能の面で同価値であると判断され、しかも構造上でも同価値である場合、「構造上の同価値」という。例えば、日本語の「私は学生だ」という文は、フィンランド語の「Mä opiskelija oo-n」と機能的に同価値のものであるが、構造上ではそうではない。(語順が同じだが、フィンランド語の存在動詞には一人称単数の動作主を示す語尾がある)。その代わりドイツ語の機能的に同価値の文「Ich bin Student」は、フィンランド語の「Mä oon opiskelija」という文と構造上でも同価値である。

意味が等価に位置する場合、両方の言語の要素は、しばしば語用論上の同価値をもつことがある。つまり、両言語の要素は、機能と構造だけでなく場面的にも同じ価値をもっている。いわば、同義的表現に近い状態である。例えば、「Mä oon opiskelija」は口語形で、語用論的にはドイツ語の「Ich bin Student」には相当しないが、文語でも口語でも使われる「Minä olen opiskelija」は、直感で判断すると語用論上でも同価値のものである。

(3) 語の意味の対照について

(3.1) 意味とは何か

「意味」という概念を考えると、それは意味を観察する視点によって次の二つの主な「意味内容」に分けることができる。第一は、話者が本来頭の中で考え、相手に伝えようとする意味内容(考え・意図・発想)である。この思考に内在する「意味」は、話者の表情にしか出ないものなどで、外から解釈されることがない。第二は話者の口から言葉に課した意味内容である。これは、聞き手によって解釈され、誰にでも伝えられるメッセージ(発話・言語的な意味)である。この思考と言葉の差のために、我々はよく「そんなことを言うつもりではなかった」あるいは「今の心境を表すのに言葉が見つからない」といったような場面にぶつかる。これは全て脳の中の思考とその思考を伝達する言葉の違いによって生じる問題である。

もし、言語と思考が同じであれば、単語の多義性(1.ambiguity)と、言語の論理的な明白性の不足(2.lack of logical explicitness)と、前に述べたものを指す機能(3.co-reference)と、話者の立場から見ること(4.deixis)と、同義語(5.synonymy)の乖離というような言語現象はありえないことになる。例えば、

1. Drunk Gets Nine Months in Violine Case.
(酔っぱらいは、九ヶ月もヴァイオリンケースの中に暮らさないだろう。)
2. Ralph is an elephant. Elephants live in Africa. Elephants have tusks.
(象は同じアフリカに住んでいるけれど同じ牙を使っていない。)
3. The tall blond man with one black shoe. → The man... → He...
(「彼」も同じ長い説明を指している)
4. A policeman's 14-year-old son, opened fire from his house, killing a policeman.
A policeman's 14-year-old son, opened fire from his house, killing the policeman.
(上の文の警察官は違う人物であるが、下は同じである。)
5. Sam sprayed paint onto the wall = Sam sprayed the wall with paint
(両方の文は同じ事柄を指しているが、表現方法は違う) (Pinker 1995/79-80)

のように思考と言語は、区別する必要がある。

しかし、この二つは、非常に密接な関係を持っている。例えば幼児は、言葉の指す概念を理解しないので、大人のいうことが分からないが、二才ごろから人生でもっとも重要な発見をする:すべての物事(概念)は名前(言葉の表示)をもっている。このときから「言葉は思考的になり、そして思

考は言語的になる」(Vygotski1982/92)。ただし、言語と思考は、前述のとおり互いに当てはまらない部分もあり、二つの輪が部分的に覆うように完全に位置するのではない。

(3.2) 脳の中の言語

脳は非常に精密な機関であるので、脳細胞を切ったり刺激を与えたりすることは非常に危険である。そのために、いくつかの手術やレントゲンによる方法があっても医学の観点から見て、思考と言語はどのように脳の中で実現するかについてははっきりと知られていない(Lesser90/372)。脳は、数えられないほどの量(約 100 億)の脳神経細胞から成っており、これらはまた脳の表面にある灰色のもっとも活発な短い脳神経網とその下にある白いより消極的な長い神経網から成っている。脳は心臓と肺臓と全く同じように一つの器官として体の中で機能しているので、任務によって脳の他の部分からはっきりと区別できるような自立している核は存在しない。脳は一部だけでは機能できないし、その形と働きに関しても個人差が大きい。例えば、言語能力は 4-6 才くらいまでに完成する(Skutnabb-Kangas88/42, Pinker95/293)が、その後に生じた脳の部分的な障害も、脳のほかの部分によって多少カバーできる。このように見て、脳は非常に柔軟性をもっている。しかし発達してから(特に青春期の後)の脳障害は、部分的に直っても完全復帰はほぼ不可能である。このように脳のすべての部分は、人間の思考と行動にとって重要である。しかし、それにしても脳の機能は、どの部分に集中しているかによって多かれ少なかれ分けることができる。言葉に関する器官も、脳のどの位置に当たるかがだいたい特定できる。

聴覚器官に一番近い脳の分野は、音と声の差などを分析する脳の「耳」である。この部分はおそらく発話と発話、単語と単語、音節と音節、音素と音素との間の区別を明確にし、脳のほかの部分にそれぞれの単語の意味などが解釈できるように声を分析する。この部分は、すでに生まれる前から周辺の声聞き分け、自分の母語に特有の音節構造を形成し、記憶する(Pinker95/264-266)。

次に耳に近い脳の部分は、左半分²の聴覚機能の後ろにあるウェルニケ領域である。この部分は、ある概念と単語を結びつくような働きを果たしている。単純に言うなら脳の中の辞書として機能している。具体的に脳は、どのように単語をその意味概念とつなぐかは知られていないが、脳梗塞患者の観察によって、ウェルニケ領域は、語彙形成で大きな役割を果たしていることが明らかである。ウェルニケ領域の脳梗塞患者は、しばしば名詞に関する失語症の症状を見せているからである。彼らの話している言葉は、文法的に正しいが、使っている単語は全く意味を持たない間違った単語が多い(Pinker95/310)。ウェルニケ領域は、聴覚器官で分析された名詞を記憶にある意味概念と結びつけることはできるが、文の構造に関する情報とは結合できない。

脳の左半分(聴覚器官の前)におけるブローカ領域は、文の形成に当たって大きな役割を果たしている。ブローカ領域の脳梗塞患者は、動詞の使用に影響があり、名詞をただ並んでいる様子

² 右手利きの場合 97% 左手利きの場合 19% は、脳の左半分に言葉を支配する部分を持っている。残りは脳の右半分 (68%) あるいは両側に言語能力を持っている。(Pinker1994/306)

で話している。軽い障害を持つブローカ領域の患者は、例えば能動文と受動文の差が分からない、また格などの文法的な要素の働きも認識できない(Pinker95/308)。しかし文法全体を把握する部分としてはブローカ領域は小さすぎる。ブローカ領域の周辺も、その長距離の脳神経も、その他の全体的な思考を支配する領域も、言語の文法と何らかの関係を持っている。例えば、耳の上にある体の動きと指などをコントロールする部分(somesthetic area, primary motor area)も言語能力、例えば派生接辞などに影響している。

言語学の観点から見ても、ブローカ領域とウェルニケ領域が言語に関する機能を分担していることは、ごく自然なことである。ほとんどの言語の中で動詞と名詞は互いに区別され³、発話の基本になる動詞とその素材になる名詞に別れている。このために基本語彙の中でも、動詞は語彙全体の中で少ない(フィンランド語で約8%と日本語で約11%)が、名詞は広い範囲(フィンランド語で約75%日本語で約78%)を占めている(Saukkonen1979/11、石綿 1982/124)。

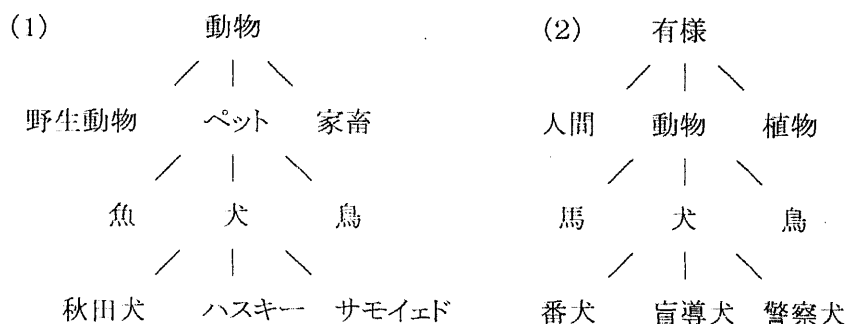
(3.3) 語と概念の関係

全ての人間が世界を同じような道具も用いて概念化するとは言えても、その道具の作った概念自体は同じとは限らない。どの人間に共通の概念、例えば「WALK」「EAT」「WOMAN」「CHILD」などがあるとしても、環境によって必要とする概念は大いに異なる。例えば、赤道近くに住んでいる人は、「吹雪」や「セントラルヒーティング」といった概念を知る必要がない。同じように一定の言語の中でも、例えば農民は、必ずしも「為替レート」や「円相場」といったような経済概念を使わないし、その意味を知る必要もない。しかし、外国人でも農民でも、必要に応じて自分の思考の中にないことがらを学び、新しい概念を身につけることはできる。外国語の場合、言葉が新しいとはいっても、概念自体はたいていの場合新しいものであるとは限らない。しかし、これらの概念は、母語と結びついているので、概念の新しい分類・整理が必要である。これは外国語学習で行われる精神的作業である。

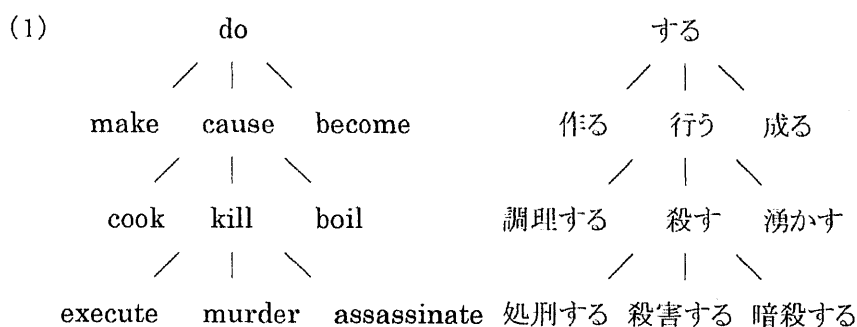
では、単語を通じて表面に出てくる概念は、いったいどのように理解するべきであろうか。例えば、フィンランド語の単語「koira」は、一方「犬」のようにものを直接的に指す明示的な(denotative)意味を表し、他方では人によって異なる「かわいい・怖い」というようなものに付加されている内包的な(connotative)意味も含めている。本研究では、後者の意味を分析しない。その概念が本来的に曖昧なためである。

同じ「犬」という概念のさまざまなニュアンスを指すために、また異なった単語も使われている。例えば、「hauva」≠「いぬの幼児語」・「rakki」≠「憎いぬ」・「pentu」≠「子いぬ」・「piski」≠「番犬のようないぬ」などがある。また犬をその形によって「ゴールデンレトリバー」や「秋田犬」などそれぞれ異なった名称が使われる。これらはすべて同じ概念「犬」を含めた「犬」の下位範疇である。例えば、犬の場合、それぞれの単語は、階層関係(hierarchy)によって少なくとも次の2つ以上の下位範疇構造に振り分けることができる。

³ 中国語などでは、動詞と名詞の区別は(日本語の「愛<>愛する」のように)はっきりしないと言われている。



最初の(1)は、はっきりと「動物とハスキー」の間をつなぎ、全体と部分の関係を築いているが、(2)の「有様と盲導犬」の関係は多少わざとらしい感じがする。動詞も同じように意味の階層関係によって下位範疇に分けることができる。



(日本語の動詞は英語からの訳である。)

(Taylor1991/48)

しかし、こういった構造では、例えば[do-become]や[kill-execute]の関係は本当に全体と部分の関係だろうか。「死刑犯は殺された」は「処刑する」という意味には成らない。

(3.4) 語の意味の分類

上述のフィンランド語の単語「koira」には、別の「弱虫」という直接的な意味もある。これは、単語の意味の変化によって生じたものである。もともと「犬」は、えさを十分取れず、外で寒さの中で飼われたため、貧弱のものとして見えただろう。このように単語の意味が変化するのは、ごく普通のことであり、却って変化しないほうがおかしい。

言葉の意味の変化に関して、少なくとも次の7つの原因が考えられる(Kangasniemi1997/83-86)。(1)「言語内部による原因」の場合、単語が使われる環境の中で、その使用目的が変わる。例えば、形容詞の活用語尾「けれ」と接続助詞「ども」が一緒に使われたので、接続詞「けれども」ができた(渡辺 1997/155)。(2)「歴史的な原因」の場合、新しいものが古いものの代わりに入っても古い単語が使われる。例えば、昔は生き物だけが「走った」が、今は列車も「走る」。(3)「社会的な原因」の場合、社会の常識によって意味が変わる。例えば、フィンランド語の「junkkari」は、もともと「貴族の青年」の意味を表したが、社会のイメージの中で「悪ガキ」の意味に変わった。(4)「感情的な原因」の場合、深い感情を表す語の意味は反対の意味に転じる。例えば、フィンランド語の「paha」という単語は、元の意味は「意地悪な」であるが、「paha tyttö」のばあい「かわいそうな女の子」である。(5)「感覚器官による原因」の場合、例えば味でしか言わなかった言葉(甘

い・苦い)は、別の場面でも使えるようになる(甘い考え・苦い経験)。(6)「意味的な借用」の場合、別の言語からの直訳の影響で単語は新しい意味を持つようになる。例えば、フィンランド語の「hedelmätön」(実のない)という形容詞は、スウェーデン語の「fruktlös」同じ意味の単語から別の新しい意味(無駄な)を借りた。最後に(7)「新しい概念の誕生」の場合、依然存在する単語は新しい概念の意味を受け持つことになる。古い単語に新しい意味を導入すれば、言語自体はより経済的になる。

言葉の意味の変化は、心理的な原因にも分類されている(Kangasniemi1997/78-82)。一番変化の多いのは、(a) 具体的な意味から抽象的な意味への変化である。例えば「あげる」はもともと「ものを上昇させる」の意味を表しただろうが、少しずつその意味は「与える」意味に変動した。また、(b) 単語の比喩的な用法(隠喩 metaphor)によってできた意味、例えば「机の脚」など、も少なくはない。そして(c) 同じように換喩(metonymy)、例えば「建築」は原因と結果の関係を表す、と提喩(synecdoche)、例えば「めし」は全体と一部の関係を表す、もよく使われる。発音に近い単語(d)も変化を起こす原因になる。例えばスウェーデン語の「svartsjuk」(黒い病気の)嫉妬深いという意味の単語は、フィンランド語で「mustasukkainen」(黒い靴下の)の形で同じ意味を表すようになった。このほかに(e) 複合語の一部(ブラットホーム→ホーム)も、(f) 語の軽蔑語への変動(貴様)も、(g) 語の意味的な向上(「marsalkka」*牛飼い→将軍)も、(h) 語の意味の激化・緩和(「tappaa」*殴る→殺す・「valittaa」*痛む→嘆く)も意味の変化の原因になっている。

本研究では、「あげる」と「NOSTAA」の意味変化の原因は解明しないが、どのような原因があるかを指摘することによって「あげる」と「NOSTAA」の多義性を分かりやすくするつもりである。

(3.5) 語の多義性

上述のさまざまな意味変化の原因でできた新しい意味は、それぞれ同じ単語の多義性としてその単語の意味に加わる。もし言語は、このような現象がなければ、つまり一つの単語が常に一つの意味を表すならば、我々の脳はその莫大な量に堪えられないだろう。

単語の多義性は、直接に単語の使用頻度にも関係している。例えば、動詞は、語彙全体の中で名詞より少ない(上述 p.9)が、使用頻度の場合、動詞は名詞の半分ぐらい(動詞と名詞との使用頻度の割合は、フィンランド語で動詞約25%と名詞約44%、そして日本語で動詞約24%と名詞約62%)使われている(Saukkonen1979/11、石綿 1982/124)。したがって、動詞の意味は、名詞よりも多義性が高いことが分かる。

多義語と非常に近い語は、同音異義語である。その差は曖昧であるが、二つの語の意味はもとも同じ一つの意味だったかどうかは、一般的に区別の基準になっている。しかし、歴史的にさかのぼることは難しい。この場合、意味の関連性が決め手になる。例えば、「郵便ポスト」と「会社のポスト」は、互いに何も関連性がない。一方統語論上の違いも多義語の一つの基準として考えることができる。例えば、「pitää -a」は「持つ」という意味を「pitää -sta」は「好き」という意味を表している。ただし、明らかでない場合は、問題は多い。また、多義語の意味を分析するとき、語の階層関係との区別も明らかにしなければならない。例えば、「殺す」は「殺害する・暗殺する」の二つ

の意味を含めないと考えることにする。

語の意味は、連結し、互いに意味的な関係を持っている。その中の一つは、語の基本的な意味、あるいは言い換えれば中心的な意味である。例えば「のる」の中心的な意味は「台に上がる」であるが、「乗り物に入る」などは二次的な意味である。それぞれの意味に近いものは、より密接な関係を持ち、語の中で多義の一つの意味要素を形成する。例えば、「船に乗る」と「電車に乗る」は、「太郎は船に、次郎は自転車に乗った」という文で分かるように、両方の文は同じ意味を表している。

本研究では、「あげる」と「NOSTAA」の意味の対照は目的であるので、それぞれの意味の多義性も把握しなければならない。しかし、それはあくまでも対照するために行うもので、多義性そのものを解明しようとはしない。

本論

第一章 動詞「あげる」と「NOSTAA」について

第一節 動詞とは何か

(1) 世界と概念と動詞の関係

世界のどの言語も、脳の中の発想を反映し、コミュニケーションの中でその発想を発話に変えて情報を伝える。しかし、言語は思考そのものではない。かつて Piaget などの研究では、思考が言語によって発達するといわれていたが、思考が独自に発達することはすでに1930年代に指摘されている (Vygotski1982/90)。最近の研究では、生まれてくる赤ちゃんは、すでに3ヶ月のとき単純な模様についてのプロトタイプを形成し、7ヶ月のときおもちゃを大人と同じように概念化し、そして10ヶ月のとき顔を把握できることが分かった (Itkonen1996/265-266)。つまり、思考と概念化能力は、言語能力の前に存在するが、言語の発達によって思考は意識されるようになる。このように概念が語と結びつくことによって、論理的な考えが発展し、そして(生まれ育った環境で話されている)言語が獲得される (Itkonen1996/269)。したがって、思考はどのようなシステムで伝達されるか(様々な言語の文法)、また概念はどのように分類されるか、(手=[hand, arm]、head=「頭、首」)、そしてどのような概念は文化と関連しているかは、言語の比較によって明らかになる。

それぞれの言語のシステムによって、意味を表す要素は、別々の自立した単位として認識されたり(中国語など)、または一つの文を一つのまとまった単位として把握されたり(エスキモー語など)、あるいは両方のケースが多かれ少なかれ一緒に認識されたりする。しかし、どちらかの形態論的な傾向が強いかとは言えても、完全に一つだけの方法という言語は存在しない。どの言語も、両方の自由形態素(駅・向かう)も拘束形態素(に/へ・る/た)も使用している。

このように言語の差はすでに形の上で大きく異なっているが、直接現実の世界に存在する要素を形の上で反映する普遍的な要素もある。例えば、前に起きたことを先に述べなければならないという規則が世界の多くの言語の中で存在するが、逆の規則は存在しない。また、言語的に複数が表示される物は現実世界では一つ以上であり、言語の複数形も単数形より長い(山/山々・Berg/Berge・Vuori/Vuoret)。そして、「物」と「物の性質」や「動作」と「動作の対象」などのような支配関係は、現実世界でも言語の中でも密接な関係を見せている。また、動作と物体の区別も、言語の中で、動詞と名詞の区別としてどの言語でも現れてくる (Itkonen1996/261)。しかし、「動詞」という品詞概念は、どこまで普遍的であるか、どのような要素の結合によって個別言語的な動詞範疇ができるかは問題である。

(2) 動詞の定義

まず「動詞」という文法概念は、一般的にどのように定義されているかを見てみたい。日本の国語辞書(広辞苑)の中で「動詞」は、次のように定義されている。「動詞」(verb) 品詞の一。事物の動

作・作用・状態・存在などを時間的に持続し、時間的に変化して行くものとしてとらえて表現する語。国語では、用言に属し語尾変化に正格と変格とがある。…。この定義に従うと、動詞は、まず意味の上で「動作・状態」などを表している。しかし、動作や状態を表す普通名詞もある。例えば、「使用・勉強・往来」はそれぞれ「何かをすること」を表している。またもともと動作を表した語から名詞を派生した語も多い。例えば、「売り上げ・使い・本立て」はそれぞれ動詞から派生した名詞である。そのために、「動詞は、時間的に持続し、時間的に変化して行く」意味をもつと説明する。「使用・勉強・往来」も時間の経過を含む語であるが、形態的には明らかに名詞であり、意味的にも「働き」を表さない。例えば、「勉強は去年始まった」、「使用の始めと終わりに注意しなさい」の場合、文の時間的な位置は動詞で表される。説明の最後に「語尾変化」が述べてあるが、これは、日本語における動詞には、規則通りの活用とそうでないものがあることを示す。

言語学大事典の中で動詞は、次のように定義されている。「動詞は名詞とともに、もっとも重要な品詞である。名詞は文の主要な素材をなすが、動詞はそれをまとめて文を作り上げる。まことに、動詞は、言葉(verbum)の中の言葉である。それでは動詞は何であるかということになると。一言でそれを明らかにすることができない。名詞の場合と同様に、形態論的に定義することができないからである。印欧語のような言語なら、活用(conjugation)をする語群といえるかもしれない。しかし、いかなる語形変化をもしない言語があり、しかもその言語にも動詞を認めないわけには行かないのである。活用は、いかなる形にしる、それをもって動詞を定義する性質のものではなく、むしろ動詞の中に含まれるべき契機の現れにすぎないのかもしれない。」(亀井孝 1996/1003)

同じようにライオンズは:「伝統的な文法概念「名詞」「動詞」「形容詞」は、形と役目と意味の全ての方面からの「合わせた概念」であると批判している。そのためにインドヨーロッパ語以外の言語では、品詞を定義するとき、困難な場合もある」という(Lyons1977/423)。ライオンズが引用する言語、北アメリカのヌートカ語では、主語と述語は語尾で示され、あらかじめ形態論的な動詞と名詞の分け方がないそうだ。しかし、この時制と法を表す要素は、ただ文の最初の語の後につくという規則に基づくことで、名詞と動詞は同じように活用するとは断定できない。ヌートカ語の基本的な語順は $V_{INFL}SO$ であるが、特別な目的語の取り立ての場合、語順は $O_{INFL}VS$ である。名詞と動詞は同じ活用を持つことを証明するために $S_{INFL}V$ のような語順も存在するはずである(Anderson1985/155-158)。

確かに動詞は形の上で定義できないが、サピアが言うように:“There must be something to talk about and something must be said about this subject of discourse once it is selected...No language wholly fails to distinguish noun and verb, though in particular cases the nature of the distinction may be an elusive one”(Sapir1921/119)、つまり何らかの(意味論上の)方法で発話の中の動詞と名詞を区別する必要がある。

上述のことを参考に、動詞は、形態論上と統語論上と意味論上の三つの観点から次のように定義できるだろう。

1. 形態論上の定義:活用(人称・テンス・アスペクト・など)。形態論上の定義は、非常に個別言語的である。言語によって活用などの形態論的な定義が不可能な場合もあり(中国語など)、形

容詞が動詞と似たような形で活用する場合もあり(日本語など)、それぞれの言語によって活用の存在が異なっている。したがって、動詞は、普遍的に形の上で定義することができない。

2. 統語論上の定義:動詞は述語あるいはその一部として機能し、名詞句を結合する力を持ち、名詞句の格を決定する。この場合の動詞は、動詞句(VP)の中で働き、名詞句(NP)と区別される。また基本的な文の中では、動詞句は、一つ以上の名詞句を支配することができる。しかし存在文の場合、動詞は、述部の中の名詞(NP/N+(V))または形容詞(A+(V))と区別することが難しい。例えば、「総理大臣は橋本さんである」「私は学生である」「この本は私のである」「地球は丸いです」の中の連結詞(である・です)は、物事も性質も表していないほか二つの要素の結合を要求するので、動詞の分類として認められるが、その前の名詞句あるいは形容詞は認められない。日本語やウイグル語など多くの「アルタイ系」諸言語の場合、「連結動詞」がなくても文が形成できるが、この場合、「名詞と名詞」または「名詞と形容詞」の関係は、語順などによって明確であるので、それをわざわざ示す必要がない。例えば、「地球は丸い」の場合、「地球」と「丸い」の関係は明らかである。

しかし、「私はゴリラが恋しい」と「私はペットが欲しい」の場合、この関係は明らかではない。それは、「恋しい」と「欲しい」のような語は、二つの観点からの意味を同時に受け持つからである。つまり、「恋しい」の場合、「動作主は“恋しい”」と「対象が“恋しい”」の二つの意味が含まれている。そして、「欲しい」の場合、「動作主は“欲しい”」と「対象が“欲しい”」という二つの要素があると解釈できるだろう。このように、「欲しい」「嫌いだ」「好きだ」のような形容詞または形容動詞は、片方だけの意味は単独で登場できないので、動詞と同じような結合力を持っている。これらの語は、構造上の意味の面では状態動詞「好む・欲しがる」などに匹敵するものであるが、形態論と統語論の違いによって動詞ではないと判断できる。(結合する表層格は動詞と違う)

クリントンは若い女性が好きだ。 ≠ クリントンは若い女性を好む。

彼女はお金が欲しい。 ≠ 彼女はお金を欲しがる。

このように、動詞を比較するときには、同じ意味のものは別の言語では別の品詞で表されていることもある。

3. 意味論上の定義:動詞は文の中で「動作(event,processes,action)」と「状態(state)」を表している。また、発話行為(speech act)・法(modality)・時制(tempus)・相(aspect)・人称(conjugation)・数(number)などのような要素も、動詞の意味に内在していると考えられる場合もあるが、普段これらは活用語尾などによって関連した意味として動詞に結びついている。このほかに動詞は、文構成要素と密接な関係を持ち、意味によって「動作主」・「対象」・「場所」などの補語を要求することができる。このように、意味から動詞を定義するなら、動作と状態のような「語彙的な意味」と「時間の軸との関連性」そして「格支配」が重要な決め手になると思う。(例えば、「明るむ」に対して「明るい」¹と「明るさ」)。

¹ 日本語の形容詞は、例えば「明るい」という形容詞を「優れている」という状態動詞と比べる場合、状態を表す動詞と同じ時間の軸に表現される。しかし、形容詞は、最終的に事物の性質しか表せない。例えば、「子供は怖い」と「先生は怖い」は、それぞれ

このようにそれぞれ形・文構造・意味の観点から見た「動詞」は、多少異なっている、互いに密接な関係を持っている。すなわち言語範疇としての動詞は、この全ての観点で定義された語である。しかし、普遍的に動詞のカテゴリーを定義する場合、その本来の意味(動作・状態 vs.もの・こと・性質)と文の中の役割(述語)と構造上の意味(意味上の格支配)が動詞の重要な要素になると私は考える。

(3) 日本語とフィンランド語における動詞

動詞は、日本語でもフィンランド語でも形によってほかの品詞と区別できる。この形とは動詞の活用である。両言語では活用は語幹に付く語尾によって表される。フィンランド語の場合は、語尾による変化が多いので、「不定形語幹」と「活用語幹」の二つの語幹が考えられている。「不定形語幹」に付く語尾は、「第一、第二不定形」・「過去分詞」・「二人称単数以外の命令形」・「可能法」そして「受身」である(Karlson1983)。

不定形語幹	第一不定形	過去分詞	二人称単数 命令形	可能法	受身
anta/	anta/a	anta/nut	anta/kaa	anta/nee	annet/aan
huomat/	huomat/a	huoman/nut	huomat/kaa	huoman/nee	huomat/aan
saa/	saa/da	saa/nut	saa/kaa	saa/nee	saa/daan
nous/	nous/ta	nous/sut	nous/kaa	nous/see	nous/taan
tul/	tul/la	tul/lut	tul/kaa	tul/lee	tul/laan

ほかの「人称」・「過去」・「第三不定形」・「条件法」・「現在分詞」などの活用語尾は「活用語幹」に付く。(Karlson1983)

不定形語幹	活用語幹 (命令形)	一人称単数	過去 + 二人称単数	第三人称 不定形	条件法
anta/a	anta/	anna/n	anno/i-t	anta/ma-an	anta/isi

れ別々の観点からの「怖さ」の性質を表している。誰が誰を怖がるかによ、想像と習慣によって判断される。

huoma/ta	huomaa/	huomaa/n	huomas/i-t	huomaa/ma-an	huoma/isi
saa/da	saa/	saa/n	sa/i-t	saa/ma-an	saa/isi
nous/ta	nouse/	nouse/n	nous/i-t	nouse/ma-an	nous/isi
tul/la	tule/	tule/n	tul/i-t	tule/ma-an	tul/isi
tarvit/a	tarvitse/	tarvitse/	tarvits/i-t	tarvitse/ma-an	tarvits/isi
lämmet/ä	lämpene/	lämpene/	lämpen/i-t	lämpene/mä-än	lämpen/isi

表の中で語幹が変化しているところがあるが(「annoit」など)、これらの変化は語尾による「子音階程交替」または「/i/による母音の変化」である。二つの語幹は、第一不定形の語尾を「-A」と決定すれば、一つにまとめることも可能だろうが、ここでは形態論的な問題を扱わないことにする。

現代日本語の動詞は、五段活用と上一段活用と下一段活用とサ行変格活用そしてカ行変格活用の五つの異なった活用形になっている。これらは五段活用の場合、子音に終わる語幹、そして上一段活用と下一段活用では、母音で終わる語幹を形成する。変格活用は、下記のモデルでは子音で終わる語幹を持っている(佐久間 1966 年)。

活用形	語幹	終止・連体形	・使役 打消・受身	過去・連用形	命令・可能形 假定・現在・	未来
五段	hanas-	hanas-u	hanas-anai	hanas-ita	hanas-eba	hanas-oo
上	mi-	mi-ru	mi-nai	mi-ta	mi-reba	mi-yoo
下	kikoe-	kikoe-ru	kikoe-nai	kikoe-ta	kikoe-ba	kikoe-yoo
サ変	s-	s-uru	s-inai	s-ita	s-ureba	s-iyoo
カ変	k-	k-uru	k-onai	k-ita	k-ureba	k-oyoo

この活用の体系は恐らく表よりも簡単なものもあるだろうが、この研究では、活用自体を問題にしない。

語幹に付く用言的な語尾はいつも一定の順番で動詞の語幹にかかる。日本語の場合この順番は、「語幹＋使役＋受身＋助動詞(「始める」など)＋アスペクト(「ている」など)＋丁寧＋打消＋時制＋推量など＋終助詞」である(国研 1978/102)。例えば、「食べさせられ始めていなかっただろうね」のような文が可能である。同じようにフィンランド語の動詞の語尾は、「受身・時制・モダリティ

「イ・人称・終助詞」という順で語幹につく。世界の言語の中でも、「アスペクト＞時制＞モダリティー＞人称」という順番が普遍的であるようだ(Itkonen1996/116)。

動詞の文の中の位置は基本文の中で、日本語の場合文の最後 SOV で、フィンランド語の場合主語の後 SVO である。しかし、フィンランド語の場合、文の中のどの要素を取り立てるかによって語順が変わる。一般的には、次の5つの語順が使われている。

Kissa söi kalan	Kissa kalan söi	Kalan kissa söi	Kalan söi kissa	Söi Kissa kalan
cat ate fish SVO	cat fish ate SOV	fish cat ate OSV	fish ate cat OVS	ate cat fish VSO

語順が違って動詞が使用されている場所は、両方の言語の中で似ている。日本語でもフィンランド語でも動詞の位置は述部の中、あるいは、名詞句を修飾する場合、名詞の手前である。ただし、フィンランド語の連体修飾文では、関係代名詞を使った文も可能である。この3つのすべての場合、動詞は格支配によって名詞句を連結し、文法的な関係を決める。

動詞に似ている「好き・恋しい・欲しい」などの語は、このような連体修飾の中の連結を作れない。

猫は魚を食べた。>	猫の食べた魚…。>	魚を食べた猫…。
Kissa söi kalan.>	Kissan syömä kala....>	Kalan syönyt kissa..
N:nom+V:pt:3sg+N:acc>	N:gen+V:3inf+N:nom>	N:acc+V:prt:prf+N:nom.

この三つの文は、すべて同じ動詞とそれに結びつく名詞句の関係に基づく。しかし、「犬が好きな猿は…」の場合、「犬が猿が好き」か「猿が犬が好き」かは分からない。

(4) 動詞の意味範囲

動詞の意味が一つの形態素としてどの程度ほかの形態素の意味役割を担うことができるかは、言語または動詞によって異なる。語彙的な意味を表す要素と文法的な意味を表す要素は、日本語とフィンランド語でどのように区別されているかをいくつかの例によって見てみよう。

(1)

Tuule-e. = 風が吹く。	Mene-n sisään. = 私が入る。
V:sg3 N:nom+V	V:sg1+N:illat N:nom+V
(*winds) (wind +blows)	(I go+inside) (I +go inside)

最初の例文では、フィンランド語の動詞は、日本語の名詞の意味も含んでいる。と言うよりもフィンランド語の /tuule-/ という名詞(tuuli)の語幹は動詞(tuulee)に派生できるが、日本語の/kaze/は動詞(*風る)には派生できない。フィンランド語の場合、/tuuli puhaltaa/のように「吹く」という動詞が使われると、「風が吹く」という「意味」の文も可能になる。二番目の例文では、フィンランド

語は、動作と目的地を別々に分けているのに対し、日本語の動詞は、目的地(何らかの場所の中にあること)もその意味の中に組み込まれている。日本語は、「私は中に行く」のように別々の形態素でも同じことが表現できる。それぞれの言語の形態と統語構造は異なっても、一定の「意味内容」は、非常に文化的な要素でなければ、どの言語でも伝えることができる。つまり、言語が違っていても、思考の中の概念または概念化する能力は似ている。

次に、より複雑な「バイオリンを演奏する」という動作を3つの別々の言語で表現してみると、それぞれの言語に使われる動詞はかなり異なる。この場合、本来の意味というのは、動詞の最も原素的な意味のことを言う。日本語に訳した「操作する」「鳴らす」はいうまでもなく、英語とフィンランド語の意味に合うような動詞を選んだだけであり、意味的に統一したものではない。

(2)

	文	本来の意味	最終的な意味
英語	「I play the violin.」>	バイオリンを 操作する	= 音楽を演奏する。
日本語	「バイオリンを 弾く 」>	バイオリンの 弦を引く	= 音楽を演奏する。
フィンランド語	「 Soitan viulua.」>	バイオリンを 鳴らす	= 音楽を演奏する。

このように英語・日本語・フィンランド語の中で、動作に対する考え方はそれぞれ異なっているが、最終的に想像される事柄は同じである。たとえば[tuulee]という形態素は、日本語では文の主語を表す名詞句(風が)と述語(吹く)の意味を表しているが、結果的に同じ事柄を表している。また同じ事柄は、全く別の方法で表される場合もある。

(3)

Ole-n suuttu-nut.	= 私は怒っている。
V:1sg+V:prt:perf.	pN:top/nom+V:dur.
(I'm+got angry)	(I+be get angry)
Minu-a raivostutta-a.	= 私は怒っている。
pN:part+V:3sg.	pN:top/nom+V:dur.
(me+make angry)	(I+be get angry)
Hän raivostutta-a minu-a.	= 私は彼のことで怒っている。
pN:nom+V:3sg+pN:part.	pN:top/nom+pN:gen+N:inst+V:dur.
(He +make angry+me)	(I+his+thing with+be get angry)
Ole-n vihainen.	= 私は怒っている。
V:1sg+A:nom.	pN:top/nom+V:dur.
(I'm+ angry)	(I+be get angry)
Ole-n vihainen häne-lle.	= 私は彼のことで怒っている。
V:1sg+A:nom+pN:all.	pN:top/nom+pN:gen+N:inst +V:dur.
(I'm+ angry+to him)	(I+his+thing with +be get angry)

これらの例で分かるように、ある言語で自動詞(怒る)で表されることは、別の言語で自動詞

(suuttua)でも他動詞(raivostuttaa)でも形容詞(vihainen)でも表すことができる。自動詞でも他動詞でも結果が同じで、その原因はどう取り上げられるかは問題である。また形容詞になると、結果だけが存在し、方向性を加えることによってその原因との関係も述べることができる。

このように異なった言語の形態素は、同じ意味を表しても、「弾く⇔play⇔soittaa」のように一対一と比べられる場合でも、それぞれの形態素の意味範囲は同じではない。例えばフィンランド語の/antaa/("GIVE")という動詞に相当する日本語の動詞は、「与える」「あげる」「くれる」「下さる」「渡す」などであるが、それぞれの動詞にはまた別の/antaa/にないような意味が含まれている。例えば、「あげる」²の用法には、「与える」のほかに「持ち上げる」("LIFT")と「調理する」("COOK")などのような意味がある。

- | | |
|----------------------|--------------------------------------|
| 6) 本を棚にあげる。 | = Nosta-n kirja-n hylly-lle. |
| N:acc+N:dat+V | V:sg1+N:acc+N:allat. (場所として人間も可能) |
| (book+to shelf+lift) | (I lift+book+on to shelf) |
| 7) 私は魚を揚げる。 | = Paista-n kala-a rasvassa. (食料以外も可) |
| N:acc+V | V:sg1+N:partitiv+N:inessiv. |
| (I+fish+fry) | (I fry+ fish+in oil) |

例文(6)では「あげる」の意味は、物理的な移動にすぎないのに対し、例文(7)では「あげる」の意味は料理法まで及ぶ。どちらかというと「あげる」の意味の中では、所有関係を表す領域は非常に限られている。

同じように動詞と密接な関係を持っている「格助詞」など格を表す語の意味範囲も言語によって非常に異なる。格助詞「に」に当たるフィンランド語の格接辞も、次のようにいろいろな語尾に訳すことができる。

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 8) 棚に入れる。 | = Laitan hylly-yn |
| N:dat+V | V:sg1+N:illativ. |
| (at shelf I+put to) | (I put+into shelf) |
| 9) 棚に置く。 | = Laitan hylly-lle. |
| N:dat+V | V:sg1+N:allativ. |
| (at shelf+put on) | (I put+onto shelf) |
| 10) 棚(の中)にある。 | = Se on hylly-ssä |
| N: (gen+N)dat+V | N:nom+V:sg1+N:inessiv. |

² このように記した「あげる」は、全ての挙げる・上げる・揚げるの意味を統括したものである。ただし、現在通用する共時的な意味だけは対象になる。

(at shelf+inside+is)	(It+is+in shelf)
11) 棚(の上)にある。	= Se on hylly-llä
N:(gen+N)dat+V	N:nom+V:sg1+N:adessiv.
(at shelf+on +is)	(It+is+on shelf)
12) 太郎は先生になる。	= Taro valmistuu opettaja-ksi.
N:top+N:dat+V	N:nom+V:sg3+N:transitiv.
(T.+to teacher+become)	(T.+become.+to teacher)
13) 先生にもらった。	= Sain sen opettaja-lta.
N:dat+V	V:past:sg1+N:acc+N:ablativ.
(by teacher + recive)	(I recive+it+from teacher)
14) 銀行にもらう。	= Sain sen pankki-sta.
N:dat+V	V:past:sg1+N:acc+N:elativ.
(by bank + recive)	(I recive+it+from bank)
15) 私はあの人に鞆を盗まれた。	= Minulta varasti tuo mies laukun.
N:nom+N:dat+N:acc+V:past:pass	N:abl+V:past:sg3+N:nom+N:acc.
(I+that+by man+bag+was stolen)	(from I+stole+that+man+bag)
16) 丁寧に挨拶する。	= Tervehdin kohteliaa-sti.
Adj:adv+V	V:(past)sg1+Adj:adv.
(politely +greet)	(I greeted+politely)

格助詞「に」の8から12までの例文の意味は、それぞれ別のフィンランド語の格接尾辞に相当する。13から15までの例文の場合、方向性が異なっているので、フィンランド語の語尾(-sta/-lta)と似ているような意味を持つ助詞「から」も使用できる。15のような受身文の動作主を表すような格接尾辞の働きは、フィンランド語には全くない。フィンランド語の受身は、どちらかというと非人称であるからである。最後の例16の動名詞に付く場合の「に」は、格助詞ではないが、形は同じである。フィンランド語の場合、このような副詞の形成は形容詞から副詞を作る派生接辞に相当すると考えることができるだろう。

このようにして格助詞「に」は、述語とその補語の関係をより抽象的に表しているのに対し、フィンランド語の格接辞は、より具体的な意味を持っている。したがって両言語の格接辞は、格の範疇を異なった意味範囲で表現している。日本語の場合、述語と補語の関係は、それぞれの語彙的な意味に重点がある。格助詞は必ずしも具体的な意味を持たないので、ときには「形式名詞」(奥津)と呼ばれる上・中・下などの補助的な単語が、動詞と補語の関係を特定する。その代わりフィンランド語の格接辞³は、日本語の格助詞よりも具体的な意味を補うことができる(例えば上・中の

³ フィンランド語の中で接辞は非常に大きな役割を持ち、例えば語根は約6000語しかないが、派生接辞によって新しい単語が形成できる。

意味。例文 8-11)。動詞の意味を比較するときにも、格の役割の違いも意味規定の重要な因子として検討しなければならない。

(5) 動詞の対照の基準

上述のように言語によって動詞は、形態論的に、統語論的に、そして意味論的に異なっている。しかし似ている、あるいは共通の点もある。特に(2)で述べた動作・状態という動詞の意味と結合価という構造上の意味は重要な要素になる。しかし、似ているとはいっても、初めから言語間の共通点、あるいは普遍的要素がなければ、比較することも難しい。序論で述べたように、対照研究では、3つの可能な対比する方法がある。

- ①同じ機能を推定し、その機能の両言語における出現(同価値の表現)を明らかにする。
- ②ある言語の範疇または構造などを取上げ、その機能を別の言語に記述し、同価値の範疇・構造がどう表面化するかを解明するものである。
- ③同じように命名された範疇が2カ国語の中でどのように実現されるかを調べ、それぞれの同価値の出現を求めるものである。

本研究では第②の立場から動詞を対照する。つまり、「あげる」の意味を分析し、それをフィンランド語に比較する。しかし、いちばん客観的な①の立場も配慮するために、「NOSTAA」というフィンランド語の動詞も検討することにした。この二つの動詞の接点は、もっとも原素的な意味のものである。両方の動詞は、「地球の引力に対して力を加え、対象物を上の方へ移動させる」というような意味を基本にもっている。さまざまな意味は「上昇」から派生したかどうかは定かではないが、人間の発達の中で、「上昇」は恐らく最も基本的な概念の一つである。このように対象は、「あげる」を基本に考えているが、フィンランド語との接点を明らかにするために、「上昇」という共通の意味も建てることにした。このように対象は次のように現れてくるだろう。

「あげる」	—	「上昇」 ¹	—	「NOSTAA」+動詞 ¹
「あげる」	—	意味 ²	—	動詞 ²
「あげる」	—	意味 ³	—	「NOSTAA」
「あげる」	—	意味 ⁴	—	動詞 ³
動詞 ²	—	意味 ⁵	—	「NOSTAA」
動詞 ³	—	意味 ⁶	—	「NOSTAA」

「上昇」が思考の中で根本的な概念であるならば、「上昇」を表す動詞のほかの意味をほかの言語の同類のものと比べると、本来の概念化と文化的な影響の差が明らかになるだろう。そのほか、「あげる」が、どこまでほかの言語の動詞で表現できるかは興味深い問題であり、この問題を検討することによって、言語の意味の個別言語的差異を明らかにするための方法が明示されよう。それは記述方法論上の論点をいくつか明らかにするに止まらず、この分野の個別言語的分節の差異についての類型論的な問題を指摘することになろう。

以下このような目論見から「あげる」「NOSTAA」の語意対照を行う。

第2節 研究対象「あげる」

(1) 辞書の中の「あげる」

語彙の意味記述が最も多く用いられているのは、辞書においてである。この研究で使われる「あげる」の意味に関する例文も、おもに辞書の中から取り、再分類された。もちろんほかの意味分析の中に出ている「あげる」の例文も使用するが、辞書はそれぞれの語、この場合「あげる」の意味を包括的に記述しているからである。意味論的な研究の中の「あげる」の記述は、おもにほかの動詞とともに現れ、ある一定の意味場の記述だけで使われている。辞書は語のすべての意味(使用される環境)を全体的に見ているので、「あげる」の意味を理解するために、辞書における「あげる」の意味分類を考察しなければならない。

この研究のために用いた辞書は、4つの国語辞典と2つの和英辞典の合わせて6つの辞書である。国語辞典は、文化庁出版の「外国人のための基本語用例辞典」、中型の「新明解国語辞典」、そして大型の「大辞林」と「広辞苑」である。和英辞典は、中型の「小学館プログレッシブ和英辞典」と研究社の「新和英中辞典」である。辞書によって語の意味の分類法方が異なるので、できるだけ多くの辞書を互いに比較しなければならない。特に多義語の場合、語の意味が形としてはっきりと表面化しないので、意味の分類または同音異義語との区別は、さまざまな方法で実現されている。しかし、この研究の目的は、「あげる」の意味を分析しフィンランド語に対照することであるので、「あげる」の全体的な使用を把握することで十分である。そのために分析された辞書の数、六つである。

国広(1997)は、いくつかの国語辞典を比べ、辞書の中の意味記述一般について述べている。例えば、語義の配列方針を、「一般的な意味から特殊な意味へ」(意味関係)、「原義から転義へ」(年代順)、そして「使用頻度の多い語から使用頻度の少ない語へ」(頻度順)の三つのタイプに分ける:「この語義配列の基本方針を見ると、『三省堂』のものが一番明確で、『現代の基本的な意味から、派生関係に注意しながら特殊へ』ということである。『大辞泉』は基本的には『現代(一般的—特殊)—古語』としながら、それと並んで『原義—転義』という歴史的配列方を認めており、混乱の可能性はらんではいる。…『必携』は、辞典で引かれる頻度によるということであるが、…筆者の推測では、『必携』は実際は語の『使用頻度』のことをいうつもりで『辞典を引く頻度』と表現してしまったのではないだろうかと思われる。もしそうだとすると、三辞典はほぼ同じ『普通—特殊』という順序で配列しようとしていることになる」(国広 1997/187-188)。このように、たいていの国語辞典は、共時的に語の意味を分類し、現在使われている意味を一般の意味から特殊の意味へと記述している。単語の語源による意味記述は、通事的な語の意味変化に基づいているので、特殊な語源辞典の中で扱われるはずであるが、総合的な国語辞典の中で語源的な記述も混ざってある場合もある。また、語の意味の配列順を使用頻度の面で見ると、「普通—特殊」という順番が明らかになるが、語の意味関係が明確でないので、語意分類または語と同じ形をもつ同音異義語との区別ができなくなる。そのために、語のどの用法が互いに意味的に統一性のあるグループを形成し、そしてそれぞれのグループは互いにどの程度関連しているかを明らかにしな

ればならない。

(1.1) 研究社の新和英中辞典

和英辞典の役目は、日本語の単語の意味を英語に伝えることであるので、この辞典でも「あげる」の意味を分析し、英語に訳すようにしている。しかし、どのような基準で意味が分析されたかは定かではない。意味の配列順は、主要なもの、普通のものから特殊なものへという論理的な並べ方を基本にしているが、最初に並べられたものは1「高い所に移す」>2「招じ入れる」>3「学校に」と具体的な意味を表すものでばかりである。より主要な普通の意味をもつものは後回しになっている。例えば、6「価格などを」・12「実例を」・18「天ぷらを」は、普通に使われている「上げる」の意味なのに、「学校に」ほど一般的でないような印象を受ける。そのほか、「与える」意味は非常に重要なのに、8「(神仏に) 供える」という意味の中で説明されている。また、同音異義語の扱いについては、「国をあげて」のように副文でしか使われない「あげて」と接尾語的な用法の「一てあげる」は別の項目になっている。接尾語的な用法は別扱いでもいいが、「国をあげて」は同音異義語であるなら、「お金を上げる」や「天ぷらを揚げる」も別の項目に入れなければならない。以下主要な点を引用する。

「

あげて 挙げて **all in a boby** 『全財産を挙げて事業に投資する。invest everything [all] one has in an enterprise. (文例): 彼は一家を挙げて南米に移住した。

あげる 上げる, 挙げる, 揚げる

1 〈高い所に移す〉 **raise; lift (up)** 『顔を上げる。raise one's face; look up. 棚に箱を上げる。put a box on the shelf. (学校で生徒が) 手を挙げる put one's hand up. 旗を揚げる。raise [hoist] a flag; run a flag up 《a pole》. 本から目を上げる。look up from one's book. (文例): 先生に質問したかったら手を挙げてからするのですよ。You should put your hand up [raise your hand] first if you want to ask the teacher a question. 新聞から目を上げて窓の外を見た。He raised his eyes from his newspaper and looked out of the window.

2 〈招じ入れる〉 **call [invite] sb. in**; 〈芸者などを〉 **call in [hire] a geisha**; 〈荷物を陸に〉 **land [unload]** 《the goods at Genoa》; 〈(魚を) 釣る〉 **fish** 《sea bream》; **angle for** 《trout》 『客を座敷に上げる。call [invite] the guest(s) into the parlor; 〈案内する〉 show [usher] the guest(s) into the parlor. ハゼを一束(いっそく) 上げる。fish [catch] a hundred goby. (文例): あんな人を上げることはないよ。ああいふのは家(うち)のお客じゃないんだから。You were quite right to turn him away [to refuse him]. We can do without that sort of customer [He's not at all the sort of customer we want].

3 〈学校に〉 **send** 《one's boy》 **to school**. (文例): 私は息子を東京の学校に上げた。I sent my boy to school in Tokyo.

- 4 〈声を〉 **raise** 《one's voice》; **give** [utter] 《a scream》; 〈氣勢を〉 **raise** [boost] sb's morale; **raise** [lift] sb's spirits. (文例): 閉山には彼らはこぞって反対の声をあげた。They all spoke out against the closure of the mine.
- 5 〈褒⁽¹⁾める〉 **praise**; **speak well of sb** 『上げたり下げたりする。praise sb one minute and speak badly of him the next; now praise and now disparage sb.』
- 6 〈価格などを〉 **raise** 《the price of a commodity from 1, 000 yen to 1, 200 yen》; 〈品質などを〉 **improve** [better] 《the quality of ...》; 〈地位などに〉 **promote sb to** 《a higher position》; 〈(数を) 上の桁(けた)に送る〉 **carry** [move] 《a figure》 to the left 『1 桁(けた) 上げる。carry [move] 《a figure》 one place to the left. (15+17 のような計算で) 下に 2 を書いて 1 を上に上げる。put down two and carry one. 腕を上げる。生産性を上げる。increase [raise] the productivity 《of》. 名を上げる。給料を上げてもらふ。have [get] one's salary raised; get a raise [《英》 rise] (in salary); 《口語》 get a pay [wage] hike. (文例): 家賃をそんなにむちゃに上げることはできないはずだ、違法なんだから。It's illegal [against the law] for them to raise your rent like that [to such an exorbitant level].』
- 7 〈成果・利益などを〉 『成果をあげる。get good results; 事が主語 produce satisfactory results. 利益をあげる。(事が主語) bring [give, fetch] one a profit. 百万円の純益をあげる。(人が主語) make a net profit of one million yen; clear a million yen.』
- 8 〈(神仏に) 供える〉 **offer** 《incense sticks on the altar》; **lay** [place] 《flowers on sb's tomb》; 〈(目下の者に) 与える〉 **give sb sth; give sth to sb** (文例): この本を君に上げよう。I'll give you this book. You can have this book.
- 9 〈胃から擦く〉 **vomit**; 《口語》 **throw up** 《自動詞として用いるのが普通》; 《口語》 **bring up** 《one's breakfast》 (文例): 昼食べたものを皆あげてしまった。She vomited [brought up] what she ate for lunch.
- 10 〈終える〉 **finish** 『バイエルを上げる。finish [get through, graduate from] Beyer's Primer (of Piano Playing). (文例): この仕事を月末までに上げてもらいたい。I want you to finish [complete] this job by the end of this month.』
- 11 〈…の費用ですませる〉 (文例): 披露宴の費用は 1 人あたり 3 万円に上げてもらいたい。We don't want the cost of the reception to exceed 30, 000 yen per person.
- 12 〈実例などを〉 **mention** 《sb's name》; 《fml》 **cite** 《an instance》; 〈列挙する〉 **list**; 《fml》 **enumerate** 『証拠をあげる give [produce, bring forward] evidence 《to show that...》; 《fml》 cite sth as (a) proof 《of》. (文例): 今は機械の時代で、ほんの 2, 3 の例を挙げれば、自動車もテレビも衣服も書物もみな機械で作られたものである。We live in a machine age; motorcars, TV sets, clothes, and books, to name but a few [to mention only a few], are all machine-made products.』

13 〈すべてを出し尽くす〉→あげて。

14 〈(犯人などを)捕える〉 **arrest**; 《口語》 **nab** 『警察に挙げられる。be arrested; be taken to the police station.

15 〈式などを〉 **hold** 《a wedding》(文例):結婚式は11月3日に挙げようと思っています。We are planning to hold our wedding on the 3rd of November.

16 〈兵を〉 『兵を挙げる。《fml》 rise in arms 《against》; 《fml》 take up arms 《in defense of …》.

17 〈子を〉 『3人の男子を挙げる。bear [give birth to] three sons. (文例):彼女は彼との間に2人の子供を挙げた。She bore him two children.

18 〈テンプラを〉 (deep-) **fry** 《cuttlefish》 『野菜をサラダ油で揚げる。(deep-) fry vegetables in salad oil.

19 〈花火・凧(たこ)などを〉 **set off** 《fireworks》; **fly a kite**》.

一あげる。(文例):手伝ってあげよう。I'll help you (with your work). 切符を買ってあげよう。I'll buy [get] you a ticket. I'll buy [get] a ticket for you. そのおばあさんに手を貸してバスから降ろしてあげた。I helped the old woman down from the bus. 年寄りには親切にしてあげなさい。Be kind to old people. 」

上に見るように語の格意味はこのようにほぼ無操作のままで並べられているが、これでは、それぞれの用法は互いに関係がないような印象を受ける。編者が多義性や語義の抽象性について考えていないとは思われないが、辞書を利用する側としては、このような分類は分かりにくいので、何らかの意味的な分類による配列順が必要である。

(1.2) 小学館プログレッシブ和英辞典

この辞書の分類の中で、「あげる」は、表記によって「上げる」と「挙げる」と「揚げる」と「一あげる」の四つの同音異義語に分類されている。表記による分類は、辞書を利用する側として特に漢語と外来語の場合便利かも知れないが、意味的な関連性がないことが証明できない。漢字が異なっても意味が同じ場合が多いからである。例えば、「幕を上げる」と「幕を挙げる」と「幕を揚げる」は、「新明解国語辞典」によると、同じ意味を表している。それぞれの“同音異義語”の語義は、前の辞典と同じように一般的な意味から特殊な意味へと分類されているが、英語の意味に反映してより細かく分けている。そのほか、この辞書は原義を「Ⅰ」として比喩を「Ⅱ」と区別している。しかし、下位分類の順番は、比較的あいまいである。

「

「あげる【上げる】Ⅰ

①「下から上に動かす」**raise**; 「持ち上げる」**lift(up)** 『石を頭より上に上げる。』**raise a rock above one's head.** ★「彼は帽子をちよつと上げて、婦人にあいさつした。He raised his hat a little to the lady. ★彼は100キロのバーベルを上げた。He lifted the 100-

kilogram barbell.

②「高い場所に移す」『「本を2階に上げる」carry books upstairs.★「花瓶をピアノの上に上げる」put a vase (up) on a piano.★「床を上げる」put away one's bedding.

③「体の一部を上を動かす」『「私は驚いて顔を上げた」looked up in surprise.★「遠くの山に向かって目をあげた」I lifted up my eyes to the distant mountains.

④「部屋などに入れる」『「客を座敷にあげる」invite guests into the parlor(and entertain them there).

⑤「学校に入れる」send『「子供を2人とも大学に上げた」I've sent both of my children to college.

II

①「よくする、上達させる」improve『「製品の質を上げる」improve[better] the quality of a product [manufactured goods].★「子供の性質を上げるために家庭教師をつけた」We employed a tutor for our child so that he would get better grades.★「女性の地位を上げる」raise women's status.

②「昇進させる」promote『「彼はやっと課長にあげてもらった」He was finally promoted to section chief.

③「数量・程度を高くする」raise『「声を上げる」raise one's voice.★「部屋の温度を上げる」raise the temperature of a room.★「来年は私の給料を上げてくれるそうだ」They promised to raise my salary[(米)give me a raise/(英)give me a rise] next year.★「ここは100キロまでスピードをあげられる」You can increase your speed here to 100 kilometers.★「生産を5年で2倍に上げる」double the output in five years.

④「物価・貨幣価値を高める」raise『「家賃を上げる」raise the rent.★「その会社は大幅に株価を上げた。」The company's stock has risen a great deal[(口) gone way up/skyrocketed].

⑤「利益などを得る」『「その取引で200万円の利益を上げた」We made a profit of 2 million yen on the transaction.

⑥「ある費用ですませる」『「パーティーは一人1万円で上げてほしい」We don't want the cost of the party to go over 10,000 yen per person.★「安く上げてくれ」Do it as cheaply as possible.

⑦「仕上げる、終える」『「ドレスは明日中に上げます」The dress will be finished tomorrow.★「この仕事を年内に上げるようにする」We'll try to complete the job by the end of the year.★「第3巻を上げたところだ」I've just finished (writing/reading) the third volume.

⑧「効果などを現す」『「立派な成果をあげた」They obtained excellent results./They did very well.

⑨「神仏に供える」『「祭壇にろうそくをあげる」offer candles on the altar.

⑩「与える」**give**「この時計を君にあげよう」I will give you this watch. / This watch is for you. / You can have this watch.

⑪「吐く」**vomit**;(口)**throw up**;(口)**upchuck**「ゆうべ食べた物をあげてしまった」I vomited [threw up] what I ate last night.★「急にあげそうになった」I suddenly felt very sick at my stomach.

⑫「声を立てる」「彼は苦痛の叫び声を上げた」He gave [uttered] a cry of pain.★「彼女は絶望のうめき声を上げた」She groaned in despair.★「それを見てみんな歓声を上げた」They shouted for joy at the sight.★「その提案にだれもあえて反対の声を上げなかった」No one bothered [made the effort] to speak out against the proposition.

あげる【挙げる】

①「上の方へ伸ばす」**raise**「賛成の人は手を挙げて下さい」Those in favor,raise your hands.★「後ろで手を挙げろという声がした」"Hands up!" said someone behind us.

②「示す」「似た例をもう2、3挙げる」give a few more similar examples / (文) cite a few more similar cases.★「警察は状況証拠しか挙げられなかった」★「警察は状況証拠しかあげられなかった。」The police could produce only circumstantial evidence.★「国会議員の名前を挙げた」He mentioned a Diet member by name.

③「推挙する」「彼を会長候補に挙げることに決まった」They decided to nominate him for president.

④「検挙する」**arrest**「殺人犯はその場で挙げられた」The murderer was arrested [(文)apprehended] on the spot.★「麻薬密輸団はまだ挙げられていない」The drug smugglers are still at large.

⑤「式を行う」「結婚式は10月に挙げる予定です」We plan to have [hold] our wedding (ceremony) in October.

⑥「大勢の人を動かす」「彼らはついに政府に対して兵を挙げた」They finally took up arms [rose up in arms] against the government.

⑦「世間に知らせる」「第2作目の小説で彼は名を挙げた」He won fame with his second novel. / His second novel brought him fame.

あげる【揚げる】

①「揚げる」**hoist**; 「空中に飛ばす、翻す」**fly**★「旗を揚げる」fly [hoist] a flag.★「すると旗をあげる」run up a flag.★「凧をあげる」fly a kite.★「花火をあげる」set [shoot] off fireworks

②「揚げ物を」**deep fry**;**deep-fat fry**「エビ(魚)を揚げる」(deep) fry shrimps (a fish).

③「陸に移す」**land**「これらの箱はすぐに陸に揚げる必要がある」These boxes are to be landed [go ashore] immediately.

④「芸者を呼ぶ」「芸者を揚げてどんちゃん騒ぎをする」call in geishas and whoop it up.
—あげる

- ①「すっかり…する」『「賊を縛りあげた」They tied up the thief.
 ②「はっきり表す」『「この誌は彼らの勝利を歌いあげている」This poem sings of their victory.
 ③「…し終わる」『「この本を昨夜読みあげた」I finished reading this book last night.
 ④「…してあげる」『「代わりに行ってあげよう」I will go in your place [instead of you]★
 「自転車を貸してあげる」You can use my bicycle.★「彼にも見せてあげなさい」Let him see it, too. 」

このように意味の分類で一定の基準を使おうとしても、結果的に意味の分類は語の意味を並べたリストになってしまう。例えば、「旗をかかげる」と「揚げ物をフライする」と「芸者を呼ぶ」は、意味の面で非常に異なっているが、すべて“「揚げる」”の原義に属するように次々と並べられている。

(1.3) 外国人のための基本語用例辞典

この用例辞典は、あまり配列順について述べていないが、外国人のための基本語彙を並べたものなので、基本的な語彙とその一般的な意味しか登録していない。「本書を使用する学習者を考えて、あまり特殊な意味・用法には及ばない。基本語彙として採録した語は、日本語の学習者や諸種の語彙調査などに見られるものを資料とし…(用例 1994/0)」というように語の特殊な意味は採録されていない。

「

上げる・揚げる・挙げる＞あがる「上がる」

1) 下から上のほう、高い所へうつす。「上・揚」＞さげる「下げる」。おろす「下ろす」。あがる「上がる・揚がる」。「お客をさしきに上げなさい」。「このにもつを棚に上げてください」。「手をあげてあいさつをした」。「下ばかり見ていないで、顔を上げなさい」。「町は市になったので、花火を揚げておいおいをした」。「船は積み荷を揚げると、すぐに港を出た」。

2) 値段・価値・資格・程度などを高くする。「上」＞さげる「下げる」。あがる「上がる、揚がる」。「政府は税金をあげないで行っている」。「一年に一度月給を上げることになっている」。「もっと部屋の温度を上げないとかぜを引いてしまう」。「もっと調子を上げて歌ってください」。

3) 物事を終わらせる。すませる。「上」「生活費はできるだけやすくあげたいと思います」。「ピアノソナタを一曲あげた」。

4) 「敬語」として使う場合。「上」(1)「やる・あたえる」のていねいな言い方。＞やる。あたえる「与える」。「お好きならあなたにあげましょう」。「あとで手紙をあげます」。(2)「動詞＋てあげる」の形で、人のためにある動作をする意味を表す。「てやる」のていねいな言い方。「わからなければ教えてあげます」。(3)「申す・存ずる＋あげる」の形で使って、けんそんの気持ちを表す。

「ここでお待ち申し上げます」。「お名前はよく存じあげております」。

5) やさいや、にくや、さかななどをあつゐあぶらの中に入れて料理する。「揚」「てんぷらを

あげる。「カツレツをあげる」。

6) 人に知られるようにする。名をよんだりして数え立てる。「揚」「例をあげて説明せよ」。「合格者の名前をあげて下さい」。「彼はスピーチコンテストで一番になって学校の名をあげた」。「来月結婚式をあげます」。

7) 全部を一度にする。使う。「挙」「全力をあげて試験のため勉強した」。「国をあげて記念日をいわう」。

8) 利益を得る。「デパートは大きな利益を上げている」。

このような分類は、基本的な意味だけが採用されているので、語のおもな意味領域がよく把握できる。しかし、意味範囲は全体的にどのように形成するかはここでもはっきりしない。

(1.4) 新明解国語辞典

新明解国語辞典の編集方針の中で語義の配列については、「語義は、現代日本語において通常使用されているものを凝視し、頻度の多いものから低いものへ、一般的なものから特殊なものへという方向によることを原則とした。古義・原義で、あとへ回すことに忍びないものは、語源として冒頭に注した(新明解 1981/3)。…なんらかの意味で対比される同音語、及び語源の異なる同型の外来語を便宜Ⅰ・Ⅱで統合し、スペースの儉約を図った(新明解 1981/4)」という。この分類で「あげる」は、形態・統語論的な働きによってⅠ他動詞・Ⅱ自動詞・Ⅲ助動詞の三つの項目に分けてある。その他の分類は、頻度または一般性によるものである。

「

**あ・げる[上げる]Ⅰ0(他下一)

(一) 人目に付かぬ・低い所(下の方)から、人の目に付く・高い所(上の方)へ移す。「(重い)腰を一・国旗を一[＝高く掲げる]・手を一([①挙手する/②⇒お手上げ])・両手をあげて賛成する:軍配・(幕)を一:棚に一・客を座敷に一[揚がるように進める]・芸者を一[＝座に呼んで遊興する]・娘を大学に一[＝入学させる]:食べたものを一[＝吐く]:打ち一」

(二) 今までより程度を高める。「成績を一[＝よくする]・月給を一[＝昇給させる]:スピード・(全力)を一[＝出す]:名・(男)を一:血道・(熱)を一:あげたり[＝ほめたり]下げたりする:運賃・(スピード・ピッチ・能率・効果・業績)を一」

(三) それとはっきり分かるように・形(行為)に表す。「花火・(波しぶき・のろし・アドバルーン)を一:兵を一[＝起こす]:悲鳴・(総力)を一[＝出す]:結婚式を一[＝行う]・おだを一[＝自慢する]:収穫・(利益)を一[＝得る]:名・(声・名乗り)を一:槍玉に一:高らかに歌い一」

(四) [条件を満足する・(問題となる)ものとして]示す。「具体的な例・(難点)を一:何人かの名・(候補者)を一:理由・に(を)一:…の点が挙げられる・筆頭に一[＝掲げる]・証拠を一[＝見せる]・犯人を一[＝検挙する]・挙げて数ふべからず[＝あまり多くて一々数えては居られない]:数え一・取り一・並べ一」

(五)望ましい結果を納める。「結果を一・業績を一・利益を一〔＝得る〕：一男一女を一〔＝もうける〕」

(六)(その範囲内で)けりがつくようにする。「千円で一〔＝①まかなう。②済ます〕・リーダーを一〔＝終える〕」

(七)「与える」の・謙譲(丁寧)語。「花を一〔＝供える〕」

II 0(自下一)

「遠くにあったものが」すぐそばまで来て一杯になる。「潮が一〔＝満ちてくる〕・胸が上げそうだ〔＝むかむかして吐きたくなった〕」

III〔接尾語的に〕

(一)もう十分だということまで何かをする。「書き一・縛り一・練り一・こね一・でっち一」

(二)相手への動作をへりくだって言う。「願いあげます」

(三)「てやる」の謙譲・(丁寧)語。「見て一」

あ・げる「揚げる」(他下一)

(一)熱い油に入れて火を通し、食べられるようにする。「天ぷらを一・フライを一・ニンジンを一」。

このような分類は、辞書の中で最も適用しやすいもので、比較的に見やすい分類の結果を生み出す。しかし、一般性または頻度順を使っても「上げる I」の⑦「与える」は、よく使われている意味なのに、⑥「(範囲内で)けりがつくようにする」のあとに配列されている。

(1.5) 広辞苑

この辞典の配列順について作者は、「国語項目は、現代語はもとより、古代・中性・近代にわたってわが国の古典にあらわれる古語を広く収集し、その重要なものを網羅した。…国語項目の解説に当たっては、つとめて古典から文例を引用し、語の用法を実地に示した(広辞苑 1991/9)。語義がいくつかに分かれる場合には、原則として語源に近いものから列記した(広辞苑 1991/13)。』という。その意味の大きな分類は、(一)(二)(三)…で行われ、それをまた細かく分ける場合(1)(2)(3)…を使い、そして更にこの意味を分割する場合は、(イ)(ロ)(ハ)…と示している。この分類では、語源が基本になり、用例もほとんど古典文学から引用されているので、現代語の国語辞典としての働きよりも総合的な国語辞典とする方が適切な呼び名であろう。

「

■あ・げる【上げる・挙げる・揚げる】《他下一》〈文〉あ・ぐ(下二)

力や手を加えて、物の位置や状態や次元を高くする。

(一)そのもの全体または部分の位置を高くする。

(1)上へやる。高い所に移動させる。丹後風土記逸文「大和べに風吹き一・げて」。竹取「燕はいかなる時にか子産むと知りて人をば一・ぐべき」。

(2)上向きにする。「目を一・げる」。

- (3) 空高く浮ぶようにする。「風を一・げる」。「花火を一・げる」。
- (4) 陸上へ移す。平家一「一・げ置いたる船」。
- (5) 下げていた髪を結び上げる。また、ものを高い位置に据え付ける。万一六「橋の寺の長屋に吾がゐねし童女放髪(ウナイハナリ)は髪一・げつらむか」。「棟を一・げる」。
- (6) 下に敷いてあるものを取りのける。「畳を一・げる」。
- (7) 吸い上げる。「切花が水を一・げる」。
- (8) (胃から口の方へ)もどす。吐く。「船に酔って一・げる」。
- (9) 家の中に入らせる。浄、忠臣蔵「はじめてのお方を同道申した。…一つ一・げます座敷があるか」。
- (10) 芸者・遊女を(座敷へ)呼び寄せる。また、呼んで遊ぶ。織留一「丸屋の七左衛門方に太夫の吉野を一・げ置き」。
- (11) (人を)都へのぼらせる。上京させる。源玉鬘「とかく構へて・京へ一・げ奉りてむ」。
- (12) 勢いよく馬を跳ねあがらせる。著聞一〇「おとど力及ばで、あがり馬をひかれにけり。なか道くちをはづさせて一・げけり」。
- (13) (気を)たかぶらせる。栄華若枝「あないみじ。気(け)一・げさせ給ふな」。
- (14) (水位を高める意から自動詞的に使われて)潮がさす。「潮が一・げてくる」。
- (15) (「揚げる」と書く。金網にのせて油をきる意)油で煮て、揚げ物をこしらえる。「てんぷらを一・げる」。

(二) 資格・価値・程度・勢いなどを高める。

- (1) 地位を高める。昇進させる。続紀一〇「冠位一階一・げ賜ふ事」。
- (2) (「騰げる」とも書く) 価を高くする。金額をふやす。「料金を一・げる」。
- (3) (子女などを)寺子屋・学校などに入れる。浮世物語「寺に一・げて手ならひをさすれども」。
- (4) 技能などを高度にする。上達させる。日葡「ガクモンナドノイロヲアグル」。
- (5) 勢いをさかんにする。勢いをつける。「氣勢を一・げる」。「ピッチを一・げる」。
- (6) 声量を大にする。高く発する。日葡「コエヲアグル」。
- (7) 顔だち・風采また評価などをよくする。「男ぶりを一・げる」。「男を一・げる」。

(三) 極点にまで至らせる。事を終らせる。

- (1) なしとげる。仕上げる。「この仕事は今夜中に一・げなければならない」。
- (2) 育てあげる。今昔九「これ片輪者なりとて、その子を遂に一・げずして棄てつ」。
- (3) (赤子を)とりあげる。もうける。「二男一女を一・げる」。
- (4) 経費をそれだけですませる。浮世床初「一分。エ。それで一・げるつもりかエ」。
- (5) 遊興や投資に金を全部使う。入れあげる。浄、二枚絵草紙「新地狂ひに身代一・げ・方々の借錢」。
- (6) 全部出しつくす。何物も残さない。「全力を一・げる」。「国を一・げて祝う」。
- (7) 撤去する。かたづける。玉塵抄14「食ひ果てて、食ひ残しの分けのあるを、婦が膳を一・

げて、その膳の分けを食ふぞ」。

(四) 高く人目につくようにする。広く知られるようにする。

(1) 高く掲げ示す。平家二「天下に兵乱起つて、烽火を一・げたりければ」。

(2) (実例・証拠などを)明確に表面にあらわす。また、(効果・実績などが)はっきりあらわれるようにする。「証拠を一・げる」。「成果を一・げる」。

(3) (名声などを)世に広める。平家六「日本一州に名を一・げ」。

(4) 取り立てて示す。平家一「大織冠・淡海公の御事は一・げて申すに及ばず」。

(5) ほめたたえる。また、その地位や仕事に突した人として推挙する。雨月三「この玉河てふ川は国々にありて、いづれをよめる歌もその流れの清きを一・げしなるを思へば」。「委員には某君を一・げる」。

(6) 大勢の人を集め動かして事を起す。十訓抄「義兵を一・げて、かの国へ向ひ給ひし時」。

(7) (行事や儀式などを)とり行う。「式を一・げる」。

(五) 高位または有力なものの所に到達するようにする。

(1) 神仏に供える。奉納する。栄華鶴林「関白殿、日ごとに法華経一部、阿弥陀経あまた…を一・げさせ給ひて」。「お賽銭(サイセン)を一・げる」。

(2) 身分の低い者から高い者にさし上げる。献上する。景行紀「すなはち朝庭(ミカド)に進上(ア)げたまふ」。

(3) 返上する。辞任する。玉塵抄二「周公の摂政を一・げて、山東の東国へひつこまれたぞ」。

(4) (本来は「与える」「やる」の相手を敬った言い方)対等または目下の相手に物を渡す場合の丁寧表現。「君に一・げよう」。

(5) 屋敷などに奉公にやる。浮世風呂賭「六ツの秋、御奉公に一・げました」。

(6) 参上させる。莫切自根金生木「ずいぶん申し触らしまして、横着な借手を一・げませう」。

(7) (官が領地・役目などを)召し上げる。没収する。諏訪の本地「彼が知行の所領を一・げて、我等半分づつ知行せん」。

(8) 物をむりに取り上げる。まきあげる。浮世風呂前「トレ手拭を見せや。…あれが所から一・げて来やアがつて」。

(9) 賊などを召しとる。検挙する。「犯人を一・げる」。

(六)

(1) (動詞の連用形に付いて) その動作を完了させる意を示す。古今六帖二「わが門の早稲田(ワサタ)もいまだ刈り一・げぬに」。「一刻も早くし一・げてほしい」。

(2) (「申す」「頼む」「願う」などの動詞の連用形に付いて) その動作の対象をあがめ敬う意を添える。狂、三人夫「汝らが名を申し一・げい」。

(3) (動詞連用形に助詞「て(で)」の付いた形に添えて) その動作を他にしてやる意の丁寧表現。梅暦「どこぞへ私(ワチキ)があづけられて、お金をこしらへて一・げるよ」。

この分類では、時代の流れの中で消えた用法も、新しく誕生した用法も、一緒に同じ「あげる」の中で取り上げている。文語の中の意味を分かるために語源による細かい分類は適切であろうが、現代語の語義の範囲を把握するためにこのような分類は誤解を招くものである。

(1.6) 大辞林

この辞典の見出し語と配列については、次のように述べられている。「この辞典は、現代の言語生活に立脚し、現代語を中心に古語や百科語をも含めた総合的な国語辞典として編集したものである」(大辞林 1995/5)。「意味の記述順序は次のようにした。(ア)現代語として用いられている意味・用法を先にし、古語としての意味・用法をあとに記述した。(イ)現代語は一般的な語義を先にし、特殊な語義や専門的な語義をあとに記述した。(ウ)古語は、原義を先にし、その転義を順を追って記述した」(大辞林 1995/8)というように大辞林は、広辞苑と同じように総合的な国語辞典であり、語の意味を現代の意味範囲に限らないで記述したものである。語義・用法は大きく異なる場合、【1】【2】【3】…を使い、そして語義・用法を分ける場合、(1)(2)(3)…を使う。

「

■あ・げる【上げる・揚げる・挙げる】

【1】より高い所へ移動させる。(1)物を、高い所に移動させる。《上・揚》。「たんすを二階に一・げる」。「原っぱでたこを一・げる」。「ロケットを打ち一・げる」。(2)体の一部を上の方へ動かす。(ア)手や足を上へ動かす。《挙》←→おろす。「わかった人は手を一・げなさい」。(イ)顔など、下向きになっていたものを上向きにする。《上》←→伏せる。「顔を一・げてこちらを見る」。「目を一・げて相手を見つめる」。(3)水の中の物を、陸地や船の上に移す。また、船に積まれていた物や人を陸に移す。《揚》。「網を一・げる」。「船から荷を一・げる」。(4)ある家屋に人を入れる。(ア)屋外や土間から人を部屋へ入れる。《上》「客を座敷に一・げる」。(イ)妓楼で、相手を客として中に入れる。《揚》。「一見(イチゲン)の客は一・げるわけにいかない」。(ウ)(芸者を)宴席に呼んで遊ぶ。《揚》。「芸者を一・げて一晩愉快地遊び明かす」。(オ)自分の子供を学校に入学させる・また、進学させる。《上》。「子供が六歳になったら小学校に一・げる」。「大学に一・げる」。(5)敷いてあるものを取りのける。《上》。「布団を一・げる」。「畳を一・げて干す」。(6)いったん食べたものを、吐く。目的語を省略して自動詞像にも用いる。《上》。「船に酔ってすっかり一・げてしまう」。(7)「生まれた赤ん坊を「取り上げる」ということから」自分の子供をつくる。母親にも父親にもいう。儲(モウ)ける。《挙》。「結婚して一男二女を一・げた」。(8)「兵をあげる」の形で)軍隊を率いて行動を起こす。《挙》。「関東に兵を一・げる」。

【2】定形のないものやひそんでいたものを、現れるようにする。(1)煙・炎などを、上方に立ちのぼるようにする。《上》。「のろしを一・げる」。「真っ赤な炎を一・げて燃える」。(2)大きな声を発する。《上・揚》。「悲鳴を一・げる」。「喚声を一・げる」。(3)話題となっているものを明確にするために、人・物の名や数値などを具体的に示す。《挙》。「次期社長の候補として三

人の名を一・げる。「具体的数字を一・げて説明する」。(4)利潤やよい成果をおさめる。《上・挙》。「多額の利益を一・げる」。「好成绩を一・げる」。(5)犯人をつかまえる。また、証拠などを発見する。《挙》。「犯人を一・げる」。「確証を一・げる」。

【3】物事の程度をはなはだしくする。(1)値段を前よりも高くする。《上》←→さげる。「もっと給料を一・げてもらいたい」。(2)勢い・スピードなどを高くする・《上》。「あまりスピードを一・げると危険だ」。「仕事のピッチを一・げる」。(3)温度・湿度その他の数値を大きくなるようにする。《縦》←→さげる。「部屋の温度を一・げる」。「打率を一・げる」。(4)地位・成績・評価などをよくする。《上》。「位(クライ)を一・げる」。「腕を一・げる」。「一躍男を一・げた」。(5)すべてを一度に…する。(ア)「全力をあげる」の形ですべての能力を出し尽くす。《挙》。「問題解決のため全力を一・げる」。(イ)「…を挙げて」「挙げて…」の形で副詞的に用いる構成メンバーがそろって…する。《挙》。「市民はこの計画に一・げて賛成した」。「国を一・げて歓迎する」。

【4】物事を最後までし終える。完了する。《上》(1)仕事・作業・学習を完了する。「この仕事は今月中に一・げてしまわなければならない」。(2)「…であげる」の形で)合算した費用・日数などがその範囲内で済むようにする。「総額一千万円で一・げる」。

【5】熱した油の中に材料を入れて、天ぷら・フライなどをつくる。《揚》。「天ぷらを一・げる」。

【6】神仏に供物(クモツ)を捧げたり、その前で祈ったりする。(1)神仏に供物を捧げる。《上》。「お墓にお花を一・げる」。(2)神仏の耐で祈りの言葉を唱える。《上》。「仏壇にむかってお経を一・げる」。(3)結婚式を行う。《挙》。「教会で結婚式を一・げる」。「祝言を一・げる」。

【7】「与える」「やる」の丁寧な言い方。《上》。「この本、あなたに一・げます」。

【8】潮が満ちて水位が上がる。「夕方になると潮が一・げてくる」。

【9】他の動詞の連用形の下に付いて複合動詞をつくる。《上》。(1)十分に…する。できるだけ…する。「ピカピカに磨き一・げる」。「鍛え一・げた体」。(2)最後まで…する。…し終える。「論文を書き一・げる」。「一週間で編み一・げる」。(3)はつきり他者に示すように…する。「原稿を読み一・げる」。「欠点を数え一・げる」。(4)動作の受け手に対する尊敬の気持ちを表す。「申し一・げる」。「存じ一・げる」。

【10】(補助動詞)動詞の連用形に接続助詞「て」の付いた形に付く。相手に対し恩恵となるような動作をすることを、動作者の立場からいう。《縦》[普通、仮名書き。これは「…てやる」と異なり、受け手に対する軽い期意がこめられている。目上に対しては「さしあげる」を用いるのが一般的である]。「本を貸して一・げる」。「家まで送って一・げます」。

このように大きな意味分類が基本になり、それぞれ分類された意味はまた細かく下位分類されている。しかし、大きく分けた意味は互いにどう関係しているかははっきりしていない。また、細かい意味項目も、無理に同じ大きな意味項目の中に挿入されたようにも感じる。例えば、「【6】神仏に供物を捧げたり、その前で祈ったりする」の中の「(3)結婚式を行う」は「【4】物事を最後までし終える。完了する」に入れることも可能であろう。このように具体的な同一した項目ははたして立てるこ

とができるだろうか。

(2) 辞書における「あげる」の意味分類のまとめ

国語辞典と和英辞典の分類法方は、それほど異なっていないが、国語辞典の方がより具体的にかつ論理的に「あげる」の意味を分類している。和英辞典では、異なった意味項目は、比較的単純に並べられているのに対し、国語辞典では、曖昧でありながらも、頻度・語源などの基準に基づいて意味の配列が行われている。国語辞典の場合、外国語が説明の中で使えないので、より具体的な意味の分類が必要になる。

国語辞典の間でも意味分類にかなりの差が出る。まず、大きさの関係であるが、「用例辞典」と「新明解」は、「あげる」の意味を直接細かい具体的な意味場に分類する。前者は、基本的な意味しか集めていないのに、八つの意味場、そして後者は十一もの意味場を形成する。その代わりに、「広辞苑」と「大辞林」は、総合的な広い範囲の意味を記述しようとするが、基本的な分類はそれぞれ六と十しかない。しかし、この基本的な分類はまた細かく下位分類されている。広辞苑は多い場合十六の、そして大辞林は九つまでの下位分類がある。

意味分類の中で、もっとも単純なのは、基本的な意味しか扱わない「用例辞典」である。その意味は八つの意味場に分けている：(1) 下から上のほう、高い所へうつす、(2) 値段・価値・資格・程度などを高くする、(3) 物事を終らせる・すませる、(4) 「敬語」の場合：(1) 「やる」の丁寧な言い方・(2) 人のために動作をする・(3) 謙遜、(5) あぶらの中に入れて料理する、(6) 人に知られるようにする・名をよんだりして数え立てる、(7) 全部を一度にする・使う、(8) 利益を得る。この分類の中で、例えば「(4) 敬語の場合」と「(7) 全部を一度にする」の説明は不透明である。例えば、「この本を君にあげる」の場合の「あげる」は、普通の「与える」意味の方が近いのに、敬語「差し上げる」の一種として扱われている。一人称が間接目的語にならないのは、「敬語」として認められている理由だろうが、この場合の「あげる」の第一次的な意味は、所有物を渡すことである。また、「国をあげて」は、「全部一度にする」というような説明では理解できない。これよりも新明解国語辞典の説明の方が分かりやすいであろう。

新明解国語辞典も、意味分類項目が少ないが、その定義(意味説明)は「用例辞典」よりも論理的である。最初の段階では「新明解」は、「あげる」の意味を統語論上で(1) 他動詞と(2) 自動詞と(3) 接尾語の用法によって分ける。辞書としてこのような形・構造からの分け方は、意味の関連性があっても、最も適切だろう。そしてほかの辞書と大きく異なっているのは、「調理する」という「あげる」の用法は、全く別の同音異義語の語彙素として扱っていることである。この意味は、ほかの意味とあまりにもかけ離れているので、別の項目を立てることの方が論理的だと判断されたためだろう。「上げる」他動詞：①…高い所へ移す・②…程度を高める・③…はつきり分かるように形(行為)に表す・④条件を満足する・問題とするものとして示す・⑤望ましい結果を納める・⑥…けりが付くようにする・⑦「与える」の・謙譲(丁寧)語。自動詞：①…一杯になる。接尾語：①十分…何かをする・②動作をへりくだって言う・③謙譲・(丁寧)語。「揚げる」(他動詞)：①熱い油に入れて火を通し、食べられるようにする。

「用例辞典」の(1)「高い所へ移す」と(2)「程度を高める」は、おおむね「新明解」の(①)と(②)に相当するが、「用例辞典」の「高い所へ移す」の「花火を・」は、「新明解」で(③)「はっきり分かるように形に表す」で説明する。そのほか「新明解」の(②)「程度を高める」は、「用例辞典」の(7)「全部を一度にする」と(6)「人に知られるようにする」の一部の意味も含んでいる。さらに「用例辞典」の(3)「物事を終らせる」は、「新明解」の(⑥)「けりが付く」に、(4)「敬語」は(⑦)「謙譲語」と「接尾語」の一部に、(8)「利益を得る」の一部は(⑤)「望ましい結果を納める」に、そして(1)「高い所へ移す」と(6)「人に知られるようにする」と(8)「利益を得る」の一部は(③)「はっきり分かるように形に表す」に相当する。「用例辞典」で区別されていない項目は、(④)「条件を満足する、問題として示す」と自動詞であるが、(④)の内容の説明は(③)「はっきり分かるように形に表す」とどのように異なっているかを明らかにならない。「新明解」は比較的論理的に分類されているのに、(⑤)の「1男1女をあげる」は「望ましい結果を納める」であるかのように問題になるところもある。

総合的な国語事典の意味分類も曖昧な点が多い。中辞典と異なる点は、大きな意味分類が下位分類されたことである。「広辞苑」は唯一「あげる」の全体的な意味を説明する辞書であるが、この説明「力や手を加えて、物の位置や状態や次元を高くする」はせいぜい1(そのもの全体または部分の位置を高くする)と2(価値・資格・程度・勢いなどを高める)と4(高く人目につくようにする、広く知られるようにする)の項目を説明でき、基本的な意味を指すだろう。3(極点にまで至らせる。事を終らせる)と5(高位または有力なものの所に到達するようにする)と6(一)はそのままこのような基本的な一つの定義に当てはまらない。細かい分類でも疑問がある。例えば、1(位置を高くする)の中では「花が水をあげる」は「吸い上げる」と個別の下位分類項目に区別されている。また「潮があげる」と「天ぷらを揚げる」も1の下位分類に数えている。2の下位分類はおおむね合っているが、3と4と5の下位分類を一つにするのは、かなり無理がある。例えば、3では「二男一女をあげる」と「安くあげる」と「国をあげる」がそれぞれ下位分類をなしている。

「大辞林」は「広辞苑」よりも多くの大きな項目(10)を立てているが、「調理する」と「潮が満ちる」と「与える」は別々の項目として認められているので、大きな項目はほぼ同じぐらいである。その代わり「大辞林」の下位分類は「広辞苑」の49より大幅に少ない、32だけである。下位分類を見ると、辞書の間には大きな差が出てくる。どの用法がどの下位分類項目に属するかは、非常に主観的な判断に基づいている。次の表(1)では、広辞苑の下位分類に対して、ほかの国語辞典と和英辞典の中の下位分類は、どのように当てはまるかが示してある。広辞苑の一つの下位分類項目に対して、他の辞典ではいくつかの項目が相当する場合もあるが、語源を基準にもっている。全く相当しないものもある。広辞苑と大辞林の場合、最初の数字は大きな分類項目、そして次の数字はその下位分類を意味する。新明解国語辞典の場合、tr は他動詞、itr は自動詞、aux は接尾語、そして ageru は同音異義語「揚げる」を指している。また、小学館和英辞典の場合、同音異義語は a・b・c・d と分類されている。

表(1)

辞書 下位分類	広 辞 苑	大 辞 林	新 明 解 典 国 語 辞	典 用 例 基 本 辞	典 和 英 辞	中 辞 典
高い所に移動させる。	1.1	1.1	tr1	1	a1.1/c1	1
上向きにする。	1.2	1.2	tr1	1	a1.3/b1	1
空高く浮ぶようにする。	1.3	1.1	tr3	1	c1	19
陸上へ移す。	1.4	1.3	—	1	c3	2
ものを高い位置に据える。	1.5	—	—	—	—	—
敷いてあるものを取りのける。	1.6	—	tr1	—	a1.2	—
吸い上げる。	1.7	—	—	—	—	—
吐く。	1.8	1.7	tr1	—	a2.11	9
家の中に入らせる。	1.9	1.4	tr1	1	a1.4	2
芸者を呼んで遊ぶ。	1.10	1.4	tr1	—	c4	2
上京させる。	1.11	—	—	—	—	—
馬を跳ねあがらせる。	1.12	—	—	—	—	—
気をたかぶらせる。	1.13	—	tr2	—	—	4
潮がさす。	1.14	8	itr1	—	—	—
揚げ物をこしらえる。	1.15	5	ageru	5	c2	18
地位を高める。	2.1	3.1	tr2	2	a2.3/4	6
価を高くする。	2.2	3.4	—	—	a2.1/2	6
学校などに入れる。	2.3	1.4	tr1	—	—	3
上達させる。	2.4	3.4	tr2	—	a2.1	6
勢いをつける。	2.5	3.2/3.3	tr2	2	a2.3	6
声量を大にする。	2.6	2.2	tr3	—	a2.3/12	4
評価などをよくする。	2.7	3.4	tr2	—	—	—
仕上げる。	3.1	4.1	—	3	a2.7	10
育てあげる。	3.2	—	—	—	—	—
赤子をもうける。	3.3	1.8	tr5	—	—	17
経費をすませる。	3.4	4.2	tr6	3	a2.6	11
金を全部使う。	3.5	—	—	—	—	—
全部出しつくす。	3.6	3.5	tr3	7	—	—
撤去する。	3.7	—	—	—	—	—
高く掲げ示す。	4.1	2.1	—	—	—	—
明確に表面にあらわす。	4.2	2.5	tr3/4/5	—	a2.8/b2	12
世に広める。	4.3	2.3	tr2/3/4	6	b7	—

取り立てて示す。	4.4	2.3	tr4	6	b2/3	12
ほめたたえる。	4.5	—	tr2	—	—	5
大勢の人を集め事を起す。	4.6	1.9	tr3	—	b6	16
行事を行う。	4.7	6.3	tr3	6	b5	15
神仏に供える。	5.1	6.1/6.2	—	—	a2.9	8
身分を上げる。	5.2	—	—	—	—	—
辞任する。	5.3	—	tr6	—	—	—
与える。	5.4	7	tr7	4.1	a2.10	8
奉公にやる。	5.5	—	—	—	—	—
参上させる。	5.6	—	—	—	—	—
没収する。	5.7	—	—	—	—	—
物をむりに取り上げる。	5.8	—	—	—	—	—
検挙する。	5.9	2.5	tr4	—	b4	14
動作を完了させる。	6.1	9.1/2/3	aux1/tr1/4	d1/2/3	—	—
申す・頼む・願う。	6.2	9.4	aux2	4.3	—	—
動作を他にしてやる。	6.3	10	aux3	4.2	d4	—
成果を収める	—	2.4	tr3	8	a2.5	7

国語辞典と和英辞典の分類を全体的に見ると、その意味分類は、主観的な判断によるものである。具体的なものを高める意味「より高いところへ移す」そしてはっきりした抽象的な意味「程度をたかめる」はどの辞書にも分類されているが、「あげる」に結ばれる名詞句は、より抽象的になるにつれ、または基本的な意味から離れていくと、意味分類もさまざまになる。「新明開国語辞典」の自動詞・他動詞・接尾語のように形に基づく客観的な分類も使われているが、「天ぷらを揚げる」はなぜ別の意義素に成るかは、明らかではない。それは、「到着点がよそうできない」という理由があるならば、「国をあげる」も「利益をあげる」も「費用を千円であげる」も別の語彙素として取り立てなければならない。

(3) 多義語の意味分類

辞書の中の「あげる」の意味分類でも見たように、多義語を同音異義語と区別するとき問題になるのは、「解決を図る」と「会議に諮る」などのような意味関係がはっきりしない中間的なケースである。辞書によってその記述も、一つの多義語であるというものから多くの同音異義語であるというものまでさまざまであり、どちらを選ぶかはかなり主観的な判断によるとされる。語源的に判断する場合、現在の意味が非常にかけ離れている場合もあるので、同音異義語との差が分からなくなる。例えば、「辞を書く」・「汗をかく」・「オールで水を掻く」は、おそらく語源的に同じであるが、意味的に関連性がない(国広 1997)。したがって、語源的に分類すると、三つとも同じ多義語「かく」の

項目に入れることができるが、意味の関連性で分類する場合、別々の同音異義語として分類するべきである。

一番多く使われている多義語の判定基準は、語の共時的な意味的関連を調べることであるが、辞書の分類で見たようにこの場合の判断は主観的で統一性がない。ただし、客観的な意味変化によって多義語を記述することが可能であろう。このような普遍的に認められる意味変化の類型は、互いにはっきりと区別できるような独立した意味変化の関係を表わすものではないだろうが、先行研究の中では少なくとも次の 16 の変化過程が考えられている(国広哲弥 1997/210-225、Kangasniemi1997/78-83)。

- ①「焦点移動」とは、「海岸の波」>「若い女性の波」のように、一定の現象素を異なった心的角度から眺めるとき生じる意味の差である。
- ②「具象化」とは、「水の流れるが速い」>「流れを渡る」のように、(流れる)事柄を表す語はもの(川)の意味に転じたことをいう。
- ③「比喩的転義」とは、「お爺さんの心臓」>「大都市の心臓部」のように、二つの事物の間に類義性が認められる場合をいう。これは①「焦点移動」とほぼ同じであるが、おそらく現象と事物の差で別々の項目としてみとめられたためだろう。
- ④「時空比喩」とは、「映画館に入る」>「雨期に入る」のように、空間を表す語が時間を表す意味に転じるもの(あるいは反対)である。
- ⑤「時空間推義」とは、「日が差す」>「母の日」>「晴れた日」のように、現象(太陽)・時間(一日)・空間(天気)のそれぞれの方面から見て語の意味が変わるものである。
- ⑥「推義」とは、一般的に「換喩」と「提喩」と呼ばれる。「換喩」(metonymy)は、ある事物に関連しているもの(mesikämmen=蜂蜜の手* > 熊)を表し、そして「提喩」(synecdoche)は、事物の一部が全体をあるいは全体が一部を(ase=武器 > 鉄砲)さすことである。
- ⑦「プラス値派生義」とは、「病人は熱がある」と「この人は力がある」のように、本来の意味より以上であることを表す。
- ⑧「上下関係派生義」とは、「青い空」と「青信号」のように、一般義と特殊義の関係を示している。
- ⑨「推論的派生義」とは、「人を撃った」(弾を当てて > 人が死ぬ)のように、一般の人々の常識による推論の結果である。
- ⑩「抽象化派生義」とは、「歴史の流れ」と「大学にはいる」のように、元の意味が抽象化されたことをいう。
- ⑪「拡大」とは、「penikka=子犬 > 犬・狼・狐の子」のようにもとの意味は、似たような意味も含めるように広がることをいう。
- ⑫「縮小」とは、「emä=人間・動物の母 > 動物の母」のように元々の意味範囲が小さくなることをいう。
- ⑬「向上」とは、「kolari=交通事故(口語) > 文語」のように語の社会的な価値があがることである。
- ⑭「墜落」とは、「piika(少女*) > (女中)」のように語の価値が社会の中で下がることである。

⑨「転移」とは、「huomen＝曙*＞明日」のように元々の意味が類型の意味に転じたことをいう。これはおそらく⑤「時空間推義」と関連しているが、もとの意味が存在しないので、意味が転じたことになる。

⑩「発音の近いもの」とは、「teini＝学生*＞ティーネイチャー」のように、外来語など新しい語の発音が似ているので、語はその意味を受け持つことをいう。

これらの意味関係は、語の意味関係構造を明らかにするために、重要な役割を果たしているが、このような意味変化の分類は、語源からの歴史的な派生によるものであるとも言えるだろう。ただし、このような意味関係を通時的ではなく共時的に判断するならば、語の意味構造が明らかになり、語のそれぞれの用法は互いにどのように分類されるかも解明できるだろう。ただし、共時的な語の用法に限って意味の分類する場合、これらの意味派生の類型は、上述の 16 よりも少ないだろう。

(4) 機械翻訳用「日本語意味辞書」

ここで紹介する「あげる」の意味分析は、NTTコミュニケーション科学研究所で機械処理のために作られた日英機械翻訳システム ALT-J/E (automatic language translator - japanese to english) の中の日英文型パターン表によるものである。このシステムは、日本語の文を機械的に英語に翻訳することを目的とするので、語彙論と構文論の両面から語の用法を記述する。この場合、単語の語彙論上の意味は「単語意味辞書」に、そして構文論的な意味は「構文意味辞書」に記載される。

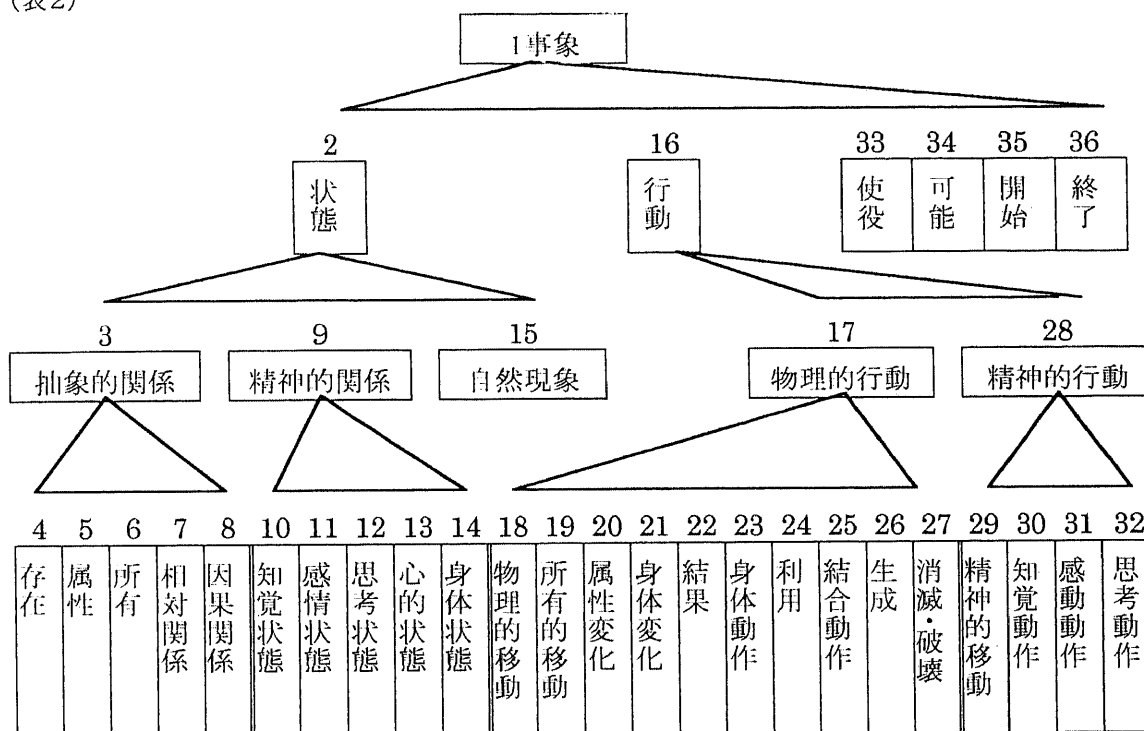
「単語意味辞書」は、単語の意味的用法とそれぞれの用法に付与した意味属性を含んでいる。単語の意味的用法は、「人間は単語の語義が分かると常識を援用してその単語のさまざまな用法までを理解するが、計算機にはそれができない」(池原 1997/13)というように、語義そのものではなく、単語のあらゆる用法をリストしたものである。単語意味属性は、一般名詞意味属性と固有名詞意味属性と用言意味属性に別れている。ここで扱う用言意味属性は、「用言の持つ本来の意味とそれが文中で使われたときの働きに着目して用法を分類したもので、構文意味辞書に登録された用言の用法の記述などで使用される」(池原 1997/15)。

「構文意味辞書」に記載されるのは、文型パターンと格要素の意味的制約である。文型パターンは、もともと基本と見られる用言と名詞との結合の構造を体系化したものであり、一般表現文型と慣用表現文型からなる。「一般表現文型は、用言の持つ一般的な文型パターンを用言の字面をキーとする意味的結合価値パターンによって表現したもので、用言の字面と一つ以上の格要素から規定される。格要素は名詞と格助詞から構成され、名詞は意味属性が規定される。…。慣用表現文型は、一般表現文型と同様なパターン対であるが、一つ以上の格要素が意味属性でなく、直接単語の字面で規定される点が一般表現文型と異なる。」(池原 1997/16)。

一般的に意味論の中で語の意味は、細かく「意味素」に分けるか、あるいは全体的な「意味標識」として把握される。しかしこの翻訳システムでは、単語の意味は、その用法の違いによって識別される。用法によって分類するという観点から見ると、このシステムは、一般的な和英辞典とそ

れほど変わらない。しかし、機械で処理できるように作られているので、語の意味は、文型パターンと意味属性によって一般的な辞書よりも細かくかつ組織的に分析されていると言えるだろう。例えば「あげる」のそれぞれの用法は、単語意味辞書の中で「用言意味属性」をもってその位置が決まる。しかし、池原もいうように「単語の意味的用法を定義するに当たっては、単語意味属性が、その単語の表す概念の抽象度を超えないよう、単語の意味属性体系のなるべく下位の意味属性の中から適切なものを選んで付与した」(池原 1997/16)と、単語のどの用法がどの意味属性をもつかは、主観的な判断による。次の単語意味属性の下位分類表(表2)でも分かるように、状態・行動の区別以外のものは、比較的主観的に分類することになる。

(表2)



(池原 1997/243)

普通の辞書と大きく異なる点は、意味属性項目は語彙全体にわたって同じである。また、意味属性を分類することに当たって、状態動詞と動作動詞の普遍的な差が利用されている。このような点で、語の意味記述の普遍性が図られたが、原言語のそれぞれの語の用法は、結局構文意味辞書の中で目的言語に直接訳されたことによって機械翻訳が成立する。抽象的な意味属性の使用は、下位関係構造が理解するには便利だが、提案された客観的な横並びの分類は果たして可能だろうか。

次に、二カ国語辞書と異なる点は、それぞれの動詞の各意味属性の中の可能な文型パターンのリストアップである。辞書では、文型パターンは、例文でまかなうので、より組織化された記述になっている。しかし、格形式がはっきりしている以外利点がないようだ。以下は、用言意味族性別文型パターン対表における「あげる」に関する文型パターンが示してある。日英の文型パターン対であるので、それぞれの意味属性の意味で用いられた場合の「あげる」の用法を示している。

5属性	挙げる(10) N1が効果を― N1 be effective 挙げる(11) N1がN2に・へ・の効果を― N1 be effective in N2
7相対関係	上げる(43) N1がN2に音を― N1 throw up the sponge to N2 揚げる(5) N1がN2に・へ白旗を― N1 give signal for surrender to N2
16行動	上げる(1) N1が全力を― N1 do N1's best
18物理的移動	上げる(2) N1がN2をN3に― N1 put N2 on N3 上げる(3) N1がN2をN3に・へ・まで― N1 raise N2 to N3 上げる(4) N1がN2をN3に― N1 let N2 into N3
19所有的移动	上げる(5) N1がN2をN3で― N1 cover N2 with N3 上げる(6) N1がN2をN3に― N1 give N2 N3 上げる(7) N1がN2をN3に― N1 make N2 N3
20属性変化	上げる(8) N1がN2をN3に・まで― N1 increase N2 to N3 上げる(9) N1がN2をN3に― N1 send N2 to N3 上げる(10) N1がN2をN3に― N1 promote N2 to N3 上げる(11) N1がN2を― N1 produce N2 上げる(12) N1がN2を― N1 improve N2 上げる(13) N1が男降りを― N1 improve N1's look 上げる(14) N1がN2をN3― N1 raise N2 by N3 上げる(15) N1がN2を― N1 improve N2 上げる(30) N1がN2に・の腕を― N1 improve N1's skill in/at N2 上げる(31) N1がN2の腕を― N1 improve N1's skill of N2 上げる(36) N1がN2の質を― N1 improve the quality of N2 上げる(37) N1がN2を棚に― N1 shelve N2 上げる(42) N1が・のN2で名を― N1 become famous for N2 上げる(49) N1が風采を― N1 improve in N1's appearance 揚げる(1) N1がN2を― N1 deep-fry N2 揚げる(4) N1がN2に氣勢を― N1 be elated at N2
22結果	上げる(16) N1がN2を― N1 raise N2 to N3 上げる(33) N1がN2に対して凱歌を― N1 win a victory over N2
23身体動作	挙げる(1) N1がN2を― N1 celebrate N2 挙げる(2) N1がN2を― N1 raise N1's N2 挙げる(3) N1がN2を― N1 arrest N2 挙げる(4) N1が兵を― N1 take up arms 上げる(17) N1が歓声を― N1 shout for joy 上げる(18) N1がN2をN3に― N1 raise N1's N2 above N3 上げる(19) N1がしぶきを― N1 send up a spray

	上げる(20) N1 が N2 を一 N1 call in N2 to N3
	上げる(21) N1 が N2 を一 N1 take up N2
	上げる(22) N1 が N3 に N2 を一 N1 offer N3 to N2
	上げる(23) N1 が腰を一 N1 stand up
	上げる(24) N1 が N2 を一 N1 shoot off N2
	上げる(25) N1 が N2 を砂浜に一 N1 put N2 ashore
	上げる(26) N1 が N2 を一 N1 raise N2
	上げる(27) N1 がのろしを一 N1 send up a flair as a signal
	揚げる(1) N1 が N2 を一 N1 deep-fry N2
	揚げる(2) N1 が N2 を一 N1 fly N2
	揚げる(3) N1 が N2 を一 N1 raise N2
24利用	挙げる(13) N1 が N2 を例に一 N1 cite N2
26生成	上げる(32) N1 が産声を一 N1 come into the world
29精神的移動	挙げる(9) N1 を以下に一 N1 be as follows
	上げる(27) N1 がのろしを一 N1 send up a flair as a signal
	上げる(34) N1 が N2 に気炎を一 N1 talk big to N2
	上げる(46) N1 が N2 に N3 の悲鳴を一 N1 let out a screech of N3 to N2
30知覚動作	上げる(28) N1 が N2 を一 N1 let out N2
31感情動作	挙げる(12) N1 が N2 を槍玉に一 N1 make an example of N2
	上げる(38) N1 が N2 を棚に一 N1 shut N1's eyes to N2
	上げる(40) N1 が N2 に血道を一 N1 be head over heels in love with N2
	上げる(41) N1 が N2 に血道を一 N1 be obsessed with N2
	上げる(43) N1 が N2 に音を一 N1 throw up the sponge to N2
	上げる(44) N1 が N2 に音を一 N1 be floored by N2
	上げる(45) N1 が N2 に音を一 N1 be at N1's wits' end for N2
	上げる(47) N1 が N2 で・に悲鳴を一 N1 cry for help because of N2
	上げる(48) N1 が N2 に N3 の悲鳴を一 N1 alternate between joy and embarrassment with N2
	揚げる(4) N1 が N2 に氣勢を一 N1 be elated at N2
	揚げる(5) N1 が N2 に・へ白旗を一 N1 give a signal for surrender to N2
32思考動作	挙げる(5) N1 が N2 を一 N1 give N2
	挙げる(6) N1 が N2 を N3 に一 N1 nominate N2 for N3
	挙げる(7) N1 が N2 を一 N1 give N2
	挙げる(8) N1 が N2 を一 N1 list N2
	挙げる(13) N1 が N2 を例に一 N1 cite N2
	上げる(2) N1 が N2 を N3 に一 N1 put N2 on N3

上げる(35) N1 が N2 に・へ軍配を― N1 declare N2 the winner

上げる(39) N1 が N2 を棚に― N1 raise N2 on a shelf

36終了

上げる(5) N1 が N2 を N3 で― N1 cover N2 with N3

上げる(29) N1 が N2 を― N1 finish N2's N3

(池原 1997/702-844)

この「あげる」の用法を見る限り、36 まで続く意味属性では、動詞の用法を一貫してまとめる統括的な力がない。例えば、5 属性と 7 相対関係のように「あげる」は一般的に考えられる上で状態を表わす事ができない。また 20 属性変化の中の「天ぶらを揚げる」は行動でも身体動作でも結果でもありうるし、24 利用の「例に挙げる」は32思考動作でも見つかる。それぞれの文型パターンが英語に対比されたことによって、機械翻訳は可能になったかどうかは分からないが、「あげる」の意味がどの程度英語の動詞の意味に似ているか、あるいは動詞という概念が言語によってどのように異なるかは明らかにならない。

(5) 動詞の意味用法の記述的研究の分類

これまで観察した「あげる」の意味記述は、辞書または機械処理のための動詞の意味用法の体系だったが、次に取り上げる記述は、最も本格的な実際の用例に基づく動詞の意味記述的研究の中のものである。これは、昭和40年代に国立国語研究所が行った日本語の現代語の動詞の意味・用法を全体的に分析・記述する研究である。本来辞書というものは、文法書と隣り合わせて使う必要がある。しかし、学問的な研究がなかったため、辞書は、語の意味に関する説明が不完全で、結論に達する根拠が示さず、語と語の意味関係を明らかにしないという欠点を抱えている。一方、意味論の中の哲学的な意味分析方法も、意味記述で解決策を導かなかったので、実例の分析による研究にすぎないものになった(国研 1975/1)。動詞の意味記述は研究の目標であるが、方法論の研究もそれとなうようになっている。

方法論の原点は、できるだけ多くの用例を集め、それによって語の意味を分析することである。実際の作品から用例を集めるものなので、多くの用例は基本的な多義語的な単語についてしか見つからない。また、用例を集めた文献は、先世紀のものもあるので、“現代語”の意味記述よりも幅が広いという心配もあるが、基本的な動詞の意味は100年の間はそれほど変わらない(国研 1975/6)。

一対の単語の意味を区別するのは意味特徴である。例えば「ほえる」と「なく」の場合、A「犬が―」のような文脈では両方の動詞が可能だが、B「猫が―」という文脈では「なく」だけが可能である。B の場合、「ほえる」の意味が積極的な制限を受けているから、実現できない。この制限が、「ほえる」にとって意味的な制限を示し、同じ意味分野の動詞を上位下位・同位・反対語関係に分ける。多義語についての処理は、ぎ人化した比喩的方法、基本的な意味から派生して使われる方法、または意味が広がり変化したとする方法のいずれかで解決する。一つ一つの単語を全面的に記述しないのは、労力と記述のスペースのためである。そこで動詞は意味分野によって分類し、そ

これらの意味の上下関係を分析し、個々の動詞の意味特徴を明らかにした(国研 1975/15)。しかし、いくつかの動詞の用法が国研の研究で全面的に記述されているので、ここで扱うのは、当研究で分析された「あげる」の用法である。

個々の単語の記述では、すべての単語は、「あげる」のように多くの異なった用法をもつものである。この場合、全体的な共通の意味側面は、認めることができる場合もあるが、難しい場合もあるので、動詞の意味は多義語として扱っている。動詞の異なった意味は、ABC と別々のグループに分け、それぞれのグループに共通な抽象的な側面をもつものは、 $A_1A_2A_3$ と並べられる。 $A_1B_1C_1$ などの小分類の間の関係も全体的に見て、明らかにする必要がある。しかし、最も基本的な問題として、どのようなものを一つの意味に認めるべきかという点が未決定である。 $ABC \cdots A_1A_2A_3 \cdots A_{11}A_{12}A_{13}$ という分類では、境目が箱のようにはっきりしているが、多義語の本当の姿は不規則な形の星雲である。そこで、実例を多く積み重ね、多義語における意味関係の具体的なあり方を追求する中から、この問題の解決に迫る(国研 1975/509-510)。次は国立国語研究所の分析を観察して、その長所と短所を検討する。

「

[00] 「あげる」の基本的な意味は、空間的に上へ移動させることである。移動させるということのなかには、2つのばあいがある。1つは、

○「これでしょ？」とウイスキーのびんを上げて女中は首を傾けた。(暗夜行路・前85)

○校長は椅子を離れてガラスの戸を上げた。(破戒78)

○錨を上げたり、下したりする度に、(蟹工船10)

のように、移動が、ほかから加えられる力によっておこるものである。大部分の「あげる」の用例はこれに属する。もう1つの、数からいえばずっと少ない型のもは、次のように、移動はこれ自身の力によっておこり、他動詞としての性格は、その移動を他のものがゆるすところにあるものである。

○「牡と名のつくものは猫も膝にあげちゃいけないよ。」(小説春秋1956年7月39)

○盲目の女師匠が物干台に立ち出でて雲雀を空に揚げているのを(春琴抄181)

他動詞性におけるこのようなちがいは、対応する自動詞(このばあいは「あがる」)にみられるちがいととも、多くの動詞に共通しているものである。

「あがる」のばあい、「二階に上がる」のような到着点や「坂をあがる」のような経由点が表示されていることが多く、そこから、到着という結果に重みがかかるものと、経過に重みがかかるものとあいだにニュアンスの差が生じることをのべた。「あげる」については、そのような差はほとんど問題にならない。というのは、到着点も経由点も示されていないものが多いからである。いま、雑誌90種の資料によって、[0]とした空間的上昇の意味をもつもののうち、「～に(へ)」「～を」「～から」の形で到着点・経由点・出発点の明示されているものの数をしらべると、つぎのとおりである。

	到着点	経由点	出発点
あがる 39 例	15(38%)	3(8%)	4(10%)

あげる 69 例 12(17%) - (0%) 3(4%)

このことは、上昇するもの、すなわち、「あがる」については動作の主体、「あげる」については動作の対象が何であるかにも関係する。これを、いきもの(人間・動物)・からだの部分・それ以外のもの3つにわけるとつぎのようになる。(「裾から八寸上がった所に」のように主体があまり問題にならないものは、便宜上、いきものにした。)

	いきもの	部分	もの
あがる 39 例	22(56%)	2(5%)	15(38%)
あげる 69 例	2(3%)	29(42%)	38(55%)

このことは、上昇するものがいきもの、特に人間であるばあいには到着点や経由点が問題になるが、からだの部分であるばあいには問題にならない、ということを示すものであろう。からだの部分については、からだ全体との相対的な位置がきまっているから、ある部分(たとえば手や足)が上昇すればどの辺に来、その結果からだは全体としてどんな形になるかは、わかりきっている。つぎにあげるような例では、その部分の上昇ということ自身よりも、その結果として人が一定の姿勢をとったことが大切なのである。

- ほりながらときどき、頭をあげて、左右に気をくばったが、(真空地帯・86)
- 向うで鎌首を上げたと思ふと草をさらさらと渡った。(高野聖20)
- 時屋一等兵は一寸薄い唇の右端をあげ、(真空地帯・上68)
- 雑夫長が薪を脇にはさんで、片肩を上げた窮屈な恰好で、(蟹工船 65)
- そのひとは指を一本あげてしづかにそれをおろしました。(銀河鉄道の夜 318)
- 拳固をあげて、自分の頭を力まかせに撲りつけた。(多情仏心・前 289)
- 婦人は背後へ高々と踵を上げて向うへ飛んだ。(高野聖 37)
- 白耳はそれを見上げていたが、もう下から吠えるようなことはせず尻尾を上に向けて何事もなかったように引揚げて行つた。(小説新潮 1956 年 8 月 302)

このほか、首・手・腕・足などを対象とした表現があった。

以上にのべたように、からだの一部をあげることの表現は、たしかに特徴的な1群である。しかし、一部の辞書がしているように、これを独立の意味とすることには問題がある。人体の一部でなくても、「～をあげる」という表現が、習慣的に一定の姿勢をとるばあいをさすように固定化している例があるからである。

- 彼は、ただ機械の如く渾身の力を入れて、槌を挙げ、渾身の力を以て、之を振り降ろした。(恩讐の彼方に 79)

- 鞭をあげて、光秀は小姓に訊いた。(オール読物 1956 年 1 月 100)

これらが、単に道具の空間的な上昇をあらわすだけでなく、その道具をもって一定の姿勢をとったことをあらわしていることは、明らかである。これと「手をあげる」などとは、はたらきかけの対象が主体のからだの外にあるかどうかという基準による以外は、区別することが難しい。

なお、消極的な理由としては、他のいろんな動詞、たとえば「まわす」「うごかす」「さげる」「なじる」などについて、からだの一部に対する動作とそうでないものとを別の意味としているものがないことをあげることができるだろう。これも、「あげる」のばあいとまったくおなじはずである。

このような、いわば意味の特殊化に向かう傾向は、実は空間的上昇を意味する「あげる」の用例の大部分についてみられることで、そのようなニュアンスのうすいもののほうが、かえって少ないようである。(最初に引用した「びんをあげる」「ガラスの戸をあげる」「いかりをあげる」は、比較的特殊化されていないとおもわれるものである。もちろん、対象はそれぞれちがう以上、完全に不色透明な上昇というものはない。)「あがる」についても、「坂道をあがる」のと「階段をあがる」のとでは、たしかにあがりかたがちがう。しかし、どちらも上昇するものが人間であることにはかわりない。「あげる」については、上昇するものが、いちいちのばあいでちがうので、一層特殊化しやすいのであろう。

特殊化を意味のずれの第1段階とすれば、第2段階としては、これに象徴的な用法のくわるものがある。ここで象徴的な用法とよぶのは、そこで直接のべられている動作にともなう他の現象を暗示するようなものである。「あげる」という動作をその一部分とする、より大きな動作を示しているという意味では、これを提約的な用法とよんでいいかもしれない。

○「御目出たう」と云つて、先生が私のために杯を上げて呉れた。(こころ 88)

○母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさって仕舞つた。(こころ 88)

○根は愛妻家などで決して直接手を上げる様な事はなく、(文芸春秋 1953 年 10 月 232)
「さかずきをあげる」というとき、かんじんなことは酒をのむことである。「床をあげる」では床をかたづけることである。これらのばあいに、さかずきや床の上昇という事実はあるにちがいないが、大切なのは、その上昇に象徴され、代表されているもっと大きな動作全体である。しかし、ここで、「あげる」に「(～をつかつて)酒をのむ」「かたづける」などの独立の意味をみとめるべきではないだろう。なぜなら、この用法は「さかずきを」「床を」という形、または意味的にみてこれときわめて近い「祝杯を」「ふとんを」などの形でしかみられず、「茶わんをあげる」「コップをあげる」や(かたづける意味で)「下着をあげる」「食器をあげる」などとはいえない。つまり、これは自由なむすびつきをつくるものではなく、意味のずれは「さかずきをあげる」「床をあげる」全体についておこっているものとみるべきである。

「頭をあげる」「顔をあげる」も、この段階に属するものとみられる。これらのばあい、たそかに大体は頭や顔の空間的上昇をとともうだろうが、大切なことは、むしろそれとともに頭や顔が前をむくということである。

「あがる」と同様、部分的な位置変化のものもみられる。

○それをだしてきた、上衣の前をあげて腹のところに納めたが、(真空地帯・上 135)

○熱帯の朝が、幕をあげるやうに、するすると明け放れるのを(野火 67)

基本的な意味の範囲内で、全体が比喩的な慣用句になっているものには、「たなにあげる」がある。

○葉子は、自分のことは棚に上げておいて、激しく事務長を憎んだ。(或る女・前 162)

{あがる}にならって、空間的上昇の範囲内にあって本来の用法とはちがっているものをならべておこう。(国研 1975/534-537)」

宮島は空間的な上昇を「あげる」の基本的な意味として定義するが、なぜ空間的な上昇が基本的な意味であるかについて詳しく述べていない。おそらく宮島は、言語の歴史的な発展の中で空間的な意味が基本とされていることを判定の動機としているだろう。人間の進化の中で空間的な認識は、すでに言語能力の前の段階で存在したと思われるので、原始的な段階の言語は、おそらく具体的な空間的な動作を表しただろう(Jackendoff1983/210)。しかし、現在の語の姿を明らかにしようとすると、歴史的な発展は重要ではない。重要なのは単語の中心における意味とほかの意味との関係である。「あげる」を幼児の発展から見ると、やはり具体物の空間的な上昇は、おそらく子供の言語発達段階でほかの意味より早く覚えられようし¹、使用頻度の面でも物理的な動作は中心的な意味である(国研 1972/551(p.68))。このような観点から見ると、「空間的な上昇」は、「あげる」の基本的かつ中心的な意味の一つであると判断できる。

次に宮島は、「あがる」と「あげる」の要求する名詞句を比較して、移動する生き物は多くの例で到着点を必要とすることを指摘する。しかし、動作主を「生き物・部分・もの」と意味的に三段階に分けるよりも、動作主の可能な動きに注目したい。意志のある生き物は(アリ<>鳥のように動物の移動できる範囲に限りがあるが)、ほぼどこでも移動できるので、「あがる」場所(到着点)の提示が必要である。しかし、ものや体の部分は、多くの例では決まった動きしかできないので、到着点を必要としない。このように「人が上がる」というとき、空間的な移動はSF文学でしか考えられないので、別の意味(「講演の前にあがる」)を表すことが妥当となる。他動詞「あげる」の場合、生き物は生き物を物理的に上に上げることは考えにくいので、「人を上げたり下げたりする」意味になるが、「座敷に一」と到着点の決定すれば、物理的な動作になる。ただし、生き物を上下に動かす場合、複合動詞「持ち上げる」を使用しなければならない。カモメなどの鳥はふだん風に乗って上空にあがるので、「カモメが上がる」という到着点のない文は可能かもしれないが、「いかり・煙・日の丸」などのようなはつきりと上下に動くものを上げる場合、到着点は要らない。言うまでもないが、手・首・顔など体の部分も物理的な動きには限りがある。

次に述べる第一段階の意味の変化、特殊化も、上述のものの動きの制限に関係している。宮島は「「びんをあげる」「いかりをあげる」は、比較的特殊化されていない」というが、「鞭・槌をあげる」に比べると、それらはただ異なった環境で使われるものである。「鞭・槌」は「手に持って打つためのもの」という特徴を持っているなら、「あげる」動作に「おろす」動作が自動的に加わる。「いかり」の場合、「船を止めるために使う道具」という特徴を加えるなら、「出航・漂流」という動作が考えられる。しかし「ビン」の場合、「あげる」は別に特定の連想を起こさないなので、ただ単に「空間的上

¹ 子供が最初に習う移動を伴う動詞「行く・する・食べる・有る・乗る・見る・出る・要る・終わる・開く・居る・買う・書く・締まる・取る・飲む・持つ・置く・来る・出す・向く」は、具体的な動作、または空間的な移動を表している(大久保 1993/89)。

昇」を表している。語用論における特定の環境だけにおける連想と異なって、意味論での連想は、言語の中で一般的な習慣として使われる意味である。

第二段階の意味の変化、提喩的な表現では、重視される動作はすでに“あげる”動作から連想される別の動作に変化しているが、空間的上昇はまだ背景に残っている。このように「杯を上げる」や「床をあげる」は、空間的上昇(杯・床を持ち上げる)を表すよりもその後に伴う動作(飲む)や結果(片づけた)を表している。これとは別に、比喩表現では、「熱帯の朝が、幕をあげる」や「自分のことは棚に上げて」のように視点は完全に連想する意味に移った。「幕を挙げる」は「始まる」、そして「棚に上げる」は「後にする」ことを連想するので、その連想だけが残り、慣用句を形成する。

「

[01] ふつう上のほうにあるもの、つまり服装の頭に近いほうが、平面状にあっても上とされ、それらに近づくことが「あげる」であらわされるのは、「あがる」のばあいと同様である。

○肩線は肩先とネック・ポイントを5ミリ上げてカーヴ線で訂正します。(婦人倶楽部 1956 年 10 月付録 流行のジャケット集62)

○ウエスト線を3センチ上げ、そこからスカート丈をとる。(婦人の友 1956 年 12 月 251)

(国研 1975/537)」

これらの例文もものの前提にある意味の影響力を裏付ける。つまり、テーブルの上にある紙であっても、話者に近い端は下遠い端は上という。その上の線や点などを動かす場合、「上げる」と「下げる」が使われる。上述の例では、「肩線・ウエスト線」は人間の胴体に関係しているので、人の立っている状態が前提に想像されている。そのために「肩・ウエストを上げる」ことは自然に考えられる。

「

[020] 「あげる」の重点が、単なる上昇よりも、そのものをよく目立たせる、という点にうつっているばあいがある。

○松山書店と書家を書いた看板をあげている古本屋へ来た。(暗夜行路・前 265)

○汚い活動小舎があつて、静々しいチャンバラものの絵看板があげてある。(むらぎも 175)

これらも、もちろん上昇という事実を重要な要素としてふくんでいる。しかし、単なる上昇ではなく、よく見えるような位置に看板をかかげて固定する、ということを表しているのである。そのような一連の動作を「あげる」で表現させている点で、これは「さかずきをあげる」「床をあげる」などと同様に提喩的な側面をもっている。ただ、「表札をあげる」「国旗をあげる」など、よく目立つ高い位置におくことであれば、わりに自由につかわれるのではないかとおもって、それらとはちがう扱いをした。(本当に「さかずきをあげる」などどちらがって独立させる必要があるかどうかを確認するためには、さらに大規模な調査が必要である。)

つぎの例は、「一旗あげる」全体で比喩となっている。

○夏期林間学校で一旗挙げんものと近藤舞子に赴くが、(明星 1956 年 11 月 204)

[021] (顔をなどを)前のほうに向けること。

からだの部分について「手をあげる」「足をあげる」などというばあい、特に1つの意味としてみとめる必要がない、ということは前にのべたが、それは、一定の姿勢をとるようなし方での上昇である点で特殊ではあっても、とにかく上昇に中心があった。しかし、「顔をあげる」「目をあげる」については、事実として上昇をとまなうかどうかはあまり問題ではない。

○木村はふと顔を上げてしげしげと葉子を見た。(或る女・前 221)

○私は不図眼を上げて其所に立つてゐるKを見ました。(こころ 247)

○新治と水夫は訊ねる視線を上げた。(潮騒 144)

これらの例で実際に目などの位置がより高くなったかどうかはわからない。下を見ていたのが前を、つまり、より上をみるようになったこと、視線が前を向いたことが問題なのだ。つぎの例が実際に上昇を問題にしているのとは、区別されるべきである。

○事務室で週番下士官の調査がはじまったが、安西ははいっという言葉を繰返しては目の玉を上の方にあげた。(真空地帯・上 210-211)

この例でわざわざ「上の方に」とことわっていることに注意。単に「目をあげる」といえば、目玉を「上の方に」つりあげることではないのである。ただし、顔や目を前に向けることには、上昇をとまなうことが多いはずで、「顔をあげる」などとの境は連続的である。

顔や目を前の方に向けることは、つまりこれらを他人からよく見えるようにすることである。その点で、この用法は[020]の「看板をあげる」「旗をあげる」と共通する面をもっている。

[022] 敵の首をとること。

○漢軍之を追撃して虜主を挙げる事数千。(李陵 158)

これは、「首をあげる」といえても「頭をあげる」といえないことからみて、完全に慣用句としての用法であり、「さかずきをあげる」などの延長上にある。しかし、「さかずきをあげる」などが、上昇という要素を失っておらず、上昇で全体を代表させる提喩であるのに対し、「首をあげる」では、上昇の要素がほとんどゼロに近い——つまり、首を切りさえすれば、より高い位置に移動させなくても「首をあげる」といえる。——点で、基本的な用法からのズレが大きい。

首をとることを「首をあげる」というのは、とった首を高くかかげて示すことからでたものと考えてここに位置づけたのだが、とにかく慣用句だから、この「あげる」の意味をそうはっきり規定することができない。

つぎの例は、この用法の「兕首をあげる」が、全体として比喩的にもちいられたものである。

○レッツの場合は、新鋭が思いがけずに兕首をあげるのではないかと見られている。(野球界 1956 年 10 月 157) (国研 1975/537-539)

最初の「看板をあげる」はどのように「国旗をあげる」などと違っているかについて宮島は、提喩表現であると説明しているが、「日の丸をあげている国立競技場」と言うこともできるだろう。看板をあげている場所のほうが多いだけである。つまり動作主が意志のある生き物である場合、「看板・国旗をあげる」のは空間的な上昇であるが、動作主が看板や国旗などの場所である場合、「あげ

ている」状態である。この点で「看板をあげる」は「床をあげる」とは異なっている。「床をあげる」は空間的上昇が時間的に同じ動作の連続である。

次に宮島は、「顔をあげる」と「頭をあげる」を別々に分けているが、問題は「あげる」の空間的上昇ではないと思う。なぜなら顔は、頭の一部分であるので、頭と同じような動きをするからである。ただし、顔は頭の表であるので、当然「見る」ことがまず連想される。しかし、それはほかの体の部分と区別する理由にはならないと思う。また、「目をあげる」は「視線をあげる」と同じように解釈できと思う。つまり「目」の意味は「視線」という連想をおこすので、「あげる」ことは「ウェスト線」と同じように可能である。同じように次の例のように上から下への“動き”も可能である。

○「そのきらきら輝く目を落した。」(アンナ・カレーニナ)

もちろん誰か他の人の「目と首をあげる」ことになると、結果は恐ろしいものだろう。「首」の場合、宮島も慣用句であることを指摘しているが、「床をあげる」と同じように提喻表現であると思う。なぜなら首を取る場合、あげる動作は前提になるからである。

「

[03] 「あげる」ことが同時に対象の生産を意味する例は多い。

○けたたましい汽笛が一抹の白煙を青空に挙げて鳴りはためき、(或る女・前 164)

○爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのでした。(銀河鉄道の夜 263)

○やがて水沫をあげて全身をあらはした。(冬の宿 17)

○砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、(田園の憂鬱 5)

○手首にぶつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、(銀河鉄道の夜 274)

○見えない天の川の水もそのときはゆらゆらと青い焰のやうに波をあげるのでした。(銀河鉄道の夜 298)

次の例は、ここから比喩的につかわれるようになったものである。

○一方を揉み消す為には一方にどんと火の手を挙げる必要がある。(或る女・前 27)

○このときに、分子生物学の研究を志す日本の学者たちはノロシを上げたのである。(生命の暗号を解く 163)

作りだされた結果は、以上のように「～を」で示されることが多い。しかし、また、「～に」で示されることもある。

○丸髻に結つたり教師らしい地味な束髪に上げたりしてゐる。(或る女・前 80)

この文にはないがこのばあい、材料となるものを「髪を束髪に上げる」の形でおぎなつて示すことができる。これはちょうど、

{ 絵をかく
 けしきを絵にかく
 { かざりをつける
 花をかざりにつける

などに見られる対応関係と同じである。

つぎに、空間的移動ではあるが、かならずしも上昇といえないもの。(国研 1975/539)」

ここの「あげる」は、対象生産を表すよりも、対象自体は継続して生産されて現れてくるものであると思う。波・沫・ほこり・湯気・煙は(波以外?)すべて数えられないものを表しているので、一つ一つあげることは不可能である。そのために動作主は、「風・ヒバリ」の場合と同じようにただ「あがる」きかけを与えるだけであって、その後の動きを継続させる。意志のない動作主は、「看板」と同じように起きる場所を表している。「髪を束髪に上げる」という文は、この類の名詞とは関係ない。どちらかというと「手を拳に握った」というような例である。つまり格助詞「に」で表される名詞句は、場所を表せないの、「あげた・握った」状態を表している。「髪の毛」をあげる場合、かつらではないので、可能な動きは一つしかない。

「

[04] 「あがる」のほうには、船から陸に「あがる」という用法があるが、これに対して、「あげる」のほうには、水のなかから空気中にとりだす、というばあいがある。下の例で、たとえばザルが水よりも上にあるとはいえない。

○そうめんはゆでて水にさらし、ザルにあげて。(主婦と生活 1956 年 3 月 387)

○金魚は、よわい。水からちよいちよい上げて行くんじや、もたないや。(婦人倶楽部 1956 年 7 月 71)

さかなをつりあげることを「あげる」というのは、ここからさらに特殊化したものであろうが、別の独立のものとしてたてるべきかどうかは不明である。

○永田氏は二貫七百匁の寒鯛と九百匁の石鯛をあげたのみで殆んど全員があぶれた。(中央口論 1953 年 8 月 208)

(国研 1975/539-540)」

これらの例は、「本を棚に上げる」のと変わらないと思う。ただし、「エビを50キロあげた」の場合、エビ漁の独特な動作が前提であるので、多少異なっている。また、「つり上げる」についてだが、「釣ってあげる」という意味の別動詞ではないかと思う。

「

[05] 座敷などにとおすこと。

「あがる」についてのべたように、「家にあげる」ことは、多くの場合上昇の動作があるとしても、それに本質があるとはいえない。

○自分の家へ君を上げては、死んだ奴らに済まぬと感じた男だ。(帰郷 135)

○河原田は日本座敷へ二人をあげた。(むらぎも 166) (国研 1975/540)」

目的地は家の中である場合、ものを運んでも人を連れていても動作主は玄関の段差を“あがら”なければならない。ただし、人をあげるとき、ふだん花嫁以外は自分の足で家に入るので、「あげる」の空間的上昇は「連れる」意味に変化する。「人をあげたり下げたりする」という意味での用法もあるが、一般的に「人をあげる」ことは空間的上昇として考えられないので、格助詞「に」で表される動詞の意味を特定する要素が必要である。

「

[06] 神仏にそなえる、意味。

○僕の香を上げ花を上げ水を注いでから、前に蹲つて心のゆくまで拝んだ。(野菊の墓 53)

○燈明をあげ、肩衣をつけ、歎異抄に類したものを唱した。(仲子・上 169)

○お経をあげて山川の霊を慰めてやることは出来ない。(蟹工船 88)

これは、たしかに 1 つの群をつくるだろうが、そのなかでもいろいろな、具体的な上昇に近いものからきわめて慣用句的なものにいたる段階をみとめることができる。

まず、もつとも移動動作としての性格をこくもっているものに、

○政は立つた次手に花を切剪つて仏壇に捧げて下さい。(野菊の墓 10)

のように、到着点が明示されているものがある。これはいわば移動と「ささげる」意味とをあわせもった、中間的なものである。

つぎには「香をあげる」「燈明をあげる」の類がある。これも、香や燈明をほかの場所から仏壇へうつしたばあいにもいえる。しかし、「花をあげる」がつねに移動をあらわすのに対し、これらはかならずしも移動をともしなくてもよい。もともと仏壇にあった香に火をつけ、燈明をともしただけでも「あげる」ことになる。したがって、「仏壇」ということばをともしつつ、これが移動の到着点をあらわすとは、言いきれないのである。大切なことは香や燈明に火がつけられること、すなわちこれらの状態が変化することである。

最後に「お経をあげる」がある。ここではもう移動はまったくおこらない。これは、意味的には、移動よりもむしろつぎの「祈りをあげる」などを中だちとして、「声をあげる」のほうにつながるともみられる。

○隣人の女たちはすぐ感謝の祈りをあげ、叫び声をあげて、子供たちを抱いた。(実話雑誌 1956 年 12 月 28)

この「祈りをあげ」は「お経をあげる」のと同じ群に属するとおもわれるが、つぎの「叫び声をあげて」とも近いようにおもわれる。

(国研 1975/540-541)」

これらの例について宮島は「神に供える」意味と解釈するが、実は「床をあげる」と「杯を上げる」などと同じように「与える」と「捧げる」という連想をおこすのではないかと考えている。その理由として動作の中には空間的な上昇は実際に存在することがあげられる。仏壇も祭壇も机と同じように“上”にある所である。燈明の場合「あげる」ところが決まっているので、述べる必要がない。また、お経や祈りの場合、出発点が「声をあげる」であるので、別ルートでの連想が考えられるだろう。この意味用法は、低い声から高い声への変化という抽象的な「上昇」から派生したものではないかと考えている。

「

[07] たべたものをはくこと。

これは実例がなかったが、「さげる」や「おろす」に対応しないことや、到着点が表現されない点で特殊なものである。

(国研 1975/541)」

この用法は基本的に「水を井戸から上げる」という意味ににているが、普通の空間的な上昇と異なって、あげられるものは動作主の中にあり、必ずしも動作主の意志によってあげられるものではない。いずれにせよ上げられるものは「食べたもの」に限っているので、出る方向は上下の二つしかない。

「

[I] 状態・性質の変化をあらわすようになったもの。

[11] 抽象的場面内での変化。これには、つぎに示すように、「入学させる」「進級させる」の2つのばあいがある。

○おくみが十四になつて女学校へ上げて貰つたばかりのときに(桑の実 6)

○あれ切りしか休まないで落第するなんか、変だなあ。あれくらゐなら、僕なんか上げてもらえるんだがなあ。(冬の宿 129)

ただし、この両者をくらべると、前者のほうが「学校」という、ときとしては具対物をもあらわしうることばとつながっているのにくらべ、後者は「上級」などの、より抽象的なものへの移動であり、その点でつぎの二層純粋な状態変化に近づいている。

(国研 1975/541)」

前にも述べたように人間が「上げる」の対象になると物理的な空間的な移動は考えにくいので、格助詞「に」で表される要素によって動作の意味が決まる。学校は、普通の家とは違って小・中・高等学校という上下のランク付けの場所であり、また学校の中で低学級と高学級があるので、抽象的に上昇する意味が考えられる。ただし、「人が相手に勧められてどこかへ入る」という要素によって「人を家に上げる」と「人を都へ上げる」という用法と類似している。高学級に上げることはこれとは別に考えなければならない。

「

[12] 資格の変化。これは、人に一定の(これまよりもよい)資格・役目をあたえることをあらわすものである。

○帝国大学を卒業後は直に助教授に挙げられ、(つゆのあとさき 53)

○自分を代議員にあげてくれた職場にくると、(改造 1954 年 1 月 153)

これらの例は、対象は人という具対物である点、「子どもを学校にあげる」などの[11]のばあいと共通であり、「湿度をあげる」のように抽象名詞と結びついた[13]とはちがう。しかし、[11]では、帰着点が「女学校」のように、対象の外にあるもの(組織)であり、抽象的な場面における移動ともいえるのに対し、「助教授にあげる」では、帰着点である「助教授」が、対象自身の資格であつて、外にある場面ではない。それだけ、より純粋な状態変化であつて、[13]に近づく。「助教授にする」といいかえられることも、このことを示している。

(国研 1975/541)」

これらの例もまた社会的なランクの低い段階から上の段階への抽象的な上昇を表している。しかし[11]の学校と学級とは異なつて場所と関係ないので、空間的な移動の意味は完全に打つ切

られている。

「

[13] 純粋な状態変化のうち、量的拡大を示すものには、つぎのような例がある。

○勤続年数がふえるにつれて、給与をあげねばならぬ。(文芸春秋 1956 年 10 月 98)

○将来、月産三千トン位の能力までは上げるかも知れないがそれ以上にする計画はないようである。(ダイヤモンド 1956 年 4 月 28 日 70)

○温度を上げて溶融して液体にすると、(新しい繊維 381)

なお、この類のもので比喩的に使われた慣用句に「熱をあげる」がある。

○マリナのほうは早くも彼に熱をあげ、訪問のお目当てが姉なのですっかりふくれ、(スクリーン 1956 年 7 月 108)

質的向上をあらわすものには、つぎのような例がある。

○班の成績あげよおもて、自分の班のものにええのん廻して、(真空地帯・上 49)

○レンズや反射鏡などで収レンさせて 50%までこの率を上げることができることが分かっている。(科学朝日 1956 年 10 月 31)

○奢侈に依って自分の面目を上げようとする努力である。(世潮 1954 年 4 月 36)

[11]と[13]とのちがいは、意味的には、前者に抽象的場面における移動というニュアンスがあるのに対して、後者がまったく変化の結果を示すものだということである。上にあげたように、変化の主体は、[11]では具対物であり[13]では抽象的な、それ自身質であるものである。そして、後者のばあい、「～に」という到着点は示されないことが多い。具対物を「あげる」ばあいには、空間的にあげることもあるし、またここにみるように抽象的なわくのなかで「あげる」すなわち変化させることもある。これに対して抽象物を「あげる」には、空間的上昇ということは考えられないから、質的に変化させることにきまっている。そして、「熱」「成績」などの抽象物はおのおの独自のしかたで変化するのであり、その帰着点を示す必要がない。(もし示すとすれば、それは変化の程度をあらわすことになる。)これが「～に」という帰着点が[11]では示されていて[12]では示されていない理由である。

具体名詞がもちいられていても、つぎのような例では抽象化して質をあらわすものになっている。

○古藤さんも手紙の上では一枚がた男を上げてゐますわね (ある女・前 204)

○「煙ゆる情炎」以来、腕をあげて、(スクリーン 1956 年 2 月 144)

○前に伊藤整はチャタレー裁判で一躍名をあげたが、(改造増刊 1953 年 10 月 10)

も、やはりここへはいるべきものであろう。「名がたかい」という表現があることからみて、空間的上下の関係を上台においているとおもわれる。「人に知れるようにする」という点で「式をあげる」などとくっついている辞書があるが、「式を」のほうには「式がたかい」という表現はない。

(国研 1975/541-542)」

最初の「熱を--」「成績を--」などの例は、「学級に--」「代議士に--」とはつきり区別する必要がある

ある。宮島のいう通り、「熱」「成績」などは、程度を高低で表される抽象名詞であるのに対し、人は具体物である。おそらくすべての高低で表される抽象名詞は「あげる」で上昇することが表現できるだろう。このような例は、おそらく空間的な上昇から直接意味の抽象化によって派生したものだと思う。その代わり、「男を上げる」「名をあげる」はおそらく「質を上げる」逆に派生されたものだろう。でなければ慣用句として扱わなければならない。しかし「腕をあげる」はただ単に比喩表現になったものと思う。「式をあげる」は、「看板をあげる」に類似しているが、「町を上げる」など盛り上げる意味も考えられる。

「

[2] はっきり口だたせるようにすることをあらわすもの。

これには、「犯人をあげる」ばあいと、「例をあげる」ばあいと、2つある。移動的で、かつ人目につくようにすることをあらわす「看板をあげる」(02)などの延長にあるものであろう。

[21] 検挙すること。

○質屋から足がついて、出入りの魚屋の若い者が上げられた。(多情仏心・前 308)

○主犯共犯いつしよに挙げちまひました。(本日休診 76)

[22] とりだして示す、意味。

○彼女が思い出すままに挙げる新しい作家の名前など、(雪国 41)

○一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、其女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、何処か適当な所へ嫁に遣つて呉れます。(こころ 194)

この用法には、特に文法的な制限はなさそうである。慣用句的ではない、自由な意味としてよい。「あげる」の対象としては、「雪国」の「名前」のように、ことばのばあいもあるが、多くは「こころ」の例のように「一例」言語外の事実である。「雪国」のばあいでも、ただ単に「彼女が思い出すままに挙げる新しい作家など」といいかえてもよい。つぎの例を参照。

○先にあげた松下幸之助氏は、あれだけの要素は備えていたのだ。(実業の日本 1956 年 11 月 1 日 52)

辞典のなかには「候補者をあげる」の例をひいて、これに「すいせんする」という説明をくわえているものがある。このような例は見当たらなかったのも、はっきりはいえないが、こういうれいぶんがあることだけで「すいせんする」という意味をみとめることはむずかしいだろう。それはちょうど「欠点をあげる」という例文から「非難する」という意味がぬきだせないのと同じである。辞典のなかにはまた、「例をあげる」などについて、「かぞえたてる」「列挙する」という訳をあてているものがある。たしかに、例は1つだけでなく、いくつかまとめてあげることがおおい。しかし、それと「こころ」の「一例を挙げると」のあいだに線をひいて別の意味とするのは、あきらかに無理である。だから、これらの訳語は間違いとしなければならない。

「とりだして示す」という規定は、それらにくらべれば難点がすくないが、このようなかんたんな規定では、けっきょくのところ不十分なことはまぬかれぬ。「示す」行為は、ある意味では、意識的にせよ無意識的にせよ、すべて他からとりだしてということである。だから、よりくわしくは、「いう」「のべる」「話す」「知らせる」など、いくつかの類義語の組のなかにおいて、そのちがいをしら

べなければならない。ここでは、いくつか気づいたことを指摘するにとどめる。

第1に、形式の上からは、「あげる」は体言的なものしかうけえない。つまり、「あげる」対象は、「例」「候補者の名前」のように単語相当のものであり、「…したといった(のべた)」のように文相当のものをうける用法はない。後者をいいかえれば、「…したことをあげた」のように体言化した形につづくわけである。

第2に、「あげる」はつねに対象を要求する。

かれは自分の先生についてのべた。

の「のべた」を「あげた」でおきかえると「何を」あげたのかあらためて指摘しなければならない。しかもこの対象は、発言の内容にかかわることであって、発言の形式にかかわることではない。「悪口を言う」「感謝のことばをのべる」のように、「いう」「のべる」には言語形式を対象とする用法があるが、これらの例は「あげる」ではおきかえられない。

第3に、その対象は資格づけられていなければならない。

かれは自分に金がないことをのべた。

とい分の「のべた」を「あげた」にするとおちつかない。そのまえに「不参加の理由として」といった表現がほしいところである。すなわち、「あげる」対象が内容的に一定の叙述・判断をふくんでいるばあい(いいかえれば、文相当のことを伝えるばあい)、これはおもな伝達内容であるよりも、副次的な説明である。しかし、「候補者の名前をあげる」のように、「あげる」対象は単語相当のものであるばあいには、このことはかならずしもあてはまらない。また、

インドネシアについて知っていることをあげなさい。

のようなばあいにも、伝達内容という観点からみて、副次的とはいいいにくいだろう。それで、このようなものでふくめて考えるならば、「あげる」の特徴は、あげられた内容(対象)の資格が話し手だけでなく聞き手にもあきらかなことに求められるかもしれない。金がないことは単純な報告でありうる。そのばあい、これは「のべた」ことであっても「あげた」ことではない。これが不参加の理由という資格でのべられるとき、それは「あげた」ことである。

第4に、「あげる」がはたして言語活動に属するとしてよいかどうかの問題がある。

○この説には種々の反証が挙げられる。(日本及日本人 1954 年 1 月 90)

証拠をあげるばあい、もちろん原則としては言語活動によるわけであるが、ある物的証拠をつきつけるという無言の動作によっても、やはり立証したことになるばあいがあるであろう。すなわち、大切なことは証拠を示すことであり、述べることではない。だから、「とりだしていう」という規定よりも、「とりだして示す」といった方がよい。

(国研 1975/542-544)」

宮島によると最初の例は「看板をあげる」の延長であるというが、「警察は犯人を上げる」場合、目立たせるという意味はないと思う。それよりも「犯人をあげる」ことは、[21]で示されるように捕まえることを意味している。ほかの例を考えると「捕まえる」という意味が含まれるのは「魚を釣りあげる」のような例であるので、この意味の「あげる」の比喩的な使い方ではないかと思う。

次の「例をあげる」という類のものも直接「看板をあげる」とつながっているかについて疑問を抱

いている。それよりも抽象的な「声をあげる」の一種ではないかと思う。例も名前も結局声を出す必要があるので、別の方向からの派生だろう。その代わり「候補者をあげる」は具体物を動かしているので、「看板をあげる」の意味からの比喩的な表現だろう。なぜなら「候補者をあげている」は、「名前をあげている」と異なった時間の経過を見せているからである。また、宮島の指摘する辞書における「推薦する」という意味解釈は、その辞書の著者の連想ではないかと思う。

また宮島は、「あげる」を「述べる」「話す」などの発話動詞との違いによって「取り出して示す」という意味解釈を説明するが、「声をあげる」の意味と比べれば、その意味は一目瞭然である。「あげている」という進行形では両方は同じように繰り返しているような声の出し方を示している。その代わり「述べる・話す」などは、当然ながら連続している話の意味になる。また、第3の説明では、「金がないこと」とはつきり「言葉」を表さない句の場合、別の「言葉」を裏付けるような要素(理由として)を加えなければならない。第4の説明での「反証をあげる」は声で行う「反証」でも物的証拠による「反証」でもあり得るので、厄介な例であるが、言葉の連想と自由な意味の創造の証拠としても取り上げられる。

「

[3] 生産をあらわすもの。

[31] 子どもをうむこと。

○母しげ女は京都屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男四女を挙ぐ。(春琴抄 138)
たまたま文語文の用例しかなかったが、この意味の「あげる」は口語文でも使われる。しかし、文章語的であって話しことばには出てこないであろう。また、「うむ」といっても、具体的な出産の動作をさすよりも、もっと抽象的に、いわば家族構成に変化があったことをのべているのであり、その点「もうける」に通じる。動物については、おそらくいわないだろう。なお、対応する自動詞「あがる」には、この用法はない。
(国研 1975/544)」

この用法について宮島は、一方口語文でも使われるというが、すぐに話し言葉には出てこないという。この研究の資料の中で似たような例はすべて文語的な慣用句である。また、「赤ちゃんを上げる」と「子供を上げる」という文の意味は、この意味を連想させないが、具体的な動き「赤ちゃんを乳母車に上げる」のように可能である。おそらく「もうける」という用法は、空間的な上昇の比喩表現である。「*二男四女を乳母車に上げる」という空間的な上昇がおかしいので、「二男四女を上げる」は別の連想を引き起こす。

「

[32] 音・声の生産。

これには、

○ア--メンと云ふ声の一座の人々から挙げられるのを待つて(或る女・前 63-64)

○奥の間の廊下までくると、俄かに滝十郎は酔漢らしいつくり声をあげて、「さア、来ましたよ！ 来ましたよ！ ど、同勢そろつてちん入しますよ！」(多情仏心・前 84)

のように、はっきりしたことばになっているものもある。また、

○その時の彼の気持ちを考へ、中には声をあげて泣いたものがゐた。(蟹工船 87)

○急に弾け返つたやうな笑ひ声をあげ、(多情仏心・前 87)

○伸子はそのたびに悲しげな、断れ断れな叫びを上げた。(伸子・上 66)

のように、ことばにならない声のばあいもある。しかし、

○木谷はしよげかえっている曾田をみて笑いをあげずにはいられなかった。(真空地帯・上 153)

○ベンチの浮浪人達は、朗かな鼾声をあげて眠っている。(放浪記 42-43)

のようなのは特殊な例であろう。

声以外の音についても、この表現はありうと思うが、実例はなかった。しいていえばづぎの 1 例である。

○鋭い口笛の音を上げたりするものがあつたが、(多情仏心・前 172)

辞典のなかには、この意味を「声を高く(大きく)する」ことだとしているものがある。たしかに、今までだしていた声を一段とはりあげる、のような意味でも「声をあげる」というだろう。「ラジオの音をあげる」なども、よくいうところである。こんどの用例には見あたらなかったが、もしこのようなものがあれば、それは[13]のところに、「熱をあげる」とならべて、量の増大の例としていれることになる。しかし、以上にあげたのは、それとはちがつて、今までだしていなかった声をだしたことである。事実として大きな声をだしたものが多いただろうが、それにかぎられるわけでもない。

○ふりかえって木谷をみつけたとき、あつと小さい声をあげた。(真空地帯・上 134)

したがって、これらの用例は声をだすこと一般をさしているものとみるべきで、「声をたかくする」という規定であてはまらないのはもちろん、「高い声をだす」という規定も「多くのばあい」というような限定なしではまちがいである。もつとも、実例が非意図的な笑い声・泣き声・叫びなどについてのものと、大声をあげるものとかぎられることからみて、単なる「声をだす」にくらべて、何らかの限定があることは、みとめるべきかもしれない。これは(声を)「だす」「たてる」などの用例と比較しながら、検討しなければならない。

ここに属する比喩的な例には、づぎのようなものがある。

○われわれの判断に対して疑念が生じ不信任の声が挙げられるにつれて、(哲学以前 202)
また、以下に示す慣用句も、ここにつながるものである。

○これが下宿の人々の最後に上げた凱歌であつた。(破戒 11)

○いち早く「近代文学」を創刊して戦後文学第一の名乗りをあげたが、(群像 1956 年 4 月 115)

ただし、これらと「声をあげる」のあいだには、比喩的用法ということをぬきにしても、づぎのような差がある。すなわち、現代語では、実際にはことばをつかっているばあいでも、上に示してきたように「声をあげる」という形でしかいわず、「声」の位置に「歌」「ことば」「あいさつ」など言語表現を示すいろいろのことばがくることはない。この点で「凱歌をあげる」「名乗りをあげる」は、その本来の具体的な動作をあらわす用法においても、一般の「声をあげる」とはちがつているのである。

つぎの「音をあげる」も、「声をだす」という意味ではあまりつかわない慣用句である。

○それでなくても主食の獲得に音を上げてゐる兵庫県や大阪府では、(闘牛 118)

(国研 1975/544-546) 」

この用法は上述の説明のとおり「例をあげる」と同類のものだと思う。「声をあげる」はおそらく「視線を上げる」と同様に具体的な上昇から比喩的に応用された用法である。宮島が指摘している「声を出す」意味と「声を高くする」意味の違いを考えると、その違いは、「看板をあげる」と「看板を上げている」などという提喩表現と似ているのではないかと思う。つまり「声」は、一方では声が出た後の量に関する抽象的な要素と、他方では声が出る前の移動に関する具体的な要素を持っている。問題は「歌」や「言葉」などはつきりと「声」と関係のある単語である。「笑い」や「例」などは「上げる」ことができるが、「歌」や「言葉」などはできないのはなぜか。[22]でも述べられたとおり、「悪口」や「感謝の言葉」などは「あげる」ができない。おそらく「上げる」の空間的な上昇という一気で行われる動作の影響は残っていると思う。自発的な「煙を上げる」以外の例では「あげる」は、一回で到着点に移動されるので、時間的に長いべらべらする話しは「あげら」れない。また、「例をあげる」などは「声をあげる」からの提喩表現ではないかと思うので、別の名詞がつくような生産性は低い。

「

[33] 成績などの生産。

○穂数で主に収量をあげる品種では、(農業世界 1956 年 9 月 127)

○労賃以上いくばくの収益をあげているだろうかなどの (農耕と園芸 1 月 133)

○一番の希望は開幕早々から連続二十勝をあげること。(週刊読売 1956 年 3 月 11 日 7)

○次の回西鉄がまた二点をあげ (ベースボールマガジン 1956 年 10 月 116)

○メーデーが平和に、百六十万という戦後最高の動員レコードをあげながら、(中央公論 1954 年 6 月 46)

これは、さきに質的向上の例としてあげたものと区別がつけにくいばあいがある。

質的向上

生産

○{日東紡}富士、日清にまさる利益増加率を示している。(中略)各部門とも、成績をあげている。(ダイヤモンド56年6月23日50)

○能率の高い動力噴霧器や撒粉機が普及し、共同防除の効果を著しくあげている。(農業世界1956年2月133)

○要するに明日の仕事の能率をあげるために、全部組をつくっておいて、(改造1954年1月199)

○前場所は西前頭二枚目に進み、八勝五敗の成績を挙げ、関脇にはね上がった。(相撲1956年5月116)

○使いかたによっては、シャレた効果を上げることができる。(婦人朝日1956年12月106)

○与えられた分量に対して、百一パーセントの能率をあげたという図表が(改造1954年1月199)

左がわの例では、これ以前にも成績や効果はあったのであり、ただ、最近のそれは以前よりもよ

くなっているのである。このばあい、成績や効果の内容は以前のとかわりないから、特にこれらを限定する語句はつけ加えられていない。これに対して、右がわの例では、それ以前に類似の成績や効果があったかどうかは問題でなく、このばあいのことだけが問題にされているのである。したがって、「八勝五敗の」「シャレた」などという限定がある。「効果」ということばは、単なる結果とちがって積極的な評価をふくんでいるから「効果をあげる」だけでも効果の生産という意味で使える。しかし、「成績」については、よい成績もわるい成績もふくんだ中性的な表現であるから、成績の生産というのはナンセンスであり、どのような、どの程度の、という限定がなければ、「成績をあげる」は生産的な意味にならない。だから、単なる「成績をあげる」はつねに質的向上のグループに属する。

一応生産的な意味に入れたけれども向上のほうかもしれない、というものには、つぎの例がある。

○このように、宮川村森林組合は、着々と山林復興に、その実績をあげているが、(家の光り 1956 年 4 月 187)

なお、より低いところからの程度の変化という点で、質的变化は基本的な空間的上昇と共通性をもつ。逆の意味で、生産は基本的意味からより遠い位置にある。

この意味での「あげる」の対象を示すのは、広くいって成績をあらわす名詞である。すなわち、

- a) 「成績」「レコード」など本来そのような性質をあらわす抽象名詞
- b) 「勝星」「二点」のように、成績の象徴であるもの
- c) 「収益」「利潤」のように、その量が成績をはかる基準になるようなもの

などがふくまれる。そして、これらのうちで、「あげる」の基本的な意味につながる橋わたしの位置にあるものは、c) の類の具体的なものや金をあらわすグループについての用例であろう。

○イランが石油を国際市場に販売し、それから収入をあげようとすればそれには、妥協しなければならない。(世界 1953 年 11 月 18)

というような例では、抽象的だけれども「それから」という出発点が示されていることで移動(所有権の移動か?)のニュアンスがある。なお、この意味の「あげる」は、抽象的な出発点をあらわすことばをとまなくても、「～に」という到着点をともなうことがない。(国研 1975/546-547)

質的向上は、上述でも取りあげたように高低によって計られる要素の抽象的な上昇である。つまりある低いとされるレベルからより高いとされるレベルへの心理的な移動である。これは、「国旗をあげる」などの具体的な意味の「あげる」からの比喩表現だと考えられるだろう。しかし、“生産的”な意味をもつ「勝利」と「よい結果」などは、同じ推論で得られたものではないと思う。またこの場合の「あげる」の類義語をあげると、「獲得する」や「得る」や「おさめる」などが考えられるので、「生産する」という意味で意味の統一を図るのは理屈に反すると思う。それよりもこの場合の連想は、「犯人をあげる」のと同じように、「魚を釣りあげる」における「あげる」の意味からの比喩的かつ抽象的な用法であると考えている。高低の区別のある「成績」などの単語は、ふだん抽象的な「あげる」と解釈されるので、「結果」を表すために「六勝九敗」という規定が必要である。最後の例で格助詞

「--に」で表される到着点がないことは、「石油を販売し」という曖昧性のために起きることである。曖昧性がなければ目的として「3億ドルに」などが可能だろう。

「

[34] 以上のほか、つぎの例も生産的なものにそえてよいかもしれない。

○そこで、クラスとしてとり上げたこの問題を自治会でとり上げてやらせてもらおうというので委員をあげることになったら、受験勉強をやっている人たちが皆立候補して出てくるのです。

(平和1954年6月35)

この「あげる」は、委員をただ単に列挙するのではなくて「選出する」ことであろう。「会長」「代表」など、一般の人よりもいわば一段とたかい、目だつような位置にある人について、この表現は可能かとおもわれる。さきに[12]の質的向上の例として「自分を代議員にあげてくれた」という例文をのせておいたが、これと「委員をあげる」とは事実としておなじことをいっているのである。「米をたく」と「めしをたく」、「切れをエプロンにしたてる」と「エプロンをしたてる」などとおなじ関係がここにもみられる。

ただし、この用法に属するものは上の1例しかなく、その所属や他の用法との関係については、まだ問題があるかとおもわれる。

(国研 1975/547-548)」

この文の環境では「委員を上げる」は「候補者をあげる」と同じように感じるが、候補者は基本的に委員になるためのポストである。この文を書いた人は、「委員を上げる」では、候補者を上げるという新しい連想を作ったのではないかと思う。ほかの例もないので、語用論的な用法だと思う。自分の「ポストを上げる」という別の意味の用法もある。

「

[35] 式をおこなう、の意味。

○ 年来の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げたといへば (こころ227)

実例としては「式(結婚式)をあげる」のほか、「結党式をあげる」「華しょくの典をあげる」があった。

この用法は、実行する、という点ではつぎの[4]に近いが、人前でみんなに見えるようにする、という点では「例をあげる」などにつながるともいえる。

(国研 1975/548)」

この用法は「風をあげる」意味の「上げる」からの比喩的な用法だと思う。「式をあげたが中断した」という例にも分かるように、「あげた」は、「風をあげた」と同じように式の初めの盛り上がりを指している。もちろん想像の中では式の終わりまでの考えがあるが、重点は感覚的に式の初めにある。ただし、比喩表現であるので、はっきりした関係は分からない。

「

[4] 最後までやりとげる、の意味。

○aの字も知らぬと云ふ者があれば、第一読本を少しやつたと云ふ者、第二読本をあげたという者もある。(思川の記・上205)

○早撮り映画の、手早くあげる作品を（笑の泉1956年12月191）

これと「式をあげる」とは、実行するという点では共通するが、つぎの点でちがう。まず、「式を」のほうは実行の開始が問題であって、「式をあげたが中絶した」ということもありうる。これにたいして、「作品をあげる」のほうは、行為の完了が問題である。すでに開始し、進行中の行為が目的とするところまで達した、という表現である。つぎに、「式をあげる」のほうは、「式」およびこれと同義的な「華しよくの典をあげる」のように、そのうけることばがひじょうにかぎられている。動作性名詞の「式」を動詞化するために、たまたま「あげる」がえらばれた、といった気味がある。その意味で慣用句的である。「作品をあげる」のほうについては、実例が以上の2つともう1つ、やはり映画の話しかないので、「作品」の位置にどのような名詞がくるか、あきらかに示すことができないが、すくなくとも「式をあげる」にくらべればずっと多いのはたしかである。たとえば「しごと」のような抽象名詞も、「教科書」のような具体名詞もくることができる。したがってこの結びつきはかなり自由なものであり、「式をあげる」ほどには慣用句的でない。

なお、「会の費用を千円であげる」のような例は、これの変種であるが、出てこなかった。

（国研 1975/548）

「作品を上げる」などには、宮島の指摘しているとおり、行為の完了が問題になる。そのために「式をあげる」とまったく別の連想の経過を示していると思う。「作品を上げる」は直接空間的上昇と関係がないので、おそらく比喩的な表現である。例えば、「仕事のあと道具を置き場に上げる」や「本は読み終えたら本棚に上げる」などのような文からの比喩だと考えられるだろう。しかし、「式をあげる」と同じように確実な証拠はない。いずれにせよ、別のことが証明されない限り、このような考え方も妥当であると考えている。「会費を千円で上げる」というような例は、「仕事をあげる」に「千円で」という条件によってできた連想の続きだと考えられるだろう。なぜなら、「*会費を千円で上げたが、途中で2千円に値上がりした」は言えないからである。しかし、ここまで来ると、意味関係を証明するのは非常に難しい。

「

[5] 全部出しつくす、の意味。

○収入の全額を挙げて春琴の川に供した（春琴抄206）

○一家を挙げて大阪へ移つたさうだが、（多情仏心・前298）

○いま国内をあげてBKP時代にあるので（東洋経済新報1956年7月28日35）

なお、「蒲団」には、「全身をあげて同情してくれた」という例があるが、今ではこんな表現はしないだろう。

この用法は原則として「～をあげる」の形で副詞的にあらわれる。ただし、つぎのような形で使われることもある。

○党は、我が国民の独立、平和、自由の闘争の先頭にたって活動することができるように、われわれは全力をあげている。（中央公論1956年2月50）

○アカハタ紙その他同系統のものはいざ知らず、それ以外の日本の言論機関は、挙げて、

重光全権と同じ見解を表明した。(東洋経済新報1956年8月18日21)

この用法と、ほかのものとのつながりも、あきらかではない。「全部を…」といてんでは「しごとをあげる」などに共通したところがあるかもしれない。
(国研 1975/548-549)」

「村をあげての祝い」(NHK ニュース)のような例を見ると、「式をあげる」と同じように何か大きなイベント「祝い」「引っ越し」「戦い」などに関係している。「式をあげる」は直接「式典」の盛り上がりを目指しているが、「村を上げて」は式典に参加する「全員」を指している。「村を上げて」は副詞的に「祝う」と「戦う」などの動作にかかるので、「式をあげる」のほうが先にあったと考えられる。「村・国」の意味に含まれている「全村人」や「全国民」などの連想を持ち、「全力」や「全額」に結びつたのではないかと考えている。

「

[60] 「あたえる」の敬語。

これも[06]と同様うやまう相手を空間的に高いところにたとえることからでたものである。

○二千円だけの金をあげるというのだ。(暗夜行路・前203)

○君の所へ愛子を上げたい気は充分にあるのですが、(暗夜行路・前72)

○返事を上げなければ済まない貴方に対して、(こころ150)

このグループには、「仏壇に花をあげる」のように、移動に近いものから、「お祈りをあげる」のようにこれと遠いもの、といった段階のちがいはない。

[61] 補助動詞としての用法。「～てやる」の敬語。

○いい額縁を買って来て、おくみさんの部屋へかけて上げようね。(桑の実84)

(国研 1975/549)」

宮島はこの「上げる」の意味を“敬語”というが、現在の言語生活の中で自分より低い身分の人に対してもペットに対しても使われる例が多いので、丁寧型だといったほうが適切であろう。「与える」は限られた「先生に・私に・犬に苦痛を与えた」のような場合でしか人に対して使われていないので、丁寧さに対して中性的な動詞である。この用法は、「本を棚に上げる」と関係しているが、間には「仏壇に花を上げる」のようなものが入っているだろう。今や空間的上昇とは関係がほとんどないが、「あなたにこのアイスクリームを上げる」のようにすぐに渡さないと溶けてしまう例もあり得るので、提喻表現だと考えられるだろう。

「

[7] 油でにること。

○蚕豆の油であげたやうなのを壇に詰めたのと、(桑の実96)

この意味は、ほかの意味とどのように関連するのか、不明であり、その位置を証明するような中間的な例がみつからない。
(国研 1975/549)」

この用法は、はっきりと料理あるいは「油で」という料理法が記されていないと、「油で煮る」と

いう意味にはならない。「魚」は現代社の中で生き物よりも料理の材料であるので、「上げる」場合はまず「油で」という言葉が連想されるだろうが、漁師にとって同じ「あげる」は「網で」という連想をおこすだろう。また「鮫」や「いるか」を上げることは、おそらく空間的上昇の意味解釈しかないだろう。「油で上げる」こともともと空間的上昇からの提喻表現だっただろうが、今は完全に空間的な移動と無関係の比喩表現になっている。

「

[8] 潮がみちてくること。

○このへんが内海のまん中西からも東からも潮が上げて来て、(暗夜行路・前173)
これは自動詞としての用法で、ほかのところがっている。「(風が)ふく」「(潮が)ひく」「(日が)さす」など、自然現象にはこの類が多い。意味的にはもちろん空間的上昇という面があり、基本的意味と直結している。
(国研 1975/549)」

自然現象による自動詞的なようほうであると、まさに宮島のいうとおりである。しかし「潮があげる」が言えるのに「洪水があげる」はなぜ言えないだろうか。おそらく「潮」は自然現象であるが、洪水はその結果であるという理由が考えられる。しかし、はっきりした答えがない。

「

[x] 所属不明の慣用句。

慣用句のうちで「たなにあげる」のように、もとの意味があきらかで、比喩的なニュアンスのはっきりしているのは、それぞれの意味のところへ入ったが、以下は所属不明のものである。

○切支丹を槍玉に挙げて、凡そ残虐の限りを尽くした家光が(青銅の基督5)

○その前に三春兵の一人は必ず血祭りにあげてみせると(落城13)

○選挙で同じ候補者へ投票するというぐらいのことに何で血道をあげる必要がある？(むらぎも318)

○今にきつと世界的な仕事をして、日本の為に気焔をあげてくれるだろう(友情44)

○際限なく酒を注文して、乱暴に飲みながら、氣勢を揚げてみた。(帰郷337)

○吾妻橋で文七を助けたところの拵へから違ふ。――扇朝師匠のために清清これが味噌をあげた奴さ。(木枯57)

これらのうち、「槍玉にあげる」は「上にあげる」と、「氣勢をあげる」は「能率をあげる」などと、というふうに関係づけられそうに思われるものもあるが、その正確な位置づけはむずかしい。

以上のほか、

○尤も老婆は僕の鯛のねたを一度嘗めて以来、二日にあげず生臭いねたを拵へては、(思川の記・上 193)

のような、「二日にあげず」という形の慣用句があるが、これは、現代語で「あげる」に結びつけることがむずかしいであろう。
(国研 1975/549-550)」

このような慣用句を見ると、「棚に上げる」はそのまま「本を棚に上げる」という形でも使われる

ために、ほかのと異なっているが、「楡玉に上げる」の場合も元の意味が推測できないことはない。しかし、「血祭りにあげる」と「血道をあげる」と「気焔をあげる」と「氣勢をあげる」は初めから同じような意味を表したのではないかと思う。「血道」と「氣勢」はただ「熱をあげる」という慣用句の「熱」を変えただけで、「気焔」は「炎を上げる」から「熱を上げる」意味への比喩表現だろうし、また「血祭りに上げる」は「神々に上げる」という意味からの慣用句だと考えられるかも知れない。ただし、上で述べたとおり具体的な関係を証明するのは難しい。例えば、「三日に上げず」は、「仕事を上げずに好きなことをする」というような発想があり得るが、慣用句よりもことわざに近い表現なので、関係を開かずことは非常に難しい。

「

00) 上に～	[まとめ]		——1) 成績を～(変化)
	ト	02) 看板を～	——2) 例を～(顕在化)
	ト	03) 煙を～	——3) 声を～(生産)
	+	?	——4) 作品を～
	ト	?	——5) 全力を～
	ト	06) さいせんを～	——6) 金を～(所有関係)
	ト	?	——7) 油で～
			——8) 潮が～

これらのうち、8)「潮が～」は、自他の変換が行われただけで、空間的な性質をなくしていない点で、ほかのと区別される。

1)「成績を～」(変化)、6)「金を～」(所有関係)は、基本的な「あげる」(空間的な上昇)における<上>という観点が抽象化して、空間的なものではなくなったものである。しかし、1)のばあいには質の水準として、6)の場合には対人関係として、まだ方向性が残っている。つまり、これらについては、「～にあげる」という表現が成立する。

ほかのものでは、このような方向性も失われている。2)、3)はそれぞれ02)、03)をとおして基本的な意味にむすびついており、空間的な上昇のもっていた別々の側面が抽象化したものである。4)、5)については、このようなむすびつきがあきらかでない。

[雑誌90種の資料による統計]

			かな	上	挙	揚	騰	計
0)	00)	上に～	14	28	1	—	—	43
	01)	3センチ～	—	3	—	—	—	3
	020)	看板を～	1	—	1	—	—	2
	021)	目を～	8	5	—	—	—	13
	022)	首を～	1	—	—	—	—	1
	03)	煙を～	1	1	—	—	—	2
	04)	水から～	4	2	—	—	—	6
	05)	家に～	—	—	—	—	—	—

	06)	さいせんを～	3	1	—	—	—	4
	07)	たべものを～	—	—	—	—	—	—
1)	11)	学校に～	—	—	—	—	—	—
	12)	助教授に～	—	—	—	—	—	—
	13)	成績を～	7	3	—	—	1	11
2)	21)	犯人を～	—	—	1	—	—	1
	22)	例を～	42	3	11	—	—	56
3)	31)	子どもを～	—	—	—	—	—	—
	32)	声を～	21	11	—	—	—	32
	33)	成果を～	21	1	4	—	—	26
	34)	委員を～	—	—	—	—	—	—
	35)	式を～	5	—	9	—	—	14
4)		作品を～	2	—	—	—	—	2
5)		全力を～	9	—	1	—	—	10
6)	60)	お金を～	3	1	—	—	—	4
	61)	…て～	37	4	—	—	—	41
7)		油で～	—	—	—	5	—	5
8)		潮が～	—	—	—	—	—	—
		？	2	2	—	—	—	4

(国研 1975/550-551) 」

この研究は、辞書に比べると、はるかに精密に「あげる」の意味を取り上げている。しかし、多くの「あげる」の用法の場合、語義の関係を明らかにしても、根本的な所では、「目立たせるようにする」や「式を行う」や「油で煮ること」などと、記述は辞書と同じように意味を分けている。どのような(派生・比喻・特殊化の)基準で意味の変化が決まるか、そしてなぜ「あげる」は混乱が起きないようにいくつもの意味を表せるか、という問題ははっきりしない。多義語を別の言語と対照することに成功するため、すべての用法の基本的な意味との関係は、仮説でありながらもはっきりしなければならない。

第3節 研究対象「NOSTAA」

この研究の重点は、「あげる」の意味をフィンランド語の意味と対照するので、重点はあくまでも「あげる」の意味記述にあるが、対照語であるフィンランド語の動詞の意味を把握するために、最近作られたフィンランド語の国語辞書 (Suomen Perussanakirja) における「NOSTAA」の記述も取り上げる。なぜ「NOSTAA」という動詞を選んだかという、「あげる」の推定される基本的な意味、つまり「空間的にものを動かすこと」は、「NOSTAA」の基本的な意味と最も似ているからである。「NOSTAA」の意味を観察することによって、「あげる」のフィンランド語との対照の眺望はより明らかになる。

Nostaa

1) 上に動かす、移動する。

- Niin raskas kivi, ettei sitä jaksaa nostaa.
Conj(so)+Adj:nom(heavy)+N:nom(stone)+Conj(that not)+N:part(it)+V:3sg(can)
+V:1inf(rise).
＝持ち上げられないほど重いイ。
- Nostaa pudonnut kirja pöydälle.
V:1inf(rise)+V:prt.prf(fall)+N:acc(book)+N:all(table).
＝落ちた本をテーブルの上に上げる。
- Nostaa hattua tervehdykseksi.
V:1inf(rise)+N:part(hat)+N:tran(greeting).
＝帽子をとってあいさつする。
- Nostaa housujaan.
V:1inf(rise)+N:part:3sg(trousers).
＝ズボンをあげる。
- Joka kannattaa ehdotusta, nostakoon kätensä.
N:nom(who)+V:3sg(support)+N:part(proposal)+V:3sg:imp(rise)+N:acc:3sg(hand).
＝提案に賛成する人は手を上げて下さい。
- Järven pintaa aiotaan nostaa.
N:gen(lake)+N:part(surface)+V:pas(intend)+V:1inf(rise).
＝湖の水位が上げられる。
- Nostaa lippu (salkoon).
V:1inf(rise)+N:acc(flag)+N:ill(pole).
＝旗をポールにあげる。
- Nostaa ankkuri.
V:1inf(rise)+N:acc(anchor).
＝いかりを上げる。

- Uponneen laivan nostaminen.
V:prt.prf:gen(sink)+N:gen(ship)+V:4inf(rise).
=沈んだ船をあげること。
- Nostaa verkot [vedestä].
V:1inf(rise)+N:acc:pl(net)+N:elat(water).
=網を水からあげる。
- Nostaa vettä kaivosta.
V:1inf(rise)+N:part(water)+N:elat(well).
=井戸から水をあげる。
- Nostaa perunoita.
V:1inf(rise)+N:part:pl(potato).
=芋を収穫する。
- Nostaa korttipakka.
V:1inf(rise)+N:acc(pack of playingcards).
=トランプを確認する。
- Nostaa pudonnut silmukka.
V:1inf(rise)+V:prt.prf(fall)+N:acc(loop).
=ほどけた編み物の糸を取り直す。
- Nostaa lapsi syöttötuolista lattialle.
V:1inf(rise)+N:acc(baby)+N:elat(eating chair)+N:all(floor).
=子供をベビーチェアから下ろす。
- (スポーツでは) Nosti [kevyellä potkulla] pallon yli maalivahdin.
V:3sg(rise)+Adj:ades(light)+N:ades(kick)+N:acc(ball)+Postp(over)+N:gen(GK).
=軽いキックでボールをゴールキーパーの上からゴールに入れた。
- Nostaa [painonnostossa] uusi ennätys.
V:1inf(rise)+N:ines(weightlifting)+Adj:acc(new)+N:acc(record).
=重量挙げで新しい記録を出す。

2a) 抽象的に高くする、よくする。

- Nostaa jk maineeseen.
V:1inf(rise)+N:acc(somebody)+N:ill(fame).
=誰かを有名にする。
- Nostaa sivistyksen tasoa.
V:1inf(rise)+N:gen(civilization)+N:part(level).
=教養の水準を上げる。
- Nostaa kuntoa liikunnalla.
V:1inf(rise)+N:part:3sg(condition)+N:ades(exercise).

=運動によって体の調子をあげる。

- Tytytmättömyys nostaa päätään.

N:nom(unsatisfaction)+V:3sg(rise)+N:part:3sg(head).

=不満がどんどん一杯になる。

- Keskustelussa esiin nostettu kysymys.

N:ines(conversation)+N:ill(surface)+V:prt.prf(rise)+N:nom(question).

=対話の中で取りあげられた疑問。

- Nostaa nokkaansa.

V:1inf(rise)+N:part:3sg(beak).

=鼻を高くする。自慢する。

- Nostaa rimaa.

V:1inf(rise)+N:part(pole).

=走り高跳びのボールの高さを上げる。難しくする。

- Nostaa kytkintä (俗語).

V:1inf(rise)+N:part(clutch).

=クラッチをはずすこと。出発する。

2b) 雰囲気などを明るくする、盛り上げる。

- Yhteislaulu nosti tunnelmaa.

N:nom(singing in chor)+V:3sg(rise)+N:(atmosphere).

=一緒に歌うことは雰囲気を盛りあげた。

3) 量を増やす。価値を高める。

- Nostaa hintoja,/palkkoja.

V:1inf(rise)+N:part:pl(price/salary).

=値段を・賃金を上げる。

- Verenpainetta nostava aine.

N:part(blood pressure)+V:prt.prs(rise)+N:nom(matter).

=血圧を上げる物質。

- Nostaa jnk määrää/pitoisuutta/osuutta.

V:1inf(rise)+N:gen(something)+N:part(amount/quantity/part).

=量を・容量を上げる。誰かの分け前を増やす。

- Nostaa nopeutta.

V:1inf(rise)+N:part(speed).

=スピードを上げる。

4) 倒れたものの立てる、まっすぐする。

- Nostaa kaatunut tuoli pystyyn.

V:1inf(rise)+V:prt.prf(fall)+N:acc(chair)+Postp:ill(stand).

=倒れた椅子を立てる。

- Koiran nosti karvansa pystyyn.

N:nom(dog)+V:past:3sg(rise)+N:acc:pl(fur)+Postp:ill(stand).

=犬は(怒って)毛を逆立てた。

- (抽象的に) Nostaa liikeyritys jaloilleen.

V:1inf(rise)+N:acc(company)+N:pl:all:3sg(foot).

=会社を立てなおす。

5) 上がる・出るようにする。起こす。

- Tulehdus nosti ihoon paiseita.

N:nom(inflammation)+V:past:3sg(rise)+N:ill(skin)+N:pl:part(blister).

=炎症は皮膚にかぶれを起こした。潰瘍を起こした。

- Löyly nostaa hien pintaan.

N:nom(steam)+V:3sg(rise)+N:acc(sweat)+N:ill(surface).

=サウナの蒸気で汗をかいた。

- Tuuli nosti korkeat laineet.

N:nom(wind)+V:past:3sg(rise)+Adj:acc:pl(high)+N:acc:pl(wave).

=風は高い波をおこした。

- Nostaa riita/meteli/häly jstak.

V:1inf(rise)+N:acc(quarrel/noise/tumult).

=喧嘩を起こす。大騒ぎを立てる。何かについて騒がせる。

- Vilustumisen nosti ankaran kuumeen.

V:4inf(catching cold)+V:3sg(rise)+Adj:acc(severe)+N:acc(fever).

=風邪で高い熱を上げた。

- Nostaa kansa kapinaan.

V:1inf(rise)+N:acc(nation)+N:ill(revolt).

=国民の間で革命をおこす。

- (裁判では) Nostaa syyte/oikeusjuttu.

V:1inf(rise)+N:acc(suit/trial).

=訴えを・訴訟を起こす。

6) 口座からお金を下ろす。

- Nostaa rahaa pankista/tililtään.

V:1inf(rise)+N:part(money)+N:elative(bank/account).

=銀行からお金を下ろす。口座からお金を下ろす。

- Nostaa 100 mk/palkkansa.

V:1inf(rise)+N:acc:3sg(100mark/salary).

=百マルクを・給料を下ろす。

- Nostaa eläkettä/työttömyyskorvausta.
 $V: \text{linf}(\text{rise}) + N: \text{part}(\text{pension/unemployment allowance}).$
 =年金を・失業保険を受けている。
- Nostaa laina kolmena eränä.
 $V: \text{linf}(\text{rise}) + N: \text{acc}(\text{loan}) + \text{Num:ess}(3) + N: \text{ess}(\text{part}).$
 =ローンを3回に分けて受け取る。

第2章 意味記述の方法について

第1節 辞書記述と意味記述の相違点

先述で見られたとおり、ほとんどの辞書の記述は、多義語の意味を一般的な意味から特殊な意味へと記述する。このような意味の分類は、主観的なものなので、辞書によって記述の差が大きい。また、多義語の意味範疇を定義するに当たって、辞書記述は、比較的近い関係にあるものを同じ項目の元に集め、動詞の意味を分類する。なぜ辞書記述はこのような問題を抱えているかというと、辞書はあくまでも語彙レベルの単語しか観察していないからである。多義語のさまざまな用法の差を理解するために、特に動詞の場合、語の現れてくる環境も把握しなければならない。動詞はどのような格を支配するか、またはどのような名詞句は格範疇で表示されるかによって、動詞のその場その場の用法(意味)も変わる。格範疇も名詞句ももちろん無操作で動詞と結びつくことができないので、何らかの制限を含めているはずである。また、動詞は新しい用法を受け持つときも、これもどんなことも表せるような無操作の意味の適用ではない。動詞の意味を全体的に把握するために、これらの制限または規則を理解しなければならない。

動詞の意味を言語間で対照する場合も、このような制限と規則が重要である。対照の場合、両方の言語の意味は、同じ方法で記述し、対照しなければならない。この記述方法は、言語の間の中間言語になる。中間言語によって二つの言語の意味が平等に記述し、互いに対比することができる。次は、いくつかの意味を記述する方法論を紹介し、それらの長所と短所を検討することにする。

第2節 格構成による意味記述

(1) 格文法による深層構造の記述

格文法(case grammar)は、1950年代に始まった生成文法の研究の中で発生した理論の一つである。この理論は、テニエル(L.Tesnière1959)などの結合価文法からそのアイデアを受け、フィルモア(Fillmore1966)によって1960年代の半ばごろ発展されたものである。結合価文法との共通点は、動詞を中心とする構造のタイプである。両方の理論では、動詞は文の中の構成要素の数と種類を決定することになっている。しかしこのほかに、フィルモアの格文法は、それぞれの構成要素「アクタント」の統語論上の役割(主語・目的語)と意味論上の役割(動作主・動作対象・受益者…)を分離した(石綿・荻野 1983/93)。

格文法は、チョムスキーの当時の段階の生成文法標準理論に対しても相違点をあげている。伝統的に生成文法では、文が名詞句(NP)と動詞句(VP)に分類されるが、格文法では、すべての動詞に結びつく名詞句は同レベルで実現する。つまり生成文法では $S \rightarrow NP + VP$ のに対し、格文法では $S \rightarrow V + (NP)_1 + (NP)_2 \dots$ である(Hakulinen1976/131)。それぞれの名詞句(NP)_{123...}は、前述のように述語に対する基本的な関係を表している。例えば、行為者・主体・道具などである。次の英語の例文で分かるように、深層構造の役割は表層構造の中でいつも同じ形(語順)を取らない。(文の意味をフィンランド語に訳すことによって、それぞれの文の動詞が異なるので、英語の動詞の中の意味的な変化をより分かりやすくしてみた。)

「

- (1) The door opened. (O) = Ovi avautui. (avautua=自・動作主なし)
N:nom(ドアが)+V:past;3sg(開いた).
- (2) The janitor opened the door. (A)+(O) = Vahti avasi oven. (avata=他・動作主あり)
N:nom(管理人が)+V:past;3sg(開けた)+N:acc(ドアを).
- (3) The janitor opened the door with this key. (A)+(O)+(I)=Vti avasi oven avaimella.
N:nom(管理人が)+V:past;3sg(開けた)+N:acc(ドアを)+N:ades(鍵で).
- (4) This key opened the door. (I)+(O) = Ovi aukesi täällä avaimella. (aueta=自・動作主)
N:nom(ドアが)+V:past;3sg(開いた)+pN:ades(この)+N:ades(鍵で).
- (安井 1993/54) 」

これらの文の中の「door」、「janitor」、「key」のそれぞれは、どの文でも同じ主体と行為者と手段を表しているから、深層構造の中で「open」という動詞に対して一定の役割を保っている。格文法ではこれらの意味的な役割は、深層構造における対象格(O=objective [door])・動作主格(A=agentive [janitor])・道具格(I=instrumental [key])などという。これらの格を一括して深層格(deep case)ともいう。深層格は普遍的であると考えられるので、それぞれの言語の変形規則によって表層構造の実現は接辞・助詞・前置詞・語順などさまざまである。例えば、上述の英語の例文を助動詞[will]に合わせて生成すると、変形規則は、次の2つである。

「

規則1 アクタントの一つを選び動詞の左側に移す。この場合必ず前置詞を削除する。

規則2 動詞の後ろの前置詞は削除されることがある。

(石綿・荻野 1983/94-95) 」

深層構造のアクタントは、前置詞を含んでいるので、[by the janitor]と[of the door]と[with the key]になっている。変形規則を応用すると、[will open by the janitor of the door with the key]という深層構造は[the janitor will open the door with the key]などの表層構造に変えることができる。とされる。

(2) 格文法の問題点

格文法は、名詞句の動詞に対する意味上の役割の統語上の役割を別々に記述する点で、動詞の意味記述にも貢献をした。しかし意味を記述する点でいくつかの問題点が生じている。

まず、いくつかの意味的役割は格文法の中で深層格として認めるかについて、研究者の間で意見が大きく異なっている。フィルモア自身は動作主格・経験者格・道具格・対象格・源泉格・目標格・場所格・時間格などを上げている(石綿・荻野 1983/96)。また、ハクリネンは、フィンランド語の中から見た深層格を次のように定義している。

動作主(agent)。	=動作を起こす生き物。
経験者(experiencer)	=動作に影響しないが、動作に参加する生き物。
受益者(benefactive)	=動作によって利益を得る生き物。
対象(object)	=動作の結果または対象。
ところ(place)	=場所と時間そして移動動作の場合方向。
所有(possession)	=所有する生き物、所属の場所。
道具・手段(instrument)	=動作に影響する物。
刺激(stimulus)	=動作をさせるもの。
源泉(source)	=出発点(場所・時間・原因など)
中性(neutral)	=状態や過程に影響しないが、参加するもの。

(Hakulinen, Karlsson 1979/101)

ここでも分かるように、どのような基本的な深層格が認められるかはおおむねほかの研究者と一致するが、基本的な“動作主”や“対象”や“場所”などのほかにどのような深層格を定義するかは問題である。ハクリネンの提案した深層格のほかに、例えば目標(goal)や引用(quotation)や期間(duration)や目的(purpose)などさまざまなものがある(石綿・荻野 1983/96)。このような現実から見ると、深層格は普遍的であるだろうが、その厳密な定義は難しいと判断できる。動作の対象を表す名詞句の深層格を決定するとき、どのような動作の対象であるかによって対象の様態がかなり異なる。例えば、「染める」の場合、“対象?”は変化するが、「触る」の場合、変化しない、そして「食べる」の場合、対象は消えるが、「噛む」の場合、消えない。それぞれの対象の本質が異なっているので、別々の名前と呼ぶべきだろうか。また同じ動詞の場合でも「乳をしぼる」や「酒を

しぼる」のように目的語の表す意味が異なっている。このように対象でさえ定義の境目を引くのが難しいのに、“受益者”や“源泉”などの定義はもっと難しいのではないだろうか。

次に、深層構造は英語の場合、表層格がおもに語順で表現されるので、表層構造は、どの“形”を取っても深層構造の意味的な役割と矛盾しない。しかし、表層構造の格表示がはっきりしている言語の場合、表示自体が全く意味を表さないとは断言できないので、表層格も多義語と同じように多数の意味的な役割を果たすことが可能である。レイノも「多義性は言語の中で例外よりもルールである。この面で格表示も広く使われている単語と異なっていないだろう。このような単語も、多くの異なった互いに関連している意味をもっているが、意味関係ははっきり示すことができない。(Leino1990/38)」というように、ヤコブソン(Jakobson1971)の考えている形と意味の関係を指摘している。例えば、次のフィンランド語の例文の深層格は、表層格の意味の違いを明示しない。

(1)Pöydällä on naula. (lok)+(nom) =テーブルには釘が置いてある。

N:ades(table)+V:3sg(be)+N:nom(nail).

(2)Pöydässä on naula. (lok)+(nom) =テーブルには釘が打ってある。

N:ades(table)+V:3sg(be)+N:nom(nail).

この場合、深層格は主体「釘」が場所「テーブル」に対して何らかの場所的な関係にあるとしか伝えない。具体的にどのような場所的な関係であるかは明らかにならない。このほかに国広によると、例文(3)と(4)の「塗る」という動詞の場合、同じ深層構造の場所格に対して二つの表層構造の格助詞「に」と「を」が可能である(国広 1997/120)。このように考える場合、例文(5)と(6)の「ペンキ」も対象格になるはずである。また(7)のように対象がなくても塗ることが可能である。

(3)壁にペンキを塗る。(場所格に・対象格を)

(4)壁を塗る。(場所格を)

(5)壁をペンキで塗る。(場所格を・対象格で)

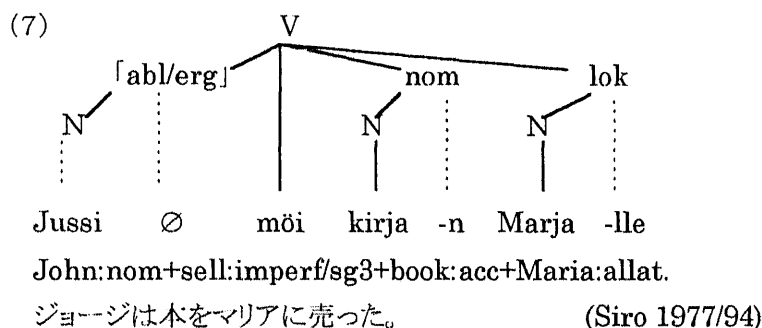
(6)絵をペンキで塗る。(場所格を・対象格で)

(7)ペンキが付いてない刷毛で壁を塗る。(道具で・場所を)

しかし、「壁にペンキを塗った」や「壁をペンキで塗った」の場合の「壁」は本当に同じ場所だろうか。自然言語が全く意味が変わらない二つ以上の別々の形を用いることは、あまり合理的ではない。同じぐらい「壁」は対象で「ペンキ」は道具というように考えてもいいのではないだろうか。もし「塗る」という動詞を多義語的に観察するならば、この二つの用法は、「液体を場所へ移す」(3)と「個体物の表面を塗料によって変える」(4・5)という別々の立場から見た動作になる。

いずれにせよ、基本的に「壁」と「ペンキ」は、すべての文の中で「塗る」に対して確かに同じ概念上の関係をもっているだろう。しかし、格文法での意味関係の説明はこのように深層構造に止まるので、表層構造との接点が失われ、意味的な差が説明できなくなる。レイノも「格文法は、表層格の記述問題に関して解決方法をもたさなかった。なぜなら格文法の記述は、表層まで及ばないからである。表層格は、形式的な現象であり、文内部における意味論的なそして統語論的な関係の分析に無関係である(Leino1990/29)」という。

また、格文法の記述では、動詞は具体的にどのような意味を持っているか、どのような名詞句に対する意味的な制限を要求しているかという点は明らかにならない。例えば、次のフィンランド語の文(7)では、名詞句と動詞の意味に触れないので、深層構造だけでは表層構造の意味を明示できない。



この場合動詞[möi] (myydä=売る)の構造は、おそらく[myydä:abl+erg, nom, (lok)]という深層構造をもっているだろう。つまり「ergの影響でablから、nomが、lokに、移動する」というように理解できるが、ほかの同じ構造を持つ動詞「あげる・渡す・借りる」などと区別されていない。本研究では、動詞の意味的な対照が目的なので、格文法の方法では、動詞の名詞句の支配だけが対照できる。

(3) 結合価理論と格文法の統合

格文法の考え方における問題を解決するために、文を用言と名詞句の共起関係でとらえる方法には、2つのレベルが考えられた。

①表層のレベルでとらえる結合価パターン。用言にかかる格助詞と格助詞の前にくる名詞の意味特徴を一つの成分として、用言の結合価を記述するものである。

②深層のレベルでとらえる格支配パターン。用言と名詞句の意味的な関係により、名詞が結合相手の用言に対し何格(動作主格、対象格、場所格…)として働いているかをとらえ記述するものである。

例	社長が	その結婚式を	派閥争いに	利用した。
結合価のレベル	N[hum] ガ	N[abs] ヲ	N[act] ニ	V
格支配のレベル	Agent(hum)	Object(abs)	Purpose(act)	V

(石綿・荻野 1983/112-113) 」

第二のレベルは前述の格文法の深層格にあたるが、第一のレベルは表層の意味を説明するためにもうけた結合価パターンのレベルである。第一のレベルで見られる[hum]や[abs]や[act]などはそれぞれ動詞に結びつく名詞句を意味的に限定する。このように「が」の示している名詞句の

意味は人間[+hum]に、「を」は抽象概念[+abs]に、そして「に」は事柄[+act]に限定される。このような記述方法では多義的な動詞の意味は、互いに区別ができるようになる。例えば(8)「書く」の場合、「手紙を使せずに書く」と「手紙を人に書く」が意味的に区別できる。

「	(8) 書く	N [hum]が+N [abs]を+N [con]に+V	
		N [hum]が+N [abs]を+N [hum]に+V	
		N [hum]が+N [con]を+Sと+V	
		N [hum]が+N [hum]を+Sと+V	
		(石綿・荻野 1983/235)	」

この記述方法の中のそれぞれの意味カテゴリーは、一般的な資料「分類語彙表」、「類語辞典」などを基本にして、決定されている。石綿による意味カテゴリーは、「abs, act, ani, con, div, hum, loc, num, mat, temps」(石綿・荻野 1983/131)の10項目である。例えば上述の「塗る」は、「壁に」の場合[+loc]、そして「壁を」の場合[+con]という特徴を取る。

第一レベルの深層格の問題を別に、第二レベルでは、動詞の意味を記述するとき、名詞句を10個の意味的な項目に分類することによってすべての動詞の表す意味が内包することができるだろうか。一つの文型パターンからはみ出るような例もある。例えば、「小説を書く」の場合、「読者のために」とは言えても「手紙を先生のために書く」とは異なり、そして「飛行機は空に白い線を書いた」の場合、意識的に“書いた”とは言えないので、[+hum]とはいえないだろう。したがって文型パターンをより細かく分類し、増やす必要がある。

第1章2節の(4)で紹介した NTT の機械翻訳システムの分類も石綿・荻野などの記述と似たような考え方に基いているが、この翻訳システムでは、動詞の意味は、その用法の違いによって細かく識別されている。それぞれの動詞の用法は、単語意味辞書の中で「用言意味属性」をもってその位置が決まる。この意味属性は、石綿・荻野の[hum][con]などの意味素性で得られた文型パターンの違いに相当すると理解されている。しかし、どのような名詞句がそれぞれの意味属性の中の文型パターンに当てはまるかは明らかにならない。また、単語意味属性の下位分類表(s.40)でも分かるように、状態・行動の区別以外のものは、比較的主観的な判断によるものである。機械翻訳システムの目的は日英翻訳であるので、動詞の用法のリストを英語に訳すだけで望ましい結果が得られるだろう。しかし、語の用法の関係、つまり語の内部構造を理解するために、より組織化された意味の下位分類と構造の記述が必要であると考える。

(4) 機能文法の例

格文法と同じように機能文法でも、文の成分が深層構造での働きによって分類されている。例えばムスタヨキは、Subjekti (S=動作主)・Kokija (E=経験者)・Hyötyjä (R=受益者)・Objekti (O=対象)・Teema (T=主題)・Instrumentti (I=道具)・Paikka (L=場所)というアクタントの深層格を区別している(Mustajoki1993/67)。格文法との一番大きな違いは、機能文法では表層

構造が深層構造から生成されていない。つまり機能文法の深層構造は、文の意味だけを記述し、表層構造の形には影響力がない。このように機能文法の目的は、ある意味を表している深層構造の表層でのすべての実現を描くことである。しかし、「選択された言語上の表現がいつも表層構造に別の付加的な意味を与える (Mustajoki1993/44)」ので、表層構造に実現された文は完全に同じではない。もしこの意味的な差が表層構造の違いによって生じるなら、深層構造における他の意味的な要素も表層構造の差によって決まるのではないだろうか。

機能文法の中で、格文法に比べ全く新しい要素は、深層述語の確定である。深層述語はまず、アクタントの述語に対する関係によって八つの基本的な項目に分類される。これらは「action=動作」、「relation=関係」、「possession=所有」、「location=場所」、「existent=存在」、「state=状態」、「character=性格」、「identification=身元」である (Mustajoki1993/77)。基本的な項目はまた、深層構造の表す状況の意味によって12の下位項目に分類される。これらは、「物理的動作」、「社会的交流」、「情報管理と伝達」、「場所と移動」、「所有と所有の変化」、「存在と存在の変化」、「生理的な状況」、「心理的な状況」、「外面的状態」、「性格描写」、「身元確認」、「自然状態」である。基本的な分類では、できるだけ普遍的な意味範疇が考えられたようだが、例えば所有と場所の境目の特定ははっきりしない。また、格文法と同じように「機能文法が辞書ではなく文法であるので、深層構造の語彙的な意味を分析する必要がない」 (Mustajoki1993/38)といわれるが、深層述語の基本的な項目とその下位分類はまさに動詞の語彙的な意味の特定を目指すものではないだろうか。

いずれにせよ機能文法の深層構造における意味記述の基準は、はっきりしていないので、結果は非常に曖昧である。またアクタントの役割の記述は、格文法の記述と同じであるので、問題点も全く変わらないのである。例えば、次の三つの文では、深層構造が同じであるが、アクタントの役割と動作の分類の類似性は、どのように得られたかは定かではない。

「

[→Ps; R, O] (Ps=所有、→=になる動作、R=受益者、O=対象)

(1) Liisa sai syntymäpäivälahjaksi upean kuvateoksen.

N:nom+V:past;sg3+N:trans+Adj:acc+N:acc.

Lisa +get+as birthdaypresent +beautifull +album

リサさんが誕生日プレゼントとしてきれいな写真集をもらった。

(2) Virtasille syntyi potra tyttö.

N:pl;allat+ V:past;sg3+ Adj:nom+ N:nom.

To Virtanen+born +solid +girl

ウィルタネン家族に丈夫な女の子が産まれた。

(3) Minulle löytyi työpaikka.

N:allat+ V:past;sg3+ N:nom.

To me+found+ workplace

私のために職場が見つかった。

(Mustajoki1993/90) 」

(1)「もらう」の場合、「もの(O)が所有の変化によって(R)に渡る」が、(2)「生まれる」の場合、物の元々の持ち主があり得ないため、所有の変化の性格は違うのではないかと思う。また(3)「見つける」の場合、動作全体は向格(-lle)によって所有表現であると判断されただろう。確かにフィンランド語の[allative]向格は、所有者を表しているが、同じ意味は受益者がなくても表せる。

(4) **Tokiosta löytyi työpaikka.** = 東京では職場が見つかった。

N:elat+ V:past;sg3+ N:nom.

I+ found + workplace

この場合、文そのものの意味は「職場が見つかった」ことであるが、職場が「話し手の所有物」であることは、文脈の意味から推測できる。また、場合によって深層構造が同じであるかどうかは曖昧である。例えば、

(5) **Liisa sai elinkautisen / kuukautiset / nuhan / miehen.**

N:nom+V:past;sg3+N:acc.

Lisa +get+life sentence / menstruation / cold / husband.

リサは 無期懲役の判決を受けた。リサは生理だ。リサは風邪を引いた。リサは夫をもらった。

このようにムスタヨキの機能文法は、文の思考の中におけるアイデアを記述しようとしている。本論文の目的である動詞の意味対照から見れば、機能文法の記述方法は語彙の間の関係を十分に明らかにしないため、使用できない。

第3節 意義素分析による意味記述

(1) 意義素

今まで扱ってきた意味記述方法は、すべて文の構造を中心とするものだったが、以下に取り上げるのは語の意味を全体的に分析しようとする意義素分析である。「意義素」という概念は、文の最小の意味をもつ単位である形態素の意味であるとよく定義されている(安井 1990/415)が、形態素として定義される場合、複合語や慣用句などのような一つの形態素でないものは問題になる。そこで、意義素を語彙素(lexeme)の意味であると定義したほうがいい(国広 1982/39-40)。

意義素は、抽象的な概念であるので、言語が使われている集団の中の一般的な意味しか扱わない。このように個人の間における単語(語彙素)の使用に関する差異が抽象化され、言語集団全体で一致する意味しか扱わないことになる。同じように文脈の影響も抽象化される。例えば次の文では「いとこ」(cousin)の意味は文脈によって変化する。

「

(a) My cousin is handsome, isn't he?

(b) My cousin is pretty, isn't she?

(c) My cousin married a son of a millionaire, didn't she?

(国広 1982/45, Weinreich 1966) 」

最初の例文では、「いとこ」は男であるが、次の二つの文では女を示す。「cousin」自信は性別を持たない。また、指示物との相対的關係も抽象化される。例えば、「速い」は「コキブリ」や「ロケット」などのように指示物が異なっても、相対的に同じ「速い」という意義素をもっている。このように文の意味は、それぞれの語の意義素と指示関係と文脈によって形成される。

(2) 意義特徴

それぞれの語の意義素を構成している意味内容は、より細かい意味的な要素に分析され、語の語彙体系の中の場所を位置づけられる。例えば「つまむ・はさむ・にぎる・つかむ・ちぎる・もぐ・なでる・など」は〈手を用いる動作〉、「リンゴ・みかん・オレンジ・イチゴ・など」は〈果物〉、そして「高い・低い・広い・狭い・など」は〈次元〉などという意味特徴を持っている。第一の例の場合、〈手を用いる動作〉のほかに〈切断動作〉という基準を立てると「もぐ・ちぎる」という動詞だけが残る。この二つの特徴に関して「もぐ・ちぎる」は、同じ意味分野型を作っている。また〈切断動作〉という特徴に関して「きる・たつ・わる・など」は、共通の意味分野型を形成している。このように語の語彙体系の中の位置が決まる。

対照研究に関して重要なのは、このような語彙体系の中で、意味体系の穴(lexical gap)が存在するかどうかという点である。例えば、日本語の「入る・出る」という動詞に対して、フィンランド語では「mennä=行く」という動詞と名詞句の位置を特定する「中・外」が使われる。同じように親族名詞の場合、「兄と弟」に対してフィンランド語は「veli」という語しかもっていない。区別を明らかにするために「iso=大きい」と「pikku=小さい」という名詞を特定する形容詞が使われている。また、

語彙に関する「民間分類」はどのように異なっているかという点も明らかにしなければならない。例えば、日本語では「イカ」と「タコ」は区別されているが、フィンランド語では両方は一般的に「mustekala」という。このように科学的な分類は同じであっても、日常生活にかかわる文化的な要素が加わり、言語の中の分類は常に生活環境に合うように発展している。

語彙体系の中の位置は語と語との意味関係によって決まるが、このような関係は、六つに分類されている(国広 1982/170-178)。非両立関係(incompatibility)は、例えば曜日の名前のように二つの極からではなく、連続した輪のような関係である。反義関係(antonymy)は、例えば連続的に少しずつ変わる「熱い⇔冷たい」、そしてはっきりと両極的な「女⇔男」のような関係を含む。反対関係は、おそらく動詞を形容詞と区別するために作られただろうが、例えば「買うー売る」のように前者の意味が後者の意味の裏返しになるような関係である。同義関係(synonymy)は、例えば、「刷る」と「印刷する」のようにほとんどの意味特徴の面で一致するような語と語の関係である。上下関係(hyponymy)は、例えば「殺す」と「暗殺する」のように、同じ意味分野の語であるが、前者はすでに後者の意味を含んでいる。最後の部分全体関係は、例えば「足」は「体」のように前者は後者の一部をなしている関係である。このように語と語の間にはさまざまな関係があるが、この関係は、類義語との意味の違いを表すために重要である。しかし、本研究は、一つの動詞の意味を別々の言語の中から対照するので、ほかの動詞との関係はそれほど重要ではない。

(3) 意味特徴の特定

意義素を構成する意味特徴は、大きく「文法的特徴」と「語彙的特徴」と「含蓄的特徴」の三種類に分けられる。文法的特徴に含まれている品詞的特徴(word-class)と統語的特徴(syntactic)は、語の文法的な役割を示している。その代わり語彙的特徴の中の「前提的特徴」(pre-suppositional)と「本来的特徴」(inherent)は、語の意味を表している。最後の含蓄的特徴には、文体的特徴(stylistic)と喚情的特徴(emotive)と文化的特徴(cultural)のような語用に関する意味特徴が含まれている(国広 1982/67-68)。

文法的特徴の中の品詞的特徴は上述の格文法で描かれた深層構造の語の品詞的な意味(N, V_{Tr}, V_{iTr} など)に当たるのに対し、統語的特徴は深層構造における語の役割と同じである。意義素分析は単語レベルで行われるので、文法的な情報はそれぞれの語に関して記述される。このように例えば、「私の日本語の勉強」という句の中の「私」と「日本語」と「勉強」の表層構造の品詞はすべて「名詞」であっても、品詞的特徴は「勉強」の場合「動詞」である。なぜなら深層構造での「勉強」は、勉強を行う「動作主」と勉強の「対象」を要求するからである。このような動作主や対象などの深層構造の役割は、深層構造の動詞という品詞的特徴を持つ単語の統語的特徴である。動詞によって要求される統語的特徴も変わってくる。例えば、

「

- | | |
|------------------------------------|----------------------|
| (1) hang pictures on the wall | =壁に絵を飾る。 |
| (2) the wall is hang with pictures | =壁には絵が飾られてある。(代換＋受動) |
| (3) hang the wall with pictures | =壁を絵で飾る。(代換表現) |

(国広 1982/71) 」

格文法と同じように表層構造では異なった文構造をもつ代換表現(2・3)と受動表現(2)は、深層構造では同じ統語的役割を果たしている。このように「壁」は場所、そして「絵」は対象という役割が動詞「飾る」によって与えられている。ただし、格文法でも述べたように代換表現と受身の表す意味の違いを、どのように記述するかは問題として残る。もしも意味の違いがなければ、表層構造ではいくつもの異なった言い方がないはずである。しかし、基本的な名詞句の動詞に対する関係は、格文法の示したように同じであろう。

語の語彙的な特徴は、他の語の意味と区別できるような「本来の特徴」と語彙体系の中で周辺の語と共通の意味を表している「前提の特徴」からなっている。例えば「独身者」の「本来の特徴」は〈未婚〉であるが、「前提の特徴」は例えば〈人間〉〈大人〉などである。また動詞の場合、例えば「暗殺する」の「本来の特徴」は〈目的をもった陰謀で〉で、「前提の特徴」は〈殺害する〉であろう。前提の特徴は否定によってくつがえることができないのに対し、本来の特徴は否定の場合拒否される。例えば、「人間であるが、独身者ではない」と「殺害をしたが暗殺はしなかった」などのように否定されるのは、「未婚」と「陰謀によって」であるが、「人間」と「殺害する」は必ずしも否定されない。

しかし、「のぼる」と「あがる」のような類義語の場合は、動詞の意味の違いが、前提の特徴の否定では説明できない。例えば、「*のぼったが、あがらなかった」あるいは「*あがったが、のぼらなかった」はいずれも言えない。山田はこれらの動詞について次のような特徴の違いをあげている。

特徴(1)あがる 到着点に焦点を合わせる。

特徴(1)のぼる 経路に焦点を合わせる。

特徴(2)のぼる 自分で動き得るものの全体的な移動を表す。

特徴(3)あがる 始めの状態(基点)を離れることを表す。

特徴(4)あがる 非連続的移行である。完了を表す。

特徴(5)あがる 上への移動である。その結果、顕在化する。

特徴(5)のぼる 上への移動である。その結果、顕在化する。

(柴田 1992/14-22) 」

このような記述では、確かに類義語の微妙な意味の違いは明らかになるが、上述の説明の他に例文がなければ、説明が分からない。例えば特徴(4)の「完了する」は、どのように特徴(1)の「到着点に焦点を合わせる」と異なっているかは分からない。また、動詞のすべての用法を同じ特徴で表そうとすると、「花火は上がった」のような文には特徴(4)と(1)は必ずしも合わない。このために「上がる」のような多義語の意味は、いつも同じ特徴で表せるのではなく、辞書の記述でも見られたように、本来的な特徴は同じであってもそれぞれの用法に合うような別の特徴も定めなければならない。このように多義語の意味は、互いに関連した意味特徴を共有しているか、あるいは連続的につながった意味特徴の集団をもって、一つの単語として認められる。同音異義語との違いについては第3節の最後に述べる。

含蓄の特徴は、個人差の影響が一番大きい。その中で文体による含蓄的な意味は最もはっきりしているが、口語体・方言・文語体・女性語などの間の区別は難しい。また「あほ・ばか」など喚情的な意味と「塾・そば」などのように文化的な要素が含まれている意味を記述するのも一苦勞である。しかし、本論文ではこのような付加的な意味ではなく、動詞の統語的と語彙的な意味の記述に重点を置くことにする。

(4) 意義素分析の例

上述の意味特徴のタイプを別として、『日本語百科事典』では(1)「統合の意味特徴」と(2)「本来の特徴」と(3)「意味的役割」そして(4)「文体的特徴」という意味特徴の分類があげられている(金田一 1988/425-430)。最初の「統合の意味特徴」の場合、それぞれの構成要素の可能な意味範囲を特定する。例えば、「彼女はバイオリンを弾いた」は言えるが、「*バイオリンは彼女を弾いた」はいえない。なぜなら、それぞれの構成要素は規定された範囲内にないからである。「彼女」と「バイオリン」の位置に立つことのできる語句は、それぞれ〈人間〉〈楽器〉という意味特徴を含む。また「バイオリン」の代わりにすべての楽器は可能ではない。例えば、太鼓やトランペットは合わないので、統合の意味特徴はより細かく特定しなければならない。このために〈楽器〉の代わりに〈弦楽器〉または〈鍵盤楽器〉という特徴をもうけなければならない。次の「本来の特徴」では、その語だけに本来的に認められる意味特徴が定められる。例えば、「弾く」と「演奏スル」の本来の意味特徴は〈楽器を操作して曲に合うような音を出す〉であるが、「弾く」と区別するために「演奏スル」には〈音は人に聞かせるためである〉という特徴も含まれている。「意味的役割」では、格文法の深層格と同様にそれぞれの構成要素の役割が明確にされる。例えば、「彼女はバイオリンで曲を弾いた」の中の「彼女」は主体、「バイオリン」は道具、そして「曲」は対象を指している。格文法と同じように、格助詞が変わっても意味的役割は変わらない。最後の「文体的特徴」は、上述のように語の文体的な意味を示している。このように上述で扱ってきた意義素分析を少し短縮してまとめると、次のような形になる。

「 [弾ク]

- | | | |
|------|-------|--|
| i) | 統合型 | (a) [XがYでZを__] (例:彼女はピアノで曲を弾いた。) |
| | | (b) [XがYを__] (例:彼女はピアノを弾いた。) |
| ii) | 意味的役割 | 《主体》:X
《対象》:Z
《道具》:Y |
| iii) | 統語的役割 | 《主体》←〈人間〉
《対象》←〈曲〉
《道具》←〈弦楽器〉または〈鍵盤楽器〉 |
| iv) | 本来の特徴 | 〈XがYを操作してZに合う音を出す〉 |
| v) | 文体的特徴 | [中立的] |

[演奏スル]

- i) 統合型 (a) [XがYでZを__] (例:彼女はピアノで曲を演奏した。)
(b) [XがYを__] (例:彼女はピアノを演奏した。)
- ii) 意味的役割 《主体》:X
《対象》:Z
《道具》:Y
- iii) 統語的役割 《主体》←〈人間〉
《対象》←〈曲〉
《道具》←〈楽器〉
- iv) 本来的特徴 〈XがYを操作してZに合う音を出す〉
〈その音を人に聞かせることを目的にする〉
- v) 文体的特徴 [文章語的]

(金田一 1988/430) 」

本論文で扱う動詞の意味を分析するために、関心のある「統合的特徴」と「本来的特徴」は、分析の方向性が正しいとしても、他言語と対照するためには不十分である。多義語的な動詞の意味は、すべての用法が含まれる上、普遍的に分析しなければならない。そのために、例えば「弾く」のすべての用法の構造を観察する上で、一つ一つの用法を分析し、対照しなければならない。

(5) 同音異義語と多義語の区別

上述の(3)で扱った語彙的特徴の中では、多義語の意味記述と同時に多義語と同音異義語との区別が問題になっていた。歴史言語学や多くの辞書記述の場合、多義語と同音異義語との区別は、歴史的な発展によって説明されてきたが、現代の自然言語を研究する場合、このような語の歴史的な発展に基づく基準は考えられない。国広も「同音異義語と多義語を区別する基準として、語源が無関係であり、中心的なものは意味の親近性に対する話し手の直感である、…、いくつかの基準を考えることができる。(1)形式類(form-class)が異なっていれば同音異義語である。…。(2)転用関係にある意味は多義を構成する。…。(3)派生系列。(国広 1982/107)」と述べている。(1)の基準では、例えば英語の名詞‘sleep’と動詞‘sleep’は意味的に似ているが、同音異義語になる¹。そして(3)の場合では、例えばフィンランド語の「kuusi」は、「kuude-」(六)と「kuuse-」(もみの木)という二つの別々の活用語幹をもっているので、同音異義語であると判断できる。したがって、多義語の基準として(2)語の転用関係が取り上げられる。

この基準について、ライオンズは次のように述べている。「The second major criteria that is traditionally invoked by linguists and lexicographers in drawing the distinction between homonymy and polysemy is unrelatedness vs.relatedness of meaning ; and it

¹ 深層構造だけで見てみると、表層構造の統語的な関係が影響していないので、[sleep]_Nと[sleep]_Vは、同義語であるが、文の中の役割が違うので、同じ多義語ではない。[sleep]_Nも[sleep]_Vもそれぞれ別々の多義語であるといえるだろう。

is clear that this is a relevant and important consideration. Indeed, it is arguable that it is the only synchronically relevant consideration. (Lyons 1979/ 551)」。このように、多義語のすべての意味は、一つの共通の特徴を持っているか(i)、あるいは互いに連続的につながっている(ii)ので、一つの単語として認められる。

(i) $A \rightarrow AB \rightarrow AC \rightarrow AD$

(ii) $A \rightarrow AB \rightarrow BC \rightarrow CD$

例えば、(i)の例を見てみると、英語の「paper」は、「紙」と「新聞」と「書類」と「論文」という意味の中で共通の「紙」という特徴を持っている。このように名詞は、基本的に具体的なものを表しているので、多義語的であってもその関係が比較的分かりやすい。しかし、例えば多くの動詞の意味を見てみると、その意味はより多くの要素をもち、より抽象的である。最も抽象的なのは、文法的な関係を表している助詞や接辞や前置詞などである。次の英語の「over」の例でも分かるように、多義性は、広くなればなるほど共通の意味特徴を特定するのは難しくなり、(ii)のような関係の連続のほうが似合う。

「

- (a) The lamp hangs over the table.
- (b) The plane flew over the city.
- (c) He walked over the street.
- (d) He walked over the hill.
- (e) He jumped over the wall.
- (f) He turned over the page.
- (g) He turned over the stone.
- (h) He fell over a stone.
- (i) He pushed her over the balcony.
- (j) The water flowed over the rim of the bathtub.
- (k) He lives over the hill.
- (l) Come over here.
- (m) Pull the lamp down over the table.
- (n) He walked all over the city.
- (o) The child threw his toys (all) over the floor.
- (p) He laid the tablecloth over the table.
- (q) He put his hands over his face.

(Taylor 1991/110-111) 」

最初の(a)の中の「over」の意味「上にある様子」を(g)「ひっくり返す」と(f)「捲る」に比べると、共通性がないようにも見える。しかし、「円形の180度の移動のルート」を表している(d)が間に入っ

ていると、語の意味のつながりが明らかになる。また(k)の「山の向こう側に」は、直接(a)「テーブルの上に」ではなく、(d)「山の向かい側へ」とのつながりをもっている。

このように多義語の意味は互いに関係を結んでいるのに対し、同音異義語はこのような意味的な関係を持っていない、あるいは[sleep]_Nと[sleep]_Vのように統語論的に一致しない。厳密にいうと[sleep]_Nと[sleep]_Vは、同義語であるので、同音異義語というよりも「同音同義異役割語」である。つまり、同じ形態素が文の中で別々の役割を持っているだけのことであるので、「帰る」と「帰る」と同じように多義性と同音異義性とは別問題である。しかし、文法的な役割が異なる形態素も異義語として認められる場合、同音異義語はより広い意味を表している。

国広は多義語の意味関係の種類を11も区別する²。(1)心的視点の相違によるものは、例えば日本語の隅と角に当たる英語の「corner」のような語である。(2)転移は、例えば「生き物」としての竹と「材料」としての竹の違いである。(3)部分転用は、例えば「手相を読む」の場合「読む」の本来の意味特徴の一部分だけが使用される。(4)推論的意味の場合、例えば英語の「I shot him.」から「彼を殺した」ことが推理できる。(5)比喩的転用は、例えば「みち」は「道路」と「仕方」のように空間でも方法でも表す。(6)提喩的転用の場合、例えば「車」は「自動車」の部品であるが、全体を指している。(7)換喩的転用の場合、例えば英語の「china」は、陶器は元々中国産のものだったので、陶器の意味として使用されるようになった。(8)具象化転用では、例えば「まき割り」は仕事から道具を表すようになった。(9)上下関係的意味では、例えば英語の「man」は、「人間」と「男」両方を表す。(10)特殊化転用の場合、例えば「クリーム」は、靴屋とパン屋では違うものを指している。そして(11)集合化の場合、例えば「髪の毛」は一本を指す場合も紙全体を指す場合もある(国広 1982/111-128)。

しかし、多義語のこのような用法の関係は、完全に明らかになったわけではない。例えばテイラーは「The first concerns the possibility that some members of a family resemblance category might have a more central status within the category than others. (Taylor 1991/116)」というように、多義語のすべての用法は、必ずしも同じステータスをもっていない。例えば[over]の例を見ると、使用頻度に関して(e)「飛び越える」は中心的であるが、(l)「こっちへ来い」も多く使われているが、(q)「手で顔を覆う」は比較的まれに現れる(Taylor 1991/118)。

本論文では、中心的な意味用法は語のそれぞれの用法の生産性と使用頻度に関係しているという立場をとるので、中心的な意味は一つ以上であっても問題はない。しかし、語の用法の関係構造の中でどの意味用法が基本になっているかは別問題である。例えば[over]の場合(a)「上にある」は、明らかな空間的位置を表しているので、おそらく基本的な意味だろう。また、どこまで語の意味の関係は多義性をもっているかは検討するべきである。例えば、「天ぶらを揚げる」は「オイルから持ち上げられた」というつながりをもっていると言えるが、このような説明はわざとらしい感じがする。

² 第一章二節の(3)では、多義語に関する発生の種類を並べた。

第4節 意味素成による意味記述

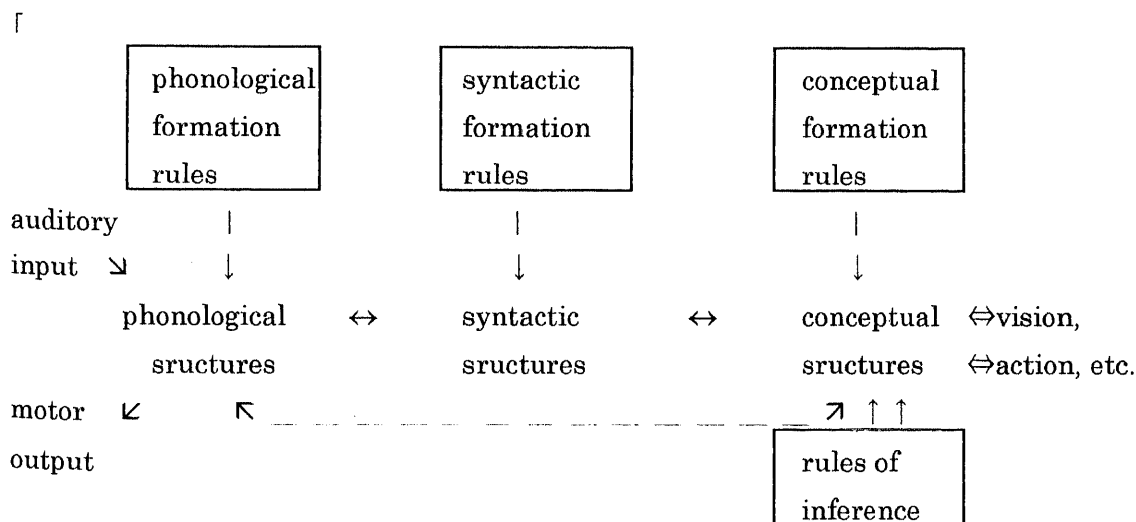
(1) 概念意味論の理念

上に述べた言語の意味記述の理論における出発点は、言語の統語構造(格文法)あるいは形態論(意義素分析)であるのに対し、概念意味論は、言語の意味を人間の思考と概念化と結びつけ、言語現象を全体として観察する。ジャケンドフは、言語の意味を見る立場に関して二つの目論見を述べている:「From the point of view of linguistics and linguistic philosophy, the question is: What is the nature of meaning in human language, such that we can talk about what we perceive and what we do? From the point of view of psychology, the question is: What does the grammatical structure of natural language reveal about the nature of perception and cognition? (Jackendoff 1983/3)」。

つまり言語と意味との関係を観察する場合、言語学と心理学という二つの立場がある。しかし、ジャケンドフはこれに加えて、「My thesis is that these two questions are inseparable: to study semantics of natural language is to study cognitive psychology (Jackendoff 1983/3)」と述べるように、思考と言語の意味とは別々に扱うことはできない。したがって言語の意味を記述する場合、人間の思考も記述することになる。

では意味を記述するための意味論は、どのような条件を持っているだろうか。言語学で一般に言われるように、意味論は、1) 自然言語の表すすべての意味の違いを表現可能で、2) 普遍的にどの言語にも応用可能で、3) 文の成分の意味から文全体の意味が引き出し可能で、そして4) 同義性や変則性や前提などに適用可能でなければならない (Jackendoff 1983/11)。

しかし、この一般的な意味論に対する要求は、それだけで十分ではない。このほかに意味理論は、5) 統語構造と結びつかなければならない。これによって言語の形と意味の間の関係が明らかになる。ただし、統語構造と意味の関係は、直接的に思考には結びつかないので、思考は感覚機能と結びつくレベルも必要である。このレベルで目や耳など受けた情報は概念化され、言語の構造と結ぶところになる(図1)。



それぞれ音韻構造と統語構造と概念構造は、対応規則(correspondent rules)によって互いにつながっていて、そして不適確文は適格規則(well-formedness rules= WFR)によって排除される。また、概念構造には、適格規則のほか推理に関する規則(rules of inference)も関連している。なぜ語用論に関する規則も概念構造につながっているかについて、ジャケンドフは「That is, there is no proprietary level of “semantic representation” at which only logical properties of sentences are encoded, with other “pragmatic” properties reserved for a different level. (Jackendoff1990/18)」と述べている。このように言葉の意味に関するすべての要素は、同じ構造の中で適用されることになる。しかし、本論文で最も注目する辞書に関しては、上述の図1で記されていない。ジャケンドフは、「Under the standard view of the lexicon, a lexical item establishes a correspondence between well-formed fragments of phonological, syntactic, and conceptual structure; that is, the lexicon is a part of the correspondent rule component. Similarly, rules of morphology in general may have phonological parts (how an affix is pronounced, how it affects stress, and so on), syntactic parts (what lexical category an affix is attached to and the lexical of the resultant), and conceptual parts (what kinds of meanings the affix can be applied to and the meaning of the resultant). Thus we can regard each component in figure (1) as divided into lexical principles (those that apply within words) and extralexical principles (those that apply to domains larger than the word level). (Jackendoff1990/18)」と述べて、辞書はそれぞれの自立したレベルの中に内地されていることを示している。つまり、それぞれのレベルでは“単語”そのものが存在しない。概念構造では概念が思考の中から実現される。統語構造では概念の順序が決まる。そして、音韻構造では概念の形がようやく決定される。このように見た場合、辞書は記憶された概念と音の関係であると理解している。

このような考え方の場合でも、多義性が問題になる。一つの形は、どのようにいくつもの別々の意味概念を表しているか、その多数の意味概念は互いにどのように関連しているか、さまざまな点が不明である。しかし、全体としてしてみると、概念意味論は、意義素分析でも取り上げられた語の音韻構造・統語構造・意味構造の関係をより論理的に説明している。

(2) 概念意味論の概念構造

ジャケンドフの理論では、概念構造の基本的な単位は、概念を構成する概念構成要素(conceptual constituent)である。それぞれの構成要素は、何らかの存在論的な範疇(ontological categories)に属している。主なこのような範疇(あるいは概念的な発話の部品)は、Thing, Event, State, Action, Place, Path, Property, Amount である。それぞれの範疇は、互いに異なった発話の中の対象をさしているが、共通点も少なくとも次の6つある。

(1) すべての統語的な構成要素は、概念構成要素と結びついている。例えば、「John ran

toward the house」という文の NP「John」と「the house」は Thing 概念成分に、PP「toward the house」は Path に、そして S「John ran toward the house」は Event 概念成分に相当する。ただし、すべての概念成分は、必ずしも統語構造の成分にそのまま相当しない。

(2) 言語は、言語的な情報だけではなく、すべての感覚器官の環境からの情報と結びつくことができる。すべての単位の概念上の範疇化は、つまり概念構成要素の存在は、このような考え方を支えている。

(3) 多くの範疇は、タイプ・トークンという区別を支えている。例えば、Thing タイプのトークン「a hat」は、Event タイプのトークン「John ate his hat」と同じようにたくさんあり得る。

(4) 多くの範疇は、量的な要素が加わっても可能である。例えば、「Anyplace you can go, I can go too.」という文の中で「Anyplace」は量的に多いといっても Place 概念成分である。

(5) すべての概念的範疇は、機能・項構造の中に埋め込まれている。例えば、「John is tall.」という文は State 機能を表しているが、その中で「John」は Thing という項、そして「tall」は Property という項を表している。上位に立つ範疇はふだん機能的に働くが、場合によって Thing も Place も Property も機能的に働くことがある。例えば、(1) では、Place は Path の項を果たしている。そして(2) では、Event か Action は Property の項になっている。

(1) from under the table.

(2) ready to leave.

(6) 語彙項目の概念構造は、ゼロからいくつかの項の統語構造の位置を実現する。例えば「John loves Mary」という文の「love」動詞は、State 機能を表しているが、その項は主語と目的語の位置で実現する。このように統語論の基本的な構成規則(図2)と並行して、概念範疇の構成規則(図3)も作ることができる(Jackendoff1990/22-24)。

「 (図2)

$$\begin{aligned} XP &\rightarrow \text{Spec} \text{---} X' \\ X' &\rightarrow X \text{---} \text{Comp} \\ X &\rightarrow [\pm N, \pm V] \end{aligned}$$

(図3)

$$\begin{aligned} & \left[\text{Event/Thing/Place/...} \right] \\ [\text{Entity}] & \rightarrow \left[\text{Token/Type} \right] \\ & \left[F(\langle \text{Entity}_1, \langle \text{Entity}_2, \langle \text{Entity}_3 \rangle \rangle) \right] \end{aligned}$$

(Jackendoff1990/24)」

次にすべての範疇に共通の性質は、空間的な機能が基本になっていることである。このようなローカリスト的な考え方の基本は、空間的な位置と移動が多くのほかの意味範囲に応用できるという点である。例えば、次の文の中の動詞「keep」は、四つの異なった意味範囲で登場する。

「

a) 空間的な位置と移動

Harry kept the bird in the cage.

b) 所有

Susan kept the money.

c) 特性の描写

Sam kept the crowd happy.

d) 時間の合わせ

Let's keep the trip on Saturday.

(Jackendoff1990/25)」

このように概念構成要素は同じであっても意味場素性 (semantic field feature) によってその差が明らかになる。したがって、a) の場所的な意味場は BE_{Spatial}、b) の所有の意味場は BE_{Poss}、c) の性質の意味場は BE_{Ident}、そして d) の時間の意味場は BE_{Temp} というふうに記述される。

ジャケンドフは、語彙素の意味を意味特徴に分解する意義素分析のような理論を批判している。ジャケンドフによると「One of the abiding reasons for skepticism about feature-based semantics, even among those who believe in semantic decomposition, is that simple categorical features are clearly inadequate to the full task of conceptual description. (Jackendoff1990/32)」と概念の意味の分解に反対の立場をとる。

最初の問題は、意味特徴の有様に関するものである。例えば、「chair」と「stool」を区別するために「±has a back」というような特徴は定義できるか。つまり、どのような特徴は意味記述の道具になりうるかについて意義素分析ははっきり特定しない。概念意味論では、このような幾何学的な物体の認識は、3D—モデル (Marr1982) によって概念構造と別に行われるので、概念構造の中に特徴を入れる必要がない。3D—モデルでは、視覚機能が物体を分割し把握するので、言語と離れて扱うことが可能である。このような3D構造は対応規則によって概念構造とつながっている (Jackendoff1990/33)。3D—モデルを応用すれば、例えば「throw」という動詞の類義語「toss」との違いは把握できるので、概念構造で両方の動詞は同じように推進の動作として扱うことができる。

次のこの研究に関連のある問題として、ジャケンドフは連結した特徴をあげる。意義素分析では、例えば「climb」という動詞は「traveling upward」と「moving with grasping effortfull motion」という2つの条件を持っているが、文は、これらの条件のどちらか (b,c) あるいは両方 (a) を満たせば、実現可能になる。

「

- a. Bill climbed (up) the mountain.
- b. Bill climbed down the mountain.
- c. The snake climbed (up) the tree.
- d. ?*The snake climbed (down) the tree.

(Jackendoff1990/35)」

しかし、「climb」の意味は、この二つの意味特徴だけであれば、二つの別々の同音異義語が区別できるはずである。なぜなら、b は最初の条件、そして c は次の条件を満たさないからである。こ

の場合、文 a は二つの意味をもつ曖昧な意味になるだろう。それより「Bill climbed (up) the mountain」は、もっともステレオタイプ的な文で、bとcは「climb」の限界の意味表していると理解している。ジャケンドフは、「A word meaning, then, is a large heterogeneous collection of such conditions dealing with form, function, purpose, personality, or whatever else is salient. (Jackendoff1983/139)」というように、単語の意味を決めるのは、個別の意味特徴でなく、意味特徴のグループである。これらのグループは、選択規則システム (preference rule system) という。この規則に適しない情報は、デフォルト価値として利用される。例えば、例文 b と c はこのような情報をもっている。このように単語の意味は特徴の群から集められ、多くの特徴を実現するよりステレオタイプ的な意味とそうでない意味に分けることができる。しかし、選択規則システムが、どのように概念構造と結びついているかは、はっきり記されていない。おそらく、選択規則システムも3D—モデルに属し、それぞれの概念構造の構成要素と結びついている。

このように単語の意味記述に関して、概念意味論は、概念構造とは別に組み立てられるように定義し、あまり触れていない。しかし、語彙に関する問題が、意味論の中で具体的に提起しなければ、はたして意味論とは言えるだろうか。

(3) 概念意味論による意味記述

概念構造は、内在的な形成規則をもっている。図4で示されたのは、場所的な意味場の主な形成規則である。

「(図4)

a.[PLACE]	→	[_{Place}	PLACE-FUNCTION	([THING])	]
		[	[TO	]	]
			FROM		([([THING])])
b.[PATH]	→		{ TOWARD }	{ }	
			AWAY-FROM		\([PLACE])\)
		[_{Path}	[VIA	]	]
		{	[_{Event} GO([THING],[PATH])]	}	
c.[EVENT]	→	{		}	
			[_{Event} STAY([THING],[PLACE])]		
		{	[_{State} BE([THING],[PLACE])]	}	
d.[STATE]	→	{	[_{State} ORIENT([THING],[PATH])]	}	
			[_{State} EXT([THING],[PATH])]		

e.[EVENT] → 「 ([[[CAUSE]]] [EVENT]]]
 ↳Event ([[[EVENT]]])]]
 (Jackendoff1990/43) 」

最初の規則 a. では、Place に属する概念構成要素は、場所機能と Thing に属する項に一致している。この場合、項は、場所的な指示物を指しているのに対し、場所機能は場所的な範囲を定める。例えば、「under the table」という文では、「the table」は指示物を表し、「under」は指示物に対する場所的な範囲を指している。同じように b. では、五つの経路機能は、指示物 (Thing) あるいは場所 (Place) の直線における位置を指している。例えば、「to the house」では、指示物「the house」は、直線の終わり「to」にあると示している。また「from under the table」の場合、直線は場所から始まると言うことが分かる。次の c. では Event 範疇の構成要素は、GO と STAY という二つの機能を選択できる。GO は項の PATH での移動を表しているのに対し、STAY では項は一定の期間移動しないことを表している。例えば、「Bill went to New York」は GO 機能であり、「Bill stayed in the kitchen」は STAY 機能である。d. では三つの State 機能が上げられる。最初の BE 機能は、例えば「the dog is in the park」のように、物体の場所的な位置を表している。次の ORIENT 機能は、例えば「The sign points toward New York」のように、物体の向きを決める。そして三つ目の EXT 機能は、例えば「the road goes from New York to San Francisco」のように直線的な物体の経路に対する位置を表している。最後の e. では、Event 範疇の構成要素は、CAUSE 機能と二つの項をもっている。最初の項は Event の場合、それは同じく CAUSE 機能のものである。Thing の場合、その Thing は動作主を表している (Jackendoff 1990/44)。

概念構造のすべての構成要素は、直接的に統語論の構成要素と結びついている。例えば英語では、統語論の名詞句 NP は、概念構造のどの構成要素にも実現できる。また前置詞句 PP は、Place と Path と Property を実現することができる。このように例えば「John ran into the room」という文の構造は次のようになる。

「
 a. Syntactic structure
 [s [NP John] [VP ran [PP into [NP the room]]]]]
 b. Conceptual structure
 [Event GO ([Thing JOHN], [Path TO ([Place IN ([Thing ROOM])]])])]
 (Jackendoff1990/45) 」

統語構造の動詞は概念構造の Event 機能に相当し、前置詞句は Path 機能に、そして名詞句は Thing 項に相当する。このようにそれぞれ「into」と「run」の語彙の中の記述がまとめられる。

「 [into]
 「 into]
 | P |

____ NP _j	
└ [Path TO ([Place IN ([Thing]i)])]	└
[run]	
┌ run	┐
V	
____ <PP _j >	
└ [Event GO ([Thing]i, [Path]j)]	└

(Jackendoff1990/45)」

走る「run」の場合、前置詞句が「John run」のように空であっても、概念構造では無特定の Path 機能は存在する。もし「run」の代わりに例えば「enter」が使われると、前置詞句 PP で表された Place 機能は、動詞の語彙的な意味に内包されることになる: [Event GO ([Thing], [Path TO ([Place IN ([Thing])])])]。このように動詞の語彙的な意味の違いは、概念構造で現れてくる。しかし、ジャケンドフが言うように「This entry for *run* is of course only approximate, since at this level of detail it is not differentiated from other verbs of locomotion such as *walk*, *swim*, or *fly*. I assume, ..., that much of this further differentiation is localized in the associated 3D model representation and plays no role in the level of conceptual structure of run. (Jackendoff1990/290/2)」と語彙的な意味の具体的な記述は概念構造とは別に3D—モデルの中で行われる。どのように「run」と「walk」などの違いは表されるかについてジャケンドフは述べていないようだ。

語の文法的な役割について、概念意味論は格文法とにしているような立場をとる。しかし格文法とは異なって、深層格というような概念を使っていない。概念意味論では、深層格は、GB理論の θ ロールと結びついている概念構造の各機能の關係に相当する。

「

Reference target = x: [F¹ (x)], x ≠ [F¹ (...)] , (F¹ ∈ Place Function ∪ Path Function)

Theme = x: [F² (x, [...])], (F² ∈ Event Function ∪ State Function)

Agent = x: [F³ (x, [...])], (F³ ∈ Cause Function)

(Leino1990/85) 」

このように概念意味論は、格文法で問題になった深層格の数と種類に関する問題を解決する。しかし、表層構造の格の違いについて別に何も述べていないようだ。おそらく概念意味論で扱われる表層構造の格標識は、生成文法でも同じようにただ形だけのものであろう。

(4) 概念意味論に関する疑問点

概念意味論は、非常に複雑で分かりにくい理論であるが、私の理解の範囲で以下に述べる。本論文を作成することに当たって、概念意味論の適用を考えると、少なくとも次の五つの疑問点が浮かび上がった。

まず、本論文は、語彙の意味の対照を目的にしているので、語の語彙的な意味をはっきりと記

述できないといけない。これに関して概念意味論は例えば、「go」と「enter」という動詞の語彙的な意味の差が比較的分かりやすく説明してあるが、「walk」と「run」について概念意味論は、概念構造の中で扱う必要はないと説明する(Jackendoff1990/290/2)。このような類義語は、なぜ「run」は例えば[*Properly fast*]という付加的な概念で「walk」と区別されていないのだろうか。

次に例えば自動詞「rise」と他動詞「rise」の違いは、概念構造の中で他動詞が Cause 機能をもつことによって区別されている(Jackendoff1983/184)。また「He runs」と「Time runs」の違いは、おそらく場所[GO_{Spatial}]と時間[GO_{Time}]という異なった意味場によって説明される。しかし、このような多義語の意味の区別はどの程度可能だろうか。例えば「Machine runs」は State 機能で上述のものと区別するべきだろうか。また「life runs smoothly」は、3D—モデルの中の特徴の束におけるよりステレオタイプの「run」と周辺的な「run」で説明するべきだろうか。このほかに例えば、「the enemy run」のように、推論に基づく「run」の意味は、どのように推論規則(rules of inference)と概念構造の間で説明されるかは明らかではない。つまり統語論と意味の間の関係が概念意味論で非常にまとまったかたちで記述されるのに対し、語の多義性などは別問題として十分に扱い得ないように思われる。

3番目の疑問として、次のフィンランド語の動作は、Event 機能か State 機能のどちらになるかははっきりしない。

- 1) Työ väsyttää minua. = 私は仕事で疲れる。 (Event function)
N:nom(work)+V:3sg(makes tired)+N:part(me).
- 2) Minua väsyttää työskennellä. = 私は仕事に疲れている。(?Event function)
N:part(me) +V:3sg(makes tired)+V:1inf(to work).
- 3) Minua väsyttää. = 私は疲れている。 (?State function)
N:part(me)+V:3sg(makes tired).

この答えとして「run」と同じような説明が考えられるだろう。つまり表層構造で空の項も概念構造では存在する。このように3)は、[CAUSE([...], [Event GO ([ME], [Path TO ([Place ([TIRED])])])])] という構造になるだろう。しかし、これはあくまでも統語論に対応するための解決である。このような構造で表層構造は再び再生できるかどうかは問題である。

次の疑問は、項の 0 ロールに関するものであるが、表層構造での格標識の意味の差は、はたして Agent と Theme と Reference Target で表現できるか。例えば、次のフィンランド語の文を観察すると、テーマ(Theme)における意味の差は、概念構造の中で明らかにならない。

- 4) Malaan seinää. = 私は壁を塗っている。(壁のその時点のところは対象)
V:1sg(I paint)+N:part(wall).
- 5) Malaan seinän. = 私は壁を塗る。(壁全体は対象)
V:1sg(I paint)+N:acc(wall).

おそらくまた概念構造とは別に扱うだろうが、それはテーマの記述にどのようにかわるのかを疑問に思う。

最後に上述のように「walk」と「run」の意味の詳しい相違点は、3D—モデルで説明されると言

われたが、「sell」と「give」の場合、意味の差を説明するために EXCH という機能が加わる。

```

「give
|      V
|  ___NPj [NP to NPk]
|  [CAUSE([ ]α i, [GOPOSS ([ ]j, 「FROM [α] [ ]」)]]
|
|      [ TO [ ]k ]
|

```

```

「sell
|      V
|  ___NPj
|  [CAUSE([ ]α i, 「GOPOSS ([ ]j, 「FROM [α] [ ]」)
|
|      [ TO [ ]β ]
|
|      [EXCH [GOPOSS ([MONEY], 「FROM [α] [ ]」)]]
|
|      [ TO [β] ]
|

```

(Jackendoff1990/194)

このような「sell」と「give」の相違点に関する情報は概念構造に属するが、なぜ「walk」と「run」の違いについての情報は3D—モデルに属するか。この EXCH も3D—モデルに属するべきではないか。

以上概念意味論に関する考察だが、根本的な問題についてははっきりしたことは言えないとしても、全体的に見ると、概念意味論の方法は、具体的な語彙的な意味を記述するためにそのままでは複雑すぎる。概念構造は理論的に正しい方向を示していると思われるが、現実的には特定言語の語彙をメタ言語として用いざるを得ないので、十分な記述を実現するのは難しいのではないだろうか。

第5節 「あげる」の多義語的な記述

(1) 「あげる」の用法を分解する

国立国語研究所の『動詞の意味用法の記述的研究』(s.)では、「あげる」の意味は、大きく八つの互いに関連している意味に分けられている。最も基本とされている意味は、(00)「上に__」である。(1)「成績を__」(変化)と(6)「金を__」(所有関係)では、基本的な「あげる」(空間的な上昇)における「上」の意味は抽象化した。(2)「例を__」(顕在化)は(02)「看板を__」によって、そして(3)「声を__」(生産)は(03)「煙りを__」によって基本的な意味につながっているが、空間的な上昇の別の側面が抽象化したものである。(4)「作品を__」と(5)「全力を__」と(7)「油で__」についてどのような結びつきがはたらいっているかは明らかではない。(8)「潮が__」について他動詞は自動詞として使われるだけであるので、別扱いをしている(国研 1972/550)。

このように「あげる」に関して8つの主な意味が区別されている。以下はこれらの意味に関して意義素分析と概念意味論の方法を応用して記述してみる。どこまで記述が可能かという点がねらいである。

(2) 「あげる」の意味の意義素分析での記述

あげるの最も基本とされている用法を意義素分析によって記述すると、おそらく次のような形になるだろう。

[あげる]

- | | | |
|------|-------|-------------------------------------|
| i) | 統合型 | (a) [XがYをZに__] (例:彼女はピアノを舞台に上げた。) |
| | | (b) [XがYを__] (例:彼女は手をあげた。) |
| ii) | 意味的役割 | 《主体》: X
《対象》: Y
《場所》: Z |
| iii) | 統語的役割 | 《主体》←〈人間〉
《対象》←〈もの〉
《場所》←〈場所〉 |
| iv) | 本来的特徴 | 〈XがYをZに空間移動させる〉 |
| v) | 文体的特徴 | [中立的] |

この基本的な構造の統語的役割を変えるだけで、いくつかの別の意味は説明できる。例えば、対象を「もの」から「人間」に変えると「客を--」、また場所を「学校」に限定すると「子供を大学に--」という意味が説明できる。本来的特徴もちろんこれによって変化する。例えば、「声を--」と「煙りを--」も対象と主体を変えることによって説明できるだろう。しかし、次のような構造ははたして分かるだろうか。

[あげる]

- | | | |
|------|-------|-------------------------------|
| i) | 統合型 | (a) [XがYを__] (例:彼女は作品をあげた。) |
| ii) | 意味的役割 | 《主体》:X
《対象》:Y |
| iii) | 統語的役割 | 《主体》←〈人間〉
《対象》←〈仕事〉 |
| iv) | 本来の特徴 | 〈XがYを終了する〉 |
| v) | 文体的特徴 | [中立的] |

この場合もちろん対象を変えるだけで新しい意味が表現できる。例えば、仕事の変わりに、「式」か「全力」か「国」を入れることによって「あげる」の表している意味が変化する。しかし、問題のある語の意味関係は、全くと言えるほど明らかにならない。フィンランド語の動詞と比較することに当たって、このような記述方法は十分ではない。次のフィンランド語訳を見てみると記述の問題は、明らかだろう。

私は凧をあげる。 = Minä lennätän leijaa.
 pN:nom(I)+V:1sg(fly)+N:part(kite).
 国をあげて喪に服した。 = Koko maa osallistui suruun.
 P:(whole)+N:nom(country)+V:past;3sg(take part)+N:ill(sorrow).

これらの例文でも分かるように、動詞の意味の違いは、動詞内部の制約だけでは説明できない。動詞の意味は思考の中でどのように解釈されるかについての情報も得られなければならない。

(3) 「あげる」の概念意味論による記述

概念意味論は、まず項の役割をより効率的に概念構造で記述する。また語彙的な意味の記述も原素的な要素によって記述するので、本来的特徴のような曖昧さが解消できる。しかし、語彙の意味記述は概念構造と統語構造と推論規則と語用論に分解されているので、語の全体的な意味がなかなか把握しにくい。例えば、「あげる」の基本的な意味を記述すると、次のようになる。

「あげる

| V

| ____⟨NP_jを⟩⟨⟨_[pp]NP_kに⟩⟩⟨⟨⟨_[pp]NP_kに⟩⟩⟩

| [_{Event}CAUSE([]^α_i,⟨_{[Event}GO([]_j),「⟨⟨_{[FROM}[α]⟩⟩⟩_j)])]

| | UPWARD |

| |_{[Path}⟨_{[TO}[]_k⟩⟩ |

このように意義素分析で示した NP 中の違いによって動詞の意味が変わると推測できるが、記

述の複雑さによって広く使うことは難しい。また上述のような疑問点のほか、意義素分析でも説明できなかった「凧をあげる」と「*凧を飛ばす」の関係を明らかにしないようだ。このほかに例えば次のような「あげる」の例文もある。

- (a) 原っぱでたこをあげる。(大)
- (b) 盲目の女師匠が物干台に立ち出でて雲雀を空に揚げているのを(春琴抄181)
- (c) 河原田は日本座敷へ二人をあげた。(むらぎも 166)
- (d) ホカホカと湯気を上げる水餃子。(汽車・酒)

これらの例文でも分かるように(a)では動作主は確かに対象に対して何らかの影響を与えて「あがらせる」(CAUSE/GO?)が、(b)では雲雀は自分の力であがる(LET/GO?)。そして(c)では対象は自分の意志であがる(CAUSE/MOVE?)。これらの意味の差はどのように記述するかも問題になるのではないかと思う。(d)の場合、水餃子は湯気の出発点になるので、記述の問題はない。

(4) 「あげる」の特徴の束と意味派生と意味構造

以上述べたように、本研究で行われる対照研究に関して、どの方法論も十分ではないので、それぞれの方法の適切な部分を応用して、研究を進めたいと思う。基本的な方法として国立国語研究所で行われた「あげる」の記述を利用する。しかし、それだけでは、「あげる」のすべての用法の関係が明らかにはできないので、国広などによる意味派生の方法を応用して、より詳しい「あげる」の意味関係を記述する。最後に格関係が明らかになるため、また概念構造が明らかになるために概念意味論を単純化し、応用してみる。

第3章 「あげる」の意味記述

第1節 多義語の意味記述

(1) 動詞の多義性の記述

上にも述べたように言語は、思考の道具であるので、常に新しい考えを表せるように設計されている。そのために全ての言葉は、それぞれの文法によって数え切れないほど多くの異なった文のコンビネーションを生み出すことができる。しかし、いうまでもないが、すべての文法的に正しいコンビネーションが意味的に受け入れられるわけではない。例えば次のチョムスキーが考えたあまりにも有名な英語の例文でも分かるように、文法的に可能なコンビネーションは、意味的に英語の言語感覚に違反している。

(a) Colorless green ideas sleep furiously.

(b) Furiously sleep ideas green colorless.

(ヘルマン 1971/54)

例文(b)は、文法的にも意味的にも違反しているので、個別の単語を並べられただけの意味しか解釈できない。したがってここでは、例文(a)だけを扱うことにする。なぜ、文法的に正しい文は、全体的に何も理屈に通じるような正当な意味を表さないか。まず「colorless」と「green」は互いに反対の意味を表しているので、同じ名詞を修飾することができない。また一般的に英語の言語社会の中で、「ideas」は「何色」というように抽象的にも特定できないので、「Colorless green ideas」は不可能である。また「sleep」という動詞は、落ち着いた様子を表しているので、その反対の意味を表している副詞「furiously」に特定されることが不自然である。つまり、それぞれの単語の一般的に認められる意味の環境は、適切ではない。しかし、現在このような文は、意味的に不可能であっても、いずれか言葉の変動によって意味的に正当な文になる可能性もある。例えば現時点でも「Colorless」は「ぱっとしない」、「green」は「未熟な」、そして「sleep」は「能力などが潜んでいる」というように抽象的な意味でも使える。また、「furiously」を意味が関連するように解釈できるようになると、「未熟ではつきりしないアイディアができるだけ早く完全な状態で表面化するのを待っている」という非常に抽象的な意味解釈もいずれか可能になるかもしれない。

同じように多義語の場合、解釈がさまざまであるので、一方の意味解釈が不可能であっても、他方のものは理屈が通る。特に外国語を翻訳するとき、母語に直訳しようとする、ふだん考えられないような間違いをすることがある。それは、出発言語と到着言語の間に基本的に同じ意味を表しているものは、一方の言語の中で思いも寄らない別の使い方を持っているからである。例えば、

(c) Puolukka-an kadon-nut vanhus löyty-i hyväkuntoise-na.

N:ill(in berry)+V:prt.prf(disappear)+V:nom(old man)+V:past:3sg(found)
+Adj:ess(good shape)

という文を文字通りに訳すと「ベリーの中に消えた老人は良い状態で見つかった」という意味になる。しかし、「ベリー」は「ベリーを摘むこと」という意味としても使われるので、「ベリーを摘みに行つて消えた老人は、良い状態で見つかった」という解釈ができる。そして更に想像力を働かせれば、「森に迷った老人が無事見つかった」という意味が読みとれる。

このように言葉の変動は、常に単語の新しい用法・多義性を生み出すのである。しかし、多義性は、先ほどの例でも分かるように、ほかの意味とは無関係で誕生するわけではない。例えば、新しい物体を命名する場合、大きく分けて三つの方法が考えられる。最初の一つは、「タイプライター」や「インストールする」などのように外国語から外来語として新しい単語を受け入れる方法である。この場合、すでに存在する単語の意味との関連性がないので、分かりづらいことが多い。次の方法は、「深み」や「持ち上げる」などのような新しい単語を「派生語」や「複合語」などの形で創造するものである。そして、三つ目に「車＞自動車」や「あげる＞フライにする」などのように、すでに存在する単語に新しい意味を与える方法である。この場合、元になる単語は、何らかの意味的な関係によって新しい意味と結びつかなければならない。また、新しい用法は、単語の前の意味が存在する環境と重なっては行けない。元の意味とのつながりがなければ、あるいはほかの意味が解釈される環境が同じであれば、新しい意味が誕生することができない。例えば、

(d) 人を家にあげる。＞ *人を地下室にあげる。＞ ≠*人を地下室に与える。

(e) 原っぱで風をあげる。＞ *?原っぱでタコを揚げる。＞キッチンでタコを揚げる。

という文を見ると、(d)では地下室は「あげる」の基本的な意味の反対を表している。また地下室は場所を表し、そして人はものではないので、新しい用法である「与える」の意味につながらない。このような現象は、一般的に選択制限という。同じように(e)では、原っぱとキッチンという特定の環境によって「たこ」と「あげる」の意味は決まる。また対象は「たこ」という同音異義語とは別の「ロケット」や「天ぷら」である場合、「あげる」の環境は十分に特定されている。つまり、動詞のいわゆる必須補語の数は、それぞれの環境によって異なっている。

単語の意味は多義性になる場合、元の意味との関連は非常に大事である。例えば、あるアメリカの映画であった場面のように、主人公の男が朝御飯を食べようとすると、奥さんはいきなり「恐竜はいかがですか」と、コーヒーのことを「恐竜」と呼んでいた。意味の関連性が全くなかったので、男は呆然としていた。結局主人公は、聞こえた単語(コーヒー)を別の単語の意味(恐竜)につながるような言語障害だったという話したが、例えばコンピューターのマウスのことなら、誰もそれをエレファントとは呼ばなかっただろう。あるいは多義性の例に戻ると、例えば「車」は、日本語の場合「自動車」という意味も表しているが、フィンランド語の「pyörä=車」のもう一つの意味は「自転車」である。つまり両方の言語では、「車」の意味は乗り物に結びつくのである。おそらく「タイヤ」のようなあまりにも「車」に近い意味の単語、または「飛行機」のようなほとんど関連性のない単語なら、車の意味が結びつくことができないだろう。このように単語の意味は、より基本的で具体的

な意味からその用法を広げ、単語の全体的な意味を形成すると考えられる。

では、動詞の意味は、どこまで意味論による「単語の本来的な意味」に属するか、そしてどこからそれは語用論によるコンテキストの中の解釈であるか。この問題は、いわばソシュールのラングとパロールの差によるものであると考えている。例えば、次の文(f)に関して少なくとも二通りの解釈が考えられる。

(f) 「この本を棚に上げて頂戴」

一般的に言語社会の中(=ラング)でこの文の意味を解釈すると、「本を棚に動かして」という意味を表している。しかし、「お母さんが 100 冊の本も床に散らかした子供に対して命令する」という設定(=パロール)を想像すると、「本を片づけて」という解釈も可能になる。また「布団をあげて」という文の場合、「布団を片づけて」という意味も「布団を持ち上げて」という意味も同時に一般的な解釈になっている。このように動詞の意味は、言語社会で習慣的に使われている意味であるので、はっきりした意味の基準をもうけるのは難しい。しかし動詞の意味関係を明らかにすることによって、動詞の意味の大体の範囲が分かり、ほかの言語の意味範囲と対照することができるだろう。例えば、「あげる」の基本的な意味を定義できれば、例文を訳すことによってその基本的な意味に最も近いフィンランド語の動詞も見つかると思う。

(2) 基本的な意味と派生的な意味

動詞の全体的な意味構造を記述するために、記述の出発点、つまり最も基本的であると思われる用法を決めなければならない。この基本的な意味は、前にも述べたように歴史的な発展に基づいて決めようとする、言語の通事的な研究になるので、まず動詞のそれぞれの用法の使用頻度によって決めることが最も適切であろう。この場合、問題はその使用頻度のデータの解釈である。例えば、この研究で扱う「あげる」の場合、上述の国立国語研究所の雑誌 90 種の資料によると、最も使われている意味は、「例をあげる」(56)で、次は「上に上げる」(43)、そして 3 番目に「…てあげる」である。しかし、国研のデータの中でもものが何らかのかたちで具体的に「上に上がる」という意味関連のある例文「上にー」(43)、「3 センチー」(3)、「看板をー」(2)、「目をー」(13)、「首をー」(1)、「煙をー」(2)、「声をー」(32)を合わせると、単独トップ(102)にものぼる。また抽象的な「あがる様子」を描く「あげる」の用法「成績をー」(11)と「例をー」(56)を付け加えると、全例文(280)の中で半分以上の合わせて(145)もの例文は、何らかの形で「具体的な上昇」というイメージに結びついている。あとの例文では、「さいせんをー」(4)、「お金をー」(4)、「…てー」(41)の合わせて(49)、そして「成果をー」(26)と「式をー」(14)の合わせて三つの基本的な意味以外の中心的な意味が考えられるだろう。その他の用法も関連しているが、使用頻度として非常に少ない(国研 1972/551、本研究 p.68)。しかし、上述の「over」の例でも見られたとおり、使用頻度によって基本的な意味が決められない場合もある。「あげる」の「与える」という用法も、日本人の母語話者の言語感覚では、「持ち上げる」よりも多く使われているだろうが、言語の自然的な意味派生

は具体的な意味から抽象的な意味へと派生すると考えられるので、「あげる」の基本的な意味は、「上に上げる」のような空間的上昇であると判断できる。この場合の意味派生は、通事的な研究を行うためではなく、基本的な意味を定めるためにあるのである。

では基本的な意味からほかの中心的な意味はどのように関連しているだろうか。ここで登場するのは「連想」という概念である。一般的に言語心理学の中で「連想」は、ある刺激単語に対してどのような反応単語が思い浮かぶかを調べるときに使われる概念（ヘルマン 1975/118）であるが、ここではこのような心理テストのような連想を考えていない。ここでの連想は、一定の動作の結果または前提としてどのような動作・状態が想像されるかというものである。例えば、次のような動詞の前提条件と結果からの連想は明らかである。

(a) Factive verbs

George regrets that Mary left presupposes that Mary left.

(b) Implicative verbs

Mary managed to leave presupposes that Mary tried to leave.

(c) Change-of-state verbs

George stopped drinking red wine presupposes that George was drinking red wine before.

(d) Verbs of judging

John accused Mary of being rich presupposes that to be rich is bad.

(Eco 1990/223)

しかし、このような特定の動詞のグループ (factive, implicative など) だけではなく、すべての動詞は、何らかの前提条件 (b/c) また連想 (a/d) を引き起こすと考えることができる。そしてこの前提条件と結果からの連想は、それぞれのアクタントのコンビネーションによって少しずつ変わっていく。このようにできた名詞句の意味連鎖 (meaning chain) によって動詞の多義性が形成すると思う。つまりアクタントは、意味的につながりを持っているが、少しずつ動詞の意味を環境に合うように変えていく。このような動詞の意味は、できるだけ多くの例文の意味を比較することによって推定することができると考えている。このほかに動詞の意味を変化させるのは、動作の結果（場合によって前提条件）から連想された意味の孤立（以下の換喩や比喩）である。このように連想による動詞の意味の変化は、基本的につぎの図 1 のようになっている。

(図 1)

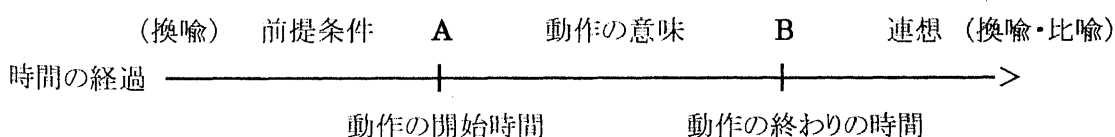
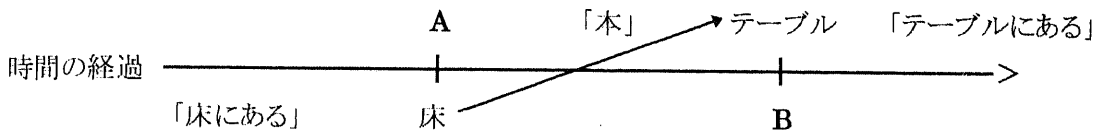


図 1 では真ん中の軸は「時間の経過」を表し、そして時点 (A) と (B) はそれぞれ動作の開始と終

わりの時点を示している。つまり「あげる」の場合、(A)は「から」で示される出発点を表し、そして(B)は「に・へ」で示される到着点を表している。また基本的に「あげる」動作の前提条件になるのは「Aにある」状態、そしてあとに連想するのは「Bにある」状態である。間にはもちろん「あげる」動作自体が入る。このように例えば、「本を床からテーブルに上げる」という文は、次図 2 のような構造(連想の経過)を示している。

(図 2)



「あげる」という動詞は、基本的に「動作主」と「対象」と「到着点」という三つのアクタントを要求しているが、「花火をあげる」や「布団をあげる」など場合によって到着点を示す必要はない。その理由は、それぞれの文の対象にある。「花火」や「布団」は、もちろん具体的に「テーブルの上」にもあげることができるが、一般的な社会の常識の上では、「花火は空中に」そして「布団は押入に」あげることは誰でも知っている。そのために到着点は、すでにその意味の中に含まれているので、述べる必要がない。「花火」のような対象は、「あがる」ために動作主の力を要らないので、「あげる」の動作主は必ずしも力を用いる訳ではないことが分かる。このほか「風をあげる」の場合、「風」が空中にあがると、動作主は常にそのあがり具合を管理し続けている。そのために進行形では、「風を空にあげている」は(B)時点に終わるが、「風をあげている」は(B)時点のあとでも続いている。「布団をあげる」の場合、布団をそのまま動かそうとすると、押入に入れること自体は、大変難しい。そのために動作の前提に「布団と掛け布団と枕をきれいに畳んで」という条件が考えられる。このような意味は、この場合の「あげる」の主要な意味になるので、換喩表現¹(metonymy)と呼ぶことにする。換喩表現は、一方では本来の意味「持ち上げる」を保ちながらも、本来の意味から想像された新しい意味「片づける」を中心に意味を連想させる。

次に、「軍配を揚げる」と「幕をあげる」のように、本来の「あげる」意味が完全に切り離されて考えられるような例がある。もちろんこの場合も具体的な「軍配をあげる」と「幕を挙げる」の意味も可能であるが、「熱帯の朝が幕をあげた」というように実際の「幕を挙げる」と無関係の例が多い。もともと「幕を挙げて開演する」という連想のつながりを持っていただろうが、幕のないところでその意味は、連想される「開演する>始まる」という意味だけを示している。このような意味の変化は、比喩表現(metaphor)と呼ぶことにする。この場合、「あげる」の一般的に要求するアクタントの役割は当然崩れ、「始まる」と同じように格助詞「が」は、「対象」を表している。

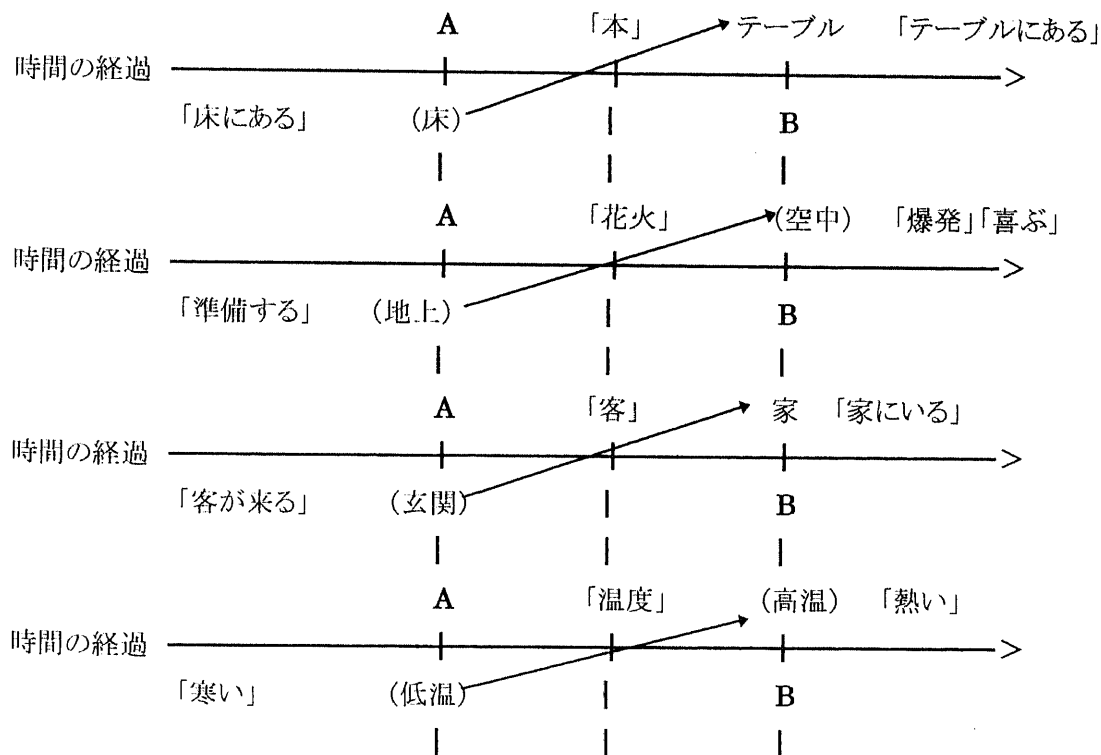
時間の軸では連想は上述の通り意味の変化をなしているが、上述の「花火」でも見られたように、

¹ 一般的に換喩は提喩(synecdoche)と並べて、(提喩は類⇄種・全体⇄一文など、そして換喩は原因⇄結果・抽象⇄具象など)さまざまな意味変化のパターンを占めているが、ここで重要なのは原因と結果の間の意味関係が残っているかどうかという点である。対象の抽象化などは、意味連鎖の一点として考えている。

ただ単に「対象」の交替による微妙な意味の変化もある。「花火」は自分の力であるが、自分の意志である「客」や「息子」や「芸者」などの場合、到着点も人の社会的な役割によって複雑化し、動作主との人間関係によって「あげる」の意味が「案内する」から「行かせる」までさまざまである。しかし、基本的な意味変化の構造は変わらない。

基本的に「あげる」は、「具体的なもの」を対象に指定しているが、「具体物」が高低差の次元を独占するわけではない。抽象的な概念も「高い」と「低い」で判断されるし、そしてそれに伴って上下の変化も「あげる」で表現される。では空間的な移動は、どのように抽象的な移動に変わるかというと、これはアクタントの意味連鎖によるものと考えている。「あげる」だけを取り上げた意味はおそらく変わらない。変わるのは、対象の移動の可能な範囲である。つまり対象は、空間的な次元では具体物として存在しなくても、「あげる」動作の意味は、同じように想像の中で理解される。ただし、基本的な意味との接点が切れた比喻表現が違う。このように、「あげる」の基本な意味は、次の図3のような構造で表すことができる。真ん中における名詞句(アクタント)の変化は、もっとはっきりした意味の連鎖で表すべきであるが、全ての可能な名詞句の関係を手短かに明かすのは難しかったので、代表的なものだけを記述することにした。

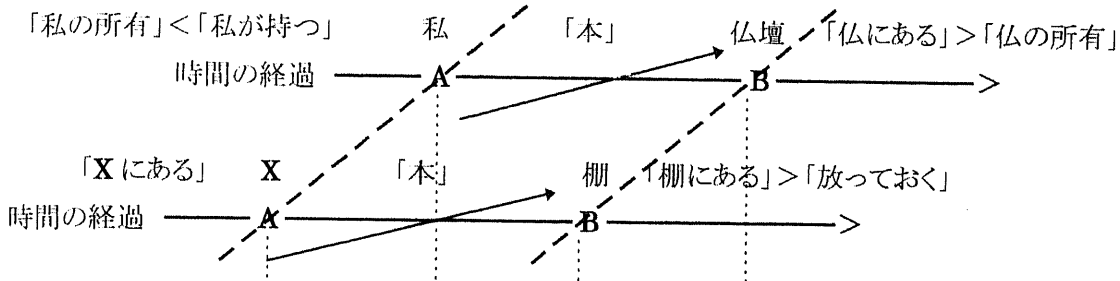
(図 3)



「本」「花火」「客」「温度」の代わりには、それぞれ抽象的な意味概念「具体物」「自力の具体物」「自意志の具体物」「抽象物」を書いてもいいが、より簡単に図形を理解するために、具体的な名詞を記入した。

上でも述べたように換喩表現または比喩表現の場合、同じ種類の「対象」であっても異なった連想をおこす場合がある。同じように「到着点」の変化も新しい連想を引き起こすことがある。この連想される意味によって、新たな換喩表現または比喩表現が創造できる。この経過を次の図4の共時的な横軸で表示する。

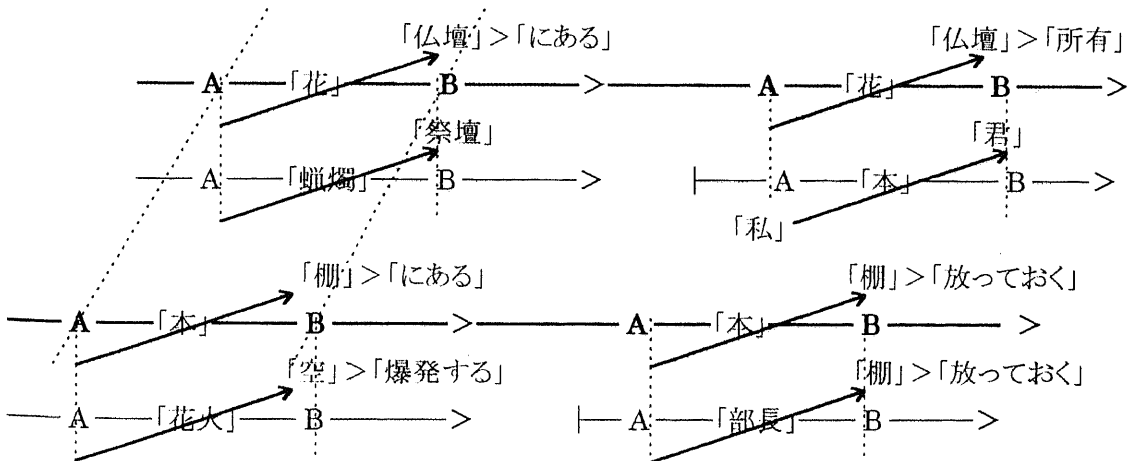
(図4)



いうまでもないが、比喩表現の対象と到着点は、「あげる」の基本的な意味と同じである場合、曖昧さが生じるので、基本的な意味の解釈が不可能な対象に集中している。例えば、「物を仏壇にあげる」場合は、連想される意味「仏に捧げる」のほうが強いが、具体的な上昇の意味もまだ解釈できる。そのために表現は「換喩表現」と言えると思う。しかし、「捧げる」意味だけが読みとれるために、到着点は、「仏」そして更に連想して「人」で示さなければならない。この場合「あげる」の意味は、具体的な上昇の意味がほとんど消え、(図5)のように対象も到着点も変えられる生産性の高い比喩表現に姿を変える。

また、「棚に上げる」や「幕を上げる」のような一般的な生産性の低い(慣用句的な)比喩表現の場合、連想によって想像された意味解釈「放っておく」や「始まる」などは、「棚に」と「幕を」のアクタントとの組み合わせだけで可能になる。そして結合するアクタントも連想される動作と同じものになる。つまり、(図5)のように「放っておく」は「XがYを」で、「始まる」は「Xが」という文のパターンになる。おそらく動詞の連想される意味は、その意味の同義語の意味構造に関連していると思う。

(図5)



このように基本的な動作の抽象化は上下の軸に記され、意味の連想は平面の軸で表される。そして連想された意味の抽象化はまた右の上下の軸で表現されている。以下は「あげる」の意味を実際の例文を通して、上述のような意味の分類をする。問題は多くあるが、このような意味関係の構造を明らかにしない限り単語の具体的な意味の対照は難しい。

第2節 「あげる」の意味構造

(1) 対象が具体物

ここで記述する「あげる」の意味構造は、上に述べた対象と到着点の抽象化(意味連鎖)と動作からの連想の固定化(換喩・比喩)に基づいて考えたものである。上述の対象の意味連鎖による基本的な上下の軸をベースにして、(1)「対象は具体物」である場合と(2)「対象は自分の意志で動く者」の場合と(3)「対象は抽象的なもの」の場合と、三つに大きく分けた。それぞれの三つのグループをまた、(1.1)「基本的な上昇」や(1.2)「到着点が比較的遠い」や(1.3)「水から陸への方」などのように対象の移動範囲によって更に細かく分類した。この細かい分類の中では、更に(1.1.1)「基本的な上昇の換喩表現」や(1.1.2)「基本的な上昇の比喩表現」や(1.1.3)「基本的な上昇の生産性の高い比喩表現」などに分類した。

(1.1) 基本的な上昇

最初に扱う例文は、最も基本になっている具体物を対象にもち、「場所にある」という基本的な意味を連想させる。これらの例文では、手で運ばれるものであっても道具を使わなければならないので、一般的に表示されなければならない。例えば次の例文は、このような対象と到着点の関係を見せている。

- (1) 棚に箱を上げる。(研)
- (2) このにもつを棚に上げてください。(文)
- (3) 花瓶をピアノの上に上げる。(小)
- (4) 石を頭より上に上げる。(小)

これらの例文の対象「箱・荷物・花瓶・石」は、すべて特定の到着点を連想し要求しないので、到着点が表示されていない場合、「持ち上げる」という意味の解釈しかあり得ない。例えば次ぎの例文は、このような「持ち上げる」意味を表していると解釈できる。

- (5) 彼は 100 キロのバーベルを上げた。(小)
- (6) 「これでしょう？」とウイスキーのびんを上げて女中は首を傾けた。(暗夜行路・前 85)
- (7) 彼は、ただ機械の如く渾身の力を入れて、槌を挙げ、渾身の力を以って、之を振り降ろした。(恩讐の彼方に 79)
- (8) 鞭をあげて、光秀は小姓に訊いた。(オール読物 1956 年 1 月 100)

最後の二つの例文は、「打つ」という決まった動きをする場合が多いので、換喩表現としても考えられるが、「ビン」と「バーベル」の例に非常に似ているので、同じグループにした。

(1.1.1) 基本的な上昇の換喩表現

換喩表現では、具体物が「あがる」に連れ、一般的な「上にある」という連想とは別の連想が引き起こされる。つまり、実際の「あがる」動作も現実には行われるが、解釈される意味の重点は、あがった後に起きる連想にある。これらの例では、対象は常に決まった動きをしているので、原則として到着点は不要である。到着点をふつうの連想される場所とは異なったものにとすると、換喩表現は(1.1)で示された一般的な用法として解釈される。

(1) 彼は帽子をちよつと上げて、婦人にあいさつした。(小)

(2) 無言のまま、ちよつと帽子をあげた。(トルストイ)

これらの例文は、手をあげる動作が伴うので、(1.4)「対象が動作主につながっている場合」に分類されることも考えられるが、「帽子」は「箱・鞭」などと同じような物体であるので、(1.1)の換喩表現に加えた。これらの例文は、「鞭をあげる」と同じタイプであるが、「帽子を上げる」はさらに別の「挨拶する」という意味を連想させる。同じように次の「杯」(3-5)の場合、「乾杯する・飲む」という意味が連想される。また「畳」(6)の場合、「運ぶ・干す」という意味が連想されることが考えられる。

(3) 宗頼はさかづきをあげた。(B)

(4) 先生は笑って杯を上げた。(こころ)

(5) 「御目出たう」と云つて、先生が私のために杯を上げて呉れた。(こころ 88)

(6) 畳をあげて干す。(大)

上述の例文は全て連想された意味を中心に表しているが、前提になる動作も同じように換喩表現に数えている。次の文は、前提になる動作も含まれていると考えられる。最初の(7)から(10)までの例文は、「片づける」という類義語に相当するが、その意味は、「布団」などをあげる前の「後かたづけ」も含まれているので、このような意味になっている。また、(11)と(12)の例文の場合、建物を完成するという連想の意味を表しているが、完成する前の段階、つまり建物の立てる最中の意味も含まれていると考えられる。

(7) 布団をあげる。(大)

(8) 床を上げる。(小)

(9) 朝家のものが床を揚げる時、誤って上から踏み殺してしまった。(硝子戸の中)

(10) 母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさって仕舞つた。(こころ 88)

(11) 棟をあげる。(岩)

(12) 一般に小屋を組み上げて棟木を上げるとき。(平凡百科 2)

次の例文(13)と(14)のように、基本的な連想「一にある」の換喩表現も可能である。この場合、本来の「あげる」動作はすでに終わって、連想される状態「一にある」だけが有効になっている。そのために主語としてあり得るものは、全て状態の場所である。本来の意味が終わっているので、比喩表現ではないかという疑問も起きるだろうが、本来の意味が終わってもその影響がまだ続いているので、換喩表現であると考えられる。

(13) 松山書店と書家を書いた看板をあげている古本屋へ来た。(暗夜行路・前 265)

(14) 汚い活動小舎があつて、毒々しいチャンバラものの絵看板があげてある。(むらぎも 175)

次の例文でも「あげる」動作の本来の意味が残っているから、換喩表現と断定することができる。

しかし、これらの例文の到着点を場所ではなく、意志のあるものに入れ変えると、連想される動作は完全に(1.1.3)のように「相手のものにする」という意味の生産性の高い比喩表現になる。しかし、以下の例では、「神に与える」という連想的な意味が含まれていても、本来の意味も同時に解釈できる。

(15) お墓にお花をあげる。(大)

(16) 祭壇にろうそくをあげる。(小)

(17) 僕の香を上げ花を上げ水を注いでから、前に蹲つて心のゆくまで拜んだ。

(野菊の墓 53)

(18) 燈明をあげ、肩衣をつけ、歎異抄に類したものを唱した。(伸子・上 169)

(19) 政は立つた次手に花を切剪つて仏壇に捧げて下さい。(野菊の墓 10)

(1.1.2) 基本的な上昇の比喩表現

換喩表現では本来の「あげる」の意味がまだ含まれていたのに対し、以下の比喩表現では「あげる」の本来的な意味はもう残っていない。典型的な比喩表現の意味は、「あげる」と特定のアクタントとの組み合わせによって連想された意味である。そのために比喩表現は、たいていの場合、慣用句のように生産性が非常に低い。というよりもそれぞれの組み合わせは、比喩的に(連想された)別の動詞の代わりに使われているだけである。以下はその例文である。

(1) 槍玉にあげる。(新) >犠牲にする

(2) この連中は口をそろえて、ジュリヤンの坊主くさいところを槍玉にあげた。(スタンダール)

(3) 切支丹を槍玉に挙げて、凡そ残虐の限りを尽くした家光が(青銅の基督 5)

(4) 葉子は、自分のことは棚に上げておいて、激しく事務長を憎んだ。(或る女・前 162)

(5) レッツの場合は、新鋭が思いがけずに兜首をあげるのではないかと見られている。

(野球界 1956 年 10 月 157)

(6) 吾妻橋で文七を助けるところの拵へから違ふ。——扇朝師匠のために精々これが味噌をあげた奴さ。(末枯 57)

(7) 軍配をあげる。(新) >勝利を示す

(8) 争いは尾崎に軍配を挙げる。(B)

(1.1.3) 基本的な上昇の生産性の高い比喩表現

一般的に比喩表現は、ある一定のアクタントの組み合わせと結びついてから、別の意味に転じるが、ときにはそのアクタントは非常に生産性が良く、一定のアクタントの意味範疇を占めるようになる。次の(1.1.3.1)と(1.1.3.2)は意味的に同じであると考えられるが、ここでは便宜上別々に下位分類した。また、これらの例は(1.1.1)における「仏壇にあげる」などの換喩表現と直接関係している。その代わり、(1.1.3.3)と(1.1.3.4)のような例文は、生産性が高いとしても換喩表現との関連を示すことができない。

(1.1.3.1) 「神に捧げること」を連想させる比喩表現

前述の「仏壇にあげる」の場合も、「仏」が連想されたが、その場合の到着点は、はっきり意志をもつ対象を表していないので、換喩表現と判断した。しかし、神や寺などはこの場合場所を表さないので、意志を持つ到着点を連想させる。そのために「あげる」の意味は、「与える」意味につながる。また例文(4)のように対象が、はっきりと与えるための物である場合、到着点は必要ではない。

- (1) 神(金の神)・お線香をあげるのを忘れるんじゃないぞ。(オアヘンリ)
- (2) 神仏にあげる。(研)
- (3) 文吉は持っていただけの錢を皆お初穂に上げた。(護持院原の敵討)
- (4) お賽錢(サイエン)をあげる。(岩)
- (5) その前に三春兵の一人は必ず血祭りにあげてみせると(落城 13)

最後の例文(5)の場合、「神に与える」という意味の比喩表現がさらに別の「犠牲にする」という意味の比喩的な用法を示している。このためにいったん連想によって引き起こされた別の意味は、さらに別の意味にも変わることがあると考えられる。

(1.1.3.2) 「人に与えること」を連想させる比喩表現

到着点は人である場合、「あげる」の本来的な意味は、ますます薄くなり、「与える」意味の生産性の高い比喩表現に連想される。この用法の場合、本研究で扱うほとんどの辞書と研究が「神にあげる」の「気持ち的に上にあるものに」という意味として解釈するが、「君にあげる」というように敬語でない普通形「君に」という例も多く見られるので、(1.1.3.1)の意味からさらに離れているのではないかと思う。

- (1) あとで手紙をあげます。(文)
- (2) この本を君に上げよう。(研)
- (3) お好きならあなたにあげましょう。(文)
- (4) 宗近さんに上げる時には私から上げます。(虞美人草)
- (5) ターニャ、さあ、おみやげをあげるよ！。(トルストイ)
- (6) 二千円だけの金をあげるというのだ。(暗夜行路・前 203)
- (7) こんな所だから上げるものがなくて困ります。その代り明日あたりは御馳走…。(門)
- (8) ああ、風邪だと思う。薬をあげる。(立原正秋)
- (9) 君の所へ愛子を上げたい気は充分にあるのですが、(暗夜行路・前 72)
- (10) わたしのところの助任司祭の職をきみにあげるし。(スタンダール)
- (11) 返事を上げなければ済まない貴方に対して、(こころ 150)

(1.1.3.2.1) 動作を与える「助動詞」の場合

「ものを与える」意味での新しい生産性の高い表現は、対象の範疇も越え、動作を「あげる」ことができるようになったと考えられる。このような動詞は、複合語とは異なって、(2)のように「物を買うこ

とをしてあげる」という意味あるいは上述と同じような意味の「ものを買ってからあげる」の二面性を持つ「助動詞」である。つまり「あげる」そのものの意味が保ちながらも、対象は「文全体」に含まれる「動作」になる。その代わり複合語の場合、「あげる」の意味が含まれていても、別の動詞と合併するので、複合される動詞の意味のほうが中心になる。

- (1) 手伝ってあげよう。(研)
- (2) 切符を買ってあげよう。(研)
- (3) そのおばあさんに手を貸してバスから降ろしてあげた。(研)
- (4) 年寄りには親切にしてあげなさい。(研)
- (5) 代わりに行ってあげよう。(小)
- (6) わからなければ教えてあげます。(文)
- (7) 見てあげる。(新)
- (8) 教えてあげる。(岩)
- (9) 本を貸してあげる。(大)
- (10) 家まで送ってあげます。(大)
- (11) いい額縁を買って来て、おくみさんの部屋へかけて上げようね。(桑の実 84)

(1.1.3.2.2) 「あげる」から転じた「丁寧」の意味の「複合動詞」

上にも述べたように複合語は、「あげる」とは別扱いをするべきだが、複合動詞の意味はどのように元の「あげる」の意味につながっているかを理解するために、下位分類として扱うことにした。ここでの「一あげる」は、「与える」が動作主の人称を限定する意味(一人称)と相手に対する丁寧さの意味(敬語)を別の動詞に付け加える。

- (1) お名前はよく存じあげております。(文)
- (2) 願いあげます。(新)
- (3) 申しあげる。(大)
- (4) ここでお待ち申し上げます。(文)
- (5) 存じあげる。(大)

(1.1.3.3) 油で煮る場合

最初の(1.1)「基本的な上昇」の場合、具体物の対象は一般的に到着点を要求していた。また到着点のない場合、「ビン」と「バーベル」のような個体である物体が対象だった。「油であげる」比喻的な表現の場合、対象は「天ぷら」のような料理や「野菜」のような食べ物や「魚」のような食材などのように「個体」ではないので、到着点が表示されない限り「あげる」は比喻的な「フライにする」意味を表している。ただし「魚」や「芋」などの場合、個体としての解釈も可能である。また一般的な社会の常識の中で「レタス」や「納豆」などのような「油であげられない」食材との区別も配慮しなければならない。このような食材あるいは靴などの個体物も、もちろん「フライにする」ことができるが、その場合「フライにする」ことを強調するために、文脈の中で道具「フライパンで」または方法

「油で」を明確に示さなければならない。いくつかの辞書では、「油から持ち上げる」という意味が、この表現の基本的な意味とされているが、このような意味に当たる換喩表現は見あたらなかった。

- (1) 野菜をサラダ油で揚げる。(研)
- (2) エビ(魚)を揚げる。(小)
- (3) カツレツをあげる。(文)
- (4) 天ぷらをあげる。(新)
- (5) ニンジンをあげる。(新)
- (6) ベーコンを揚げるためフライパンをストーブの上へかける音を聞き。(シトー)
- (7) 蚕豆の油であげたやうなのを壇に詰めたのと、(桑の実 96)

(1.1.3.4) 物の完成を連想させる比喩表現

この用法の換喩表現も見あたらなかったが、例文(1)や(2)などでも分かるように、「具体的なものをあげる」ことがこの比喩表現の原点になっていることが考えられる。そのために、「物ができたら机・人などの場所にあげる」という表現からさらに派生してきたと推測できる。いずれにせよ、比喩的に「物が完成する」という意味が表されると、もっと抽象的な意味の「作品」や「仕事」や「動作」なども表現できるようになる。また、例文(7)のように「仕事を完了する」意味からさらに「仕事を辞める」という意味が連想されたと考えられるが、はっきり証明することが不可能である。

- (1) ピアノソナタを一曲あげた。(文)
- (2) ドレスは明日中に上げます。(小)
- (3) 早撮り映画の、手早くあげる作品を (笑の泉 1956 年 12 月 191)
- (4) この仕事を年内に上げるようにする。(小)
- (5) この仕事は今夜中にあげなければならない。(岩)
- (6) aの字も知らぬと云ふ者があれば、第一読本を少しやつたと云ふ者、第二読本をあげたという者もある。(思出の記・上 205)
- (7) リーダーをあげる(終える)。(新)

(1.1.3.4.1) 「終わらせる」あるいはほかの意味から更に比喩表現に変わったもの

この用法は、おそらく「完了する」という意味からさらに「行う」という意味を連想させたものであろう。しかし、はっきりした「完了」またはほかの用法との関連は見あたらなかった。

- (1) 来月結婚式をあげます。(文)
- (2) 教会で結婚式をあげる。(大)
- (3) 十年前に式を挙げた女と今初めて式を挙げようとしている。(B)
- (4) 祝言をあげる。(大)
- (5) 年来の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げたといへば (こころ 227)

(1.1.3.4.2) ある金額内におさめる場合

この用法は、おそらく上述の物の完成を連想させる比喩表現から更に連想を続け、特定の金額で済ます意味に転じた比喩表現である。上述の例文(2-4)などのように「物を完成する」場合、費用は「何円で」と表示することができる。そこで以下の例文(1)と(2)のようにもとの対象「披露宴」は意味的に「費用」と関連づけられ、文全体の意味が費用に重点を置いた。

- (1) 披露宴の費用は1人あたり3万円で上げてもらいたい。(研)
- (2) 生活費はできるだけやすくあげたいと思います。(文)
- (3) 費用を安くあげる。(岩)
- (4) 総額一千万円であげる。(大)

(1.1.3.4.3) 物の完成を連想させる比喩表現からの複合動詞

上述の「申し上げる」などの場合と同じように、「一あげる」のこの用法も、別の動詞に「完了」という要素を付け加えるだけの意味を表している。

- (1) この本を昨夜読みあげた。(小)
- (2) 賊を縛りあげた。(小)
- (3) 練りあげる。(新)
- (4) ピカピカに磨きあげる。(大)
- (5) 鍛えあげた体。(大)
- (6) 論文を書きあげる。(大)
- (7) 一週間で編みあげる。(大)

(1.2) 到着点が遠い場合の基本的な上昇

次の例文では、動作の到着点は、かけ離れた場所にあるので、動作主の移動は「あげる」意味に含まれている。基本的にこの用法は、最初の(1.1)の「基本的な上昇」と変わらないが、対照を行う際に移動の範囲が限定される場合があるので、別の項目で扱うことにした。この意味はふだん別の動詞「持っていく」や「運ぶ」などで表現されているので、基本的に「あげる」も動作主の移動を制限している。しかし、以下の例文は、辞書に存在したので、はっきりした制限がないと判断できる。

- (1) 本を2階に上げる。(小)
- (2) たんすを二階にあげる。(大)

(1.3) 基本的に「水から地面へ」と移動する場合

この用法もまた基本的な上昇(1.1)とほとんど変わらない。また上述と同じように「海から陸にあげる」場合も、動作主の移動は可能である。最初の例文(1)は、基本的な意味とまったく同じであるが、(2)から(5)までの例文は移動が意味に含まれている。

- (1) そうめんはゆでて水にさらし、ザルにあげて。(主婦と生活 1956年3月 387)
- (2) 荷物を陸にあげる。(研)

(3) これらの箱はすぐに陸に揚げる必要がある。(小)

(4) 船から荷をあげる。(大)

(5) 船は積み荷を揚げると、すぐに港を出た。(文)

「荷物」や「箱」などのようなものは、一般的にどこにでも上げることができるので、「陸に」という到着点あるいは「船から」という出発点を表示しなければならない。しかし、次の(6)以降の例の場合、一般の社会常識の中で海からあげるものなので、出発点あるいは到着点を表示する必要がない。

(6) ハゼを一束(いっそく)上げる。(研)

(7) 網をあげる。(大)

(8) 錨を上げたり、下したりする度に、(蟹工船 10)

(9) 金魚は、よわい。水からちよいちよい上げて行くんじゃ、もたないや。

(婦人倶楽部 1956 年 7 月 71)

(10) 永田氏は二貫七百匁の寒鯛と九百匁の石鯛をあげたのみで殆んど全員があぶれた。

(中央公論 1953 年 8 月 208)

(1.4) 対象が動作主とつながっている場合

このグループは、また基本的な上昇とほぼ同じであるが、個別の物の動きと区別するために別の項目を立てることにした。以下の例文では、それぞれの例文の動作主と対象がつながっていることによって対象の動きは制限されている。このために到着点は常に決まっている。この場合の到着点は、(1.1)の「基本的な上昇」における「到着点が表示されなかった例」と同じである。一般的に連想される到着点と異なった場合、「基本的な上昇」と同じように到着点を表示しなければならない。

(1) 窓辺へ近づき、カーテンをあげると。(トルストイ)

(2) 青年は宮のお顔が見たくて、そっと格子を上げる。(田辺聖子)

(3) 校長は椅子を離れてガラスの戸を上げた。(破戒 78)

(4) コードレスを肩に挟みながら、ジーンズのジッパーを上げる。(汽車・酒)

(5) それをだしてきた、上衣の前をあげて腹のところに納めたが、(真空地帯・上 135)

(6) 丸髷に結つたり教師らしい地味な束髪に上げたりしてゐる。(或る女・前 80)

上述の例の対象は、具体的に動作主とつながっていたが、以下の例文では、対象は道具を通して(旗)、あるいは気持ちによって(花火)間接的に動作主とつながっている。この場合、対象は例文(7-9)のように必ずしも動作主の力によってではなく、例文(10-13)のように動作主の意志であるのである。この場合、対象は自力で上がる(10-11)、あるいは(1.6)と同じように自然的に上がる(12-13)と考えられる。このほか、例文(11)「アドバルーンをあげる」は、比喩表現としても使用されている。その場合の連想は、「アピールする」という意味である。

(7) 幕をあげる。(新)

(8) するすると旗を揚げる。(小)

- (9) 国旗をあげる。(新)
- (10) 原っぱでたこをあげる。(大)
- (11) アドバルーンをあげる。(新)
- (12) 花火を揚げる。(小)
- (13) 町は市になったので、花火を揚げておいおいをした。(文)

(1.4.1) 動作主とつながっている対象の比喩表現

これらの例文は、上述の例文と同じように基本的な上昇の下位分類に入れることができるが、フィンランド語との対照を考えて別の項目を立てることにした。ただし、上述の例文の中で両方の要素が含まれているので、はっきりした区別は難しい。特に以下の例文(2)は、上述の用法からの比喩表現である。その代わり例文(1)は、「バーベル」をあげるのと同じ基本的な上昇の比喩表現であろう。

- (1) 夏期林間学校で一旗挙げんものと近藤舞子に赴くが、(明星 1956 年 11 月 204)
- (2) 熱帯の朝が、幕をあげるやうに、するすると明け放れるのを(野火 67)

(1.5) 動作主の部分である対象

この用法の場合、対象は動作主の一部であるので、上述と同じように動きが限られている。基本的にこの用法の意味は、「基本的上昇」と変わらないが、動作主と対象の関係が特別であるので、別の項目を立てる必要があると考えた。例えば、「手をあげる」は、「テーブルに」と到着点を表示することも可能であるが、一般的に「手をあげる」は「まっすぐ上に」を連想させる。また「目」や「頭」をあげる場合、「見る」という意味の連想もよく起きるが、換喩表現と区別するために、例文の中で「目・頭」を上げたあとに「見る」などの動詞が表示された(14)などの場合、換喩表現ではないと判断した。「見る」が連想される場合、わざわざ動作を述べる必要がないからである。

- (1) 賛成の人は手を挙げて下さい。(小)
- (2) 後ろで手を挙げろという声が出た。(小)
- (3) 先生に質問したかったら手を挙げてからするのですよ。(研)
- (4) 手をあげてあいさつをした。(文)
- (5) 拳固をあげて、自分の頭を力まかせに撲りつけた。(多情仏心・前 289)
- (6) そのひとは指を一本あげてしづかにそれをおろしました。(銀河鉄道の夜 318)
- (7) 三四郎は肩を床から上げて、。(三四郎)
- (8) 雑夫長が薪を脇にはさんで、片肩を上げた窮屈な恰好で、(蟹工船 65)
- (9) 婦人は背後へ高々と踵を上げて向うへ飛んだ。(高野聖 37)
- (10) 白耳はそれを見上げていたが、もう下から吠えるようなことはせず尻尾を上を上げて何事もなかったように引揚げて行つた。(小説新潮 1956 年 8 月 302)
- (11) 腿(モモ)をあげる働きがある。(平凡百科 2)
- (12) 時屋一等兵は一寸薄い唇の右端をあげ、(真空地帯・上 68)

- (13) 文鳥は嘴を上げた。(文鳥)
- (14) 頭を少々畳から上げて見ると、。(吾輩は猫である)
- (15) ほりながらときどき、頭をあげて、左右に気をくばったが、(真空地帯・86)
- (16) 向うで鎌首を上げたと思ふと草をさらさらと渡った。(高野聖 20)
- (17) 女は、顔をおむつからあげることもなく、。(B)
- (18) 新聞から目を上げて窓の外を見た。(研)
- (19) 私は不図眼を上げて其所に立つてゐるKを見ました。(こころ 247)
- (20) 目をあげて相手を見つめる。(大)
- (21) 木村はふと顔を上げてしげしげと葉子を見た。(或る女・前 221)
- (22) 事務室で週番下士官の調査がはじまったが、安西ははいっという言葉を繰返しては
目の玉を上の方にあげた。(真空地帯・上 210-211)

(1.5.1) 対象が動作主の一部分である場合の換喩表現

最初の(1)から(4)までの例文は、全て「見る」ことを連想させる。基本的に上述の「目をあげて人を見る」の例文も同じであるが、この場合では「見る」動詞は加わらない。つまり、「目をあげる」だけで「見る」ことも連想される。この用法からさらに発展したものは、「目」に類する「視線」を使った例文(5)と(6)である。その次の例文(7)と(8)では、「腰」や「お尻」をあげることは「立つ」ことまたは「動く」ことを連想させる。そして最後の例文(9)は、実は体の一部分であるのに、動作主の一部ではないので、(1.1)の「基本的な上昇」の換喩表現に属し、「殺す」意味を連想させる。ここで取り上げた理由は、全体的に対象の違いが分かるためである。

- (1) 顔をあげると皇局子はもう笑いではなかった。(B)
- (2) 下ばかり見ていないで、顔を上げなさい。(文)
- (3) 遠くの山に向かって目をあげた。(小)
- (4) わたしは彼女のほうへ目をあげた。(ジ'ット)
- (5) だれだろう。と思ってひょいと視線をあげると、。(B)
- (6) 新治と水夫は訊ねる視線を上げた。(潮騒 144)
- (7) びっくりして腰をあげる。(B)
- (8) 男はもとより尻を上げるのは厭である。(虞美人草)
- (9) 漢軍之を追撃して虜主を挙げる事数千。(李陵 158)

(1.5.2) 対象が動作主の一部である場合の比喩表現

次の例文は、実際の体の一部分の上昇から離れて、完全に別の意味と結びついたものである。例えば最初の例文(1)は、「手をあげる」ことから「降伏の印」という意味を連想させる。また例文(2)では、同じ「手をあげる」は「に対して」という対象をもっている場合、「手を下ろす」>「殴る」>「暴力を振る」という連想を引き起こしてきたと考えられる。しかし、以下の例文は、基本的な意味と無関係とは言えないし、また基本的な意味とは別の意味を表していることも証明できるので、換喩

表現も比喩表現も連想することができる。

- (1) 手をあげる。(新) >お手上げ
- (2) 父は、癰癤を起して母に手を上げることもあった。(B) 暴力を振る
- (3) 根は愛妻家などで決して直接手を上げる様な事はなく、(文芸春秋 1953 年 10 月 232)
- (4) 腕をあげる。(大)
- (5) 「燐ゆる情炎」以来、腕をあげて、(スクリーン 1956 年 2 月 144)

(1.6) 対象が具体物でない場合

上述の例文では、すべての対象は、具体物であるので、到着点を表示することによって「基本的な上昇」の意味が読みとれた。しかし、次の例文では、「あげる」の対象は「水」や「土」や「煙」や「火」などのような数えられない物体であるので、「箱」や「瓶」や「手」などのように一つ一つ動かすことはできない。そのために別に示された到着点がふだん存在しない。ただし、この場合も「水」などを例文(22)のように具体物として扱う場合、「海から水をあげる」と同じように(1.1)の「基本的な上昇」であると考えられる。「花火をあげる」場合でも見られたとおり、動作主は必ずしも力を加えないので、自然的に上昇する対象に対しても「あげる」を使うことができる。また、対象は自然的にあがる場合、動作主は自然現象、つまりあがる動作の原因になることもある。このほか、非常に珍しいケースだが、例文(20)と(21)のように動作主が対象と同じ自然現象全体を指している場合、「潮が」という対象だけが必要となる。このほかに例えば「風が吹く」は、このような動詞である。

- (1) だからあたし、土台を上げなくっちゃいけないと申しましたでしょう。(トルストイ)
- (2) 取水のため水位を上げ。(平凡百科 2)
- (3) 波しぶきをあげる。(新)
- (4) 見えない天の川の水もそのときはゆらゆらと青い焰のやうに波をあげるのです。
(銀河鉄道の夜 298)
- (5) やがて水沫をあげて全身をあらはした。(冬の宿 17)
- (6) 湯気をあげる下草の上に点在するのは、珍らしく花やいだ光景であった。(B)
- (7) ホカホカと湯気を上げる水餃子。(汽車・酒)
- (8) 爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのです。(銀河鉄道の夜 263)
- (9) 砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、(田園の憂鬱 5)
- (10) それに風の強い日で、青山の練兵場は黄ろい埃を揚げた。(生)
- (11) 溶岩円頂丘が...現在も噴煙を上げる。(平凡百科 2)
- (12) 初め、墜ちて黒煙を上げているのは敵機だと、誰もが思っていた。(阿川弘之)
- (13) けたたましい汽笛が一抹の白煙を青空に挙げて鳴りはためき、(或る女・前 164)
- (14) 外は吹雪いてきて、…列車は雪煙をあげながら走って。(汽車・酒)
- (15) さかんに雪げむりをあげている野をながめ。(三浦哲郎)
- (16) のろしをあげる。(新)
- (17) 真っ赤な炎をあげて燃える。(大)

- (18) 巻は焦げて、にわかに炎をあげた。(B)
- (19) 手首にぶつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、(銀河鉄道の夜 274)
- (20) 夕方になると潮があげてくる。(大)
- (21) このへんが内海のまん中で西からも東からも潮が上げて来て、(暗夜行路・前 173)
- (22) 切花が水をあげる。(岩)

(1.6.1) 数えられない対象の比喩表現

この場合の表現は、実際の自然現象の意味などからかけ離れ、それぞれの現象に比喩的に類しているものである。最初の2つの例文は、明らかに比喩表現であるが、例文(3)と(4)は「例え」として使われる可能性もある。「例え」は、比喩表現と同じように形成されるが、一般的に比喩表現として確定していないその場その場の比喩的な用法である。例えと比喩表現と慣用句は、言語の中の定着度によって区別されているようだが、表現の違いを決める水準は主観的である。

- (1) このときに、分子生物学の研究を志す日本の学者たちはノロシを上げたのである。
(生命の暗号を解く 163)
- (2) 今にきつと世界的な仕事をして、日本の為に気焔をあげてくれるだろう (友情 44)
- (3) この三つが一緒になって、常に凄じい波を挙げた。(生)
- (4) 一方を揉み消す為には一方にどんと火の手を挙げる必要がある。(或る女・前 27)

(1.6.2) 特殊な数えられない物の場合

この用法は、上述の「水」などの数えられないものと同じであるが、動作主とつながっているのも、別の項目に分けた。この用法は「吐く」という意味として取られるので、換喩表現として扱うべきである。ここでも分かるように基本的な表現と換喩表現の差はあまりはっきりしないので、境目を引くのは非常に難しい。同じように換喩表現と比喩表現の差も「基本的な意味との関係」という曖昧な基準では、定義しにくい。

- (1) 昼食べたものを皆あげてしまった。(研)
- (2) 急にあげそうになった。(小)
- (3) 胸が上げそうだ(むかむかしてはきたくなった)。(新)
- (4) 船に酔ってすっかりあげてしまう。(大)

(1.7) 想像の中にある対象の場合

以下の例文は、いわば上述の具体的な対象と抽象的な対象の間の立つものである。対象自体は具体的なものではないが、気持ちの中で「数字」や「線」などの対象は、(1.1)の「基本的な上昇」と同じように動く。このような例は以下の3つである。

- (1) (15+17)下に2を書いて1を上上げる。(研)
- (2) 肩線は肩先とネック・ポイントを5ミリ上げてカーヴ線で訂正します。(婦人倶楽部 1956年10月付録 流行のジャケット集 62)

(3) ウエスト線を3センチ上げ、そこからスカート丈をとる。(婦人の友 1956年12月 251)

(1.8) 基本的な上昇の複合語

前に扱った「申し上げる」や「縛り上げる」などの複合動詞は、「あげる」の比喻表現の意味から派生したものであるが、以下の例文では、「あげる」の本来の意味は別の動詞の意味と合併した。

- (1) 取りあげる。(新)
- (2) 並べあげる。(新)
- (3) ロケットを打ちあげる。(大)

(2) 対象が意志をもつ具体物

上で述べた例文の対象は、すべて意志をもたないものだったので、自分の動きをコントロールすることができなかった。「風」や「花火」の場合は、動作主ではなく、風または花火そのものの力があがったが、あげるための意志は動作主にあった。同じように「波」や「煙」などの自然現象も、意識的にそれをおこす「人」などの動作主またはその原因になる「風」や「海」や「火」などの動作主を必要とした。しかし以下の例文では、すべて対象は、意志を持つものと解釈できる。つまり意志をもつ対象は、動作主があがるように働きかけても、自分の意志であがりたくなければ、行動を起こさない者である。そのために「基本的な上昇」の意味は、対象の社会の中の一般的な行動範囲によって非常に違ってくる。もちろんこのような対象を上述のような物として扱う場合、基本的な意味とはまったく変わらない表現になる。しかし、小さい動物や子供以外に、具体的に人を持ち上げることは考えにくい。

(2.1) 意志をもつ具体物が動物である

上にも述べたように対象が小さい動物の場合、「持ち上げる」という意味の解釈も可能であるが、以下の例文(1)では、猫が自分で膝にのぼるという意味の解釈をした。また(2)の場合、雲雀は自分で空にあがるという解釈しかあり得ない。しかし、両方の例文では、「猫を棚に上げる」と「雲雀を椅子にあげた」のように基本的な「持ち上げる」という意味解釈も可能であるので、到着点を常に記述する必要がある。

- (1) 「牡と名のつくものは猫も膝にあげちゃいけないよ。」(小説春秋 1956年7月 39)
- (2) 盲目の女師匠が物干台に立ち出でて雲雀を空に揚げているのを(春琴抄 181)

(2.2) 意志をもつ対象が子供など動作主と対等でないものである

この場合でも対象は、決まった到着点がないので、それを記述する必要がある。「本を二階に上げる」場合と同じように、到着点は一般的に比較的遠い場所になるが、異なる点は、対象は自分で移動することである。自分で移動するので、一般的に「あげる」などの他動詞ではなく「あがる」などの自動詞が使われる。その代わり、動作主が対象にあがるように働きかける場合、「あがらせる」のように使役が使われる。おそらく、使役の意味には選択の余地がない強制的な要素が含ま

れているので、他動詞「あげる」は強制的でない場合に使われる。この場合、命令の要素が含まれていても、それは「学校にあげる」や「都にあげる」のように対象の役割的な動作を意味する。「学校に上がらせる」などに比べると、「学校にあげる」ことはより自主的な意味を表している。

- (1) 私は息子を東京の学校に上げた。(研)
- (2) 子供を2人とも大学に上げた。(小)
- (3) 子供が六歳になったら小学校にあげる。(大)
- (4) おくみが十四になつて女学校へ上げて貰つたばかりのときに(桑の実 6)
- (5) あれ切りしか休まないで落第するなんか、変だなあ。あれくらゐなら、僕なんか上げてもらえるんだがなあ。(冬の宿 129)
- (6) 話しがしてみたくなったんで、それでわざわざ使を上げた様な訳なんです。(門)
- (7) 親達が一応実家へ帰らせ、あらためて官仕えに上げるようになった。(田辺聖子)

(2.2.1) 対象が子供であるが、到着点がない場合

この用法は、対象は自分の意志を持たない赤ちゃんであるので、おそらく具体的な(1.1)の上昇の比喩表現である。そのために、到着点も表示されていない。(1.1.3)で扱うべきであるが、ここで扱う「子供」などの行動範囲と混同することもあるので、ここで並べることにした。このような例文は多く存在しないが、すべての場合、対象は「3人の男子」や「一男」のように数字で特定されたものに限られている。

- (1) 3人の男子を挙げる。(研)
- (2) 結婚して一男二女をあげた。(大)
- (3) 母しげ女は京都屋町の跡部氏の出して安左衛門に嫁し二男四女を挙ぐ。
(春琴抄 138)

(2.3) 意志をもつ対象が大人である

対象は子供でない場合、基本的な「持ち上げる」という意味は、一般的に使われていない。もちろん、「田中さんを椅子の上に上げた」ことも可能であるが、このような行動は一般的にされることではないので、「田中さんを棚に上げた」のように比喩的な意味の解釈も可能になる。上述と同じように「あげる」ことは、「あがらせる」のような強制的な意味を表していないので、対象は自分の意志で動いている。また上述の「子供」などと違って、対象の社会的な身分は動作主と対等(あるいは上)であるので、「神にあげる」のような丁寧さの意味も含まれていることもある。いずれにせよ、動作主と対象の社会の中での身分関係は「あげる」動作の意味に影響している。例えば、例文(6)と(7)の場合、対象は「芸者」であるので、「芸者を招く」という意味が連想される。この表現は、到着点も要らないので、換喩表現として認めることも可能だろう。つまり、「芸者を座敷に連れる」という意味が含まれていても、「遊ぶために芸者を招く」という意味も連想される。また、例文(8)と(9)のように、対象は「候補者」などの場合、到着点は「選挙戦」などの決まった状態であるので、述べる必要がない。

- (1) 女が玄関先で大きな声をたてるため、仕方なく自分が出て応接室へ上げた。(B)
- (2) 自分の家へ君を上げては、死んだ奴らに済まぬと感じた男だ。(帰郷 135)
- (3) 河原田は日本座敷へ二人をあげた。(むらぎも 166)
- (4) お客をさしきに上げなさい。(文)
- (5) 一見(イチゲン)の客はあげるわけにいかない。(大)
- (6) 芸者をあげて大騒ぎする。(岩)
- (7) 芸者をあげて一晩愉快に遊び明かす。(大)
- (8) 候補者をあげる。(新)
- (9) そこで、クラスとしてとり上げたこの問題を自治会でとり上げてやってもらおうというので
委員をあげることになったら、受験勉強をやっている人たちが皆立候補して出てくるので
す。(平和 1954 年 6 月 35)

(2.3.1) 意志をもつ対象の換喩表現

この場合、到着点は身分的により高い地位であるので、抽象的な対象の下位分類に挿入すべきだろうが、対象の基本的な意味として「意志のある具体物」に分類した。実際にここで登場する「人間」は、例文(1)のように「彼の課長以下の身分」という地位が含まれているが、ある意味では、課長の席に変わるので、移動も加わるかも知れない。いずれにせよ、この用法は、上述の物と関係していても別扱いにするべきである。

- (1) 彼はやっと課長にあげてもらった。(小)
- (2) 彼を会長候補に挙げることが決まった。(小)
- (3) 帝国大学を卒業後は直に助教授に挙げられ、(つゆのあとさき 53)
- (4) 自分を代議員にあげてくれた職場にくと、(改造 1954 年 1 月 153)
- (5) 委員には某君をあげる。(岩)

(2.3.2) 意志をもつ対象の比喩表現

動作の意味の中では、上述のような空間的な移動は全くない場合、比喩表現であると断定できる。もちろんはっきりしたことは言えないが、以下の例文は、おそらく「身分をあげる」ことから精神的に「人の気持ちをあげる」という意味に転じたと考えている。このような「あげる」の用法は後の「抽象的な対象」の例につながっているだろう。前にも述べたように、このような対象の意味の下位分類は、意味の連鎖のようにつながっているので、別々に扱っているものも結局たがいに結ばれている。(3)以降の例文は、抽象的な対象であるが、「人」を表す対象を一括にまとめるために、ここで扱うことにした。

- (1) はいはい。別品さんを上げるように言うて置ります。(鶏)
- (2) あげたり(ほめたり)下げたりする。(新)
- (3) 男ぶりをあげる。(岩)
- (4) 一躍男をあげた。(大)

(5) 古藤さんも手紙の上では一枚がた男を上げてゐますわね (ある女・前 204)

(2.4) 意志をもつ対象が群集である

この用法は基本的に(2.1)と同じであるが、集団を表している対象は「兵」である場合、「戦う」という連想が起きる。つまり、この意味は換喩表現としても考えられる。つまり、「連れていく」という意味を表している一方、「戦争・戦い・反乱などを起こす」という意味も含まれているのである。例文(1)は移動しか表していないようにも見えるが、例文(2)はより具体的にこの「基本的な意味」と「連想」との二面性を表している。

(1) 関東に兵をあげる。(大)

(2) 彼らはついに政府に対して兵を挙げた。(小)

(2.4.1) 「群集をあげる」意味からの生産性の高い比喩表現

以下の用法は、上述の換喩表現からさらに連想して、「大勢を活動させる」意味を表している。ふだんの一定のアクタントとの組み合わせに固定した比喩表現とは異なって、この用法は、一般的に「家族」や「町」や「国」などのような群集を表している対象を受け持つ。例えば、「自衛隊をあげての大イベント」さえも可能である。この用法は、「大勢で」という意味を連想させているので、文の中では副詞のような働きをしている。例文(6)は、さらに別の方向にその意味を発展したと考えられる。

(1) 一家を挙げて大阪へ移つたさうだが、(多情仏心・前 298)

(2) アカハタ紙その他同系統のものはいざ知らず、それ以外の日本の言論機関は、挙げて、重光全権と同じ見解を表明した。(東洋経済新報 1956 年 8 月 18 日 21)

(3) 国をあげて記念日をいわう。(文)

(4) 国をあげて歓迎する。(大)

(5) 市民はこの計画にあげて賛成した。(大)

(6) いま国内をあげてBKP時代にあるので(東洋経済新報 1956 年 7 月 28 日 35)

(2.5) 意志をもつ対象が犯罪者である

この用法は、「芸者を上げる」のと同じように独特な意味の連想を見せている。犯罪者は一般的な社会の常識では「家に上げる」ものではないので、別の連想も考えられるが、この場合は、「魚を網などであげる」という具体的な用法からの比喩表現ではないかと思う。なぜなら、「人」でありながらも自分の意志で「あがる」ものではないからである。この用法は、一般的に「殺人犯」など特定の対象にしか応用できないが、例文(4)と(5)のように文脈で分かる場合もある。また、例文(6)のように対象は、犯罪者から事件に変わり、「検挙する」意味を「暴露する・解決する」という意味にさらに連想させることになる。

(1) 殺人犯はその場で挙げられた。(小)

(2) 主犯共犯いつしよに挙げちまひました。(本日休診 76)

- (3) 麻薬密輸団はまだ挙げられていない。(小)
- (4) 質屋から足がついて、出入りの魚屋の若い者が上げられた。(多情仏心・前 308)
- (5) 奴もおれをあげる証拠を握っちゃいなかったし。(シトー)
- (6) やね、きみが三国鉱山の汚職をあげたことがあったろ？。(B)

(3) 対象が抽象的なものである場合

上述の具体的な対象でも取り上げたように、抽象的な対象は、基本的に具体的な対象の続きであるので、同じ対象物の意味連鎖の一部として考えられる。つまり、抽象的な用法は、いわば具体的な用法を抽象化された例に匹敵すると言えるだろう。しかし、抽象的な対象をもつ例文はあまりにも多いので、別の項目を立てることにした。

(3.1) 抽象的な対象が声である

具体的な対象に比べると、声はそれほど抽象的な対象ではない。おそらく、「声をあげる」ことは、「煙」や「炎」などと同じように解釈できるだろうが、声を感じる感覚器官だけが異なっている。例えば、「*あの外人は猛烈な臭いをあげている」とは現在の日本語ではいえないが、視覚と聴覚機能からさらに臭覚機能に意味が広がることも可能と考えられる。いずれにせよ、目で見えるような上昇の意味は、「あげる」の基本になっているので、「声をあげる」類のものを基本から離れて抽象的な対象として扱うことにした。(12)から(15)までの例文のように、対象は「人間の声」に限らなく、ほかの音が発することも表すことができる。「声・音をあげる」は、基本的に声と音のない状態から声と音のある状態への変化を表しているので、言葉など具体的な発話の有無が関係ない。

- (1) ふりかえって木谷をみつけたとき、あつと小さい声をあげた。(真空地帯・上 134)
- (2) その時の彼の気持ちを考へ、中には声をあげて泣いたものがゐた。(蟹工船 87)
- (3) ショー一族の最後の子供が、産声をあげた日でございました。(フロンテ)
- (4) なぜ悲鳴のような高い声をあげたか。(B)
- (5) 無意識に叫び声をあげた。(B)
- (6) 伸子はそのたびに悲しげな、断れ断れな叫びを上げた。(伸子・上 66)
- (7) 背後で、小さい叫びを挙げた。(B)
- (8) それを見てみんな歓声を上げた。(小)
- (9) 急に弾け返ったやうな笑ひ声をあげ、(多情仏心・前 87)
- (10) 木谷はしょげかえっている曾田をみて笑いをあげずにはいらなかった。
(真空地帯・上 153)
- (11) ベンチの浮浪人達は、朗かな鼾声をあげて眠っている。(放浪記 42-43)
- (12) でも彼らは音を上げない。(藤原正彦)
- (13) 鋭い口笛の音を上げたりするものがあつたが、(多情仏心・前 172)
- (14) 生き残った三発のイーグル・エンジンが咆哮を上げると。(汽車・酒)
- (15) 小沢の手が動き、尺八が風を切るような鋭い悲鳴をあげる。(B)

(3.1.1) 「声をあげる」場合の換喩表現

声をあげる際、特定の「話す」や「歌う」などの動作を連想させる場合、対象は、例文(1)などのように修飾文あるいは例文(2)のように文脈で特定しなければならない。また、例文(5)と(6)のように話しを促す名詞句が含まれている場合もある。しかし、最もはっきりこの換喩表現を表しているのは、(7)以降の例文のように、対象が「歌」や「お経」や「祈り」のような具体的な言葉を表している場合である。「お経」や「祈り」の場合、「神に与える」という意味とのつながりも考えられる。

- (1) アーメンと云ふ声の一座の人々から挙げられるのを待つて(或る女・前 63-64)
- (2) 女は声をあげながら勢いよく立って、まあ、ようこそ、ロックウッドさま！。(フロンテ)
- (3) 出雲市が近づいてきた。今度は私が声をあげる。(汽車・酒)
- (4) 奥の間の廊下までくると、俄かに滝十郎は酔漢らしいつくり声をあげて、「さア、来ましたよ！ 来ましたよ！ ど、同勢そろつてちん入しますよ！」(多情仏心・前 84)
- (5) その提案にだれもあえて反対の声を上げなかった。(小)
- (6) われわれの判断に対して疑念が生じ不信任の声が挙げられるにつれて、
(哲学以前 202)
- (7) 藤尾は第二の艦歌を揚げる。(虞美人草)
- (8) これが下宿の人々の最後に上げた凱歌であった。(破戒 11)
- (9) 仏壇にむかってお経をあげる。(大)
- (10) お経をあげて山田君の霊を慰めてやることは出来ない。(蟹工船 88)
- (11) 隣人の女たちはすぐ感謝の祈りをあげ、叫び声をあげて、子供たちを抱いた。
(実話雑誌 1956 年 12 月 28)

(3.1.1.1) 換喩表現から対象がはっきりした言葉になった場合

この用法は、上述の換喩表現と同じであるが、名詞句の意味連鎖はただもつとはっきりした言葉を表すようになっていく。そのために下位分類は別に必要ではないが、グループの大きさと対照する場合の便宜上で別の項目に分けることにした。最初の(1)から(7)までの例文の対象は、「例」と「数字」のように並べるように言葉を暗示する意味のものである。その次の(8)から(11)までの例文の「証拠」は、説明することを連想させるが、一方では物的証拠の場合もあるので、(1.1)に扱った基本的な上昇の換喩表現の解釈も可能である。「事件・犯人をあげる」も、「証拠をあげる」から連想された比喩表現である可能性もある。(12)から(16)までの例文の対象は、具体的に言葉を表している「名前」である。その次の(17)と(18)の例文の「名乗り」もこれに類するものであると判断できるだろう。また、(19)から(22)までの「松下幸之助氏」などの対象は、具体的に言葉を表し、「あげる」は「述べる」と同じ役割を果たすようになっていく。また、最後の(23)から(25)までの例文では、「あげる」の意味は「筆頭に」などのように文脈によって特定される。

- (1) 似た例をもう 2、3 挙げる。(小)
- (2) 例をあげて説明せよ。(文)

- (3) 具体的な例をあげる。(新)
- (4) 一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、其女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、何処か適当な所へ嫁に遣つて呉れます。(こころ 194)
- (5) 哺乳類の文化。については、いろいろな事例をあげることができよう。(B)
- (6) 具体的な数字をあげて説明する。(大)
- (7) 一変した実例を証拠に挙げた。(道草)
- (8) 警察は状況証拠しか挙げられなかった。(小)
- (9) 証拠をあげる(見せる)。(新)
- (10) 確証をあげる。(大)
- (11) この説には種々の反証が挙げられる。(日本及日本人 1954 年 1 月 90)
- (12) 名を上げる。(研)
- (13) 国会議員の名前を挙げた。(小)
- (14) 合格者の名前をあげて下さい。(文)
- (15) 次期社長の候補として三人の名をあげる。(大)
- (16) 彼女が思い出すままに挙げる新しい作家の名前など、(雪国 41)
- (17) 弁護側に東大の桂木先生が名乗りをあげた。(B)
- (18) いち早く「近代文学」を創刊して戦後文学第一の名乗りをあげたが、
(群像 1956 年 4 月 115)
- (19) 先にあげた松下幸之助氏は、あれだけの要素は備えていたのだ。
(実業の日本 1956 年 11 月 1 日 52)
- (20) スペイン文学史の上では、カルデロン、グラシアンをあげることが出来る。(B)
- (21) 前にあげたサンゴ礁の魚は、サンゴ礁ならどこにでも住めるわけではない。(B)
- (22) 難点をあげる。(新)
- (23) 筆頭にあげる(掲げる)。(新)
- (24) 理由に(を)あげる。(新)
- (25) 挙げて数ふべからず(あまり多くて一々数えては居られない)。(新)

(3.1.1.2) 換喩表現からさらに連想した比喩表現

上述の換喩表現から、一つの表現がさらに意味的に変化し、比喩的に使われるようになったと考えられる。「名前をあげる」ことはおそらく「名前がいわれた」ことによって「広く知られるようになる」という意味を連想させただろう。ほかの比喩表現と同様に、この場合も推測を証明することができないが、意味関係を比べることによってこのような考え方も正当であると考えられる。最後の「おだをあげる」は、「御題目」からの俗語であり、「勝手な気炎をあげる」という意味を表している。現在の言語社会では、「おだ」という単語は使われていないので、慣用句として「あげる」の対象から外してもいい。

- (1) 名をあげる。(新)

- (2) 第2作目の小説で彼は名を挙げた。(小)
- (3) あのひとは名をあげるだろうし、財産もつくる。(スタンダール)
- (4) 彼はスピーチコンテストで一番になって学校の名をあげた。(文)
- (5) 前に伊藤整はチャタレー裁判で一躍名をあげたが、(改造増刊 1953年10月10)
- (6) おだをあげる。(新) > 主張する

(3.1.1.3) 換喩表現から派生した複合動詞

上述の換喩表現の意味から、言葉を発する動詞「歌う」など、または言葉に関係する動詞「数える」や「読む」などとの複合動詞も数多く派生できる。次の例文は、そのいくつかを並べたものである。ただし、例文(6)は、具体的な意味の複合動詞から転じた比喩的な表現である。

- (1) 高らかに歌いあげる。(新)
- (2) この誌は彼らの勝利を歌いあげている。(小)
- (3) 欠点を数えあげる。(大)
- (4) でっちあげる。(新)
- (5) 原稿を読みあげる。(大)
- (6) こねあげる。(新)

(3.1.2) 声をあげることからの比喩表現

これらの例文は上述の換喩表現からの比喩とは異なって、直接「声をあげる」意味から連想された比喩表現である。一方では「声を発する」意味が含まれているので、換喩表現と区別しない方がいいかも知れないが、例文(1)のように「音」のない場合もあるので、「反発する」や「叱る」のような比喩的な表現として分類した。

- (1) 爆撃だけで英国が音を上げるとは、到底思えない。(阿川弘之)
- (2) それでなくても主食の獲得に音を上げてゐる兵庫県や大阪府では、(闘牛 118)
- (3) そのうえ、子供の足をつついたり、ときを声をあげたりして、。(B)

(3.2) 抽象的な対象が高低で判断される次元のものである場合

前にも述べたように高低差という次元は、基本的に空間的な概念であるが、抽象的な概念の場合に応用されることも多い。「あげる」も同じように基本的に空間的上昇を表しているが、「風をあげる」>「煙を上げる」>「声をあげる」のように意味の連鎖の中で少しずつ空間的な意味から抽象的な意味に変化する。抽象的な高低次元の最も具体的なものは、(1)から(9)までの例文の対象「数」や「価値」など主に数字で表されるものである。同じように(10)から(16)までの例文の温度も速度も頻度も数字で表現されるが、その度合いは、段差的に高まるものではなく、流れるようにあがったり下がったりするのである。次の「生産」や「成績」のような(17)から(33)までの例文に出ている対象は、「価値」や「値段」ほど段差的に度合いを上げる対象ではない。この場合、「あげる」は、対象を作り出すような意味を表している。最後の(34)から(37)までの「性質」などの対

象は、もう段差的な性質が残っていないほか、「温度」などの身体的に感じる対象とも異なっている。この場合の対象は、より抽象度の高い精神的に感じる対象である。

- (1) この家へ入り込んでくる客の人数を挙げた。(明暗)
- (2) その会社は大幅に株価を上げた。(小)
- (3) 年の暮に鍛冶町の家主が急に家賃を上げたので、私は京町へ引き越した。(二人の友)
- (4) 運賃をあげる。(新)
- (5) 政府は税金をあげないと行っている。(文)
- (6) 料金をあげる。(岩)
- (7) 来年は私の給料を上げてくれるそうだ。(小)
- (8) 一年に一度月給を上げることになっている。(文)
- (9) 勤続年数がふえるにつれて、給与をあげねばならぬ。(文芸春秋 1956 年 10 月 98)
- (10) もっと部屋の温度を上げないとかぜを引いてしまう。(文)
- (11) 温度を上げて溶融して液体にすると、(新しい繊維 381)
- (12) もっと調子を上げて歌ってください。(文)
- (13) Kさんもスピードを上げると、二人はさらに歩調を速めて、。(B)
- (14) ここは 100 キロまでスピードを上げられる。(小)
- (15) あまりスピードをあげると危険だ。(大)
- (16) 仕事のピッチをあげる。(大)
- (17) 生産を 5 年で 2 倍に上げる。(小)
- (18) 生産性を上げる。(研)
- (19) 肥料は、...より多くの収量をあげるため、。(平凡百科 2)
- (20) 穂数で主に収量をあげる品種では、(農業世界 1956 年 9 月 127)
- (21) 労賃以上いくばくの収益をあげているだろうかなどの (農耕と園芸 1 月 133)
- (22) 利益をあげる(得る)。(新)
- (23) 業績をあげる。(新)
- (24) 成績をあげる(よくする)。(新)
- (25) さて、本年もお蔭様にて、順調に成績をあげることができました。(太郎手紙文例)
- (26) 班の成績あげよおもて、自分の班のもんにええのん廻して、(真空地帯・上 49)
- (27) レンズや反射鏡などで収レンさせて 50%までこの率を上げることができることが分かっている。(科学朝日 1956 年 10 月 31)
- (28) 打率をあげる。(大)
- (29) 彼の研究している浅海魚雷の有効率を百パーセントに上げるようにという要望。
(阿川弘之)
- (30) 淵田は、夜間攻撃の精度を上げることに夢中になっていて、。(阿川弘之)
- (31) 能率をあげる。(新)
- (32) 効果をあげる。(新)

- (33) 将来、月産三千トン位の能力までは上げるかも知れないがそれ以上にする計画はないようである。(ダイヤモンド 1956 年 4 月 28 日 70)
- (34) 品質などをあげる。(研)
- (35) 子供の性質をあげる。(小)
- (36) 奢侈に依って自分の面目を上げようとする努力である。(世潮 1954 年 4 月 36)
- (37) 女性の地位を上げる。(小)

(3.2.1) 抽象的な対象の換喩表現

上述の例文(17-33)の「効果を良くする」という意味からさらに連想して、「結果を残す」という意味が想像できる。場合によってどちらの解釈も可能であるが、一般的に文脈はその意味を決定するのである。「結果」のような解釈の余地がない対象もあるが、一方では「利益」や「成績」のような対象もある。この場合、換喩表現を解釈するために、「百万円の利益」や「良い成績」のように、対象は別の名詞句や形容詞などで特定しなければならない。ちなみに同じ「百万円」を「百万円利益を上げる」のように副詞的に記述すると、前述の利益の度合いを良くする表現になる。「結果」のほかにも最もはつきりこの意味を連想させる対象は、具体的な結果を表す例文(16)の「二点」やその次の(17)の「二十勝」などである。

- (1) 立派な成果をあげた。(小)
- (2) 黄熱予防に効果をあげた。(平凡百科 2)
- (3) 考山は実力以上の効果をあげているのだ。(スタンダード)
- (4) 秀吉に従って九州征伐、朝鮮役に出陣し戦功をあげた。(平凡百科 2)
- (5) 結果をあげる。(新)
- (6) その取引で 200 万円の利益を上げた。(小)
- (7) デパートは大きな利益を上げている。(文)
- (8) 好成績をあげる。(大)
- (9) 百万円の純益をあげる。(研)
- (10) 収穫をあげる。(新)
- (11) 業績をあげる。(新)
- (12) つまり人間が陰陽和合の実を挙げるのは、。(明暗)
- (13) このように、宮川村森林組合は、着々と山林復興に、その実績をあげているが、
(家の光 1956 年 4 月 187)
- (14) イランが石油を国際市場に販売し、それから収入をあげようとするればそれには、妥協しなければならない。(世界 1953 年 11 月 18)
- (15) メーデーが平和に、百六十万という戦後最高の動員レコードをあげながら、
(中央公論 1954 年 6 月 46)
- (16) 次の回西鉄がまた二点をあげ (ベースボールマガジン 1956 年 10 月 116)
- (17) 一番の希望は開幕早々から連続二十勝をあげること。(週刊読売 1956 年 3 月 11 日 7)

(3.2.1.1) 換喩表現からの比喩表現

上述の「結果をあげる」の意味につながるかどうかは不明であるが、「すべてを出し尽くす」という意味の比喩表現が存在する。この用法は、上述の「二点を上げる」などに最もつながりやすいので、ここで下位分類として扱うことにした。例文では(1)の「全額」のほかに「全力」しか対象として現れない。

- (1) 収入の全額を挙げて春琴の用に供した (春琴抄 206)
- (2) 全力をあげて試験のため勉強した。(文)
- (3) 問題解決のため全力をあげる。(大)
- (4) 一行の詩を書くのにも全力を挙げなければならない。(福永武彦)
- (5) 全力を挙げた長篇小説は全然失敗して、。(生)
- (6) 党は、我が国民の独立、平和、自由の闘争の先頭にたって活動することができるように、われわれは全力をあげている。(中央公論 1956 年 2 月 50)

(3.2.2) 抽象的な対象の比喩表現

上述の比喩表現とは別に直接「熱を上げる」からの比喩的な用法もある。このような例文は最初の三つである。その次の(4)から(6)までの例文の「氣勢」という対象は、はっきりと上述の抽象的な対象からの比喩とは言えないが、「熱を上げる」と意味的に似ているので、同じ項目に入れた。例文(7)と(8)の「血道をあげる」は、抽象的な対象ではなく、おそらく「血があがる」という意味の自動詞の対象と同じようなものからの比喩表現である。つまり、実際にはこれらの例文は、「水を上げる」などの分類の比喩表現に入れるべきであるが、意味的に「熱を上げる」などに似ているので、一緒に扱うことにした。また最後の例文(9)は、どの用法ともはっきり結びつくような関係がないので、おそらく「三日に空けず」と同じものではないかと思う。いずれにせよこのような例文は、この一つしかないなので、あげるの意味を把握するために重要ではない。

- (1) 勝負に熱を上げたりしていた。(阿川弘之)
- (2) そう勝手に熱をあげるのはよしてくれ。(トルストイ)
- (3) マリナのほうは早くも彼に熱をあげ、訪問のお目当てが姉なのですっかりふくれ、
(スクリーン 1956 年 7 月 108)
- (4) 氣勢を上げる。(研)
- (5) 反対の氣勢をあげたいいわゆる艦隊派の一味の人であった。(阿川弘之)
- (6) 際限なく酒を注文して、乱暴に飲みながら、氣勢を揚げてみた。(帰郷 337)
- (7) 血道をあげる(新)
- (8) 選挙で同じ候補者へ投票するというぐらいのことに何で血道をあげる必要がある？
(むらぎも 318)
- (9) 尤も老婆は僕の鯛のわたを一度嘗めて以来、三日にあげず生臭いわたを拵へては、
(思出の記・上 193)

(4) 「あげる」の意味のまとめ

上述の「あげる」動詞の意味分類を簡単にまとめると次の表 1 の通りになる。まず、対象になる名詞句の具体的なものから抽象的なものへの意味の連鎖を上下に作成した。それぞれの対象に沿って左右に表現の意味の固定化、換喩表現と比喩表現の記述を計った。

対象の意味連鎖をより分かりやすくするために、最も代表的な対象だけを扱うことにした。また、上述の分析では、「意志をもつ対象」は、別の項目(2)でほかの意味から離れて扱ったが、以下の表では「意志をもつ対象」は、「マグロ」など「具体物である対象」の後に記述した。同じように、「抽象的な対象」の場合、「対象が声」の(3.1)を「煙」や「炎」などの後にした。このように全ての項目(1)と(2)と(3)は、一つの連続している表にまとめることができた。

表の最も左側の欄に基本的な連想を引き起こす対象、真ん中の「換喩表現」の欄に基本的な意味を表しながらも別の連想を引き起こす対象、そして最も右側の「比喩表現」の欄に最もかけ離れた連想を引き起こす対象を記述した。「換喩表現」と「比喩表現」では「」の中の意味は、連想された意味を表し、>という印は連想を意味する。

(表 1、「あげる」の意味の変化)

連想 意味連鎖	換喩表現	比喩表現
箱	> 杯「飲む」	> 天ぷら「フライにする」
	> 布団「片づける」	
	> 畳「干す」	
首	> 首「殺す」	> 兜首「破る」> 人を槍玉に「犠牲にする」
看板	> 看板「置かれている」	
	> 棟「家を作る」	
作品		> 仕事を「完成する」> 費用を 3 万円で「済ます」> 結婚式を「行う」
		> リーダー「辞める」
蠟燭	> 賽銭「捧げる」	> 神仏に・君に・手伝って「与える」
バーベル	> 帽子「挨拶する」	> 軍配「勝つ」
		> 3 男「生む」
マグロ		> 殺人犯
雲雀		

息子		
客		> 別品さん「誉める」
候補者		
兵		> 一家「皆で」>
		全額・全力「すべてで」
幕		> 幕「始まる」
手		> 手「暴力を振る」
腕		> 腕「上手になる」
顔	> 顔・目・視線「見る」	
	> 腰「立つ」	
食べもの		> 吐く
噴煙		
のろし		> ノロシ「関心と呼ぶ」
肩線		> 血道をあげる> 氣勢を上げる
声・音	> 艦歌「歌う」	
	> お経「祈る・歌う」	
	> 証拠「述べる・提出する」	
	> 例・名・難点「述べる」	> 名「有名になる」> 音「文句を言う」
株価		
温度		> 熱「興奮する」
業績	> 効果・成績・二点「おさめる」	
地位	> 課長に「推進する」	> 男ぶりをあげる

上述の(表 1)で示したように、「あげる」の意味は、それぞれの「あげられる」対象によって異なってくる。このような意味の変化は、上下の軸で次第に対象になる名詞句の抽象化によって起きる。もちろん順番はおおよそそのものであるが、具体から抽象へと考えればよい。左右に記された表現は、それぞれの対象を使った表現は、連想によって別の意味を表すようになったものである。また、連想によってできた表現も、元の意味とどれほど離れているかによって分けられている。もちろん、はっきりした線がないが、ここで分けた換喩表現と比喩表現を別々のラインで表すことにした。このように「あげる」の全体的な意味が把握できると思う。次の第4章では、これらの意味をそれぞれフィンランド語に訳し、フィンランド語のどの動詞は、基本的な意味の面で「あげる」に相当するかを調べる。

第4章 フィンランド語との対比

第1節 対照の基礎

(1) 対照の出発点

上述の「あげる」の意味構造の分析では、それぞれの意味は、互いに何らかの意味的な関係を持って一つの多義性のある「あげる」という形態素に結びついていることが分かった。しかし、多くの比喻表現の場合、その意味的な関係がはっきりしたものではないので、多義性をもつ「あげる」の一意であるか、あるいは別の同音異義語として認めるべきかは、判断できない。そのために多くの「あげる」のような多義性をもつ動詞、例えば「はかる」などは、辞書の中でも同音異義語として多数の別々の意味に分類されている。しかし、ほかの言語の動詞と対照するために、多義語の意味構造をできるだけ詳しく記述することは重要である。なぜなら、多義語の意味は、直接的に同じ基本的な意味を表している外国語のある形態素に当てはまる場合もあるが、多くのその意味は間接的に別の形態素につながるからである。また、外国語に全く考えられないような表現もあるので、その表現と基本的な意味との関係を明らかにしなければならない。例えば、次の日本語の動詞「貸す」の表現は、フィンランド語の中でそれぞれ異なった訳し方を持っている。

- (a) 私は彼に本を貸してあげた。
Minä lainasin hänelle kirjan.
N:nom(I)+V:past:1sg(borrow)+N:all(him)+N:acc(book)
- (b) 私は彼に力を貸してあげた。
Minä autoin häntä.
N:nom(I)+V:past:1sg(help)+N:part(him)
- (c) 私は彼にトイレを貸してあげた。
Annoin hänen käyttää meidän vessaa.
V:past:1sg(give)+N:gen(his)+V:1inf(use)+N:gen(our)+N:part(toilet)
Annoin hänen käydä meillä vessassa.
V:past:1sg(give)+N:gen(his)+V:1inf(visit)+N:ades(us)+N:ill(toilet)

最初の例文(a)では、フィンランド語の動詞「lainata」(貸す・借りる)は、統語論上でも意味論上でも直接「貸す」に訳すことができるが、例文(b)の表現では、対象と動詞の組み合わせ「力を貸す」は、フィンランド語の動詞「auttaa」(助ける)の意味に概念構造の中で間接的に相当する。つまり、フィンランド語の中で「力」は、「貸す」という意味を表す動詞の対象になることができないが、同じ「助ける」場面の意味を基本的な意味としてもっている「auttaa」(助ける)動詞は、結果的に同じ意味を表している。また同じように、例文(c)では、日本語の表現「トイレを貸す」の意味は、フィンランド語の「lainata」(貸す)動詞の中で存在しないので、別の方面から「antaa käyttää」(ト

イレを使わせてあげる)あるいは「*antaa käydä*」(行かせてあげる)というようにその意味を表現しなければならない。「貸す」と「*lainata*」は、頭の中では同じ基本的な意味概念を表しているが、動詞の対象の範囲と連想される意味が異なっている。

このような二言語間の違いは、概念意味論でも見たような概念構造による意味の記述で表現することは難しい。なぜなら概念意味論は、出来事自体の意味を記述しようとする一方では、統語論に従うような構造を取るからである。しかし、基本的な意味(a)と連想された新しい意味(b)との違い、または「あげる」に対するフィンランド語の動詞の基本的な意味を把握するために、ここで改めて概念意味論の記述方法を使う。

例文(c)で見たような場合、概念構造の記述は(e)のように表現の意味が明らかになるような方法で行われるべきであるが、同じように(d)のような動詞の基本的な意味による記述も可能だろう。(d)では借りられる物体「 α 」は、いずれか戻ってくるという条件[EXCH]で、「彼」に渡される[CAUSE]。(e)では「私」は、「彼」がトイレを使うことをさせる[LET]。

- (d) [CAUSE([私],[GO_{POSS}([トイレ] α],[TO([彼]))])] [EXCH[CAUSE([彼],[GO_{POSS}([トイレ] α],[TO([私]))]])]
- (e) [LET([私],[CAUSE([彼],[BECOME([トイレ],[TO([使用中]))]])])]]

最初の(d)のような「貸す」動詞の本来の構造に忠実した記述方法も重要である一方、(e)のような出来事の結果が分かる意味記述も必要である。二つの別々の概念構造が考えられる理由は、本来「具体物を貸す」場合に連想される意味と対象が「場所」を表すように意味が拡大された場合に連想された意味の違いによるものである。つまり、(d)のような概念構造は(c)が実際に表している意味を明らかに表現できないと同時に、(e)のような概念構造は(c)のような文に直接結びつけられない。そのために(e)の意味は(d)から連想されたという概念構造しか考えられない。つまり、「トイレ」のような場所を表す対象は、本来の「貸す」の対象ではないが、「使うために貸す」という意味で対象になる名詞句の意味連鎖を広げた。場所は相手に渡すことができないので、「使わせてあげる」という解釈しかない。このように本来の意味と新しい対象によって連想でされた意味は、互いにつながり、動作の意味構造を作る(f)。

- (f) [CAUSE([私],[GO_{POSS}([トイレ] α],[TO([彼]))])] [EXCH[CAUSE([彼],[GO_{POSS}([トイレ] α],[TO([私]))]])]
- |
- [LET([私],[CAUSE([彼],[BECOME([トイレ],[TO([使用中]))]])])]]

例文のフィンランド語訳は、(d)から(e)へと同じような基本的な動詞の意味と連想された意味ではない。フィンランド語でももちろん日本語と同じような結果を想定できるが、それに至るまでの連想段階が異なっている。フィンランド語の場合、(g)のように「使用する」または(h)のように「行って

来る」という意味の動詞が使われている。

- (g) [LET([私],[CAUSE([彼],[BECOME([トイレ],[TO([使用中]))]))])]]
(私は彼がトイレを使うことを与えた)
- (h) [LET([私],[GO([彼],[TO([IN([トイレ]))]),[IN([内]))])]
[FROM([IN([トイレ]))]
(私は彼がトイレに行って来ることを内で与えた)

日本語の場合も同じように「使う」とか「行く」という動詞も使えるかもしれないが、「トイレを使わせてあげる」や「トイレに行かせてあげる」などの表現は、「トイレを貸してあげる」と異なった意味を表している。なぜなら、「使う」や「行く」や「貸す」が結果的に同じ動作を表しても、その出発点つまり動作を眺める立場が異なっている。「使う」はトイレの中にいる段階、「行く」はトイレに入る段階、そして「貸す」はトイレの管理者にその重点を置く。フィンランド語の中で「管理者」に重点を置くような「貸す」という意味の動詞は、日本語の同意義の動詞ほど広い意味で使われていないので、「トイレを貸す」(**lainata vessaa*)という表現は不可能である。

では、対照研究にあたって、どのような意味を対照するべきであろうか。言うまでもないが、機能文法のように動詞のその場その場の最終的な意味を別の言語に比較することが目的であるので、もちろん動詞の本来的な意味だけではなく、さまざまなほかの用法も対照するべきである。しかし、上述のように直接対照できない場合、いくつものほかの動詞が現れてくるので、どの動詞が最も適しているかは分からなくなる。また、ほかの動詞は、「行く」や「使う」のように対照される言語の中で別の動詞の基本的な意味を表している。そのために対照する場合、直接対照できるような動詞は、同じ基本的な意味をもっている動詞に限る。ほかの動詞は、概念構造で間接的に同じ意味を表す結果につながっていても、結局のところ別の動詞の意味範囲に数えるべきである。ただし、異なった動詞の意味範囲であっても、基本的な意味の範囲を分かるためにすべての意味を対照しなければならない。

(2) 本研究の対照方法

本研究の対照方法は、第3章でも取り上げたように「あげる」の意味構造を分析し、それぞれの用法をフィンランド語の「あげる」と同じ基本的な意味をもつ動詞に比較するという方法である。これによって「あげる」の形成する意味範囲は、フィンランド語全体に対照することができ、フィンランド語の「*nostaa*」などの動詞の意味範囲にどれほど一致するかが分かる。

では、「あげる」と「*nostaa*」などの動詞は、同じ基本的な意味をもっていることがどのように検証されるか。「*nostaa*」の場合、「あげる」のような専攻研究がなかったので、使用頻度などの判断ができなかったが、「あげる」の最も基本とされる(1.1)「基本的な上昇」に当てはまる動詞は「*nostaa*」であり、また母語話者の直感として「あげる」の基本的な意味は「*nostaa*」に相当すると判断できる。そのほか、概念意味論の方法で「あげる」の意味概念を分析した結果(1)、記述の

問題点を配慮してフィンランド語の動詞をその構造に当てると、確かに「nostaa」動詞(2)は、同じ概念構造に適し、その意味を担う。しかしいくつかほかの動詞も同じ構造に当てることができる(3)。

(1) 「あげる

	V	
___NP _j を	<<[_{pp} NP _α から]>><<[_{pp} NP _k に/へ]>>	
[EventCAUSE([] ^α _i , <[EventGO ([] _j), [<<<FROM [α]>>>]>>])]		
	[MOVE UPWARD]	
[	Path <<TO [] _k >>]	]

(2) 「NOSTAA

	V	
___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]>	<<[_{pp} NP _k all/ill/trans]>>	
[EventCAUSE([] ^α _i , <[EventGO ([] _j), [<<<FROM [α]>>>]>>])]		
	[UPWARD]	
[	Path <<TO [] _k >>]	]

(3) 「NOSTATTAA

	V	
___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]>	<<[_{pp} NP _k all/ill]>>	
[EventCAUSE([] ^α _i , <[EventMOVE ([] _j), [<<<FROM [α]>>>]>>])]		
	[UPWARD]	
[	Path <<TO [] _k >>]	]

「KOHOTTA

	V	
___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]>	<[_{pp} NP _k ill/all]>>	
[EventCAUSE([] ^α _i , <[EventGO ([] _j), [<<<FROM [α]>>>]>>])]		
	[DIRECT]	
	[UPWARD]	
[	Path <<TO [] _k >>]	]

「KOROTTA

	V	
___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]>	<[_{pp} NP _k all/ill/trans]>	

	[Event CAUSE([] _i , <[Event GO ([] ^α)] _j , [<<<FROM [α]>>>])]]	
	DIRECT	
	UPWARD	
	Path <<TO [α] _k >>	

このように基本的な意味が概念意味論で表現できるが、上述の「トイレを貸す」などの例でも見たように対象の意味連鎖または連想によって意味が複雑化する場合、概念意味論は使いにくい。また、石綿などの格文法と結合価理論との統合では、名詞句を規定した「hum」「abs」などの概念は、意味範囲として言語を対照するときに広すぎるし、定義も曖昧である。例えば(4)では、「煙」と「声」などは全て同じ「abs」の中に入る。また、同じ名詞句(子供を)は、環境によって異なった働きをもつことができる。

- (4) 「煙を上げる」、「声をあげる」、「値段を上げる」、「性格をあげる」=「abs」
「子供を学校にあげる」=「hum」 「子供を机の上に上げる」=「con」

このほか、連想された用法の場合、石綿などの格文法と結合価理論との統合は、それぞれのアクタントの役割だけを変更する。例えば(5)のような文の意味的な関係は明らかにされていない。

- (5) 「私は看板をあげている」 「本屋は看板をあげている」
「hum」「con」 「loc」 「con」
「Agent」「Object」 「Location」「Object」

本研究の目的は、どの場合において日本語の「あげる」動詞が基本的に同じ意味を表しているフィンランド語の「nostaa」などの動詞に相当するか、という問題を明らかにすることである。そのために、第3章で分析した「あげる」の意味のフィンランド語との直接的な翻訳が必要である。これによって、上述の「あげる」と基本的に同じ意味を表しているフィンランド語の動詞「nostaa」などの相違点と共通点が明らかになるだろう。このほか、「あげる」は、別の基本的な意味を表しているフィンランド語の動詞に相当する場合、日本語でその動詞に相当する別の動詞との意味的なつながりがあるかということも調べる。

第2節 「あげる」の意味構造のフィンランド語との対照

(1) 対象が具体物

(1.1) 基本的な上昇

対象が「箱・荷物・花瓶・石」のような具体的なものである場合、また到着点が「棚」や「テーブル」などのように個別の場所に示された場合、フィンランド語で使われる動詞は(1)から(3)の例文のように「nostaa」である。この場合、ほかの「動かす」意味を表す動詞、「laittaa」(置く)や「pistää」(指す)なども可能である。ただし、これらの動詞によって表現される意味は、「あげる」と異なってくる。

例文(4)のように到着点「上に」が動作主とつながっている場合、つまり「あげる」の意味は「持ち上げる」という意味を表している場合、「nostaa」のほかに「kohottaa」という動詞も可能である。到着点が表示されない(5)から(8)までの例文の場合も、対象が動作主とつながった「持ち上げる」という意味を表しているので、「nostaa」も「kohottaa」も可能である。つまり、「kohottaa」という動詞は、到着点に関して「動作主につながっている」あるいは「直接上にある」ことを条件にしている。

(1)から(5)までの例文では、完了の意味が含まれているので、対象は全体的な意味を表す「対格」(acc)で表示される。例文(6)と(7)と(8)のように動作は進行中であることを表す場合、対象は不完全な状態を表す「分格」(part)で表示される。

(1) 棚に箱を上げる。(研)

Nostan/Laitan/Pistän laatikon hyllylle.

V:1sg(lift/lay/put)+N:acc(box)+N:all(shelf).

(2) このにもつを棚に上げてください。(文)

Nostakaa nämä tavarat hyllylle.

V:imp:3pl(lift)+N:pl:acc(this)+N:pl:acc(thing)+N:all(shelf).

(3) 花瓶をピアノの上に上げる。(小)

Nostan/Laitan kukkaruukun pianon päälle.

V:1sg(lift/lay)+N:acc(vase)+N:gen(piano)+Postp:all(top).

(4) 石を頭より上に上げる。(小)

Nostan/Kohotan kiven pään yläpuolelle.

V:1sg(lift)+N:acc(stone)+N:gen(head)+N:all(upside).

(5) 彼は100キロのバーベルを上げた。(小)

Hän nosti/kohotti 100 kilon painot ylös.

N:nom(he)+V:past:3sg(lift)+Num(100)+N:gen(kilo)+N:pl:acc(weight)+Postp(up).

(6) 「これでしょう?」とウイスキーのびんを上げて女中は首を傾けた。(暗夜行路・前85)

Tämäkö?kysyi sisäkkö nostaen/kohottaen whiskypulloa pää kallellaan.

N:nom:p(this).V:past:3sg(ask)+N:nom(maid)+V:2inf:ins(rise)+N:part(bottle)

+N:nom(head)+N:ades:3sg(slant).

- (7) 彼は、ただ機械の如く渾身の力を入れて、槌を挙げ、渾身の力を以って、
之を振り降ろした。(恩讐の彼方に 79)

Kuin kone hän antoi kaiken voimansa nostaakseen/kohottaakseen kirvestä ja
koko voimallaan hän pudotti sen alas.

Conj(like)+N:nom(machine)+N:nom(he)+V:past:3sg(give)+Adj:acc(all)+N:pl:acc
(power)+V:1inf:trans:3sg(rise)+N:part(hammer)+Conj(and)+Adj(whole)
+N:ades:3sg(power)+N:nom(he)+V:past:3sg(drop)+N:acc(it)+Prep(down).

- (8) 鞭をあげて、光秀は小姓に訊いた。(オール読物 1956 年 1 月 100)

Nostaen/Kohottaen ruoskaa Mitsuhide kysyi sisäköltä.

V:2inf:ins(rise)+N:part(whip)+N:nom(M)+V:past:3sg(ask)+N:elat(maid)

(1.1.1) 基本的な上昇の換喩表現

以下の例文(1)と(2)「帽子を―」は、上述の(5)から(8)までの例文とほぼ同じである。ここで連想される意味「挨拶する」は、フィンランド語でもまったく同じである。しかし、(3)から(5)までの例文の場合、「kohottaa」だけが「乾杯」の意味を連想させる。「nostaa」を使った場合、文の意味は、基本的な「持ち上げる」という意味に戻ってしまう。また、例文(6)「畳」の場合、フィンランド語の「nostaa」は、何も新しい連想を引き起こさないで、基本的な意味だけを表している。この場合の到着点は「干す」という動作、あるいは「外」のような普通の場所である。

例文(7)のように到着点が不特定の場所「pois」(away)である場合、「布団をあげる」と同じような連想(片づける)が考えられるが、連想を引き起こす原因になるのは「pois」の不特定さである。例文(7)の「布団」や(8-10)の「床」も基本的に「畳」と同じであるが、「床」をフィンランド語で「ベッド」と訳すと「あげる」ことはできなくなるので、「korjata」(片づける)などの動詞が使われる。

例文(11)は、フィンランド語でも同様に「建物が完成する」ことを連想させる。「棟」も「harja」も文字通り建物の同じ部分を指している。しかし、例文(12)には連想がないように感じる。なぜなら対象になる「棟木」は、具体的な産業の対象であるからである。その代わり「棟」は、「一棟」のように家全体を指すこともある。

次の例文(13)と(14)のように、「あげる」動作が終わった状態を表している場合、フィンランド語はふだん存在動詞「olla」が使われる。しかし、現在完了の受け身「oli nostettu」でも、同じことが表現できる。ただしその場合、「前に看板がなかった」ことが前提にあるはずである。したがって、この場合「nostaa」では日本語と同じ状態の意味が表せない。

最後の(15)から(19)までの例文では、「与える」という連想が加わるが、「nostaa」動詞にはそのような連想がない。また、到着点が意志のないものなので、「与える」という意味の「antaa」動詞も使うことができない。これらの文では「nostaa」が使われる場合、動作の意味は、(1.1)と同じような単純な「持ち上げる」という意味を表す。そのために「置く」動作を描く「asettaa」(設置する)という動詞が日本語の意味に最も近い。なぜなら、この動詞は、「ゆっくり」や「落ち着いた」と言った要

素が含まれているからである。また(18)のように到着点がない場合、「asettaa」が使えないので、「sytyttää」(火を付ける)など同じ結果を表す別の動詞が使われる。

- (1) 彼は帽子をちよつと上げて、婦人にあいさつした。(小)

Hän nosti/kohotti hieman hattuaan ja tervehti rouvaa.

N:nom(he)+V:past:3sg(rise/lift)+Adv(alittle)+N:acc:1sg(hat)+Conj(and)
+V:3sg(greet)+N:acc(lady)

- (2) 無言のまま、ちよつと帽子をあげた。(トルストイ)

Sanomatta sanaakaan hän nosti/kohotti hieman hattua.

V:3inf:abes(say)+N:part:p(word)+N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+Adv(a little)
+N:part(hat)

- (3) 宗頼はさかずきをあげた。(B)

Muneyori kohotti maljan.

N:nom(M)+V:past:3sg(rise)+N:acc(cup)

- (4) 先生は笑って杯を上げた。(こころ)

Tohtori naurahti ja kohotti lasinsa.

N:nom(doctor)+V:past:3sg(laught)+Conj(and)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(glass)

- (5) 「御目出たう」と云つて、先生が私のために杯を上げて呉れた。(こころ 88)

Sanoen "Onneksi olkoon", tohtori kohotti minulle maljan.

V:2inf:ins(say)+goodluck+N:nom(doc)+V:past:3sg(rise)+N:all(me)+N:acc(cup)

- (6) 畳をあげて干す。(大)

Laitan/Nostan tatamimatot kuivumaan.

V:1sg(put/lift)+N:pl:acc(tatami carpet)+V:3inf:ill(dry).

- (7) 布団をあげる。(大)

Nostan/Korjaan/Laitan futonin pois.

V:1sg(fix/put)+N:acc(futon)+Prep(away).

- (8) 床を上げる。(小)

Petaan/Korjaan vuoteen pois.

V:1sg(make/fix)+N:acc(bed)+Prep(away).

- (9) 朝家のものが床を揚げる時、誤って上から踏み殺してしまった。(硝子戸の中)

Aamulla, kun väki korjasi vuoteita, tallasi joku sen vahingossa kuoliaaksi.

N:ades(morning)+Conj(when)+N:nom(people)+V:past:3sg(fix)+N:pl:part(bed)
+V:past:3sg+N:nom(somebody)+N:acc(it)+N:ines(accident)+Adj.trans(dead).

- (10) 母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさつて仕舞つた。(こころ 88)

Kuuntelematta äitiä hän viimein korjasi vuoteensa ja lähti.

V:3inf:abes(listen)+N:part(mother)+N:nom(he)+V:past:3sg(move)
+N:acc:3sg(bed)+Conj(and)+V:past:3sg(go away)

- (11) 棟をあげる。(岩)

Nostamme talon harjan.

V:1pl(lift)+N:gen(house)+N:acc(ridge).

- (12) 一般に小屋を組み上げて棟木を上げるとき。(平凡百科 2)

Normaalisti kun mökki kootaan ja sen harjapuu nostetaan paikoilleen...

Adv(normally)+Conj(when)+N:nom(cottage)+V:pas(construct)+Conj(and)

+N:gen(it)+N:acc(ridge)+V:pas(lift)+N:pl:all:3pl(place).

- (13) 松山書店と書家を書いた看板をあげている古本屋へ来た。(暗夜行路・前 265)

Tulimme antikvariaattiin, jonka päällä oli kyltti, johon oli kirjoitettu omistajaperheen nimi M. kirjakauppa.

V:past:1pl(come)+N:ill(second hand bookstore)+N:gen(which)+N:ades(top)

+V:past:3sg(be)+N:nom(sign board)+N:ill(to which)+V:past:3sg(write)

+N:gen(owner family)+N:acc(name)+N:acc(M.bookstore)

- (14) 汚い活動小舎があつて、毒々しいチャンバラものの絵看板があげてある。(むらぎも 175)

Siellä on likainen toimintahalli ja ilkeä samurailokuvan kyltti sen päällä.

N:ades(there)+V:3sg(be)+Adj:nom(dirty)+N:nom(activity hall)+Conj(and)

+Adj:nom(nasty)+N:gen(movie)+N:nom(signboard)+N:gen(it)+Postp:ades(on)

- (15) お墓にお花をあげる。(大)

Asetan kukkia haudalle.

V:1sg(put)+N:pl:part(flower)+N:all(grave).

- (16) 祭壇にろうそくをあげる。(小)

Asetan kynttilän alttarille.

V:1sg(put)+N:acc(candle)+N:all(altar).

- (17) 僕の香を上げ花を上げ水を注いでから、前に蹲つて心のゆくまで拝んだ。

(野菊の墓 53)

Asetettuani suitsukkeen ja kukan haudalle ja kaadettuani vettä kumarruin sen eteen ja rukoilin sydämeni pohjasta.

V:prt.prf:part:1sg(put)+N:acc(incense)+Conj(and)+N:acc(flower)+N:all(grave)

+V:prt.prf:part:1sg(pour)+N:part(water)+V:past:1sg(kneel)+N:gen(it)

+Postp(front)+Conj(and)+V:past:1sg(pray)+N:gen:1sg(heart)+N:elat(bottom)

- (18) 燈明をあげ、肩衣をつけ、歎異抄に類したものを唱した。(伸子・上 169)

Sytytin alttarikynttilän, laitoin kaavun päälle ja lausuin Tanni-sutraa vastaavan rukouksen.

V:past:1sg(ignite)+N:acc(altar candle)+V:past:1sg(put)+N:acc(cape)+P:all(on)

+Conj(and)+V:past:1sg(recite)+N:part(sutra)+V:prt.prs:acc(resemble)

+N:acc(pray)

- (19) 政は立つた次手に花を切剪つて仏壇に捧げて下さい。(野菊の墓 10)

Leikatkaa seuraajalle kukka ja asettakaa se alttarille.

V:2pl:imp(cut)+N:all(follower)+N:acc(flower)+Conj(and)+V:2pl:imp(put)
+N:acc(it)+N:all(altar)

(1.1.2) 基本的な上昇の比喩表現

比喩表現では動詞の本来の意味は残っていないので、別の言語で同じ連想を見せるのは珍しい。そのために以下の例文では「nostaa」と「kohottaa」はほとんど使うことができない。ただし、例文(1)のように「誰かを槍の先にあげる」と言った表現は、言語を越えて「虐める」という比喩的な意味を表しているようだ。しかし、日本語の表現「槍玉にあげる」の意味に最も近いフィンランド語の表現はそれとは違う。

例文(4)のフィンランド語の表現は、日本語の「棚に上げる」と非常に似ているが、フィンランド語では別の動詞「hylyttää」(棚に保管する)が使われている。例文(5)と(7)のフィンランド語訳も日本語に似ているが、(5)は「ottaa」(取る)という動詞、そして(7)は「軍配をあげる」のではなく「勝利の旗が揚がる」という文から日本語と同じような比喩的な連想を引き起こす。このように比喩表現のフィンランド語の訳を見ると、似たような表現があっても完全に意味的に一致する表現がないことが分かる。

- (1) 槍玉にあげる。(新) >犠牲にする

Nostan hänet seipään kärkeen.//Teen hänestä uhrin.

V:1sg(lift)+N:acc(him)+N:gen(spear)+N:acc(top).//V+1sg(make)+N:elat(he)
+N:nom(victim)

- (2) この連中は口をそろえて、ジュリヤンの坊主くさいところを槍玉にあげた。(スタンダール)

Joukkio nosti yhteen ääneen Julianin munkkimaisuuden pilkan kohteeksi.

N:nom(group)+V:past:3sg(lift)+Num:ill(one)+N:ill(voice)+N:gen(J)
+N:acc(priesthood)+N:gen(abuse)+N:trans(object)

- (3) 切支丹を槍玉に挙げて、凡そ残虐の限りを尽くした家光が (青銅の基督 5)

Kristityt seipäänsä kärkeen nostamalla julmuuden ääriajat saavuttanut
Iemitsu.

N:pl:acc(Christian)+N:gen:3sg(spear)+N:ill(top)+V:3inf:ades(rise)
+N:gen(cruelty)+N:pl:nom(border)+V:prt.prf:nom(reach)+N:nom(I)

- (4) 葉子は、自分のことは棚に上げておいて、激しく事務長を憎んだ。(或る女・前 162)

Yooko vihasi kipeästi toimistopäällikköä siitä että hänet oli hylytetty.

N:nom(Y)+V:past:3sg(hate)+Adv(srongly)+N:part(chief)+N:elat(about)
+Conj(that)+N:acc(she)+V:past:3sg(be)+V:prt.prf:pas(shelfed)

- (5) レッツの場合は、新鋭が思いがけずに兜首をあげるのではないかと見られている。

(野球界 1956 年 10 月 157)

Reggystä puheen ollen oletetaan, että tulokas varmaan ottaa arvaamatta tiikerin pään.

N:elat(R)+N:acc(speech)+V:2inf:ins(be)+V:pas(expect)+Conj(that)
+N:nom(newcomer)+Adv(propably)+N:3sg(take)+V:3inf:abes(guess)
+N:gen(tiger)+N:acc(head)

- (6) 吾妻橋で文七を助けるところの拵へから違ふ。——扇朝師匠のために精々これが味噌をあげた奴さ。(末枯 57)

Opettaja Ogiasan hyväksi parhaimmillaan vain ylpeillyt kaveri.

N:gen(teacherO)+Postp(behalf)+Adj:pl:ades:3sg(best)+Adv(only)
+V:prt.prf(boast)+N:nom(guy)

- (7) 軍配をあげる。(新) >勝利を示す

Voiton lippu nousi hänelle.

N:gen(victory)+N:nom(flag)+V:3sg(rise)+N:all(he)

- (8) 争いは尾崎に軍配を挙げる。(B)

Taistelu toi Ozakille voiton.

N:nom(fight)+V:past:3sg(bring)+N:alt(O)+N:acc(victory)

(1.1.3) 基本的な上昇の生産性の高い比喩表現

(1.1.3.1) 「神に捧げること」を連想させる比喩表現

上述の「仏壇にあげる」などの場合、日本語では「捧げる」ことが連想されたが、フィンランド語の「nostaa」ではそのような連想がない。そのために、「nostaa」よりも厳かな要素が含まれている「asettaa」(設置する)などの動詞が使われた。しかし神や寺などの到着点は、意志を持つものと判断できるので、「与える」意味につながる。フィンランド語では「与える」意味は、例文(2)から(4)のように「antaa」という動詞で表現される。しかし、例文(1)と(5)のように対象は実際に到着点に渡らない場合、「uhrata」(捧げる)という動詞が使われている。つまり「antaa」(与える)動詞は、対象が直接到着点に渡ることを要求している。「お香を焼いて与える」または「兵士を殺して与える」は、別の表現である。

- (1) 神(金の神)・お線香をあげるのを忘れるんじゃないぞ。(オあへり)

Et kai sinä jumala ole unohtanut, että minä olen uhrannut sinulle suitsukkeita.

Neg:2sg(not)+Adv(perhaps)+N:nom(you)+V(be)+V:prt.prf(forget)+Conj(that)
+N:nom(I)V:1sg(be)+V:prt.prf(offer)+N:all(offer)+pl:part(incense).

- (2) 神仏にあげる。(研)

Annan/Uhraan jumalille.

V:1sg(give/offer)+N:pl:all(god).

- (3) 文吉は持っていただけの錢を皆お初穂に上げた。(護持院原の敵討)

Fumiyoshi antoi kaikki mukana olleet rahansa kolehti kirstuun.

N:nom(F)+V:past:3sg(give)+Num:acc(all)+Postp:ess(with)+V:prt.prf:pl(be)
+N:acc:3sg(money)+N:ill(offertory box).

- (4) お賽銭(サイエン)をあげる。(岩)

Annan rahalahjoituksen.

V:1sg(give)+N:acc(money contribution).

- (5) その前に三春兵の一人は必ず血祭りにあげてみせると (落城 13)

Sitä ennen uhraan varmasti yhden Miharun sotilaan.

N:part(that)+Post(before)+V:1sg(offer)+Adv(surely)+Num:acc(1)+N:gen(M)

+N:acc(soldier).

(1.1.3.2) 「人に与えること」を連想させる比喩表現

到着点は人である場合、「あげる」に対してフィンランド語ではふだん「antaa」(与える)が使われる。しかし、例文(1)のように対象は直接的に動作主から到着点に渡らない場合、「antaa」が使えないので、「lähetää」(送る)などの動詞のほうが適切である。この文で「antaa」を使うと、その意味は「手紙をあげ渡す」になる。また、例文(7)のような対象のない文では、「antaa」は「物を与える」という連想を引き起こすので、代わりに「食べ物を与える」ことを連想させる「tarjota」(おごる)という動詞を使わなければならない。

- (1) あとで手紙をあげます。(文)

Lähetän sinulle myöhemmin kirjeen.

V:1sg(send)+N:all(you)+Adv:comp(later)+N:acc(letter).

- (2) この本を君に上げよう。(研)

Annan tämän kirjan sinulle.

V:1sg(give)+N:acc(this)+N:acc(book)+N:all(you).

- (3) お好きならあなたにあげましょう。(文)

Jos pidät tästä, niin annan sen sinulle.

Conj(if)+V:2sg(like)+N:elat(this)+Conj(so)+V:1sg(give)+N:acc(it)+N:all(you).

- (4) 宗近さんに上げる時には私から上げます。(虞美人草)

Kun Shukinille annetaan niin minä annan.

Conj(when)+N:all(S)+V:pas(give)+Conj(then)+N:nom(I)+V:1sg(give).

- (5) ターニャ、さあ、おみやげをあげるよ！。(トルストイ)

Tanja! No niin annetaanpa ne tuomiset.

N(T). P(well)+V:pas:p(let's give)+N:acc(those)+N:pl:acc(souvenir).

- (6) 二千円だけの金をあげるというのだ。(暗夜行路・前 203)

Hän sanoi antavansa vain tuhat jeniä.

N:nom(he)+V:past:3sg(say)+V:prt.prs:acc:3sg(give)+Adv(only)+N:part(1000¥)

- (7) こんな所だから上げるものがなくて困ります。その代り明日あたりは御馳走…。(門)

- Nyt meillä ei valitettavasti ole mitään tarjottavaa, mutta huomenna...
 Adv(now)+N:ades(we)+Neg:3sg(not)+Adv(unfortunately)+V(be)
 +N:part(nothing)+V:prt.prs:part(offer)+Conj(but)+N:ess(tomorrow)...
- (8) ああ、風邪だと思う。薬をあげる。(立原正秋)
 Luulen että se on flunssaa. Minä annan lääketä.
 V:1sg(think)+Conj(that)+N:nom(it)+V:3sg(be)+N:part(flu).N:nom(I)+V:1sg(give)
 +N:part(medicine).
- (9) 君の所へ愛子を上げたい気は充分にあるのですが、(暗夜行路・前 72)
 Minulla on kyllä tarpeeksi halua antaa Aiko sinun luoksesi, mutta
 N:ades(me)+V:3sg(be)+Adv(sure)+Adj(enough)+N:part(will)+V:1inf(give)
 +N:acc(A)+N:gen(your)+Postp(beside)+Conj(but)
- (10) わたしのところの助任司祭の職をきみにあげるし。(スタンダール)
 Annan sinulle meillä olevan apulaispapin viran.
 V:1sg(give)+N:all(you)+N:ades(we)+V:prt.prs:acc(be)+N:gen(vice priest)
 +N:acc(post).
- (11) 返事を上げなければ済まない貴方に対して、(こころ 150)
 Sinulle, jolle minun on omantunnon vuoksi annettava vastaus.
 N:all(you)+N:all(whom)+N:gen(mine)+V:3sg(be)+N:gen(conscience)
 +Postp(behalf)+V:prt.prs(give)+N:acc(answer).

(1.1.3.2.1) 動作を与える「助動詞」の場合

フィンランド語の「*antaa*」も助動詞として使われているが、その場合の意味は日本語の使役あるいは英語の「*let*」に最も近い。基本的に「あげる」の助動詞的な用法は、フィンランド語では例文(2)と(4)と(6)と(8)と(9)のように一人称代名詞「*minä/me*」と一人称接辞「*-n/-mme*」そして到着点を表す向格接辞「*-lle*」で表現される。しかし、ほかの例文のように「一あげる」が付く動詞の意味によってまったく別の構造になる場合もある。

- (1) 手伝ってあげよう。(研)
 Minä autan sinua.
 N:nom(I)+V:1sg(help)+N:part(you).
- (2) 切符を買ってあげよう。(研)
 Minä ostan sinulle lipun.
 N:nom(I)+V:1sg(buy)+N:all(you)+N:acc(ticket).
- (3) そのおばあさんに手を貸してバスから降ろしてあげた。(研)
 Minä autoin sitä mummoa nousemaan pois bussista.
 N:nom(I)+V:1sg(help)+N:part(that)+N:part(oldwoman)+V:3inf(getout)
 +Postp(away)+N:elat(bus).

- (4) 年寄りには親切にしてあげなさい。(研)

Ole ystävällinen vanhuksille.

V:imp:2sg(be)+Adj:nom(kind)+N:pl:all(old people).

- (5) 代わりに行ってあげよう。(小)

Menen sinun puolesta.

V:1sg(go)+N:gen(you)+N:elat(behalf).

- (6) わからなければ教えてあげます。(文)

Jos et ymmärrä, niin minä kerron sen sinulle.

Conj(if)+Neg:2sg(not)+V(understand)+Conj(then)+N:nom(I)+V:1sg(tell)
+N:acc(it)+N:all(you).

- (7) 見てあげる。(新)

Minä katson.

N:nom(I)+V:1sg(see).

- (8) 教えてあげる。(岩)

Kerron sen sinulle.

V:1sg(tell)+N:acc(it)+N:all(you).

- (9) 本を貸してあげる。(大)

lainaan sinulle kirjan.

V:1sg(lend)+N:all(you)+N:acc(book).

- (10) 家まで送ってあげます。(大)

Saatan sinut kotiin.

V:1sg(take)+N:acc(you)+N:ill(home).

- (11) いい額縁を買って来て、おくみさんの部屋へかけて上げようね。(桑の実 84)

Ostetaan raamit ja laitetaan se kuva Okumin huoneeseen.

V:pas(buy)+N:pl:acc(rim)+Conj(and)+V:pas(put)+N:acc(that)+N:acc(picture)
+N:gen(O)+N:ill(room).

(1.1.3.2.2) 「あげる」から転じた「丁寧」の意味の「複合動詞」

複合語の中の「-あげる」は、人称を限定する意味(一人称)と相手に対する丁寧さの意味(敬語)を別の動詞に付け加える。フィンランド語ではこのような意味は、上述と同じように一人称の代名詞と人称接辞で表現されるが、丁寧さは話し相手が述べられる場合だけ二人称複数の代名詞「Te」で表現できる。

- (1) お名前はよく存じあげております。(文)

Tiedän nimenne oikein hyvin.

V:1sg(know)+N:acc:2pl(name)+Adv(very)+Adv(well).

- (2) 願いあげます。(新)

Toivon.

V:1sg(hope).

- (3) 申しあげる。(大)

Minä sanon/ilmoitan.

N:nom(I)+V:1sg(say/announce).

- (4) ここでお待ち申し上げます。(文)

Odotan Teitä tässä.

V:1sg(wait)+N:part(You)+N:ines(here).

- (5) 存じあげる。(大)

Minä tiedän

N:nom(I)+V:1sg(know).

(1.1.3.3) 油で煮る場合

ほかの比喩表現と同じように「油で揚げる」こともフィンランド語の「nostaa」には当てはまらない。もちろん「nostaa öljystä」(油からあげること)は、フィンランド語でも「paistaa öljyllä」(油で揚げる)ことを連想させるが、「nostaa kalaa」(魚をあげる)にはそのような連想がない。そのために、別の調理する意味の動詞「keittää」(煮る)や「paistaa」(焼く)などが使われる。「keittää」(煮る)はふだんお湯で調理する場合使われているので、油の量は多いが、「paistaa」(焼く)はバターで焼く場合使われているので、油の量が少ない。しかし、それ以外のはっきりした違いが「paistaa」と「keittää」にはないようだ。

- (1) 野菜をサラダ油で揚げる。(研)

Paistan juurekset salaattiöljyssä.

V:1sg(fry)+N:pl:acc(vegetable)+N:ines(salad oil)

- (2) エビ(魚)を揚げる。(小)

Paistan katkarapuja/kaloja öljyssä.

V:1sg(fry)+N:pl:acc(shrimp/fish)+N:ines(oil)

- (3) カツレツをあげる。(文)

Paistan kotletteja.

V:1sg(fry)+N:pl:part(cutlet)

- (4) 天ぷらをあげる。(新)

Paistan tempuraa.

V:3sg(fry)+N:part(tempura)

- (5) ニンジンをあげる。(新)

Keitän porkkanaa rasvassa.

V:1sg(boil)+N:part(carrot)+N:ines(fat)

- (6) ベーコンを揚げるためフライパンをストーブの上へかける音を聞き。(シトー)

Kuulin pannun äänen, kun se laitettiin hellalle pekonin paistamista varten.

V: past: 1sg(hear)+N: gen(pan)+N: acc(voice)+Conj(when)+N: acc(it)

+V: past: pas(put)+N: all(range)+N: gen(beacon)+V: 4inf: part+Postp(for).

- (7) 蚕豆の油であげたやうなのを壺に詰めたのと、(桑の実 96)

Hän sulloi papuöljyssä keitettyjen kaltaisia tölkkiin

N: nom(he)+V: past: 3sg(fill)+N: ines(beanoil)+V: prt. prf: pl: gen(boil)

+Adj: pl: part(like)+N: ill(bottle)

(1.1.3.4) 物の完成を連想させる比喩表現

「油で揚げる」と同じようにフィンランド語の「nostaa」動詞は、日本語「あげる」のように比喩的に完了の意味を連想させない。「nostaa」動詞は、「作品」や「仕事」などが空間的にあげられる場合だけ使うことができる。完成する意味では一般的に、例文(1)と(2)のように「tehdä」(作る)という動詞が使われる。その他に完了の意味を強調するために例文(1)などのように「valmis」(ready)という形容詞または例文(4)のように動詞の完了形が使われている。「valmis」が使われると例文(1)の「saada」(受ける)も可能である。例文(6)と(7)のように、ものを作るような意味を表さない場合、「tehdä」(作る)とは別の動詞を選ばなければならない。

- (1) ピアノソナタを一曲あげた。(文)

Tein/Sain yhden pianosonaatin valmiiksi.

V: past: 1sg(make/get)+N: acc(one)+N: acc(pianosonata)+Adj: trans(ready).

- (2) ドレスは明日中に上げます。(小)

Teen puvun huomenna valmiiksi.

V: 1sg(make)+N: acc(dress)+N: ess(tomorrow)+Adj: trans(ready).

- (3) 早撮り映画の、手早くあげる作品を (笑の泉 1956 年 12 月 191)

pikaelokuvien nopeasti tehtyä/valmistettua teosta

N: pl: gen(fastmovie)+Adv(fast)+V: prt. prf: part(make/finish)+N: part(work)

- (4) この仕事を年内に上げるようにする。(小)

Katson, että työ tulee tehtyä tämän vuoden puolella.

V: 1sg(look)+Conj(that)+N: acc(work)+V: 3sg(come)+V: prt. pas: part(make)

+N: gen(this)+N: gen(year)+N: ades(side).

- (5) この仕事は今夜中にあげなければならない。(岩)

Tämä työ täytyy tehdä/saada loppuun aamuun mennessä.

N: acc(this)+N: acc(work)+V: 3sg(must)+V: 1inf(make/get)+N: ill(end)

+N: ill(morning)+V: 2inf: ines(go).

- (6) aの字も知らぬと云ふ者があれば、第一読本を少しやつたと云ふ者、第二読本をあげたという者もある。(思出の記・上 205)

Oli niitä, jotka eivät tie neet edes A:ta, ja niitä, jotka olivat edenneet vähän

aapista, mutta myös toisen lukukirjan lukeneita.

V:past:3sg(be)+N:pl:part(those)+N:nom(who)+Neg:3pl(not)+V:prt.prf(know)
+Adv(even)+N:part(A)+Conj(and)+N:pl:part(those)+N:nom(who)
+V:past:3pl(be)+V:prt.prf(advance)+Adv(alittle)+N:part(ABCbook)+Conj(hut)
+Adv(also)+Adj:acc(second)+N:acc(readingbook)+V:prt.prf:pl:part(read).

- (7) リーダーをあげる(終える)。(新)

Luovun johtajan paikasta.

V:1sg(give up)+N:gen(president)+N:elat(place).

(1.1.3.4.1) 「終わらせる」あるいはほか意味から更に比喻表現に変わったもの

この用法もまた「nostaa」では表現できない。フィンランド語で式やパーティーを行う場合、「pitää」(持つ)または「järjestää」(行う)という動詞が使われる。日本語でも「行う」や「持つ」が使える。

- (1) 来月結婚式をあげます。(文)

Pidämme ensi kuussa häät.

V:1pl(hold)+Adv(next)+N:ines(month)+N:pl:acc(wedding).

- (2) 教会で結婚式をあげる。(大)

Pidämme häät kirkossa.

V:1pl(hold)+N:pl:acc(wedding)+N:ines(church)

- (3) 十年前に式を挙げた女と今初めて式を挙げようとしている。(B)

10 vuotta sitten häänsä pitäneet ja nyt ensi kertaa naimisiin menevät naiset...

Adv(10yearsago)+N:pl:acc:3pl(wedding)+V:prt.prf:pl:nom(hold)+Conj(and)+Adv
(now)+Adv(first time)+N:ill(marriage)+V:prt.prs:pa:nom(go)+N:pl:nom(women).

- (4) 祝言をあげる。(大)

Pidämme häät.

V:1pl(hold)+N:pl:acc(wedding).

- (5) 年来の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げたといへば (こころ 227)

Vuosien odotuksena olleet häätkin hän piti epävarmuudessa.

N:pl:gen(years)+N:ess(wait)+V:2inf:pl:nom(be)+N:acc:p(alsowedding)
+N:nom(he)+V:past:3sg(hold)+N:ines(unsure).

(1.1.3.4.2) ある金額内におさめる場合

この用法も、上述と同じように「nostaa」動詞では連想できない。「費用を金額で上げる」意味は、フィンランド語の中で、例えば(1)と(2)と(4)のように「費用の状態から抜け出す」という意味を表す「päästä」または(3)のように「費用の状態を保つ」のような意味を表す「pitää +所格(ades)」という動詞で表現できる。ただし、「あげる」に直接的に相当するような動詞がない。

- (1) 披露宴の費用は1人あたり3万円で上げてもらいたい。(研)

Haluan, että hääjuhlien kuluista päästään 30000lla per henkilö.

V:1sg(want)+Conj(that)+N:gen(weddingparty)+N:pl:elat(cost)+V:pas(get)
+N:ades(¥)+Prep(per)+N:nom(person).

- (2) 生活費はできるだけやすくあげたいと思います。(文)

Haluaisin päästä elinkustannuksissa niin halvalla kuin mahdollista.

V:cond:1sg(want)+V:1inf(get)+N:pl:ines(livingcost)+Conj(as)+Adj:ades(cheap)
+Conj(as)+Adj:part(possible).

- (3) 費用を安くあげる。(岩)

Minä pidän kustannukset alhaalla.

N:nom(I)+V:1sg(hold)+N:pl:nom(cost)+Adv:ades(down).

- (4) 総額一千万円であげる。(大)

Toivon pääseväni siitä 10milj jenillä.

V:1sg(hope)+V:prt,prs:1sg(get)+N:elat(it)+N:ades(10milj¥).

(1.1.3.4.3) 物の完成を連想させる比喩表現からの複合動詞

この「--あげる」の用法は、別の動詞に「完了」という要素を付け加えるだけの意味を表しているの
で、フィンランド語の場合は、「loppuun」(終わりに)という名詞句、「kiinni」(fast)という副詞、
「valmis」という形容詞など、または例文(5)のように動詞の完了形によって似たような意味が表
現できる。

- (1) この本を昨夜読みあげた。(小)

Luin tämän kirjan eilen illalla loppuun

V:past:1sg(read)+N:acc(this)+N:acc(book)+Adv(yesterday)+N:ades(evening)
+N:ill(end)

- (2) 賊を縛りあげた。(小)

Sidoin varkaat kiinni.

V:past:1sg(tie)+N:pl:acc(thief)+Adv(fast)

- (3) 練りあげる。(新)

Työstän sen loppuun.

V:1sg(work out)+N:acc(it)+N:ill(end).

- (4) ピカピカに磨きあげる。(大)

Kiilloitan sen peilikirkkaaksi.

V:1sg(polish)+N:acc(it)+Adj:trans(mirror clear).

- (5) 鍛えあげた体。(大)

Teräksiseksi taottu vartalo.

Adj:trans(steel like)+V:prt,prf(forge)+N:nom(body).

- (6) 論文を書きあげる。(大)

Kirjoitan tekstin loppuun.

V:1sg(write)+N:acc(text)+N:ill(end).

- (7) 一週間で編みあげる。(大)

Kudon sen viikossa valmiiksi.

V:1sg(knit)+N:acc(it)+N:ines(week)+Adj:trans(ready).

(1.2) 到着点が遠い場合の基本的な上昇

基本的な意味に戻るが、到着点が遠くなる場合、フィンランド語では「kuljettaa」(はこぶ)や「viedä」(持っていく)という動詞が使われる。おそらく日本語でも、以下の二つの例しかなかったもので、遠く離れた場所にもものをあげることは適切な表現ではない。例文(2)で「nostaa」が使われる場合、その意味は「ロープなどで引き上げる」という意味である。

- (1) 本を2階に上げる。(小)

Vien kirjat toiseen kerrokseen.

V:1sg(bring)+N:pl:acc(book)+Num:ill(second)+N:ill(floor).

- (2) たんすを二階にあげる。(大)

Viemme/Nostamme kaapin toiseen kerrokseen.

V:1pl:(bring/lift)+N:acc(wardrobe)+Num:ill(second)+N:ill(floor).

(1.3) 基本的に「水から地面へ」と移動する場合

以下の(2)から(5)までの例文では移動の意味が含まれている場合、「viedä」(持っていく)などが使われるが、クレーンなどを使って直接あげる場合「nostaa」も使える。ただし、対象は例文(5)「積み荷」のように増大なものである場合、全体を一気に上げない限り「nostaa」は使えない。その場合は例えば「purkaa」(バラバラにする)という動詞で同じ意味が表現できる。

例文(1)と(6)から(10)までの例文の場合、対象「ハゼ」などは直接水からあげられるので、「nostaa」動詞は(1.1)の「持ち上げる」と同じように到着点も要らない。ただし、「kohottaa」動詞はこの場合使えない。なぜなら「kohottaa」は、瓶などの対象を持ち上げた場合も、別の場所に移動することができないからである。つまり、瓶を上げた後、空中に浮かぶか同じ場所に戻さなければならぬ。海から魚をあげるとき、魚を後で放しても、いったん船の上に持ち上げるのは当然のことであるので、「kohottaa」は使えない。しかし、例文(9)などでは「kohottaa」の意味も考えられる。

- (1) そうめんはゆでて水にさらし、ザルにあげて。(主婦と生活 1956年3月 387)

Soomen keitetään, huuhdotaa ja nostetaan siivilään.

N:nom(S)+V:pas(boil)+V:pas(wash)+V:pas(rise)+N:ill(sieve)

- (2) 荷物を陸にあげる。(研)

Nostan/Vien tavarat maalle.

V:1sg(rise,bring)+N:pl:acc(thing)+N:ill(land).

- (3) これらの箱はすぐに陸に揚げる必要がある。(小)

Nämä laatikot pitää heti nostaa/viedä rannalle.

N:pl:acc(that)+N:pl:acc(box)+V:3sg(must)+Adv(at once)+V:1inf(lift/bring)
+N:all(land).

- (4) 船から荷をあげる。(大)

Nostamme lastin pois laivasta.

V:1pl(lift)+N:acc(cargo)+Prep(away)+N:elat(ship).

- (5) 船は積み荷を揚げると、すぐに港を出た。(文)

Laiva lähtee heti kun lasti on purettu.

N:nom(ship)+V:3sg(leave)+Adv(at once)+Conj(when)+N:nom(cargo)+V:3sg(be)
+V:perf(unload)

- (6) ハゼを一束(いっそく)上げる。(研)

Nostaa 100 makrillia.

V:1inf(lift) +Num(100)+N:acc(mackerel).

- (7) 網をあげる。(大)

Nostan verkkoja.

V:1sg(lift)+N:pl:part(net).

- (8) 錨を上げたり、下したりする度に、(蟹工船 10)

Aina kun ankkuria nostettiin tai laskettiin,

Adv(allways)+Conj(when)+N:part(anchor)+V:past:pas(rise)+Conj(or)
+V:past:pas(getdown).

- (9) 金魚は、よわい。水からちよいちよい上げて行くんじや、もたないや。(婦人倶楽部 1956 年 7 月 71)

Vaikka niitä nostaa vain vähän vedestä, niin ne ei kestä.

Conj(although)+N:pl:part(those)+V:3sg(rise)+Adv(only)+Adv(alittle)
+N:elat(water)+Conj(then)+N:nom(those)+Neg:3sg(not)+V(last).

- (10) 永田氏は二貫七百匁の寒鯛と九百匁の石鯛をあげたのみで殆んど全員があぶれた。
(中央公論 1953 年 8 月 208)

Nagata nosti vain 10kg lahnaa ja 3.4kg papukaijakalaa ja melkein kaikki jäivät ilman saalista.

N:nom(N)+V:past:3sg(rise)+Adv(only)+N:part(10kg sea bream)+Conj(and)
+N:part(3.4kg parrotfish)+Conj(and)+Adv(allmost)+N:nom(all)+V:past:3pl(stay)
+Prep(without)+N:part(catch)

- (1.4) 対象が動作主とつながっている場合

この対象に対して例文(1)から(3)などのように「kohottaa」動詞も使える。なぜなら対象は、上に止まるように別の場所に移らないからである。しかし、例文(4)のジッパーの場合は「vetää」(引く)、そして例文(6)の髪の場合は「laittaa」(設置する)という動詞が使われる。ジッパーは上から見ると引くような動作で上げるので、「vetää」が使われる。また髪型を作るとき、ただ単に上げるのではなく、上げて止めるという意味が含まれているので、「laittaa」という動詞が使われる。

例文(7)と(8)と(9)の場合も、対象の「幕」と「旗」は別の特定の場所に移動しないし上に止まるので、「kohottaa」も可能である。しかし、例文(11)の「アドバルーン」の場合、対象は自力で上がるので、「nostaa」が使えない。この場合、対象は意志を持っていないので、「kohottaa」動詞が使えるが、「päästää」(行かす)という動詞のほうが適切である。同じように例文(10)の「たこ」の場合、「kohottaa ilmaan」(空に上げる)も可能であるが、時間的に動作が続くことを表現したい場合、「lennättää」(飛ばす)という動詞のほうが適切である。例文(12)と(13)の場合、対象は自力で上がるほかスピード感が含まれているので、「nostaa」も「kohottaa」も使えない。この場合「laukaista」(発射する)または「ampua」(撃つ)という動詞が最も適切である。

- (1) 窓辺へ近づき、カーテンをあげると。(トルストイ)

Kun hän lähestyi ikkunaa ja nosti/kohotti verhon ylös...

Conj(when)+N:nom(he)+V:past:3sg(near)+N:part(window)+Conj(and)
+V:past:3sg(rise) +N:acc(curtain)+Prep(up).

- (2) 青年は宮のお顔が見たくて、そっと格子を上げる。(田辺聖子)

Nuorukainen halusi nähdä palatsiin ja hän nosti/kohotti hieman bambuverhoa.

N:nom(youngman)+V:past:3sg(want)+V:1inf(see)+N:acc(palace)+Conj(and)
+N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+Adv(a little)+N:acc(curtain)

- (3) 校長は椅子を離れてガラスの戸を上げた。(破戒 78)

Rehtori etääntyi tuolista ja nosti/kohotti lasi-ikkunan ylös.

N:nom(principal)+V:past:3sg(go away)+N:elative(chair)+Conj(and)
+V:past:3sg(rise)+N:acc(glass window)+Prep(up).

- (4) コードレスを肩に挟みながら、ジーンズのジッパーを上げる。(汽車・酒)

Hän laitto i langattoman puhelimen olalle ja veti farkkujen vetoketjun kiinni.

N:nom(he)+V:past:3sg(put)+Adj:acc(cordless)+N:acc(phone)+N:all(shoulder)
+Conj(and)+V:past:3sg(pull)+N:gen(jeans)+N:acc(zipper)+Prep(locked)

- (5) それをだしてきた、上衣の前をあげて腹のところに納めたが、(真空地帯・上 135)

Hän otti sen esille nosti/kohotti viittansa pielusta ja laitto sen vyötärölle.

N:nom(he)+V:past:3sg(take)+N:acc(it)+N:all(surface)+V:part:3sg(rise)+N:gen:3sg(cape)+N:part(front)+Conj(and)+V:past:3sg(put)+N:acc(it)+N:all(waist)

- (6) 丸髷に結ったり教師らしい地味な束髪に上げたりしてゐる。(或る女・前 80)

Hän solmii hiukset tai laittaa ne opettajamaiselle koruttomalle nutturalle.

N:nom(she)+V:3sg(bind)+N:pl:nom(hair)+Conj(or)+V:3sg(put)+N:acc(them)

+Adj:all(teacherlike)+Adj:all(plain)+N:all(bundle).

- (7) 幕をあげる。(新)

Nostan/Kohotan esiripun.

V:1sg(lift)+N:acc(curtain).

- (8) するすると旗を揚げる。(小)

Vedän/Hilaan/Nostan/Kohotan lipun ripeästi lipputankoon

V:1sg(pul)+N:acc(flag)+Adv(rapidly)+N:ill(flagpole).

- (9) 国旗をあげる。(新)

Nostan/Kohotan maan lipun salkoon.

V:1sg(lift)+N:gen(country)+N:acc(flag)+N:ill(pole).

- (10) 原っぱでたこをあげる。(大)

Lennätämme leijaa aukiolla.

V:3pl(fly)+N:part(kite)+N:adess(field).

- (11) アドバルーンをあげる。(新)

Kohotamme mainoskuumailmapallon taivaalle.

V:1pl(rise)+N:nom(balloon)+N:all(sky).

- (12) 花火を揚げる。(小)

Ammun/Laukaisen ilotulitusraketeja.

V:1sg(shoot)+N:pl:part(fireworks).

- (13) 町は市になったので、花火を揚げておいおいをした。(文)

Kunnan muuttumista kaupungiksi juhliittiin järjestämällä ilotulitus.

N:gen(county)+V:4inf:part(chage)+N:transit(city)+V:past:pas(celerate)+V:3inf:adess(hold)+N:nom(firework).

(1.4.1) 動作主とつながっている対象の比喩表現

例文(1)はのように比喩表現の場合、フィンランド語の動詞はまったく異なった基本的な意味を表している。フィンランド語の「hävitä」動詞は「負ける」という意味を表す。しかし、例文(2)は、文法的な比喩「何々のように」を使うので、フィンランド語でも似たような文法的な比喩「kuin…」が可能である。ただし、「朝が幕を上げる」のように「朝が」この表現で主語になることはフィンランド語ではあり得ない。比喩表現として「朝が幕を上げる」を扱うと、フィンランド語では「aamu koittaa」(朝が明るく)のように動詞を変えなければならない。

- (1) 夏期林間学校で一旗挙げんものと近藤舞子に赴くが、(明星 1956 年 11 月 204)

Ajattelin, että kesäsiirtolassa en häviä ja käännyin Maiko Kondooseen päin.

V:past:1sg(think)+Conj(that)+N:ines(summercamp)+Neg:1sg(not)+V(lose)

+Conj(and)+V:1sg(turn)+N:ill(MK)+Postp(toward)

- (2) 熱帯の朝が、幕をあげるやうに、するすると明け放れるのを(野火 67)

Kuin esirippu olisi nostettu koitti trooppinen aamu vetovedolta nopeasti.

Conj(like)+N:acc(curtain)+V:past:cond(be)+V:prt.prf(rise)+V:past:3sg(dawn)
+Adj:nom(tropical)+N:nom(morning)+Adv(stroke by stroke)+Adv(fast)

(1.5) 動作主の部分である対象

対象が体の一部分である場合、「nostaa」も[kohottaa]も一般的に使える。ただし、例文(2)と(3)のように命令が含まれている場合、「nostaa」のほうが適切である。また例文(7)と(8)と(12)のように対象「肩」は、ゆっくりした動きの場合、「kohottaa」のほうが適切である。例文(16)では動きは特に目立つようなものなので、「nostaa」のほうが適切である。

例文(17)では、ほかの所を見ることが連想されるので、「kääntää」(向ける)という動詞に「pää」(頭)という対象が使われているが、(21)のように「nostaa」も[kohottaa]も使える。この場合、見るという要素が連想されない。また、例文(18)から(20)のように対象は「目」である場合、同じく「kääntää」(向ける)という動詞が使えるが、「nostaa」と「kohottaa」を使いたい場合、対象は「katse」(視線)に変えなければならない。例文(22)の目玉も目と同じである。

(1) 賛成の人は手を挙げて下さい。(小)

Puolesta olevat nostakoot/kohottakoot kätensä ylös.

N:elat(for)+V:prt.prs:pl:nom(be)+V:imp:3pl(rise)+N:acc:3pl(hand)+Postp(up).

(2) 後ろで手を挙げろという声がした。(小)

Takaa kuului käsky nostaa kädet ylös.

Postp:part(back)+V:past:3sg(hear)+N:nom(order)+V:1inf(rise)+N:acc:pl(hand)
+Postp(up).

(3) 先生に質問したかったら手を挙げてからするのですよ。(研)

Jos haluat kysyä opettajalta, niin nosta ensin käsi ylös.

Conj(if)+V:2sg(want)+V:1inf(ask)+N:abl(teacher)+Conj(then)+V:imp:2sg(rise)
+Adv(first)+N:acc(hand)+Postp(up).

(4) 手をあげてあいさつをした。(文)

Nostin/Kohotin käden tervehdykseksi.

V:past:1sg(rise)+N:acc(hand)+N:trans(greeting).

(5) 拳固をあげて、自分の頭を力まかせに撲りつけた。(多情仏心・前 289)

Hän nosti/kohotti nyrkkinsä ja iski koko voimallaan itseään päähän.

N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+N:acc(fist)+Conj(and)+V:past:3sg(hit)+Adj(whole)
+N:ades:3sg(power)+N:ill:3sg(self)+N:ill(head).

(6) そのひとは指を一本あげてしづかにそれをおろしました。(銀河鉄道の夜 318)

Tämä henkilö nosti/kohotti sormensa ylös ja laski sen hiljaa alas.

N:nom(this)+N:nom(person)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(finger)+Prep(up)
+Conj(and)+V:past:3sg(putdown)+N:acc(it)+Adv(slowly)+Prep(down)

- (7) 三四郎は肩を床から上げて、。(三四郎)

Sanshiroo kohotti hartiansa vuoteelta.

N:nom(S)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(shoulder)+N:abl(bed).

- (8) 雑夫長が薪を脇にはさんで、片肩を上げた窮屈な恰好で、(蟹工船 65)

Työnjohtaja laittoi halot kainaloihin ja olkapäät kohotettuna vaivalloisesti

N:nom(chief)+V:past:3sg(put)+N:pl:acc(wood)+N:pl:ill(underarm)+Conj(and)

+N:pl:nom(shoulder)+V:prt.prf.pas::ess(rise)+Adv(troublesome)

- (9) 婦人は背後へ高々と踵を上げて向うへ飛んだ。(高野聖 37)

Rouva nosti/kohotti kantapäätänsä korkealle taakseen ja lensi toiselle puolelle.

N:nom(lady)+V:past:3sg(rise)+N:pl:acc()+Adj:all(high)+Postp:3sg(behind)

+Conj(and)+V:past:3sg(fly)+Adj:all(other)+N:all(side).

- (10) 白耳はそれを見上げていたが、もう下から吠えるようなことはせず尻尾を上に向けて何事もなかったように引揚げて行つた。(小説新潮 1956 年 8 月 302)

Valkokorva katsoi sitä ylös, mutta ei enää haukkunut, vaan nosti/kohotti häntänsä ylös ja lähti pois aivan kuin mitään ei olisi tapahtunut.

N:nom(V)+V:past:3sg(look)+N:part(it)+Prep(up)+Conj(but)+Neg:3sg(not)

+Adv(anymore)+V:prt.prf(bell)+Conj(but)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(tale)

+Prep(up)+Conj(and)+V:past:3sg(go)+P(away)+Adv(just)+Conj(as)

+N:part:neg(nothing)+Neg:3sg(not)+V:past:cond(be)+V:prt.prf(happen)

- (11) 腿(モモ)をあげる働きがある。(平凡百科 2)

Sillä on reittä kohottava/nostava vaikutus.

N:ades(it)+V:3sg(be)+N:part(thigh)+V:prt.prs:nom(rise)+N:nom(effect).

- (12) 時屋一等兵は一寸薄い唇の右端をあげ、(真空地帯・上 68)

Sotamies Tokiya kohotti hiukan ohuiden huulensa oikeaa puolta.

N:nom(soldierT)+V:past:3sg(rise)+Adv(alittle)+Adj:pl:gen(thin)

+N:pl:gen:3sg(lip)+Adj:part(right)+N:part(side).

- (13) 文鳥は嘴を上げた。(文鳥)

Jaavan peippo nosti/kohotti nokkaansa.

N:gen(Java sparrow)+V:past:3sg(rise)+N:part:3sg(beak).

- (14) 頭を少々畳から上げて見ると、。(吾輩は猫である)

Nostaessani/Kohotaessani päätäni hieman tatamilta.

V:2inf:ines:1sg(rise)+N:acc:1sg(head)+Adv(alittle)+N:abl(tatami).

- (15) ほりながらときどき、頭をあげて、左右に気をくばったが、(真空地帯・86)

Samalla, kun hän kaivoi, nosti/kohotti hän päätään silloin tällöin pälyillen ympärille.

Adv(sametime)+Conj(when)+N:nom(he)+V:past:3sg(dig)+V:past:3sg(rise)

+N:nom(he)+N:part:3sg(head)+Adv(sometime)+V:2inf:ins(look)+N:all(around)
 (16) 向うで鎌首を上げたと思ふと草をさらさらと渡った。(高野聖 20)

Ajatellessaan päättään nostanutta käärmettä hän ylitti kahisten nurmen.
 V:2inf:ines:3sg(think)+N:part:3sg(head)+V:prt.prf:part(rise)+N:part(snake)
 +N:nom(he)+V:past:3sg(cross)+V:2inf:ins(rustle)+N:acc(grass).

(17) 女は、顔をおむつからあげることもなく。(B)

Nainen ei ehdi kääntämään päättään pois vaipoista.
 N:nom(woman)+Neg:3sg(not)+V(havetime)+V:3inf:ill(turn)+N:part:3sg(head)
 +Postp(away)+N:pl:elat(diaper).

(18) 新聞から目を上げて窓の外を見た。(研)

Hän nosti/kohotti katseensa ylös sanomalehdestä ja katsoi ikkunasta ulos.
 N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(look)+Postp(up)+N:elat(paper)
 +Conj(and)+V:past:3sg(look)+N:elat(window)+Postp(out).

(19) 私は不図眼を上げて其所に立つてゐるKを見ました。(こころ 247)

Nostin/kohotin hieman katsettani ja katsoin siinä seisovaa K:ta.
 V:past:3sg(rise)+Adv(alittle)+N:part:1sg(look)+Conj(and)+V:past:1sg(look)
 +N:ess(there)+V:prt.prs:part(stand)+N:part(K).

(20) 目をあげて相手を見つめる。(大)

Hän nosti/kohotti katseensa ja tuijotti vastustajaansa.
 N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(look)+Conj(and)+V:past:3sg(look)
 +N:ill:3sg(enemy).

(21) 木村はふと顔を上げてしげしげと葉子を見た。(或る女・前 221)

Kimura nosti/kohotti yllättäin kasvonsa ja katsoi Yookoa tarkkaan.
 N:nom(K)+V:past:3sg(rise)+Adv(suddenly)+N:acc:3sg(face)+Conj(and)
 +V:past:3sg(look)+N:part(Y)+Adv(carefully)

(22) 事務室で週番下士官の調査がはじまったが、安西ははいっという言葉を繰返しては
 目の玉を上の方にあげた。(真空地帯・上 210-211)

Toimistossa oli päivystävän aliupseerin tutkimus alkanut, mutta Anzai vain
 toisti kyllä sanaa suunnaten silmämunansa ylös.
 N:ines(office)+V:past:3sg(be)+V:prt.prs:gen(on charge)+N:gen(lower officer)
 +N:nom(investigation)+V:prt.prf(begin)+Conj(but)+N:nom(A)+Adv(just)
 +V:past:3sg(repeat)+N:part(yesword)+V:2inf:ins(direct)+N:pl:acc:3sg(eyeball)
 +Prep(up)

(1.5.1) 対象が動作主の一部分である場合の換喩表現

最初の例文(1)では、見ることが連想される場合、フィンランド語では「kääntää」(向ける)という動

詞が使ったほうがいいが、見ることが文脈でも分かるので、「nostaa」と「kohottaa」も可能である。例文(2)のように見ることが連想される場合、例えば「katsoa」(見る)という動詞が使われる。

例文(3)と(4)の対象「目」は、ふだん例文(5)と(6)と同じように「katse」(視線)で表現できる。例文(7)のような「腰を動かす」ような換喩表現がフィンランド語には存在しないので、自動詞の「nousta」(立ちあがる)が使われる。しかし、例文(8)の「お尻をあげる」という換喩表現は、フィンランド語でも同じ「動く」という連想を引き起こす。最後の例文(9)は、「殺す」意味を連想させるので、フィンランド語では「ottaa」(取る)という動詞が(1.1.2)の(5)と同じように「殺す」結果を招く。

- (1) 顔をあげると壘局子はもう笑いではなかった。(B)

Kun nostin/kohotin kasvoni, niin Ruriko ei enää hymyillyt.

Conj(when)+V:past:1sg(rise)+N:acc:1sg(face)+Conj(then)+N:nom(R)
+Neg:3sg(not)+Adv(any more)+V:prt.prf(smile).

- (2) 下ばかり見ていないで、顔を上げなさい。(文)

Älä tuijota alas vaan katso ylös.

Neg:imp:2sg(not)+V(stare)+Postp(down)+Conj(but)+V:imp:2sg(look)+Postp(up).

- (3) 遠くの山に向かって目をあげた。(小)

Käänsin/Kohotin katseeni kaukaisten vuorten suuntaan.

V:past:1sg(turn)+N:acc:1sg(look)+Adj:pl:gen(far)+N:pl:gen(mountain)
+Postp(toward).

- (4) わたしは彼女のほうへ目をあげた。(シ'ット)

Nostin/Kohotin katseeni hänen suuntaansa.

V:past:1sg(rise)+N:acc:1sg(look)+N:gen(his)+N:ill:3sg(direction).

- (5) だれだろう。と思ってひょいと視線をあげると。(B)

Ajattelin että kuka siellä nyt on ja nostin/kohotin vähän katsettani.

V:past:1sg(though)+Conj(that)+N:nom(who)+N:ades(there)+Adv(now)
+V:3sg(be)+Conj(and)+V:past:1sg(rise)+Adv(alittle)+N:part:1sg(look).

- (6) 新治と水夫は訊ねる視線を上げた。(潮騒 144)

Shinji ja Mizuo nostivat kysyvän katseensa.

N:nom(S and M)+V:past:3sg(rise)+V:prt.prs:acc(ask)+N:acc:3sg(look).

- (7) びっくりして腰をあげる。(B)

Yllätyin ja nousin seisomaan.

V:past:1sg(surprise)+Conj(and)+V:past:1sg(rise)+V:3inf:ill(stand).

- (8) 男はもとより尻を上げるのは厭である。(虞美人草)

Miehet ovat entuudestaankin huonoja nostamaan/siirtämään takapuoltaan

N:pl:nom(men)+V:3pl(be)+N:elat:3sg(p(before))+Adj:pl:part(bad)
+V:3inf(rise/move)+N:part:3pl(hip).

- (9) 漢軍之を追撃して虜主を挙げる事数千。(李陵 158)

Han-armeija ajoi tätä takaa ja otti tuhansia vihollispäitä.

N:nom(army)+V:past:3sg(drive)+N:part(that)+Postp(frombehind)+Conj(and)
+V:past:3sg(take)+Num:pl:part(thousands)+N:pl:part(enemyhead)

(1.5.2) 対象が動作主の一部である場合の比喩表現

完全に別の意味を表している比喩表現の場合はふだん別の言語と意味が直接合わないが、体の一部分になると動作が人間誰にでも同じようなものなので、共通点がかなり多く見つかる。例えば最初の例文(1)では、「手をあげる」ことはフィンランド語の中でも「降伏の印」という意味を連想させる。同じように例文(2)では、「手を誰かに対してあげる」場合、フィンランド語でも「暴力を振る」という連想が引き起こされる。しかし、例文(3)と(4)のように言語独特の連想のほうが一般的である。「腕をあげる」という意味の連想は、フィンランド語の中で「hioa taitojaan」(技を研ぐ)と言った表現で得られる。

- (1) 手をあげる。(新) >お手上げ

En voi muuta kuin nostaa kädet ylös.

Neg:1sg(not)+V(can)+N:part(else)+Conj(than)+V:1inf(rise)+N:pl:acc(hand)
+Postp(up).

- (2) 父は、癩癩を起して母に手を上げることもあった。(B) 暴力を振る

Suuttuessaan isä kohotti kätensä myös äitiä kohtaan.

V:2inf:ines:3sg(angry)+N:nom(father)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(hand)
+Adv(also)+N:part(mother)+Postp:ill(against).

- (3) 根は愛妻家などで決して直接手を上げる様な事はなく、(文芸春秋 1953 年 10 月 232)

Vaimoiaan rakastava henkilö ei missään tapauksessa kohota kättään vaimoiaan kohtaan,

N:part:3sg(wife)+V:prt.prs:nom(love)+N:nom(person)+Neg:3sg(not)+N:ines(any)
+N:ines(case)+V(rise)+N:part:3sg(hand)+N:part:3sg(wife)+Postp(against).

- (4) 腕をあげる。(大)

Parannan/Hion taitojani.

V:1sg(make better/sharpen)+N:pl:part:1sg(skill).

- (5) 「煙ゆる情炎」以来、腕をあげて、(スクリーン 1956 年 2 月 144)

“Liekehtivän kiihkon” jälkeen hän on parantanut otetaan.

N:gen(L)+Postp(after)+N:nom(he)+V:3sg(be)+V:prt.prf(make better)
+N:part:3sg(grasp)

(1.6) 対象が具体物でない場合

対象は「水」や「土」や「煙」や「火」などのような数えられない物体である場合、フィンランド語の表現がかなり変わる。ただし、この場合も例文(1)と(2)のように、動作主は「水位」や「上台」の上が

る具合をコントロールできると、「nostaa」も「kohottaa」も可能である。また例文(1)のように対象の「土台」全体が「高くなる」という意味で変化すると、「korottaa」(高める)という動詞も使える。そして、例文(22)のように対象になる水は、動作主「花」の中であがる場合、「imeä」(吸う)などほかの動詞のほうが適切である。

一般的に、「煙」や「炎」などのような対象は「花火」と同じように、自力であるいは自然的に上昇するので、「nostaa」動詞が使えない。しかし、例文(3)と(4)と(10)と(16)と(17)のように「kohottaa」のほかに「nostattaa」(あがらせる)という動詞も使える。これらの動詞の違いは例文(8)と(9)で明らかになる。対象「湯気」と「ほこり」に対して到着点「空中に」などを加える場合、あるいは例文(10)のように対象を「ほこり雲」のように全体的な対象に変える場合、「kohottaa」動詞も可能である。このように「タコを揚げる」や「ロケットを上げる」場合も両方が可能である。しかし、前述の対象は自力で上がれない場合は、「nostattaa」動詞は使えない。

例文(5)の対象「沫」や(19)の「光」の場合、フィンランド語ではふだん「nostaa」や「kohottaa」や「nostattaa」というような動詞では描かれないので、「päästää」(行かす)などの動詞が使われる。なぜなら「沫」も「光」もまっすぐ上に上がらないからである。対象が「光線」や「視線」など方向性がはっきりしている場合、「kohottaa」も「nostaa」も可能である。

例文(6)と(7)と(18)そして(11)から(14)の場合も、別の動詞が使われるが、場合によって「kohottaa」も「nostattaa」も可能である。例文(7)のように「nostattaa höyryä」(湯気を上げる)の代わりに「höyrytä」(湯気があがる)という別の動詞が使われている。また、(12)から(14)のように「あげる」動作は「摘機が落ちる」ように上下の方向ではない場合、あるいは「あげる」スピードは「汽笛」や「列車」のように速い場合、「päästää」(行かす)動詞が使われる。

例文(20)と(21)のような自然現象の場合、フィンランド語では自動詞「nousta」(あがる)が使われている。

- (1) だからあたし、土台を上げなくっちゃいけないと申しましたでしょう。(トルストイ)

Siksihän minä sanoin ,että alustaa pitää nostaa/kohottaa/korottaa.

Conj:p(that's why)+N:nom(I)+V:past:1sg(say)+Conj(that)+N:part(base)
+V:3sg(must)+V:1inf(lift)

- (2) 取水のため水位を上げ。(平凡百科 2)

Vedenoton takia nostamme/kohotamme veden pintaa.

N:gen(water take)+Postp(bahalf)+V:1pl(rise)+N:gen(water)+N:part(level).

- (3) 波しぶきをあげる。(新)

Aallokko löi/nostatti/kohotti vaahtopäitä.

N:nom(waves)+V:past:3sg(hit/rise)+N:pl:part(sea spray)

- (4) 見えない天の川の水もそのときはゆらゆらと青い焰のやうに波をあげるのです。

(銀河鉄道之夜 298)

Silloin myös näkymätön linnunradan virta nostatti/kohotti keinuvia laineita
kuin sininen liekki.

- Adv(thattime)+Adv(also)+Adj:nom(invisible)+N:gen(milkyway)+N:nom(stream)
+V:past:3sg(makerise)+V:prt.prs:part(swing)+N:pl:part(wave)+Conj(like)
+Adj:nom(blue)+N:nom(flame).
- (5) やがて水沫をあげて全身をあらはした。(冬の宿 17)
Viimein se näytti koko hahmonsa päästäen vaahtoa.
Adv(atlast)+N:nom(it)+V:past:3sg(show)+Adj(whole)+N:acc:3sg(appierance)
+V:2inf:ins(let)+N:part(foam)
- (6) 湯気をあげる下草の上に点在するのは、珍らしく花やいだ光景であった。(B)
Usvaisella ruohikolla siellä täällä oli harvinainen kukkaisu näkymä.
Adj:ades(misty)+N:ades(grass)+N:ades(therehere)+V:past:3sg(be)
+Adj:nom(rare)+Adj:nom(flower)+N:nom(view).
- (7) ホカホカと湯気を上げる水餃子。(汽車・酒)
Lämpiminä höyryäviä gyoozia.
Adj:pl:ess(warm)+V:prt.prs(steam)+N:pl:part(gyoza).
- (8) 爆発して湯気でもあげてみるやうに見えるのでした。(銀河鉄道の夜 263)
Räjähtäessä näytti siltä, että se nostattaisi vesihöyryä.
V:2inf:ines(expose)+V:past:3sg(look)+N:abl(it)+Conj(that)+N:nom(it)
+V:cond:3sg(rise)+N:part(steam)
- (9) 砂ぼこりを上げながら、主人の後になり前になりして、(田園の憂鬱 5)
Hän juoksi miehensä edessä ja takana nostattaen hiekkapölyä.
N:nom(she)+V:past:3sg(run)+N:acc:3sg(husband)+Postp(front)+Conj(and)
+Postp(behind)+V:2inf:ins(rise)+N:part(sand dust)
- (10) それに風の強い日で、青山の練兵場は黄い埃を揚げた。(生)
Sen lisäksi tuulinen päivä nostatti/kohotti Aoyaman harjoituskentälle keltaisen
pölypilven.
N:gen(it)+N:trans(additon)+Adj:nom(windy)+N:nom(day)+V:past:3sg(rise)
+N:gen(A)+N:all(training field)+Adj:acc(yellow)+N:acc(dust cloud).
- (11) 溶岩円頂丘が...現在も噴煙を上げる。(平凡百科 2)
Pyöreä laavahuippu savuaa vielä tänäpäivänäkin.
Adj:nom(round)+N:nom(lava top)+V:3sg(smoke)+Adv(still)+N:ess:p(also today).
- (12) 初め、墜ちて黒煙を上げているのは敵機だと、誰もが思っていた。(阿川弘之)
Ensin kaikki luulivat, että putoava mustaa savua päästävä kone olisi
viholliskone.
Num(first)+N:nom(everybody)+V:past:3sg(think)+Conj(that)+V:prt.prs(fall)
+Adj:part(black)+N:part(smoke)+V:prt.prs(let)+N:nom(plane)+V:past.cond(be)
+N:nom(enemy).

- (13) けたたましい汽笛が一抹の白煙を青空に挙げて鳴りはためき、(或る女・前 164)
 Korvia viiltävä höyrypilli vihelsi päästään yhden viivan valkoista savua siniselle taivaalle.
 N:pl:part(ear)+V:prt.prs:nom(cut)+N:nom(steamwhistle)+V:past:3sg(whistle)+V:2inf:ins(let)+N:acc(online)+Adj:part(white)+N:part(smoke)+Nadj:all(blue)+N:all(sky).
- (14) 外は吹雪いてきて、…列車は雪煙をあげながら走って。(汽車・酒)
 Ulkona alkoi pyrytä ja juna kiiti syösten lunta taivaalle.
 N:ess(outside)+V:past:3sg(start)+V:1inf(snow)+Conj(and)+N:nom(train)+V:past:3sg(speed up)+V:2inf:ins(throw)+N:part(snow)+N:all(sky).
- (15) さかんに雪げむりをあげている野をながめ。(三浦哲郎)
 Katsoin lumisena tupruavaa peltoa.
 V:past:1sg(look)+Adj:ess(snowy)+V:prt.prs(smoke)+N:part(field).
- (16) のろしをあげる。(新)
 Sytytän/Teen/Kohotan/Nostatan merkkitulen.
 V:pas(light/make/rise)+N:acc(signal fire).
- (17) 真っ赤な炎をあげて燃える。(大)
 Se palaa nostattaen/kohottaen tulipunaiset lieskat taivaalle.
 N:nom(it)+V:3sg(burn)+V:2inf:ins(rise)+Adj:pl:acc(red)+N:pl:acc(flame)+N:all(sky).
- (18) 巻は焦げて、にわかに炎をあげた。(B)
 Satama paloi ja liekehti kiivaasti.
 N:nom(harbor)+V:past:3sg(burn)+Conj(and)+V:past:3sg(flame)+Adv(hastily).
- (19) 手首にぶつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、(銀河鉄道の夜 274)
 Törmäyksessä ranteeseen tullut juova päästi kaunista fosforihehkua.
 N:ines(hit)+N:ill(wrist)+V:prt,prf(come)+N:nom(sroke)+V:past:3sg(let)+Adj:part(beautiful)+N:part(fosforlight)
- (20) 夕方になると潮があげてくる。(大)
 Illalla tulee/nousee nousuvesi/vuoksi. >満ちる。
 N:ades(evening)+V:3sg(come/rise)+N:nom(high tide/tide).
- (21) このへんが内海のまん中で西からも東からも潮が上げて来て、(暗夜行路・前 173)
 Tämä on sisämeren keskustaa ja nousuvesi nousee sekä idästä että lännestä.
 N:nom(this)+V:3sg(be)+N:gen(inlandsea)+N:part(center)+Conj(and)+N:nom(tide)+V3sg(rise)+Conj(also)+N:elat(east)+Conj(also)+N:elat(west)
- (22) 切花が水をあげる。(岩)
 Leikattu kukanvarsi imee vettä.

V:prt:prf(cut)+N:nom(flower stem)+V:3sg(suck)+N:part(water)

(1.6.1) 数えられない対象の比喩表現

この場合も、例文(2)のようにフィンランド語ではまったく異なった表現になることが多い。しかし、例文(1)の「のろしを上げる」ことや「波をあげる」ことは、フィンランド語でもそれぞれ「注目させる」や「乱れをおこす」という連想を引き起こす。最後の例文(4)は例えとして使われる可能性もあるので、フィンランド語でも似たような表現が可能である。

- (1) このときに、分子生物学の研究を志す日本の学者たちはノロシを上げたのである。

(生命の暗号を解く 163)

Silloin molekyylibiologian tutkimuksessa toimivat japanilaiset tutkijat nostattivat merkkitulen.

Adv(thattime)+N:gen(moleculebiology)+N:ines(research)+V:prt.prs:pl:nom(act)
+Adj:nom(japanese)+N:nom(researcher)+V:past:3pl(makerise)+N:acc(signalfire)

- (2) 今にきつと世界的な仕事をして、日本の為に気焰をあげてくれるだろう (友情 44)

Nyt hän varmaan tekee jo maailmanlaajuista työtä ja puhuu Japanin puolesta.

Adv(now)+N:nom(he)+Adv(probably)+V:3sg(do)+Adv(already)+Adj:part
(wordwide)+N:part(work)+Conj(and)+V:3sg(speak)+N:gen(J)+Postp(bahalf)

- (3) この三つが一緒になって、常に凄じい波を挙げた。(生)

Nämä kolme yhtyivät ja nostattivat jatkuvasti hirvittäviä aaltoja.

N:nom(these)+Num:nom(3)+V:past:3pl(unite)+Conj(and)+V:past:3pl(rise)
+Adv(continuously)+Adj:pl:part(terrible)+N:pl:part(wave).

- (4) 一方を揉み消す為には一方にどんと火の手を上げる必要がある。(或る女・前 27)

Sammuttaakseen yhden täytyy toisen antaa palaa.

V:1inf:trans:3sg(extinguish)+N:gen(one)+V:3sg(must)+N:gen(other)+V:1inf(let)
+V:1inf(burn).

(1.6.2) 特殊な数えられない物の場合

この「あげる」の用法は、フィンランド語の「nostaa」や「kohottaa」のにはないので、具体的に「吐くこと」を表す「oksentaa」という動詞が使われる。しかし例文(4)のように「antaa ylen」(上に与える)という慣用句も多少使われている。

- (1) 昼食べたものを皆あげてしまった。(研)

Oksensin kaikki, mitä olin päivällä syönyt.

V:3sg(rise)+N:acc(everything)+Conj(what)+V:past:1sg(be)+N:ades(day)
+V:prf(eat)

- (2) 急にあげそうになった。(小)

Rupesi yhtäkkiä oksettamaan.

V:past:3sg(start)+Adv(suddenly)+V:3inf:ill(make vomit).

- (3) 胸が上げそうだ(むかむかしてはきたくなった)。(新)

Minulla on huono olo.

N:ades(I)+V:3sg(be)+Adj:nom(bad)+N:nom(feeling)

- (4) 船に酔ってすっかりあげてしまう。(大)

Tulin merisairaaksi ja annoin ylen.

V:past:1sg(come)+N:trans(seasick)+Conj(and)+V:past:1sg(give)+Adv(over)

(1.7) 想像の中にある対象の場合

以下の例文のように、具体的な対象ではないときも、想像の中で具体的なものと同じように「あがる」場合、「nostaa」も[kohottaa]も可能である。例文(2)と(3)の場合、対象になる「肩先」と「ウェスト線」などは洋服の一部であるので、具体的にあげられるものでもある。

- (1) (15+17)下に2を書いて1を上上げる。(研)

Kirjoitetaan 2 alas ja nostetaan/kohotetaan/siirretään 1 ylös.

V:pas(write)+Num(2)+Postp(down)+Conj(and)+V:pas(rise/move)+Num(1)
+Postp(up)

- (2) 肩線は肩先とネック・ポイントを5ミリ上げてカーブ線で訂正します。(婦人倶楽部 1956年10月付録 流行のジャケット集 62)

Hartialinja korjataan käyräviivalla nostamalla/kohottamalla olkapäätä ja kaulapistettä 5milliä.

N:acc(shoulderline)+V:pas(fix)+N:ades(curveline)+V:3inf:ades(rise)
+N:part(shoulder+Conj(and)+N:part(neckpoint)+N:part(5 millimeter)

- (3) ウエスト線を3センチ上げ、そこからスカート丈をとる。(婦人の友 1956年12月 251)

Nostetaan/Kohotetaan vyötäröä 3 senttiä ja otetaan siitä hameen mitta.

V:pas(rise)+N:part(waist)+N:part(centimeter)+Conj(and)+V:pas(take)
+N:elat(it)+N:gen(skirt)+N:nom(measure).

(1.8) 基本的な上昇の複合語

前に述べた「申し上げる」や「縛り上げる」などの複合動詞と同じように以下の動詞もフィンランド語で直接「nostaa」などの「あげる」の基本的な意味を表す動詞に結びつかない。以下の例文では、「あげる」がなくてもフィンランド語ではまったく同じ訳になる。ただし、れいぶん(3)の場合、「ilmaan」(空中に)は同じようなことを連想させる。

- (1) 取りあげる。(新)

Ottaa ylös/pois/käsittelyyn.

V:1inf(take)+Adv(up/away)/N:ill(treatment).

- (2) 並べあげる。(新)

Laittaa jonoon.

V:1inf(put)+N:ill(line).

- (3) ロケットを打ちあげる。(大)

Laukaisemme raketin ilmaan.

V:1pl(shoot)+N:acc(rocket)+N:ill(air).

(2) 対象が意志をもつ具体物

フィンランド語の「nostaa」と[kohottaa]動詞は、上述のように「あげる」に最も近いフィンランド語の動詞でありながらも、対象は自力であがる場合「nostaa」が使えないし、そして以下の例文のように対象は自分の意志であがる場合「kohottaa」も使えなくなる。「nostaa」と[kohottaa]の対象は、自分の意志をもっている場合、それは「箱」と「魚」と同じようにあげられる。自分生石で移動するのではない。

(2.1) 意志をもつ具体物が動物である

以下の例文(1)では、猫が自分で膝にのぼるという意味解釈の場合、「nostaa」動詞が使えないが、「持ち上げる」場合は「nostaa」が可能である。例文(1)と(2)のように猫と雲雀は自分の意志であがるが、それを許す(させる)のは別の意志を持つもの(女師匠)である場合、フィンランド語では基本的に「あげる」とは別の意味を表す「päästää」(行かす)動詞が使われる。

- (1) 「牡と名のつくものは猫も膝にあげちゃいけないよ。」(小説春秋 1956年7月39)

Ne, joiden nimi päättyy o-hon, eivät saa päästää edes kissaa polvelle.

N:nom(those)+N:gen(whose)+N:nom(name)+V:3sg(end)+N:ill(o)+Neg:3pl
+V(may)+V:1inf(let)+Adv(even)+N:part(cat)+N:all(lap).

- (2) 盲目の女師匠が物干台に立ち出でて雲雀を空に揚げているのを(春琴抄 181)

Sokean naisopettajan pyykkitelineillä päästämässä peippoa vapaaksi.

Adj:acc(blind)+N:acc(teacher)+N:pl:ades(clothespole)+V:3inf:ines(let)
+N:part(skylark)+Adj:trans(free).

(2.2) 意志をもつ対象が子供など動作主と対等でないものである

人が対象である場合、フィンランド語では「人を行かせる」ような意味を表す動詞が使われる。例えば、例文(1)から(3)の場合、強制的な意味が含まれているので、「laittaa」(置く)という動詞が適切である。しかし、動作主は対象の希望で生かす場合、例文(4)と(5)のように「päästää」(行かす)あるいはその自動詞「päästä」(行ける)が使われる。例文(6)と(7)のように、対象が任務を果たすために到着点に行かされる場合、「lähettää」(送る)という動詞が使われる。この動詞は、学校に勉強という任務を果たすために行かされる場合、(1)から(3)の例でも使える。

- (1) 私は息子を東京の学校に上げた。(研)

Laitoin poikani kouluun Tokioon.

V:past:1sg(put)+N:acc:1sg(son)+N:ill(school)+N:ill(T).

- (2) 子供を2人とも大学に上げた。(小)

Laitoin molemmat lapseni yliopistoon.

V:past:1sg(put)+Adj:acc(both)+N:acc:1sg(child)+N:ill(university).

- (3) 子供が六歳になったら小学校にあげる。(大)

Kun lapsi täyttää 6 vuotta, niin laitan hänet ala-asteelle.

Conj(when)+N:nom(child)+V:3sg(fill)+N:part(3years)+Conj(then)+V:1sg(put)
+N:acc(him)+N:all(elementary).

- (4) おくみが十四になつて女学校へ上げて貰ったばかりのときに(桑の実 6)

Kun Okumi oli täyttänyt 14 ja päässyt juuri tyttökouluun.

Conj(when)+N:nom(O)+V:past:3sg(be)+V:prt.prf(fill)+Num(14)+Conj(and)
+V:prt.prf(get)+Adv(just)+N:ill(girlschool).

- (5) あれ切りしか休まないで落第するなんか、変だなあ。あれくらゐなら、僕なんか上げてもらえるんだがなあ。(冬の宿 129)

Repata vaikkei siitä lähtien pitänyt edes taukoja, Outoa! Siinä tapauksessa voisivat päästää minut.

V:1inf(fail)+Conj:neg(although)+N:elat(from that)+V:2inf:ins(start)
+V:prt.prf(hold)+Adv(even)+N:pl:part(break)+N:part(strange).N:ess(in that)
+N:ines(case)+V:cond(could)+V:1inf(let)+N:acc(me).

- (6) 話しがしてみたくなつたんで、それでわざわざ使を上げた様な訳なんです。(門)

Hän lähetti siis lähetin vartavasten, koska tuli puhuma päälle.

N:nom(he)+V:past:3sg(send)+N:acc(messenger)+Adv()+Conj(because)
+V:past:3sg(come)+V:3inf(speak)+N:all(mood).

- (7) 親達が一応実家へ帰らせ、あらためて宮仕えに上げることになった。(田辺聖子)

Vanhemmat palauttivat minut ensin kotiin ja lähettivät sitten uudestaan hovipalvelukseen.

N:nom(parents)+V:past:1pl(return)+N:acc(me)+Adv(firstly)+N:ill(home)
+Conj(and)+V:past:3pl(send)+Adv(then)+Adv(newly)+N:ill(court service).

(2.2.1) 対象が子供であるが、到着点がない場合

フィンランド語の「nostaa」動詞では「生む」という意味を連想させる換喩表現または比喩表現がないので、以下の例文の「あげる」の意味は「synnyttää」(生む)または「saada」(受ける)という動詞で表現される。例文(2)のようにくだけた言い方では、「pyöräyttää」(回す)という動詞の比喩表現も使える。

- (1) 3人の男子を挙げる。(研)

Hän sai/synnytti 3 poikaa.

N:nom(she)+V:past:3sg(get/bear)+N:part(3 sons)

- (2) 結婚して一男二女をあげた。(大)

Hän meni naimisiin ja sai/synnytti/pyöräytti pojan ja 2 tyttöä.

N:nom(she)+V:past:3sg(go)+N:ill(marry)+Conj(and)+V:past:3sg(get/bear/roll)
+N:acc(son)+Conj(and)+N:part(2 daughter)

- (3) 母しげ女は京都屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男四女を挙ぐ。
(春琴抄 138)

Anzaeimonille vaimoksi ja synnytti 2 poikaa ja 4 tyttöä.

N:all(A)+N:trans(wife)+Conj(and)+V:past:3sg(bear)+N:part(2sons)+Conj(and)
+N:part(4girls)

(2.3) 意志をもつ対象が大人である

上述の学校などに行かせる場合、対象は何らかの命令を受けたので、動作主は、対象と一緒に
行かなくても、気持ちの上で対象の動きを管理した。しかし、以下の例文では、対象は動作主と
同等であるので連れていく例が多い。せいぜい例文(6)と(7)の「芸者」の場合、文の意味は上述
と似ている。このような例では、フィンランド語の「lähettää」(送る)動詞が動作主から離れる意味
を表すので、別の動詞「tilata」(注文する)などが使わなければならない。例文(1)と(3)と(4)で
は、動作主が対象を連れていくので、フィンランド語の中で「johdattaa」(導く)や「ohjata」(リード
する)や「viedä」(持っていく)などの動詞が使われる。例文(2)と(5)では対象は玄関で経比され
るので、「päästää sisään」(中に行かす)という表現のほうが適切である。最後の例文(6)と(7)の
対象「候補者」は、具体的にどこにも行かないので、「送る」ことも「導く」ことも不可能である。その
ためにフィンランド語では、「asettaa」(設置する)という動詞の換喩表現が使われている。

- (1) 女が玄関先で大きな声をたてるため、仕方なく自分が出て応接室へ上げた。(B)

Koska nainen puhui kovaäänisesti aulassa, vein hänet itse odotushuoneeseen.

Conj(because)+N:nom(woman)+V:past:3sg(speak)+Adv(loudly)+N:ines(hall)
+V:past:1sg(take)+N:acc(her)+N:nom(myself)+N:ill(waitingroom).

- (2) 自分の家へ君を上げては、死んだ奴らに済まぬと感じた男だ。(帰郷 135)

Mies, josta tuntui väärältä kuolleita kavereita kohtaan päästää sinut omaan
asuntoonsa.

N:nom(man)+N:elat(fromwhich)+V:past:3sg(feel)+Adj:elat(wrong)
+V:prt.prf:pl:part(dead)+N:pl:part(friend)+Postp(against)+V:1inf(let)
+N:acc(you)+N:ill(own)+N:ill:3sg(home).

- (3) 河原田は日本座敷へ二人をあげた。(むらぎも 166)

Kawaharada johdatti molemmat tatamihuoneeseen.

N:nom(K)+V:past:3sg(lead)+N:acc(both)+N:ill(tatamiroom)

- (4) お客をざしきに上げなさい。(文)

Ohjatkaa/Viekää vieras tatamihuoneeseen.

V:imp:2pl(lead/take)+N:acc(guest)+N:ill(tatamiroom).

- (5) 一見(イチゲン)の客はあげるわけにいかない。(大)

Asiakkaita,jotka eivät ole tuttuja,ei saa päästää sisään.

N:pl:part(guest)+N:nom(which)+Neg:3pl(not)+V(be)+Adj:pl:part(known)
+Neg:3sg(not)+V(may)+V:1inf(let)+Postp:ill(inside).

- (6) 芸者をあげて大騒ぎする。(岩)

Tilaamme/Kutsumme Geishoja ja pidämme kunnon juhlat.

V:1pl(order/call)+N:pl:part(G)+Conj(and)+V:3pl(hold)+Adj:acc(good)
+N:pl:acc(party).

- (7) 芸者をあげて一晩愉快地に遊び明かす。(大)

Tilasimme Geishoja ja pidimme hauskaa aamuun asti.

V:past:1pl(order)+N:pl:part(G)+Conj(and)+V:3pl(hold)+Adj:part(fun)
+N:ill(morning)+Postp(untill).

- (8) 候補者をあげる。(新)

Asetamme ehdokkaan.

V:1pl(put)+N:acc(candidate).

- (9) そこで、クラスとしてとり上げたこの問題を自治会でとり上げてやってもらおうというので
委員をあげることになったら、受験勉強をやっている人たちが皆立候補して出てくるので
す。(平和 1954 年 6 月 35)

Kun ruvetaan asettamaan edustajaa oppilasneuvostoon, jotta saataisiin
luokassa käsitelty ongelma sen käsittelyyn, asettuvat kaikki ehdokkaiksi.

Conj(when)+V:pas(start)+V:3inf:ill(put)+N:part(representative)
+N:ill(student council)+Conj(to)+V:pas:cond(get)+N:ines(class)
+V:pas:prt.prf:nom(handle)+N:nom(problem)+N:gen(it)+N:ill(handle)
+V:3pl(sit down)+N:nom(all)+N:trans(candidate).

(2.3.1) 意志をもつ対象の換喩表現

上述のように意志をもつ対象を「あげる」場合、フィンランド語の「nostaa」と「kohottaa」が使えなかったが、換喩表現では具体的に人ではなく人のランクを上げるので、抽象的な対象と同じような扱いになる。抽象的にランクを上げる動作は、例文(1)と(2)のように普通の「魚」と「手」と同じようにあげることができるので、「nostaa」または「kohottaa」が可能になる。例文(3)では「nostaa」が可能であるが、「kohottaa」のほうがはっきりとランク順を表している。その代わり例文(4)と(5)では候補者の順番が抜けているので、一気にあげる「nostaa」のほうが適切である。しかし、ほかの動詞も可能である。

- (1) 彼はやっと課長にあげてもらった。(小)

Hänet nostettiin/kohotettiin/ylennettiin vihdoinkin toimistopäälliköksi.

N:acc(he)+V:past:pas(rise/succeed)+Adv(at last)+N:trans(section chief).

- (2) 彼を会長候補に挙げることが決まった。(小)

Päätettiin,että hänet nostetaan/kohotetaan/asetetaan johtajaehdokkaaksi.

V:past:pas(decide)+Conj(that)+N:acc(he)+V:pas(put)

+N:trans(president candidate).

- (3) 帝国大学を卒業後は直に助教授に挙げられ、(つゆのあとさき 53)

Päästyäni Keisarillisesta yliopistosta kohotettiin minut suoraan dosentiksi.

V:prt.prf:part:1sg(get)+Adj:elat(imperial)+N:elat(univ)+V:past:pas(rise)

+N:acc(me)+Adv(direct)+N:trans(assistant professor).

- (4) 自分を代議員にあげてくれた職場にくると、(改造 1954 年 1 月 153)

Kun tulen työpaikalle, josta minut nostettiin kansanedustajaksi.

Conj(when)+V:1sg(come)+N:all(workplace)+N:elat(fromwhich)+N:acc(me)+V:past:pas(rise)+N:trans(representative)

- (5) 委員には某君をあげる。(岩)

Nostamme jonkun edustajaksi.

V:1pl(rise)+N:acc(somebody)+N:trans(committee member)

(2.3.2) 意志をもつ対象の比喻表現

以下の例文はすべてフィンランド語では「nostaa」と「kohottaa」と別の動詞で表現される。例文

(3)のように表現全体が異なっている場合も多い。

- (1) はいはい。別品さんを上げるように言うて置ります。(鶏)

Kyllä kyllä.Sanon kyllä,että kaunokaisia kehutaan.

N:(yes,yes).+V:1sg(say)+Adv(of course)+Conj(that)+N:pl:part(beauty)

+V:pas(praise)

- (2) あげたり(ほめたり)下げたりする。(新)

Väliin kehuvat/ylistävät väliin haukkuvat/parjaavat.

N:ill(one time)+V:3pl(praise)+N:ill(one time)+V:3pl(scold).

- (3) 男ぶりをあげる。(岩)

Kehitän luonnettani.

V:1sg(develop)+N:part:1sg(character)

- (4) 一躍男をあげた。(大)

Hän teki kerralla itsestään miehen.

N:nom(he)+V:past:3sg(make)+N:ades(1time)+N:elat:3sg(self)+N:acc(man).

- (5) 古藤さんも手紙の上では一枚がた男を上げてゐますわね (ある女・前 204)

Gotookin on kirjeessä himpun verran parantanut osakkeitaan.

N:nom:p(alsoG)+V:3sg(be)+N:ines(letter)+Adv(alittlebit)+V:prt.prf(makebetter)
+N:pl:part:3sg(stock)

(2.4) 意志をもつ対象が群集である

この用法は、「戦う」という連想を引き起こす場合、フィンランド語では「johdattaa taisteluun」(戦いへ導く)という表現が最も適切であるが、ただ「兵を召集し、移動させる」という意味の場合、「nostattaa」(あがらせる)という動詞も使える。上述の学校や家などが到着点であった場合、「nostattaa」が使えなかったのは、対象ははっきりと自分の意志を持っていた個人であったからである。つまり、「兵」や「軍隊」などは、強い管理下にある集団であるので、「nostattaa」が可能である。(1.6)でも見られたように「nostattaa」は、「炎」や「波」など基本的に不特定の集団を対象にする。「kohottaa」は、上下の動きに限られているので、以下の例文では使えない。また、対象は自分の意志で動くことも「kohottaa」動詞を不可能にする。しかし、ほかの動詞、例えば「koota」(収集する)などが可能である。

(1) 関東に兵をあげる。(大)

Hän nostatti/johdatti armeijan Kantooseen.

N:nom(he)+V:past:3sg(rise/lead)+N:acc(army)+N:ill(K).

(2) 彼らはついに政府に対して兵を挙げた。(小)

He nostattivat/kokosivat viimein armeijan hallitusta vastaan.

N:nom(they)+V:past:3pl(gather/rise)+Adv(atlast)+N:acc(army)

+N:part(government)+Postp:ill(against).

(2.4.1) 「群集をあげる」意味からの生産性の高い比喩表現

以下の用法は、「大勢で」という意味を連想させているので、文の中では副詞のような働きをしている。そのために、フィンランド語でも「あげる」の果たす意味は、動詞では表現されない。例文(1)と(3)と(4)のように「あげる」が対象「一家」と「国」をうける場合、それは文全体の主語「彼ら・我々」に結びついている。この場合、フィンランド語では主語につく「koko」(全)という形容詞が「国をあげて」に似たような意味を表している。しかし例文(2)と(5)のように対象が動作主と一致する場合、フィンランド語では「全員で」という意味を表す副詞「yhdessä」(一緒に)や「yksimielisesti」(全員一致)などが使われる。

(1) 一家を挙げて大阪へ移つたさうだが、(多情仏心・前 298)

He näyttävät muuttaneen Osakaan koko perhe.

N:nom(they)+V:3pl(show)+V:pot:acc(move)+N:ill(O)+Adj(whole)+N:nom(family)

(2) アカハタ紙その他同系統のものはいざ知らず、それ以外の日本の言論機関は、挙げて、重光全権と同じ見解を表明した。(東洋経済新報 1956年8月18日 21)

En tiedä Punalipusta ja muista saman suunnan lehdistä, mutta muu lehdistö ilmaisi yhdessä saman kannan Eimitsu erikoislähettilään kanssa.

Neg:1sg(not)+V(know)+N:elat(red flag)+Conj(and)+Adj:elat(other)
 +Adj:gen(same)+N:gen(direction)+N:elat(Paper)+Conj(but)+Adj:nom(other)
 +N:nom(press)+V:past:3sg(expres)+Adv(together)+Adj:acc(same)
 +N:acc(position)+N:gen(special attache)+Postp(together).

- (3) 国をあげて記念日をいわう。(文)

Koko maa juhlii merkkipäivää.

P(whole)+N:nom(country)+V:3sg(celebrate)+N:part(memorial day).

- (4) 国をあげて歓迎する。(大)

Hänet toivotettiin tervetulleeksi koko maan puolesta.

N:acc(he)+V:past:pas(wish)+V:prt.prf:trans(welcome)+Adj(whole)
 +N:gen(county)+elat(belief).

- (5) 市民はこの計画にあげて賛成した。(大)

Kaupungin asukkaat hyväksyivät suunnitelman yksimielisesti.

N:gen(city)+N:pl:nom(people)+V:past:3pl(approve)+N:acc(plan)
 +Adv(unanimously).

- (6) いま国内をあげてBKP時代にあるので(東洋経済新報 1956 年 7 月 28 日 35)

Koska olemme nyt kotimarkkinoiden avulla BKP-jaksolla

Conj(because)+V:1pl(be)+Adv(now)+N:gen(inlandmarket)+Postp(belief)
 +N:ades(BKPperiod).

(2.5) 意志をもつ対象が犯罪者である

この用法の対象は、「人」でありながらも自分の意志で「あがる」ものではないので、「魚を網などであげる」という用法からの比喩表現であることが考えられる。フィンランド語では「1男2女をあげる」と同じように「nostaa」や「kohottaa」には「人」をあげるような比喩表現がない。また「nostattaa」は「立ち上げて行動させる」という意味なので、「検挙する」という意味では使えない。この用法は、フィンランド語の中で一般的に「犯人をあげる」の類義語「検挙する」と似たような意味を表す「pidättää」(留める)で表現できる。そのほか、例えば例文(1)の「ottaa kiinni」(take+fast)と(3)と(5)の「saada kiinni」(get+fast)のような動詞「ottaa」(取る)・「saada」(受ける)と不変化詞「kiinni」(閉まった)の組み合わせでも表現されている。また、例文(6)のように対象は、事件である場合、逮捕などができないので、「暴露する」や「解決する」という意味表す動詞「paljastaa」(露出する)と「selvittää」(解く)などが使われる。

- (1) 殺人犯はその場で挙げられた。(小)

Murhaaja pidätettiin/otettiin kiinni sillä paikalla.

N:acc(murderer)+V:past:pas(arrest/take caught)+N:ades(that)+N:ades(place).

- (2) 主犯共犯いっしょに挙げられました。(本日休診 76)

Pääsyytetty ja muut osalliset pidätettiin yhdessä.

- N:nom(main suspect)+Conj(and)+Adj:pl:nom(other)+N:pl:nom(accomplice)
+V:past:pas(arrest)+Adv(together).
- (3) 麻薬密輸団はまだ挙げられていない。(小)
Huumeiden salakujetusliigaa ei ole vielä saatu kiinni.
N:gen(drug)+N:part(smuggle gang)+Neg:3sg(not)+V(be)+V:pas:prf(get)
+Adv(caught).
- (4) 質屋から足がついて、出入りの魚屋の若い者が上げられた。(多情仏心・前 308)
Panttilainaamosta saatiin johtolanka ja tutun kalakaupan nuorukainen
pidätettiin.
N:elat(pawnshop)+V:past:pas(get)+N:nom(leadingthread)+Conj(and)
+Adj:gen(known)+N:gen(fishshop)+N:nom(youngman)+V:past:pas(arrest)
- (5) 奴もおれをあげる証拠を握っちゃいなかったし。(シトー)
Ei sillä jätkälläkään ollut todisteita, jolla minut oltaisi saatu kiinni.
Neg:3sg(not)+N:ades(it)+N:ades:p(guy)+V:prt.prf(be)+N:pl:part(evidence)
+N:ades(with which)+N:acc(me)+V:cond:past(be)+V:pas:prf(get)+Adv(caught).
- (6) やね、きみが三国鉦山の汚職をあげたことがあったろ?。(B)
Sinähän paljastit Sankoku-kaivoksen lahjukset. Eikö?
N:nom:p(you)+V:past:2sg(expose)+N:gen(S-mine)+N:pl:acc(corruption).
+Neg:p(isn't).

(3) 対象が抽象的なものである場合

上述の「視線をあげる」そして「課長にあげる」の対象が抽象的だった場合のように、フィンランド語でも、具体的な対象は抽象的に変わると、同じように「nostaa」と「kohottaa」と「korottaa」と「nostattaa」を使うことができる。つまり、抽象的な対象は具体的な対象と同じ意味の連鎖にあると考えられる。

(3.1) 抽象的な対象が声である

声は、「煙」や「炎」などと同じような対象であるが、見えないあるいは感じないものなので、より抽象的な対象であると判断できる。一般的に「声をあげる」場合、「光」と「沫」と同じように方向性がはっきりしないので、「kohottaa」が使えない。この場合、例文(1)と(4)と(6)と(9)と(12)と(13)と(15)のように「päästää」(行かす・放す)という動詞が使われる。しかし、例文(3)と(8)のように、方向性がはっきり特注へと示された場合、「kohottaa」も使える。ほかの例文も方向性が「ilmaan」(空中に)などで特定されると、「kohottaa」が可能になるが、ほかの用法のほうが適切である。例文(5)と(7)と(10)と(11)と(14)のように「huutaa」(叫ぶ)や「nauraa」(笑う)などの動詞も日本語と同じようによく「päästää ääni」(声をあげる)の代わりに使われている。特に「小さい叫び」や「騒声」のように対象が直接フィンランド語に訳せない場合、別の動詞が使われる。例文

(2)のように「声をあげる」は副詞的に別の動詞を特定する場合、フィンランド語では「ääneen」という副詞的な表現が使われている。

- (1) ふりかえって木谷をみつけたとき、あっと小さい声をあげた。(真空地帯・上 134)

Kun käännyn takaisin ja löysin Kitanin, päästin pienen äänen.

Conj(when)+V:past:1sg(turn)+Postp(back)+Conj(and)+V:past:1sg(find)
+N:acc(K)+V:past:1sg(let)+Adj:acc(small)+N:acc(voice)

- (2) その時の彼の気持ちを考へ、中には声をあげて泣いたものがゐた。(蟹工船 87)

Kun ajatteli hänen silloista tunnetta oli joukossa henkilöitä, jotka itkivät ääneen.

Conj(when)+V:past:3sg(think)+N:gen(his)+Adj:part(thattime)+N:part(feeling)
+V:past:3sg(be)+N:ines(group)+N:pl:part(person)+N:nom(who)
+V:past:3pl(cry)+N:ill(voice)

- (3) ショー族の最後の子供が、産声をあげた日でした。(フロンテ)

Se oli se päivä, jolloin Shaw-suvun viimeinen lapsi kohotti/päästi ensimmäisen parkauksensa.

N:nom(it)+V:past:3sg(be)+N:nom(day)+Pron(when)+N:gen(clan)+Adj:nom(last)
+N:nom(child)+V:past:3sg(rise/let)+Adj:gen(first)+N:acc:3sg(cry).

- (4) なぜ悲鳴のような高い声をあげたか、。(B)

Miksi sinä päästit kirkaisun kaltaisen korkean äänen.

N(why)+N:nom(who)+V:past:2sg(let)+N:gen(cry)+Adj:acc(like)+Adj:acc(high)
+N:acc(voice).

- (5) 無意識に叫び声をあげた。(B)

Hän huudahti huomaamattaan.

N:nom(he)+V:past:3sg(shout)+V:3inf:abes:3sg(notice).

- (6) 伸子はそのたびに悲しげな、断れ断れな叫びを上げた。(伸子・上 66)

Aina silloin Nobuko päästi surumielisen katkonaisen huudon.

Adv(allways)+Adv(then)+N:nom(N)+V:past:3sg(let)+Adj:acc(sad)
+Adj:acc(fragmentary)+N:acc(cry)

- (7) 背後で、小さい叫びを挙げた。(B)

Takaa hän huusi hiljaa.

Postp:part(behind)+N:nom(he)+V:past:3sg(shout)+Adv(quietly).

- (8) それを見てみんな歓声を上げた。(小)

Sen nähdessään kaikki päästivät/kohottivat eläköönhuudon.

N:acc(it)+V:2inf:ines:3pl(see)+N:nom(everybody)+V:past:3pl(let/rise)
+N:acc(hurrah).

- (9) 急に弾け返ったやうな笑ひ声をあげ、(多情仏心・前 87)

Hän päästi yllättäen purskahtavan naurun.

N:nom(he)+V:past:3sg(let)+V:2inf:ins(surprise)+V:prt.prs:acc(burst)
+N:acc(laugh)

- (10) 木谷はしよげかえっている曾田をみて笑いをあげずにはいられなかった。
(真空地帯・上 153)

Kitani ei voinut olla nauramatta nähdessään masentuneen Hidan.

N:nom(K)+Neg:3sg(not)+V:prt.prf(could)+V:1inf(be)+V:3inf:abes(laugh)
+V:2inf:ines:3sg(see)+V:prt.prf:acc(dishearten)+N:acc(H).

- (11) ベンチの浮浪人達は、朗かな鼾声をあげて眠っている。(放浪記 42-43)

Penkillä olevat kulkurit nukkuivat kuorsaten onnellisesti.

N:ades(bench)+V:prt.prs:pl:nom(be)+N:pl:nom(vagabond)+V:past:3pl(sleep)
+V:2inf:ins(snore)+Adv(cheerfully)

- (12) でも彼らは音を上げない。(藤原正彦)

Mutta he eivät päästäneet ääntäkään.

Conj(but)+N:nom(they)+Neg:3pl(not)+V:past:3pl(let)+N:part:p(voice).

- (13) 鋭い口笛の音を上げたりするものがあつたが、(多情仏心・前 172)

Oli joitain, jotka päästivät teräviä vihellyksiä.

V:past:3sg(be)+N:pl:nom(some)+N:pl:nom(who)+V:past:3pl(let)
+Adj:pl:part(sharp)+N:pl:part(whistle)

- (14) 生き残った三発のイーグル・エンジンが咆哮を上げると。(汽車・酒)

Ehjäksi jääneet 3 Eagle-mootoria murahtivat.

Adj:trans(whole)+V:prt.prf(stay)+N:part(3Eaglemotor)+V:past:3pl(roar).

- (15) 小沢の手が動き、尺八が風を切るような鋭い悲鳴をあげる。(B)

Ozawan käsi liikkui ja Shakuhachi päästi tuulta leikkaavan terävän kirkkaisun.

N:gen(O)+N:nom(hand)+V:past:3sg(move)+Conj(and)+N:nom(S)+V:past:3sg(let)
+N:part(wind)+V:prt.prs:acc(cut)+Adj:acc(sharp)+N:acc(cry).

(3.1.1) 「声をあげる」場合の換喩表現

以下の例文では、(2)と(3)と(4)と(9)と(10)のように動作が「話す」ことを連想させる場合、フィンランド語では「nostaa」と「kohottaa」が使われていない。「päästää」も「話す」意味で例文(4)で比喩的にしか使えないので、別の「話す」意味を表す動詞を使わなければならない。例文(1)と(11)のように対象は、「祈り」である場合、天に昇るので「kohottaa」が使えるが、例文(9)と(10)のように「お経」の場合、祈りとして理解されていないので「lukea」(読む)という動詞で表現される。また、例文(7)のように対象が一気であげる「歌」である場合、「kohottaa」も可能であるが、例文(8)のように「歌」が前から続いている場合、「laulaa」(歌う)という動詞が使われている。つまり、「kohottaa」の対象は一つのまとまりとして現れなければならない。

例文(5)のように対象は「反対の声」である場合、フィンランド語では必ずしも具体的な声という意味ではないので、「nostaa」も[kohottaa]も抽象的な「あげる」意味を表している。また、例文(6)の場合、「不信任の声」が「epäluottamus」(不信任)としか訳せないので、「煙」と同じような扱いで自動詞の「kohota」で表現される。

- (1) アーメンと云ふ声の一座の人々から挙げられるのを待つて(或る女・前 63-64)

Hän odotti, että samasta ryhmästä kohotettaisiin aamenrukous.

N:nom(he)+V:past:3sg(wait)+Conj(that)+Adj:elat(same)+N:elat(group)
+V:pas:cond:past(rise)+N:nom(amenprayer)

- (2) 女は声をあげながら勢いよく立って、まあ、ようこそ、ロックウッドさま！。(フロンテ)

Nainen nousi ripeästi seisomaan ähkäisten.”Tervetuloa herra Rockwood!”

N:nom(woman)+V:past:3sg(rise)+Adv(fast)+V:3inf:ill(stand)+V:2inf:ins(say).

- (3) 出雲市が近づいてきた。今度は私が声をあげる。(汽車・酒)

Iden kaupunki tuli lähemmäs.Tälläkertaa minä aukaisin suuni.

N:gen(I)+N:nom(town)+V:past:3sg(come)+Adv:comp(near).N:part(this time)
+N:nom(I)+V:past:1sg(open)+N:acc:1sg(mouth).

- (4) 奥の間の廊下までくると、俄かに滝十郎は酔漢らしいつくり声をあげて、「さア、来ましたよ！来ましたよ！ど、同勢そろつてちん入しますよ！」(多情仏心・前 84)

Kun tulin perähuoneen käytävään päästi Takijuro yllättäen juoppoa muistuttavan huudon.”...”.

Conj(when)+V:past:1sg(come)+N:gen(backroom)+N:ill(corridor)+V:past:3sg(let)
+N:nom(T)+Adv(suddenly)+N:part(drunk)+V:prt.prs:acc(resemble)+N:ac(shout)

- (5) その提案にだれもあえて反対の声を上げなかった。(小)

Kukaan ei nostanut/kohottanut vastalauseita ehdotusta vastaan

N:nom(nobody)+Neg:3sg(not)+V:prt.prf(rise)+N:part(objection)
+N:part(proposal)+Postp(against).

- (6) われわれの判断に対して疑念が生じ不信任の声が挙げられるにつれて、
(哲学以前 202)

Päätöstämme vastaan nousi epäily ja epäluottamuksen kohotessa.

N:part:1pl(decision)+Postp(against)+V:past:3sg(rise)+N:nom(doubt)+Conj(and)
+N:pl:gen(nonconfidence)+V:2inf:ines(rise)

- (7) 藤尾は第二の艦歌を揚げる。(虞美人草)

Fujio kohotti/päästi ilmoille 2:n laivastolaulun.

N:nom(F)+V:past:3sg(rise/let)+N:pl:all(air)+Num:acc(2)+N:acc(navy song).

- (8) これが下宿の人々の最後に上げた凱歌であった。(破戒 11)

Tämä oli asuntolanväen viimeiseksi laulama laulu.

N:nom(this)+V:past:3sg(be)+N:gen(dormitorypeople)+Adj:trans(last)

+V:3inf(sing)+N:nom(song).

- (9) 仏壇にむかってお経をあげる。(大)

Luen sutraa kasvot alttariin päin.

V:1sg(read)+N:part(sutra)+N:nom(face)+N:ill(altar)+Postp(toward).

- (10) お経をあげて山田君の霊を慰めてやることは出来ない。(蟹工船 88)

En voi lausua sutraa ja lepyttää Yamadan sielua.

Neg:1sg(not)+V(can)+V:1inf(recite)+N:part(sutra)+Conj(and)+V:1inf(comform)
+N:gen(Y)+N:part(soul).

- (11) 隣人の女たちはすぐ感謝の祈りをあげ、叫び声をあげて、子供たちを抱いた。

(実話雑誌 1956 年 12 月 28)

Naapurin naiset kohottivat heti kiitos rukouksen, huusivat ja halasivat lapsia.

N:gen(neighbor)+N:pl:nom(women)+V:past:3pl(rise)+Adv(at once)+N:acc
(thanks pray)+V:past:3pl(shout)+Conj(and)+V:Past:3pl(hug)+N:pl:acc(child)

(3.1.1.1) 換喩表現から対象がはっきりした言葉になった場合

この用法では、「あげる」に対応するフィンランド語の動詞は、対象になる「例」や「証拠」などの内容によって分かるのである。例文(1)のように対象(例)は、「もう2、3あげる」というようにリストにできるような対象である場合、「antaa」(与える)という動詞が使われている。(1)のほかにこのような例文は、(3)と(5)と(7)と(8)と(11)である。この場合、例文(9)と(10)の「tuoda esille」(表面にもたす)も使うことができる。

例文(4)のように対象(例)は、説明のようなはっきりした言葉になると、「mainita」(述べる)という動詞が使われる。(4)のほかにこのような例文は、(3)と(5)と(12)から(16)と(19)から(24)である。例文(14)では、名前はリストであるので、「antaa」(与える)も可能である。例文(17)と(18)の場合、動作主は自分の名前をあげるので、「mainita」の代わりに自動詞の「ilmoittautua」(申し込む)と「tulla esiin」(表面に出る)が使われている。

例文(2)と(6)のように「例・数字をあげて」を副詞的に使われると、フィンランド語に相当する動詞が「käyttää」(使う)である。最後の例文(25)は、慣用句的な表現なので、まったく異なった訳になる。

- (1) 似た例をもう2、3 挙げる。(小)

Annan vielä 2-3 samanlaista esimerkkiä.

V:1sg(give)+Adv(still)+Num(2-3)+Adj:part(samekind)+N:part(example).

- (2) 例をあげて説明せよ。(文)

Selitä käyttäen esimerkkejä.

V:imp:2sg(explane)+V:2inf:ins(use)+N:pl:part(example).

- (3) 具体的な例をあげる。(新)

Annan/Mainitsen konkreettisen esimerkin.

V:1sg(give/mention)+Adj:acc(concrete)+N:acc(example).

- (4) 一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、其女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、何処か適当な所へ嫁に遣つて呉れます。(こころ 194)

Jos mainitsen 1 esimerkin niin jos papilla on tytär ja se tytär on tullut täyteen ikään, niin hän antaa tyttären vaimoksi johonkin sopivaan paikkaan.

Conj(if)+V:1sg(mention)+N:acc(1example)+Conj(then)+Conj(if)+N:ades(priest)
+V:3sg(be)+N:nom(doughter)+Conj(and)+N:nom(that)+N:nom(doughter)+V:3sg
(be)+V:prt.pfr(come)+Adj:ill(full)+N:ill(age)+Conj(then)+N:nom(he)+V:3sg(give)
+N:acc(dougter)+N:trans(wife)+N:ill(some)+Adj:ill(suitable)+N:ill(place)

- (5) 哺乳類の文化。については、いろいろな事例をあげることができよう。(B)

Imettäväisten kulttuurista voidaan antaa/mainita erilaisia esimerkkejä.

N:pl:gen(mammal)+N:elat(culture)+V:pas(can)+V:1inf(give/mention)
+Adj:pl:part(different)+N:pl:part(example).

- (6) 具体的な数字をあげて説明する。(大)

Selitän käyttämällä konkreettisia lukuja.

V:1sg(explane)+V:3inf:ades(use)+Adj:pl:part(concrete)+N:pl:part(number).

- (7) 一変した実例を証拠に挙げた。(道草)

Hän antoi käänteentekevän esimerkin todisteeksi.

N:nom(he)+V:past:3sg(give)+Adj:acc(change making)+N:acc(example)
+N:trans(evidence)

- (8) 警察は状況証拠しか挙げられなかった。(小)

Poliisi ei voinut antaa muuta kuin aihetodisteen.

N:nom(polis)+Neg:3sg(not)+V:past(can)+V:1inf(give)+N:part(else)
+Conj(than)+N:acc(circumstantial evidence)+Neg:3sg:p(isn't)

- (9) 証拠をあげる(見せる)。(新)

Tuon todistusaineiston esille.

V:1sg(bring)+N:acc(evidence material)+Adv:all(surface)

- (10) 確証をあげる。(大)

Tuomme todisteet esille.

V:1pl(bring)+N:pl:acc(evidence)+Adv:all(surface)

- (11) この説には種々の反証が挙げられる。(日本及日本人 1954 年 1 月 90)

Tätä selitystä vastaan voidaan antaa useita todisteita.

N:part(this)+N:part(explanation)+Postp(against)+V:pas(can)+V:1inf(give)
+Adj:pl:part(several)+N:pl:part(evidence)

- (12) 名を上げる。(研)

Mainitsen nimen.

- V:1sg(mention)+N:acc(name).
- (13) 国会議員の名前を挙げた。(小)
- Hän mainitsi kansanedustajan nimen.
- N:nom(he)+V:past:3sg(mention)+N:gen(legislator)+N:acc(name).
- (14) 合格者の名前をあげて下さい。(文)
- Antakaa/Mainitkaa kokeen läpäisseiden nimet.
- V:imp:2sg(give/mention)+N:acc(test)+V:prt.prf:pl:gen(past)+N:pl:acc(name).
- (15) 次期社長の候補として三人の名をあげる。(大)
- Ilmoitan/Mainitsen seuraavaksi johtajaehdokkaaksi 3:n henkilön nimet.
- V:1sg(report/mention)+Adj:trans(next)+N:trans(president candidate)
+N:gen(3persons)+N:pl:acc(name).
- (16) 彼女が思い出すままに挙げる新しい作家の名前など、(雪国 41)
- Uusien kirjailijoiden nimet, jotka hän mainitsi kuten muisti.
- Adj:pl:gen(new)+N:pl:gen(writer)+N:pl:nom(name)+N:pl:part(which)
+N:nom(she)+V:past:3sg(mention)+Conj(as)+V:past:3sg(remember).
- (17) 弁護側に東大の桂木先生が名乗りをあげた。(B)
- Tokion yliopiston professori Katsuragi on ilmoittautunut puolustus-
asianajajaksi.
- N:gen(T)+N:gen(Univ)+N:nom(prof)+N:nom(K)+V:3sg(be)+V:prt.prf(offer)
+N:trans(defence layer).
- (18) いち早く「近代文学」を創刊して戦後文学第一の名乗りをあげたが、
(群像 1956 年 4 月 115)
- He julkaisivat pian Kindaibungakun ja tulivat sodanjälkeisen kirjallisuuden
ensimmäisenä esiin, mutta
- N:nom(they)+V:past:3pl(publish)+Adv(soon)+N:acc(K)+Conj(and)+V:past:3pl
(come)+N:gen(afterwar)+N:gen(literatur)+Adj:ess(first)+N:ill(surface)+but
- (19) 先にあげた松下幸之助氏は、あれだけの要素は備えていたのだ。
(実業の日本 1956 年 11 月 1 日 52)
- Äsken mainittu Koonosuke Matsushita on omaksunut niin monta elementtiä.
- Adv(while ago)+V:pas:prt.prf(mention)+N:nom(KM)+V:3sg(be)
+V:prt.prf(acquire)+Conj(so)+Num:part(many)+N:part(element)
- (20) スペイン文学史の上では、カルデロン、グラシアンをあげることが出来る。(B)
- Espanjan kirjallisuushistoriassa voidaan mainita Kalderon ja Gracian.
- N:gen(Spain)+N:ines(literaturhistory)+V:pas(can)+V:1inf(mention)
+N:acc(K and G)
- (21) 前にあげたサンゴ礁の魚は、サンゴ礁ならどこにでも住めるわけではない。(B)

Edellä mainitsemani korallikalat eivät voi asua missä tahansa korallilla.

Postp:ades(before)+V:3inf:1sg(mention)+N:pl:nom(coralfish)+Neg:3pl(not)
+V(can)+V:1inf(live)+N:ines(when)+Adv(when)+N:ades(coral).

- (22) 難点をあげる。(新)

Mainitsen ongelmakohtia.

V:1sg(mention)+N:pl:acc(difficult point)

- (23) 筆頭にあげる(掲げる)。(新)

Sivun alussa mainittu.

N:gen(page)+N:ines(beginning)+V:prt.prf(mention).

- (24) 理由に(を)あげる。(新)

Mainitsen syyksi.

V:1sg(mention)+N:trans(reason).

- (25) 挙げて数ふべからず(あまり多くて一々数えては居られない)。(新)

Lukematon määrä.

V:3inf:abes(uncountable)+N:nom(amount).

(3.1.1.2) 換喩表現からさらに連想した比喩表現

「名前をあげる」ことを比喩的に使う場合、フィンランド語では「nostaa」と「kohottaa」が使うことができるが、例文(2)と(3)と(5)のように到着点に「kuuluisuus」(有名さ)を入れなければならない。このように日本語の表現「名をあげる」はフィンランド語で「有名にあげる」というふうに表現できる。ただし例文(1)のように「有名さをあげる」または例文(4)のように「有名さをもたらす」ことも可能である。

- (1) 名をあげる。(新)

Hän kohotti mainettaan.

N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+N:part:3sg(fame).

- (2) 第2作目の小説で彼は名を挙げた。(小)

Hän nosti/kohotti nimensä kuuluisuuteen toisella romaanillaan.

N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+N:acc:3sg(name)+N:ill(fame)+Adj:ades(second)
+N:ades:3sg(novel).

- (3) あのひとは名をあげるだろうし、財産もつくる。(スタンダード)

Hän kohottaa luultavasti nimensä kuuluisaksi ja tekee omaisuudenkin.

N:nom(he)+V:3sg(rise)+Adv(probably)+N:acc:3sg(name)+Adj:trans(famous)
+Conj(and)+V:3sg(make)+N:acc:p(fortune).

- (4) 彼はスピーチコンテストで一番になって学校の名をあげた。(文)

Hän toi koululle mainetta voittaessaan puhekilpailun.

N:nom(he)+V:past:3sg(bring)+N:all(school)+N:part(fame)+V:2inf:ines:3sg(win)

+N:acc(speech contest).

- (5) 前に伊藤整はチャタレー裁判で一躍名をあげたが、(改造増刊 1953 年 10 月 10)

Aikaisemmin oli Sei Ito hetkessä nostanut/kohottanut nimensä Chattarley-oikeudenkäynnissä kuuluisuuteen.

Adv(earlier)+V:past:3sg(be)+N:nom(S)+V:prt.prf(rise)+N:acc:3sg(name)
+N:ines(trial)+N:ines(moment)+N:ill(fame)

- (6) おだをあげる。(新) > 主張する

Rehennellä/Ylpeillä.

V:linf(boast).

(3.1.1.3) 換喩表現から派生した複合動詞

以下の複合動詞に対応するフィンランド語の動詞はすべて日本語の複合される動詞の意味に相当するものである。ただし、例文(5)では副詞的に使われる名詞「ääneen」(声に)があげるの意味を反映しているかも知れない。また例文(6)は、具体的な意味の複合動詞から転じた比喩的な表現である。

- (1) 高らかに歌いあげる。(新)

Hän laulaa kirkkaasti.

N:nom(he)+V:3sg(sing)+Adv(clearly).

- (2) この誌は彼らの勝利を歌いあげている。(小)

Tämä runo ylistää heidän voittoaan.

N:nom(this)+N:nom(poet)+V:3sg(praise)+N:gen(their)+N:part:3pl(victory).

- (3) 欠点を数えあげる。(大)

Luettelen puutteelliset kohdat.

V:1sg(list)+Adj:pl:acc(fault)+N:pl:acc(point).

- (4) でっちあげる。(新)

Keksiä koko juttu.

V:linf(think)+Adj(whole)+N:nom(story).

- (5) 原稿を読みあげる。(大)

Luen käsikirjoituksen ääneen.

V:1sg(read)+N:acc(manuscript)+N:ill(voice).

- (6) こねあげる。(新)

Heittää huulta.

V:linf(throw)+N:part(lip).

(3.1.2) 声をあげることからの比喩表現

例文(2)のように「päästää ääntä」(声を行かす)ことは、比喩的に日本語の「音をあげる」と同じ

ような意味(文句を言う)を表しているが、このような表現はあまり使われてない。やはり、フィンランド語では「valittaa」(嘆く)や「torua」(叱る)のような日本語にあるような意味の動詞が使われている。

- (1) 爆撃だけで英国が音を上げるとは、到底思えない。(阿川弘之)

En usko, että hyökkäys saa Englannin valittamaan.

Neg:1sg(not)+V:1sg(belive)+Conj(that)+N:nom(attack)+V:3sg(get)+N:acc(E)
+V:3inf:ill(complain).

- (2) それでなくても主食の獲得に音を上げてゐる兵庫県や大阪府では、(闘牛 118)

Ilman sitäkin elintarvikkeiden saannin vuoksi ääntä päästävät Hyogo ja Osaka.

Prep(with out)+N:part:p(also that)+N:pl:gen(food)+N:gen(acquisition)
+Postp(behalf)+N:part(voice)+V:prt.prs:pl:nom(let)+N:nom(H and O)

- (3) そのうえ、子供の足をつついたり、ときの声をあげたりして、。(B)

Sen lisäksi hän näpätty lapsia jalkoihin ja väliin torui heitä.

N:gen(it)+N:trans(addition)+N:nom(he)+V:past:3sg(hit)+N:pl:part(child)
+N:pl:ill(foot)+Conj(and)+N:ill(interval)+V:past:3sg(scold)+N:part(them).

(3.2) 抽象的な対象が高低で判断される次元のものである場合

前に述べた「課長にあげる」のようなランクの高低差の面で「あげる」が使われた例と同じように、「価値」や「生産性」などの抽象的な対象に対しても「あげる」が使われる。フィンランド語でも「nostaa」と「kohottaa」と「korottaa」が使われているが、「nostattaa」の場合対象は自力であらなければならないので、以下の例では使うことができない。

一般的に例文(2)と(14)と(15)と(17)と(18)と(20)と(27)と(29)と(37)のように上述の「ほこり」と似たような形で、対象は「価値」や「スピード」や「生産」や「率」などである場合、「kohottaa」が可能になるが、自力であがる「nostattaa」の代わりに「nostaa」が使われる。しかし、例文(1)と(10)と(11)と(16)のように対象(量・温度)は到着点がない場合、「nostaa」だけが使われる。もし、「量」や「温度」の到着点が「18度に」のようにはっきりすれば、「kohottaa」も可能である。同じように例文(24)と(25)と(26)と(28)のように対象が「成績・率」である場合も、ふだん「kohottaa」が使われていないが、「成績を2点あげた」あるいは「打率を30%にあげた」場合には「kohottaa」も可能になる。

例文(3)から(9)のように対象は「値段」である場合、「土」と同じように「kohottaa」の代わりに「高める」という意味の「korottaa」が使われる。このような例では、「korottaa」のような「積み重ねる」意味ではなく、「5万円から6万円へ」と値段の一位の変化を強調したい場合、「nostaa」が使われる。

また、(17)と(18)と(20)と(37)そして(24)から(26)までの例文では、「生産・収量・成績・女性の地位」などの対象がはっきりと「あがる」という要素がなければ、「parantaa」(良くする)という動詞のほうが適切である。この「parantaa」動詞は、「nostaa」と「kohottaa」が使えない場合も、例

例えば例文(16)と(22)と(23)と(30)から(32)と(34)から(36)では使える。この場合「parantaa」の対象は、「ピンチ」と「能率」と「効果」と「性格」など段階的にあげられないようなものばかりである。ここでも対象の後に「どれぐらいあげたか」を記せば、「nostaa」も「kohottaa」も使えるだろう。

最後に例文(13)と(21)と(22)のように「lisätä」(増やす)という動詞も使われる。この場合、対象は「利益」のような「parantaa」でも表現できるようなものである。この動詞は、日本語の「増やす」と同じようにおもに量である対象に関して使われる。

- (1) この家へ入り込んでくる客の人数を挙げた。(明暗)

Hän nosti tähän taloon tulevien vieraitten lukumäärää.

N:nom(he)+V:past:3sg(rise)+N:ill(this)+N:ill(house)+V:prt.prs:gen(come)
+N:pl:gen(guest)+N:part(number).

- (2) その会社は大幅に株価を上げた。(小)

Se yhtiö on nostanut/kohottanut huomattavasti osakkeidensa arvoa.

N:nom(that)+N:nom(firm)+V:3sg(be)+V:prt.prf(rise)+Adv(widely)
+N:gen:3sg(stock)+N:part(worth).

- (3) 年の暮に鍛冶町の家主が急に家賃を上げたので、私は京町へ引き越した。(二人の友)

Koska vuokraisäntä nosti/korotti vuoden lopussa yllättäen vuokraa, muutin Kyöchoohon.

Conj(because)+N:nom(landlord)+V:past:3sg(rise)+N:gen(year)+N:ines(end)
+N:part(rent)+V:past:1sg(move)+N:ill(K).

- (4) 運賃をあげる。(新)

Nostan/Korotan matkan hintaa.

V:1sg(rise)+N:gen(travel)+N:part(charge).

- (5) 政府は税金をあげないと行っている。(文)

Hallitus sanoo, ettei se nosta/korota veroja.

N:nom(government)+V:3sg(say)+Conj:neg:3sg(thatnot)+N:nom(it)+V(rise)
+N:pl:part(tax).

- (6) 料金をあげる。(岩)

Nostan/Korotan maksua.

V:1sg(rise)+N:part(charge)

- (7) 来年は私の給料を上げてくれるそうだ。(小)

He kuulema nostavat/korottavat palkkaani ensi vuonna.

N:nom(they)+V:3inf(hear)+V:3pl(rise)+N:part:1sg(salary)+Adv(next)
+N:ess(year).

- (8) 一年に一度月給を上げることになっている。(文)

Palkkaa nostetaan/korotetaan kerran vuodessa.

N:part(salary)+V:pas(rise)+Adv(once)+N:ines(year).

- (9) 勤続年数がふえるにつれて、給与をあげねばならぬ。(文芸春秋 1956 年 10 月 98)
 Sitä mukaa kun työvuodet lisääntyvät on palkkaa nostettava/korotettava.
 N:part(that)+Postp(along)+Conj(when)+N:pl:nom(workyears)+V:3pl(increase)
 +V:3sg(be)+N:part(salary)+V:pas:prt.prs(rise).
- (10) もっと部屋の温度を上げないとかぜを引いてしまう。(文)
 Jos ei huoneen lämpöä nosteta,sairastuu flunssaan.
 Conj(if)+Neg:3sg+N:gen(room)+N:part(warm)+V(rise)+V:3sg(become sick)
 +N:ill(flu).
- (11) 温度を上げて溶融して液体にすると、(新しい繊維 381)
 Kun nostaa lämpöä ja tekee siitä sulattamalla nestettä.
 Conj(when)+V:3sg(rise)+N:part(temperature)+Conj(and)+V:3sg(do)
 +V:3inf:ades(melt)+N:part(liquid),
- (12) もっと調子を上げて歌ってください。(文)
 Laulakaa koreammalla nuotilla.
 V:imp:2pl(sing)+Adj:comp:ades(high)+N:ades(note).
- (13) Kさんもスピードを上げると、二人はさらに歩調を速めて、。(B)
 Kun Kkin lisäsi nopeuttaan, niin molemmat nopeuttivat askeliaan siitakin.
 Conj(when)+N:nom:p(K)+V:past:3sg(increase)+N:part:3sg(speed)+Conj(then)
 +Adj:nom(both)+V:past:3pl(speed)+N:part:3pl(step)+N:elat:p(that).
- (14) ここは 100 キロまでスピードを上げられる。(小)
 Tässä saa nostaa/kohottaa nopeuden 100 km:in tunnissa.
 N:ines(here)+V:3sg(may)+V:1inf(rise)+N:acc(speed)+N:ill(100km)+N:ines(hour).
- (15) あまりスピードをあげると危険だ。(大)
 On vaarallista,jos kohottaa/nostaa nopeutta liikaa.//kiihdyttää liikaa.
 V:3sg(be)+Adj:part(dangerous)+Conj(if)+V:3sg(rise)+N:part(speed)
 +N:part(toomuch).// +V:3sg(speed)+N:part(toomuch)
- (16) 仕事のピッチをあげる。(大)
 Tiivistää/Nopeuttaa/Parantaa työn tahtia.
 V:1sg(make faster/speed/make better)+N:gen(work)+N:part(pace).
- (17) 生産を 5 年で 2 倍に上げる。(小)
 Nostan/Kohotan/Parannan tuotannon 5 vuodessa 2 kertaiseksi.
 V:1sg(rise/make better)+N:acc(production)+N:ines(5years)+Adj:trans(2 fold).
- (18) 生産性を上げる。(研)
 Nostan/Kohotan/Parannan tuottavuutta.
 V:1sg(makebetter/rise)+N:part(productivity).
- (19) 肥料は、...より多くの収量をあげるため、。(平凡百科 2)

- Lannoitetta käytetään, jotta saataisiin yhä suurempi sato.
 N:part(fertilizer)+V:pas(use)+Conj(that)+V:cond:pas(get)+Adv(still)
 +Adj:nom:comp(biger)+N:nom(harvest).
- (20) 穂数で主に収量をあげる品種では、(農業世界 1956 年 9 月 127)
 Pääasiassa tähkäluvulla sadon määrää nostavissa/kohottavissa/parantavissa
 lajikkeissa.
 N:ines(mainly)+N:ades(earnumber)+N:gen(harvest)+N:part(amount)
 +V:prt.prs:pl:ines(rise)+N:pl:ines(variety)
- (21) 労賃以上いくばくの収益をあげているだろうかなどの (農耕と園芸 1 月 133)
 Kuinka paljon se kasvattaa/lisää voittoa palkkamenojen jälkeen.
 Intp(how)+Adv(much)+N:nom(it)+V:3sg(make biger/increase)+N:part(profit)
 +N:pl:gen(salarycost)+Postp(after)
- (22) 利益をあげる(得る)。(新)
 Kasvatan/lisään voittojani.
 V:1sg(make biger/increase)+N:pl:part:1sg(profit).
- (23) 業績をあげる。(新)
 Me parannamme saavutuksiamme.
 N:nom(we)+V:1pl(makebetter)+N:pl:part(result).
- (24) 成績をあげる(よくする)。(新)
 Parannan/Nostan arvosanojani.
 V:1sg(better)+N:pl:part:1sg(grade).
- (25) さて、本年もお蔭様にて、順調に成績をあげることができました。(太郎手紙文例)
 Tänäkin vuonna sain parannettua/nostettua arvosanojani suunnitelmien
 mukaan.
 N:ess:p(this)+N:ess(year)+V:past:1sg(get)+V:prt.prf:part(make better/rise)
 +N:pl:part:1sg(grade)+N:pl:gen(plan)+N:ill(manner)
- (26) 班の成績あげよおもて、自分の班のもんにええのん廻して、(真空地帯・上 49)
 Hän ajatteli parantaa/nostaa oman ryhmänsä tuloksia ja laittoi hyvät omalle
 ryhmälleen.
 N:nom(he)+V:past:3sg(think)+V:1inf(make better/rise)+Adj:gen(own)
 +N:gen(group)+N:pl:part(result)+Conj(and)+V:past:3sg(put)+Adj:pl:nom(good)
 +N:Adj:all(own)+N:all:3sg(group).
- (27) レンズや反射鏡などで収レンさせて 50%までこの率を上げることができることが分かって
 いる。(科学朝日 1956 年 10 月 31)
 Tiedetään, että heijastamalla linssillä ja peilillä voidaan suhdetta
 nostaa/kohottaa 50 prosenttiin.

- V:pas(know)+Conj(that)+V:3inf:ades(reflect)+N:ades(lens)+Conj(and)
+N:ades(mirror)+V:pas(can)+N:part(ratio)+V:1inf(rise)+N:ill(50%)
- (28) 打率をあげる。(大)
- Nostan/Parannan lyöntiosuvuutta.
V:1sg(rise/make better)+N:part(batting average).
- (29) 彼の研究している浅海魚雷の有効率を百パーセントに上げるようにという要望。
(阿川弘之)
- Hänen tutkimuksensa tarkoitus on nostaa/kohottaa matalanveden torpedon käyttöprosentti 100:an.
N:gen(his)+N:gen:3sg(research)+N:nom(meaning)+V:3sg(be)+V:1inf(rise)
+N:gen(low water)+N:gen(torpedo)+N:acc(effectiveness%)+Num:ill(100)
- (30) 淵田は、夜間攻撃の精度を上げることに夢中になっていて。(阿川弘之)
- Fuchida keskittyi parantamaan yöhyökkäyksen tarkkuutta.
N:nom(F)+V:past:3sg(consentrate)+V:3inf:ill(makebetter)+N:gen(nightattack)
+N:part(precision).
- (31) 能率をあげる。(新)
- Lisätään/Parannetaan tehokkuutta.
V:pas(increase/makebetter)+N:part(efficiency).
- (32) 効果をあげる。(新)
- Parannetaan vaikutusta.
V:pas(makebetter)+N:part(effect).
- (33) 将来、月産三千トン位の能力までは上げるかも知れないがそれ以上にする計画はない
ようである。(ダイヤモンド 1956 年 4 月 28 日 70)
- Tulevaisuudessa tuotantokyky nostetaan oletettavasti 3 tonnin kuukausitasolle,
mutta sitä ylittävää suunnitelmaa ei ole.
N:ines(future)+N:nom(productionability)+V:pas(rise)+Adv(probably)
+N:gen(3ton)+N:all(monthlevel)+Conj(but)+N:part(that)+V:pri:prf:part(extent)
+N:part(plan)+Neg:3sg(not)+V(be)
- (34) 品質などをあげる。(研)
- Parannan laatua.
V:1sg(makebetter)+N:part(quality).
- (35) 子供の性質をあげる。(小)
- Se parantaa lasten luonnetta.
N:nom(it)+V:3sg(makebetter)+N:gen(child)+N:part(character).
- (36) 奢侈に依って自分の面目を上げようとする努力である。(世潮 1954 年 4 月 36)
- Yritys ylellisyydellä parantaa kasvojaan.

N:nom(try)+N:ades(luxory)+V:linf(makebetter)+N:pl:part:3sg(face)

- (37) 女性の地位を上げる。(小)

Yritämme nostaa/kohottaa/parantaa naisten asemaa.

V:1pl(try)+V:linf(rise/make better)+N:pl:gen(women)+N:part(status).

(3.2.1) 抽象的な対象の換喩表現

上述の例文(17-33)の「効果を良くする」という意味からさらに連想して、「結果を残す」という意味が想像された「あげる」の例に関して、フィンランド語では「nostaa」などの「上昇」の意味を表す動詞が使えない。日本語でも「あげる」よりも「結果を出す」や「結果をもたらす」や「結果を得る」などのようなより積極的な結果に対する働きかけを表す動詞「出す・もたらす」あるいは明らかに楽観的な結果を表す動詞「得る」が使われる。

一般的に「結果を出す」というような意味でフィンランド語では、例文(1)と(3)と(5)から(7)と(9)と(11)と(13)のように「tuottaa」(生産する)という動詞が使われる。同じ意味で「tuoda」(もたらす)という動詞も使われるが、動作が進行中である場合「tuottaa」のほうが適切である。また、結果が動作主に向かって「結果を得る」という意味の場合、フィンランド語では例文(8)と(14)と(16)と(17)のように「saada」(受ける)という動詞が使われる。このほかに相当な努力が要求される場合、例文(4)と(8)と(15)のように「saavuttaa」(届く)という動詞も使われる。

以上のほかにも例文(13)と(15)のように「tehdä」(作る)という動詞も「記録」や「毎日の産業の成果」といった対象の場合、使うことができる。また、例文(2)では「効果を示した」という意味で「osoittaa」(示す)、例文(10)では「収穫を収集する」という意味で「korjata」(回収する)、そして例文(12)では「実を実る」という意味で「kantaa」(掲げる)動詞が使われている。

- (1) 立派な成果をあげた。(小)

Se tuotti/toi mahtavan tuloksen.

N:nom(it)+V:past:3sg(produce/bring)+Adj:acc(great)+N:acc(result).

- (2) 黄熱予防に効果をあげた。(平凡百科 2)

Se on osoittanut vaikutusta keltataudin ehkäisyyn.

N:nom(it)+V:3sg(be)+V:prt,prf(show)+N:part(effect)+N:gen(yellowfeaver)
+N:ill(prevention).

- (3) 考山は実力以上の効果をあげているのだ。(スタンダード)

Koosan tuottaa parempaa tulosta kuin mitä häneltä voisi odottaa.

N:nom(K)+V:3sg(produce)+Adj:comp:part(better)+N:part(result)+Conj(than)
+N:part(what)+N:elat(he)+V:cond(could)+V:linf(expect).

- (4) 秀吉に従って九州征伐、朝鮮役に出陣し戦功をあげた。(平凡百科 2)

Hän meni Hideyosin mukana Kyuushuun valloitusretkelle ja saavutti voittoja Korean tehtävällään.

N:nom(he)+V:past:3sg(go)+N:gen(H)+Postp:ess(with)+N:ill(K)+N:all(conquest)

- +Conj(and)+V:past:3sg(reach)+N:pl:part(victory)+N:gen(K)+N:ades(duty)
- (5) 結果をあげる。(新)
 Tuottaa/Tuoda tulosta.
 V:1inf(produce/bring)+N:part(result).
- (6) その取引で 200 万円の利益を上げた。(小)
 Se kauppa tuotti/toi meille 2 miljoonan yenin voiton.
 N:nom(that)+N:nom(deal)+V:past:3sg(produce/bring)+N:all(we)+N:acc(2milj¥)
 +N:acc(profit).
- (7) デパートは大きな利益を上げている。(文)
 Tavaratalo tuottaa/tuo paljon voittoa.
 N:nom(department store)+V:3sg(produce/bring)+Adv(plenty)+N:part(profit).
- (8) 好成績をあげる。(大)
 Sain/Saavutin hyvät arvosanat.
 V:past:1sg(get/reach)+Adj:pl:nom(good)+N:pl:nom(grade).
- (9) 百万円の純益をあげる。(研)
 Se tuotti/toi miljoona yeniä puhdasta voittoa.
 N:nom+V:past:3sg(produce/bring)+N:part(milj¥)+Adj:part(plain)+N:part(profit).
- (10) 収穫をあげる。(新)
 Korjata sato.
 V:1inf(gather)+N:acc(harvest)
- (11) 業績をあげる。(新)
 Tuottaa/tuoda tuloksen.
 V:1inf(produce/bring)+N:acc(result).
- (12) つまり人間が陰陽和合の実を挙げるのは、。(明暗)
 Eli ihminen kantaa jingin ja jangin harmonian hedelmää...
 N:nom(human)+V:3sg(carry)+N:gen(ying and yang)+N:gen(harmony)
 +N:part(fruit).
- (13) このように、宮川村森林組合は、着々と山林復興に、その実績をあげているが、
 (家の光 1956 年 4 月 187)
 Näin Miyagawa-kylän metsäosuuskunta tuottaa/tekee vuoristometsän
 elpymiseksi jatkuvasti tulosta.
 Adv(this way)+N:gen(M-village)+N:nom(forest co-op)+V:3sg(produce/do)
 +N:gen(mountain forest)+N:trans(recovery)+Adv(continuously)+N:part(result)
- (14) イランが石油を国際市場に販売し、それから収入をあげようとすればそれには、妥協し
 なければならない。(世界 1953 年 11 月 18)
 Jos Iran myy öljynsä kansainvälisille markkinoille ja siten pyrkii saamaan

voittoa, on löydettävä kompromissi.

Conj(if)+N:nom(I)+V:3sg(sell)+N:pl:acc:3sg(oil)+Adj:pl:all(international)
+N:pl:all(market)+Conj(and)+Adv(so)+V:3sg(try)+V:3inf:ill(get)+N:part(profit)
+V:3sg(be)+V:pas:prt.prs(find)+N:nom(compromise)

- (15) メーカーが平和に、百六十万という戦後最高の動員レコードをあげながら、
(中央公論 1954 年 6 月 46)

Saavuttaessaan/Tehdessään 1.6 miljoonalla Sodanjäkeisen liikekannallepano-
ennätyksen.

V:2inf:ines(reach/do)+N:ades(1.6milj)+N:gen(afterwar)
+N:acc(mobilization record)

- (16) 次の回西鉄がまた二点をあげ (ベースボールマガジン 1956 年 10 月 116)

Seuraavassa erässä Nishitetsu sai taas 2 pistettä.

Adj:ines(second)+N:ines(inning)+N:nom(N)+V:past:3sg(get)+Adv(again)
+N:part(2points).

- (17) 一番の希望は開幕早々から連続二十勝をあげること。(週刊読売 1956 年 3 月 11 日 7)

Toivon jos mahdollista saavani heti alusta 12 perättäistä voittoa

V:1sg(hope)+Conj(if)+Adj:part(possible)+V:prt.prs:1sg(get)+Adv(atonce)
+N:elat(beginning)+Num(12)+Adj:pl:part(continuous)+N:part(victory).

(3.2.1.1) 換喩表現からの比喩表現

例文の(1)の対象「全額」の場合だけ、具体的な動作を表す「ottaa」(取る)が使われる。それ以外の例文(3)と(4)と(6)では、対象は「全力」であるので、「すべてを与える」という意味で「antaa」(与える)や「すべてを尽くす」という意味での「tehdä」(する)が使われる。しかし、「全力をあげる」ことは悲観的な結果をもたらす場合、例文(5)のように「tuhlata」(費やす)という動詞も使うことができる。

例文(2)のような「全力をあげて」という文の副詞的な用法の場合、フィンランド語では「具格」(ins)で表示された名詞句「kaikin voimin」(全ての力で)が使われる。

- (1) 収入の全額を挙げて春琴の用に供した (春琴抄 206)

Hän otti koko palkkansa ja uhrasi ne Harukoton hyväksi.

N:nom(he)+V:past:3sg(take)+Adj(whole)+N:acc:3sg(salary)+Conj(and)
+V:past:3sg(offer)+N:acc(those)+N:gen(H)+Adj:trans(good).

- (2) 全力をあげて試験のため勉強した。(文)

Opiskelen kokeisiin kaikin voimin.

V:1sg(study)+N:ill(test)+Adj:ins(all)+N:ins(power).

- (3) 問題解決のため全力をあげる。(大)

Minä teen/annan kaikkeni selvittääkseni tämän ongelman

N:nom(I)+V:1sg(do/give)+N:acc:1sg(averything)+V:1inf:trans:1sg(clear)
+N:acc(this)+N:acc(problem).

- (4) 一行の詩を書くのにも全力を挙げなければならない、。(福永武彦)

Kirjoittaakseen vain yhden rivin runon on annettava/tehtävä kaikkensa.
V:1inf:trans:3sg(write)+Adv(only)+N:acc(one)+N:acc(line)+V:3sg(be)
+V:prt.prs(give/do)+N:acc:3sg(everything).

- (5) 全力を挙げた長篇小説は全然失敗して、。(生)

Se romaani, johon olin tuhlannut kaikki voimani, epäonnistui...
N:nom(it)+N:nom(novel)+N:ill(towhich)+V:prt.prf(spend)+Adj:acc(every)
+N:acc:1sg(power)+V:past:3sg(fail).

- (6) 党は、我が国民の独立、平和、自由の闘争の先頭にたって活動することができるように、われわれは全力をあげている。(中央公論 1956 年 2 月 50)

Teemme/Annamme kaikkemme, jotta puolueemme voisi seisoa ensimmäisenä puolustamassa maamme itsenäisyyttä, rauhaa ja vapautta.
V:1pl(do/give)+N:acc:1pl(averything)+Conj(that)+N:nom:1pl(party)
+V:cond:3sg(could)+V:1inf(stand)+Adj:ess(first)+V:3inf:ines(defend)+N:acc:1pl(country)+N:part(independence)+N:part(peace)+Cond(and)+N:part(freedom).

(3.2.2) 抽象的な対象の比喻表現

これらの例文はすべて慣用句的な意味を表しているので、フィンランド語では全ての意味に共通点を持つ動詞がない。そのためにそれぞれの例は、別々の動詞で表現されている。例文(4)と(5)と(7)の場合、対象の「氣勢」を「taisteluhenki」(闘志)と「vastalause」(反論)と「mieliala」(気分)に訳すことによって、「nostaa」と「kohottaa」が使えるようになった。しかし、「氣勢を上げる」に匹敵するような表現は、フィンランド語にはないと言えるだろう。

- (1) 勝負に熱を上げたりしていた。(阿川弘之)

Hän oli kiihtynyt kilpailusta.
N:nom(he)+V:past:3sg(be)+V:prt.prf(exited)+N:elat(race).

- (2) そう勝手に熱をあげるのはよしてくれ。(トルストイ)

Lopeta tuo itsekäs kiihkoilu.
V:imp:2sg(stop)+N:acc(that)+Adj:acc(selfish)+N:acc(agitation)

- (3) マリナのほうは早くも彼に熱をあげ、訪問のお目当てが姉なのですっきりふくれ、
(スクリーン 1956 年 7 月 108)

Marina oli huulaantunut mieheen ja, koska vierailun kohde oli isosisko, oli hän huonolla päällä.
N:nom(M)+V:past:3sg(be)+V:prt.prf(getcrazy)+N:ill(man)+Conj(and)
+Conj(because)+N:gen(visit)+N:nom(target)+V:past:3sg(be)+N:nom(eldersister)

- +V:past:3sg(be)+N:nom(she)+Adj:ades(bad)+N:ades(mood).
- (4) 氣勢を上げる。(研)
Kohotamme taisteluhenkeä.
V:1pl(rise)+N:part(fighting spirit)
- (5) 反対の氣勢をあげたいいわゆる艦隊派の一味の人であった。(阿川弘之)
Hän oli vastalauseen nostaneen niinsanotun laivastosuunnan kannattaja.
N:nom(he)+V:past:3sg(be)+N:acc(objection)+V:2inf:gen(rise)
+V:prt.prf:gen(socalled)+N:gen(fleet faction)+N:nom(supporter).
- (6) 際限なく酒を注文して、乱暴に飲みながら、氣勢を揚げてみた。(帰郷 337)
Rajatta hän tilasi sakea ja ryypäten kohotti mielialaansa.
N:abes(border)+N:nom(he)+V:past:3sg(order)+N:past(sake)+Conj(and)
+V:2inf:ins(drink)+V:past:3sg(rise)+N:part:3sg(mood).
- (7) 血道をあげる(新)
Hän on huulaantunut.
N:nom(he)+V:3sg(be)+V:prt.prf(desire).
- (8) 選挙で同じ候補者へ投票するというぐらいのことに何で血道をあげる必要がある？
(むらぎも 318)
Miksi pitää kiihtyä vain siitä, että on äänestänyt vaaleissa samaa edustajaa.
Intp(why)+V:3:sg(must)+V:1inf(getexited)+Adv(only)+N:elat(aboutthat)
+Conj(that)+V:3sg(be)+V:prt.prf(vote)+N:pl:ines(election)+Adj:part(same)
+N:part(representative).
- (9) 尤も老婆は僕の鯛のねたを一度嘗めて以来、三日にあげず生臭いねたを拵へては、
(思出の記・上 193)
Sen jälkeen, kun vanhus oli kerran kehunut minun sardiineja, niin hän päivittäin teki niistä haisevista kaloista ruokaa.
N:gen(that)+Postp(after)+Conj(when)+N:nom(old)+V:past:3sg(be)+Adv(once)
+V:prt.prf(price)+N:gen(my)+N:pl:part(sardin)+Conj(then)+N:nom(he)
+Adv(daily)+V:past:3sg(do)+N:elat(fromthem)+Adj:pl:elat(stinky)
+N:pl:elat(fish)+N:part(food)

(4) 翻訳対照の結果

上述の日本語の「あげる」が表現する意味のフィンランド語との翻訳対照をまとめると、次の(表1)のようになる。この表は、第3章で作り上げた「上げる」の対象の抽象化(意味連鎖)とそれぞれの表現の固定化(換喩・比喩)にしたがっている。最も右側に書かれた番号は、上述の項目の番号である。その次の欄は、基本的な対象そしてフィンランド語の訳と訳の意味()である。換喩表現と比喩表現も同じように記述されているが、対象の下に連想される日本語の意味「 」を加えた。

フィンランド語の基本的な上昇を表す動詞「nostaa, kohottaa, korottaa, nostattaa」の場合、欄を灰色に塗った。

(表1)

連想 意味連鎖		nostaa 等	換喩表現		比喩表現	
		フィン語 (意味)	対象 「連想」	フィン語 (意味)	対象 「連想」	フィン語 (意味)
項	対象					
11	箱	nostaa				
11	看板	nostaa	看板 「ある」	olla (ある)	3 男 「設ける」	synnyttää (生む) 22
11	バー ベル	nostaa kohottaa			軍配 「優勝」	nousta (勝旗があがる)
111			布団 「片づける」	korjata pois (片づける)		
111			畳 「干す」	kuivata (干す)		
111			帽子 「挨拶」	nostaa (挨拶する)		
111	コップ	nostaa kohottaa	杯 「飲む」	kohottaa (乾杯する)		
111	棟木	nostaa	棟 「建てる」	nostaa (建てる)		
111			墓に 「捧げる」	asettaa (設置する)		
112					槍玉に 「犠牲」	tehdä uhri (犠牲を作る)
112					棚に 「放っておく」	hyllyttää (保管する)
112			首 「殺す」	ottaa (取る)	首 「勝つ」	ottaa (取る)
11 31					賽銭 「捧げる」	antaa (与える)
11 31					お線香 「捧げる」	uhrata (捧げる)
11					奨学金	antaa

32					「与える」	(与える)
11					手紙	lähettää
32					「送る」	(送る)
113					一てあげる	(1sg/pl+all)
21						(内が誰かに)
113					一あげる	(1sg/pl+2pl)
22						(内が一ます)
11					天ぷら	paistaa
33					「調理」	(少油で焼く)
11					天ぷら	keittää
33					「調理」	(多油で煮る)
11					作品	tehdä+valmis
34					「完成」	(作る)
11					仕事	saada+valmis
34					「完了」	(受ける)
11					読み物	lukea+loppu
34					「終える」	(読み終える)
11					リーダー	erota
34					「辞める」	(離れる)
113					結婚式を	järjestää
41					「行う」	(行う)
113						pitää+ades
41						(持つ)
113					何円で	päästä
42					「済ます」	(行ける)
113						pitää
42						(保つ)
113					一あげる	kiinni
43						(V+閉まった)
113						loppuun
43						(V+終わりに)
113						valmiiksi
43						(V+完全に)
12	積み荷 二階に	viedä (持っていく)				

13	積み荷 船から	viedä (持つてく)				
13		purkaa (解く)				
13	魚	nostaa			殺人犯 「検挙」	pidättää (留める)
25						ottaa kiinni (取る)
25						saada kiinni (受ける)
25					事件 「暴露」	paljastaa (露出する)
25						selvittää (解く)
21	猫	päästää (行かす)				
21	雲雀	päästää (行かす)				
21	息子 学校に	laittaa (置く)				
21		päästää (行かす)				
21	使い	lähettää (送る)				
23	芸者	kutsua (呼ぶ)				
23	候補者	asettaa (設置する)				
23	客	viedä (持つてく)				
23	客	johdattaa (導く)			別品さん 「誉める」	kehua (誉める) 232
23	友人	viedä (持つてく)				
24	兵	johdattaa				

		(導く)				
241					一家 「皆で」	kaikki (全)
241					国は 「全力で」	yhdessä (一緒に)
14	ロケ ット	ampua (撃つ)				
14	花火	laukaista (発射する)			一あげる 18	ilmaan (空中に)
14	風船	päästää (行かす)			アドバルーン 「目立たせる」	mainostaa (宣伝する)
14	凧	kohottaa nostattaa	凧 「状態」	lennättää (飛ばす)		
14	戸	nostaa kohottaa				
14	国旗	nostaa kohottaa			一旗 141 「負ける」	hävitä (負ける)
14	幕	nostaa kohottaa			幕 141 「始まる」	alkaa (始まる)
15	手	nostaa	手 152 「降伏する」	nostaa (降伏する)	手 152 「暴力を振る」	kohottaa (殴る)
15					腕 152 「上手になる」	tulla+parempi (より良くなる)
15	頭	nostaa kohottaa	頭 「見る」	kääntää (向く)		
151	顔	nostaa kohottaa	顔 「見る」	kääntää (向く)		
151			目 「見る」	katsoa (見る)		
151			視線 「見る」	nostaa kohottaa		
151			腰 「立つ」	nousta (上がる)		
151			お尻 「動く」	nostaa (動く)		

16	土台	nostaa korottaa			血道	huulaantua (惚れる)
16	水位	nostaa korottaa			花が 「吸収」	imeä (吸う)
16	炎	} kohottaa nostattaa			のろし 161 「日立たす」	savumerkki (煙印)
16	ほこり					
16	煙					
16	光					
16	泡	päästää (行かす)				
16	潮	nousta (あがる)				
162			食べ物 「吐く」	oksentaa (吐く)		
17	数字	nostaa kohottaa				
17	肩線	nostaa kohottaa				
31	声	päästää (行かす)			声 312 「叱る」	moittia (叱る)
312					音 「文句」	valittaa (嘆く)
31 13					あげてー	ääneen (声+ill)
31	産声	päästää (行かす)				
31	歓声	kohottaa				
31	鼾声	kuorsata (鼾をかく)				
311			艦歌 「歌う」	laulaa (歌う)		
311			祈り	lausua	お経	lukea

			「祈る」	(詠う)	「捧げる」	(読む)
311			反対の声 「批判す」	nostaa (批判す)		
31 11			例 「言う」	mainita (述べる)	あげて--	käyttää (使う)
31 11			例 「言う」	antaa (与える)		
31 11			証拠 「提出」	tuoda esille (上に出す)		
31 11			証拠 「言う」	antaa (与える)		
31 11			名 「言う」	mainita antaa	名 3112 「有名になる」	tulla kuuluisa (有名になる)
31 11			難点 「言う」	mainita (述べる)		
31 11			自分の名 「言う」	ilmoittautua (告げる)		
32	価値	nostaa kohottaa				
32	運賃	nostaa korottaa				
32	スピード	nostaa kohottaa				
32 11					全力 「尽くす」	antaa (与える)
32 11						tehdä (する)
32 11					あげて 「全力で」	kaikinvoimin (全力で)
32	温度	nostaa kohottaa			熱 322 「興奮する」	kiihottua (興奮する)
32	率	nostaa kohottaa				
32	生産	nostaa kohottaa				

32	収量	nostaa kohottaa				
32	成績	nostaa kohottaa				
32	地位	nostaa kohottaa	課長に 231 「昇任」	kohottaa (昇任)		
		parantaa 「良くする」	代議員に 「押し出す」	nostaa (押し出す)		
32	ピンチ	parantaa 「良くする」				
32	能率					
32	効果					
32	性格					
32	利益	lisätä (増やす)				
321			成果 「残す」	tuottaa (もたらす)		
321			結果 「残す」	tuoda (持ってくる)		
321			成績 「残す」	saada (受ける)		
321			2点 「残す」	saavuttaa (届く)		
321			効果 「残す」	osoittaa (示す)		
322			実 「残す」	kantaa (運ぶ)	男 「磨く」	parantaa (良くする) 232
322			収穫	korjata (片づける)	氣勢	mieliala (気分)

上述の表を見ると、「あげる」と基本的な意味で一致する動詞「nostaa」と「kohottaa」などは、換喩表現と比喩表現の場合、同じような意味を表わすことは決していない。比喩表現の場合、唯一

「上げる」と共通する連想は、「手を上げる」の「暴力を振るう」という意味である。「降伏する」という意味も似ているが、フィンランド語では「お手上げ」というような表現がないので、この意味では「上げる」ほど使われていない。しかし、関心と呼ぶために「手を上げる」という意味の換喩表現は、フィンランド語でも日本語でも完全に同じ意味を表している。

比喩表現は、ほとんど共通点がないが、換喩表現もあまり一致するところがない。最も一致するところが多いのは、基本的な具体物「帽子」や「杯」などの動きの場合、そして体の一部分「手」や「お尻」などである対象の場合である。また、「地位を上げる」意味の「課長にあげる」などもフィンランド語の「nostaa」と「kohottaa」などの動詞で表現できる。それ以外の連想によって別の意味を引き起こした「上げる」の用法は、ほとんど「nostaa」などの動詞とは別の動詞で表されている。例えば、到着点が人である場合、動作の「与える」という連想が含まれている場合、「antaa」(与える)という動詞が使われる。または、到着点が敬意を要求する「墓」などである場合、到着点に重点を置く「asettaa」(設置する)という動詞のほうが適切である。

基本的な用法の場合も、「nostaa」などの動詞は、全ての「上げる」と同じ対象の動きを描くことができない。最も基本的とされる意味「具体物の空間的な上昇」(1.1)の場合、「nostaa」などの動詞が「上げる」と同じ意味を表しているが、対象の位置と性質が変われば、別の動詞が「nostaa」などの代わりに使われる。例えば、到着点が遠く離れている場合、あるいは対象は自分の意志で動く場合、「viedä」(持っていく)という動詞がよく使われている。また、対象は自分の意志ではないが自力で上昇するあるいは「斜めで速い」動きの場合、「päästää」(行かす)という動詞が使われるが、「ほこり」や「炎」や「煙」など自然的に上がる場合、「nostattaa」と「kohottaa」を使うことができる。最も抽象的な対象の場合、「nostaa」と「kohottaa」は「上げる」動作が段階的に行われるときだけ使うことができる。「能率」や「性格」などの対象に対して、「parantaa」(良くする)という動詞が最も適切である。

このほかに「nostaa」と「kohottaa」と「korottaa」と「nostattaa」はそれぞれフィンランド語の中で異なった意味範囲を占めている。形からも分かるように「nostaa」と「nostattaa」、そして「kohottaa」と「korottaa」は、それぞれ対抗するペアである。「nostattaa」は「nostaa」と「nousta」(上がる)の使役なので、「上がらせる」も「上げさせる」の意味も表している。その代わり、「korottaa」は、「kohottaa」の意味を補う形で、「土台」や「運賃」など対象全体が大きくなる場合に使われる。また、「nostaa」は、直接力を加えて別の所にも移動できるのに対し、「kohottaa」は力を入れなくても直接上に上がる場合使われている。もちろんこの違いをもっとはっきり分けるために、これら4つの動詞の意味分析が必要であるが、本研究では「上げる」の意味に集中するので、フィンランド語の動詞の意味関係を具体的に理解することが必要ではないと判断した。

以上の比較で分かったように、完全に共通の意味を表している動詞は、基本的な意味を表している動詞(nostaa など)だけである。ほかの動詞(antaa など)は、別の基本的な意味を表しているので、その動詞の意味の対照(antaa <> 与える)によって明確にすることができる。その場合、例えば「与える」動詞の意味範囲に含まれていない「antaa」の用法は、別の動詞つまり「あげる」で表現することができる。このように動詞の意味範囲が互いに絡み合い、言語活動全体を描くこと

になる。

(5) 「あげる」と「NOSTAA」などの対照

次に、それぞれのフィンランド語の動詞、「nostaa」と「nostattaa」と「kohottaa」と「korottaa」は、どのような「あげる」の対象を上昇させることができるかを見てみる。

1) 具体物	「nostaa」	「nostattaa」	「kohottaa」	「korottaa」
箱(Xに)	「nostaa」	*	*	*
魚	「nostaa」	*	*	*
バーベル	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
戸	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
国旗	「nostaa」		「kohottaa」	*
土台	「nostaa」	*	*	「korottaa」
2) 自力で上昇				
ロケット	*	*	*	*
花火	*	*	*	*
3) 自分の意志				
雲雀	*	*	*	*
息子	*	*	*	*
4) 動作主の一部				
手	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
頭	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
声	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
5) 自然的に上昇				
風	*	「nostattaa」	「kohottaa」	*
炎	*	「nostattaa」	「kohottaa」	*
光	*	*	*	*
6) 抽象的な次元				
値段	「nostaa」	*	「kohottaa」	「korottaa」
スピード	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
生産	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
候補者に	「nostaa」	*	「kohottaa」	*
性格	*	*	*	*

上述の表を見ると、フィンランド語の「上昇」を表す動詞は、動作主が必ず対象を動かす力を与える。自力で上がる対象、または自分の意志で上がる対象の場合、「nostaa」や「kohottaa」などの

動詞が使えない。ただし、対象が動作主の力を原因に自然的に上がる場合、「nostattaa」と「kohottaa」が使える。また、上下の方向性がはっきりしない、例えば「光」や「性格」の場合、「上昇」を表す動詞が使えない。

フィンランド語の上昇を表す動詞の分布を比較してみると、「nostaa」と「nostattaa」または「kohottaa」と「korottaa」は、前にも述べたようにいつも対立している。「nostaa」の場合、動作主は直接的に対象を「上昇させる」のに対し、「nostattaa」の場合、動作主は「上昇の原因」になるだけである。そのために、「nostattaa」は自然的に上昇する対象「炎」に対しても使える。「嵐」も同じように自力あるいは動作主の力によって上がれないので、自然的に上がると解釈される。

「kohottaa」の場合、対象の動きは、「nostaa」と「nostattaa」で見られた「空間的な上昇」に似ている。しかし、「korottaa」の場合、対象は、「空間的に上昇する」のではなく、「高くなる」というように変化する。そのために「土台」と「値段」のような対象だけは、「korottaa」の対象になる。「温度」や「スピード」の場合、積み重ねの意味要素が感じられないので、「korottaa」が使えない。また、「kohottaa」を「土台」に対して使うと、「土台を持ち上げる」という意味しか表現できない。このような制限は「nostaa」にはない。

では、「nostaa」を「kohottaa」に比較すると、最初の「箱」と「魚」のような対象の場合、その差が明らかである。「持ち上げる」という意味では両方の動詞が可能であるが、「どこかに置く」という意味が含まれる場合、「kohottaa」は使うことができない。つまり、「kohottaa」は、「直接的な上下の動き」という意味の制限があるのに対し、「nostaa」には直接上にある到着点以外のものも可能である。例えば、

7) Kohotin/Nostin ankkurin.

V:past:1sg(rise)+N:acc(anchor).

いかりを上げた。

8) Nostin ankkurin laivan kannelle.

V:past:1sg(rise)+N:acc(anchor)+N:gen(ship)+N:all(deck).

いかりを船の上に上げた。

9) Nostin joesta lohen.

V:past:1sg(rise)+N:elat(river)+N:acc(salmon).

川から鮭をあげた。

このほかに、「kohottaa」は、ゆっくりまたは「重そうに上昇する」ようなイメージを持っている。

上述の意味は全て、基本的な意味から対象の変化によって別の意味解釈ができた例だったが、日本語の「あげる」と同じように「nostaa」などにも換喩表現または比喩表現が存在する。上述の第1章の第3節で取り上げた「nostaa」の辞書記述でも見られたとおり、全ての用法は対象の意味変化によるものではない。例えば、次のような例は「nostaa」の基本的な意味が連想することによって別の意味に変わった。

10) Nostan eläkettä.

V:1sg(rise)+N:part(pension).

私は年金を受けている。(銀行から手のひらにお金をあげる)

11) Nostan yrityksen jaloilleen.

V:1sg(rise)+N:part(company)+N:pl:all:3sg(foot).

会社を建て直す。(自分の足に立たせる)

12) Nostin pääsykokeiden rimaa.

V:past:1sg(rise)+N:pl:gen(entrance examination)+N:part(pole).

私は入試のレベルをあえた。(走り高跳びのポールの高さを)

このように「nostaa」にも「あげる」にないような意味があるが、その意味を連想する範囲が「あげる」ほど大きくない。「あげる」の比喩的な表現は、場合によって生産性が高いので、「天ぶらを揚げる」のように別の同音異義語の動詞として扱っても問題はない。

結論

(1) 「あげる」の多義性

上述で示したように、動詞の意味は、アクタントの意味によって変わってくる。動詞の基本的な意味は、まず最も中心的なアクタントの意味の変化(抽象化)によって拡大される。中心的なアクタントというのは、「あげる」のような他動詞の場合、一般的に目的語を表している「対象物」で、「あがる」のような自動詞の場合、一般的に主語を表している「対象物」である。ここでの「対象物」というのは、「動作によって影響されるもの」あるいは「状態によって描かれるもの」である。他動詞の場合、対象物は、ふだん動作主(動作のきっかけを作るアクタント)によって動かされる「対象」(動くもの)であるが、対象が自分の意志で動けば、動作主の働きも兼ねていると考えられる。また、自動詞での対象物は、ふだん自分の意志で動くので、「動作主+対象」の働きを持つが、自分の意志を持たない自力で動く「煙」などの場合、ただの「対象」である。この対象物は、さまざまなものを指すことができ、動作の基本的な意味を応用し、動詞の意味を多義語に広げる。「あげる」の場合、対象物の意味の変化によって、どこまで「あげる」の意味範囲が広がるかを見ると、次の互いに関連している名詞の意味連鎖ができると考えている。

1) 箱>魚>バーベル>戸>国旗>土台	(具体物)
>手>頭>声	(動作主の一部)
>ロケット>花火	(自力であがる)
>風>炎>光	(自然的に上がる)
>猫>雲雀>息子>候補者	(自分の意志であがる)
>値段>スピード>生産>性格	(高低差の抽象的な次元)

このように対象物の性質によって、「あげる」の意味が応用され、多義語になってくる。おそらく「あげる」の全体的な意味は、非常に抽象的なものであるので、それぞれの対象物の表す意味に応じて「あげる」の意味が解釈できる。つまり、「あげる」の対象物の意味連鎖によって、具体物の動きも、自力で上がる動きも、自分の意志であがる動きなど、全ての対象物の動きは「あげる」の意味範囲に含まれることになる。ただし、この場合「あげる」の基本的な意味は変わらないだろう。

次に、「手をあげる」のように、具体的に手をあげるという意味のほかに、「手をあげて降伏する」や「手をあげて殴る」という別の意味の連想がある。このような換喩表現と比喩表現は、別のアクタントやほかの周辺的な意味(語彙)や語用論的な意味によって特定することができる。例えば、

- | | |
|------------------------|-------------|
| 2) 相手に対して手をあげる。 | (に対して暴力を振る) |
| 3) 夫婦喧嘩で手をあげたことがない。 | (喧嘩で殴る) |
| 4) 妻に文句をいわれても手をあげなかった。 | (批判されると殴る) |

このような例は、比較的是っきりと基本的な意味との関係を表しているが、多くの用法の場合、基本的な意味がどのように関連しているかは明らかではない。つまり、比喩的な表現から別の比喩表現が連想される場合、そして比喩表現が基本的な意味を表現できなくなった場合、表現が孤立し、同音異義語のような用法になる。例えば、

5) 結婚式をあげる。

6) 天ぷらを揚げる。

このように、語の意味の関係はどこまで多義性をもっているかは、曖昧である。例えば、上述の「天ぷらを揚げる」は「オイルから持ち上げられた」というつながりをもっていると言えるが、このような説明が証明できない。このような関連性が薄くなった生産性の高い用法は、ほかの用法との意味関連がなければ、同音異義語として扱っても問題はない。しかし、「君にあげる」のような用法は、基本的な意味からだいぶ離れているが、関連性が明らかであるので、多義語「あげる」の一つの用法として考えられる。

7) 仏壇にあげる。＞神にあげる。＞都にあげる。＞先生にあげる。＞君にあげる。

「あげる」の基本的な意味は、比較的明らかであるので、意味の連想が想像できる。しかし、「はかる」のように多くの中心的な意味の中から基本的な意味が容易に特定できないような動詞の場合、動詞はどこまで多義語として分析できるかは問題である。いずれにせよ、明らかに同音異義語のような動詞、例えば「買う」や「飼う」の場合も、アクタントの意味と格(店からかう＜家でかう)または文法的な方法(日本でかった＞日本でかっていた)によって、動詞の意味が特定される。

(2) 「あげる」の意味と格の関係

「あげる」は、基本的に動作主と対象と到着点の三つの必須補語(アクタント)を要求し、「が・を・に」という格助詞で表示する。しかし、「バーベル・手・花火を上げる」という文は、対象の性質によって到着点が明らかな、あるいは不特定であるので、到着点を要求しない。そのために、必須補語は、補語の意味が文に関連している要素によって明確にならない場合だけ、記述する必要がある。また、それぞれの「格」の表している意味は、「あげる」の基本的な意味では「動作主」と「対象物」と「到着点」であるが、連想された意味の場合、新しい動作の要求するアクタントの意味に応じるので、「格」の役割は必ずしも同じではない。

「あげる」のもっとも基本的な意味では、対象は特定の連想を引き起こさないで、「動作主は対象物を場所に」という構造になる。動作主は、一般的に「人間」など「意志を持つもの」であるが、「爆発」など「原因」も場合によって可能である。対象は、上でも取り上げたように「具体物」や「自力で上がる物」などに分けられる。例えば、

- | | | |
|----|--------------------|--------------|
| 1) | 学生が箱をテーブルにあげた。 | (具体物) |
| | 学生が頭を上を上げた。 | (動作主の一部) |
| | 学生がロケットを空中にあげた。 | (自力で上がる) |
| | 学生が煙を空中にあげた。 | (自然的に上がる) |
| | 学生が友人を家にあげた。 | (自分の意志で上がる) |
| | 学生がスピードを100キロにあげた。 | (高低差の抽象的な次元) |
| 2) | 爆発が箱を空中にあげる。 | (具体物) |
| | 爆発がロケットを空中にあげた。 | (自力で上がる) |
| | 爆発が煙を空中にあげた。 | (自然的に上がる) |
| | 爆発が温度を1000度にあげた。 | (高低差の抽象的な次元) |

到着点は一般的に「場所」であるが、場所に移動できない場合(頭)、到着点は必要ではない。その場合、方向性を持つ「上に」などが代わりに使うことができる。抽象的な対象の場合、到着点は空間的な範疇の中に収まらないので、抽象的な次元に応じてその変化の度合いを表すことができる。しかし、上に述べたように一般的な役割構造が動詞の意味の変化によって変わってくる。例えば、例文(3)「私は」の場合、意味は具体物をあげると同じであるが、例文(4)「本屋は」の場合、意味は「本屋には看板があげてある」である。

- 3) 「私は看板をあげている」
 4) 「本屋は看板をあげている」

意味変化の理由は、「ている」状態によって一般的な連想「今看板をあげている」も可能だが、別の「すでにあげてある」状態の連想も引き起こされるからである。つまり、「看板をあげている」という文は、新しく連想された意味の場合、一つのまとまった「看板をあげている状態」を表しているので、「本屋が状態だ」というような格の構造が可能になる。状態を表す場合、動作は自動詞と同じような「何かの様子」を表しているので、主語には、場所「本屋」などが入る。つまり、

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 5) 「私は」 「看板を」 「あげている」 | 6) 「本屋は」 「看板をあげている」 |
| 「動作主」 「対象」 「動作」 | 「対象」 「状態」 |

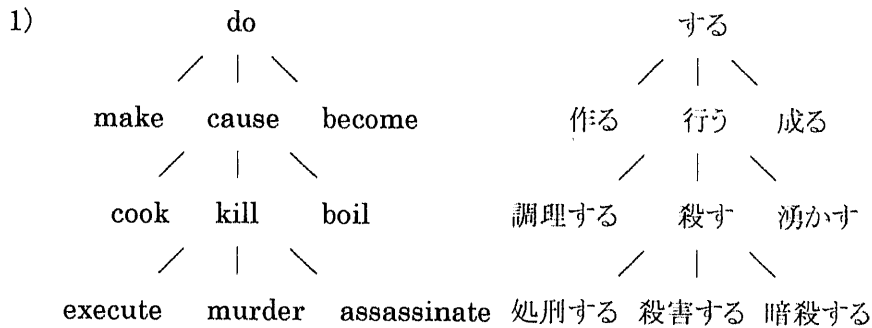
なぜ、例文(6)の「本屋」は「動作主」あるいは「場所」ではなく、「対象」の役割を果たすか。「動作主」は具体的に「対象物」に力を加えるが、(6)ではそのような意味がない。ふだん「本屋に」あるいは「本屋で」というのは「場所」を表しているが、「本屋が汚い」などのような状態の場合、「本屋」は状態の対象である。場所を表現する場合、「本屋には看板があげてある」のように表現しなければならない。

ほかの「あげる」の基本的な意味からの比喻表現は、「天ぶらを揚げる」や「君にあげる」や「式を

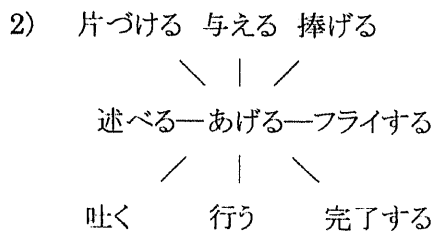
あげる」のように基本的な意味と同じ構造を要求する。このように、格は、動詞の基本的な意味にしたがって形を残すが、その意味は新しい意味に沿う。

(3) 二言語間の動詞の対照

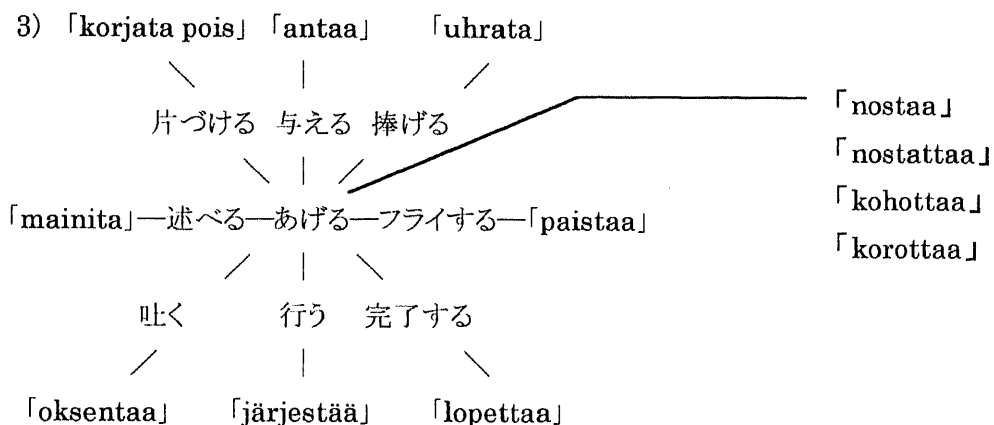
序論の(3.3)で示したように(1)動詞は互いに何らかの意味的な関係を持って語彙全体の網を作り上げる。



しかし、このほかに多義性のある動詞は、一定の関係ではなく、多くの別の動詞と意味的な関係を結ぶ(2)。



このような動詞を別の言語に対照する場合、基本的な意味に相当する動詞は、同じ意味を表していると判断できる。しかし、別の二次的な意味用法に対応する動詞は、言語の中で一致しないので、概念あるいは思考の中で一致するのである。このような動詞は、直接対応できない(3)。



このようにほとんどの比喩表現と換喩表現が、いくつかの例外を取り除けば、共通の基本的な意味をもっていない。また、基本的な意味でも全ての対象は、両方の言語では基本的な意味で表現できない。自力で上昇する対象「ロケット」などや自分の意志で上昇する対象「息子」などは、フィンランド語では「nostaa」などで表現できない。「光」と「性格」も、抽象的な方向性のため、「nostaa」などの「上昇」を表す動詞の対象には当てはまらない。このほか、両方の言語の「上昇」を表す動詞の対象に可能な名詞句の場合も、「あげる」に対応するフィンランド語の動詞は、またそれぞれの意味的な制約がある。「korottaa」は、「対象が積み重ねて高くなる」ことを条件にする。「kohottaa」の対象は、常に「上下の方向」で動く。「nostaa」の動作主は、いつも対象に対して力を加えるが、「nostattaa」の場合、対象物は自然的に上昇するが、動作主は、そのきっかけを与える。このようにあげるの意味に直接的に相当するフィンランド語の動詞は、次(a)から(d)のように分布する。

(a) 対象は具体物

魚	「nostaa」	(上下の動きではない)
国旗	「nostaa」・「kohottaa」	(上下の動き)
土台	「nostaa」・「korottaa」	(対象は変化する)

(b) 対象は動作主の一部

手	「nostaa」・「kohottaa」	(上下の動き)
---	---------------------	---------

(c) 対象は自然的に上昇する

炎	「nostattaa」・「kohottaa」	(自然的に上昇する)
---	------------------------	------------

(d) 対象は抽象的な次元

値段	「nostaa」・「kohottaa」・「korottaa」	(段階的な上昇)
スピード	「nostaa」・「kohottaa」	(上下の動き)

これらのアクタントは直接以下の 137 ページでも取り上げた概念意味論の概念構造に当てはめる。

4)	「あげる	」
	V	
	—〈NP _j を/が〉〈〈[_{pp} NP _α から]〉〉〈〈[_{pp} NP _k に/へ]〉〉	
	[Event CAUSE([] ^α _i , 〈[Event GO ([] _j), [〈〈FROM [α]〉〉]〉)]	
	MOVE UPWARD]	
	[Path 〈〈TO [] _k 〉〉]]	
	「NOSTAA	」
	V	

	___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]> <<[_{pp} NP _k all/ill/trans]>>	
	[_{Event} CAUSE([] ^α i, <[_{Event} GO ([] _j)>, 「<<<FROM [α]>>>」)]	
	UPWARD	
	[_{Path} <<TO [] _k >>」	

	NOSTATTA	
	V	
	___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]> <<[_{pp} NP _k all/ill]>>	
	[_{Event} CAUSE([] ^α i, <[_{Event} MOVE ([] _j)>, 「<<<FROM [α]>>>」)]	
	UPWARD	
	[_{Path} <<TO [] _k >>」	

	KOHOTTA	
	V	
	___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]> <[_{pp} NP _k ill/all]>>	
	[_{Event} CAUSE([] ^α i, <[_{Event} GO ([] _j)>, 「<<<FROM [α]>>>」)]	
	DIRECT	
	UPWARD	
	[_{Path} <<TO [] _k >>」	

	KOROTTA	
	V	
	___NP _j acc/part <[_{pp} NP _α abl/elat]> <[_{pp} NP _k all/ill/trans]>	
	[_{Event} CAUSE([] _i , <[_{Event} GO ([] ^α)>, 「<<<FROM [α]>>>」)]	
	DIRECT	
	UPWARD	
	[_{Path} <<TO [α] _k >>」	

しかし「あげる」とフィンランド語の「NOSTAA」等の類似的な要素は、「あげる」の基本的な意味の一部の対象物に対する用法に限られる。フィンランド語に比べると、「あげる」の特有の要素は、対象の意味連鎖によって広がった部分(e)と(f)と(g)、換喩表現(h)と比喩表現(i)のように日本語特有の連想によって引き起こされた用法である。

(e) 対象は自力で上昇する

ロケット 「ampua」・「laukaista」など(撃つなど)

花火 「ampua」・「laukaista」など(撃つなど)

(f) 自分の意志で上昇する

雲雀 「päästää」など（行かすなど）

息子 「lähettää」・「kutsua」など（送る・呼ぶなど）

(g) ほかのフィンランド語の上昇する動詞の枠組に入らない基本的な用法

二階に 「viedä」など（もっていく） （到着点は遠い）

光 「päästää」など（行ける） （対象の上がり具合は速すぎる）

性格 「parantaa」など（良くする） （対象は高低差の次元に属さない）

(h) 換喩表現（高い生産性）

墓に 「asettaa」など（設置するなど）

例を 「mainita」・「antaa」など（述べる・与えるなど）

結果を 「saada」・「tuottaa」など（受ける・もたらすなど）

(i) 比喩表現（高い生産性）

君に 「antaa」・「lähettää」など（与える・送るなど）

油で 「keittää」・「paistaa」など（煮る・焼くなど）

作品を 「saada valmiiksi」・「tehdä loppuun」など（完了するなど）

式を 「järjestää」など（行うなど）

円で 「päästä」など（行けるなど）

国を 「kaikki」など（全てなど）

犯人を 「pidättää」・「ottaa kiinni」など（留める・捕まるなど）

名を 「tehdä kuuluisaksi」など（有名にする）

全力を 「antaa」など（与えるなど）

このように「あげる」をフィンランド語の動詞に対照すると、多義性の膨大さに圧倒される。しかし、基本的な意味を比較してみると、対応する動詞の意味は、比較的対照しやすい。おそらく、人間にとって最も基本とされている動作は、どの言語でも独立した動詞で表現されているだろう。

本研究の対照方法に関しては、いくつかの問題点があげられる。例えば、基本的な意味を決定するときの曖昧さ、各表現の動詞の意味構造での位置（基本的な表現であるか、あるいは換喩表現それとも比喩表現であるか）などである。しかし、多少曖昧な点が残っても、動詞の意味構造を出発点に別の言語と対照すれば、初めて概念構造と言語構造の違いが明らかになる。これから動詞の意味構造の記述により具体的な方法を求めて、研究を進めるべきである。

参考文献

1. Anderson Stephen: "Inflectional morphology" Shopen, 1985.
2. Bechert Johannes: "Konvergenz und Individualität von Sprachen", in Boeder W.: "Sprache im Raum und Zeit; Band 1", Gunter Narr, Tübingen, 1998.
3. 文化庁: 「外国人のための基本語用例辞典」、第三版、大蔵省印刷局、1994 年(1971)。
4. Croft W.: "Typology and Universals", Cambridge University Press, 1990.
5. 大辞林→47. 松村 明
6. Duteil F.P.: "Zum Problem der quivalenz in der kontrastieven Linguistik", in Boeder W.: "Sprache in Raum und Zeit; Band 2", Gunter Narr, Tübingen, 1998.
7. Eco U.: "The Limits of Interpretation", Indiana University Press, Bloomington, 1990.
8. Edwards John: "Multilingualism", Penguin books, London, 1995.
9. Fillmore C.J.: "Toward a modern theory of case", The Ohio State Univ. Project on Linguistic analysis, Report No.13
10. Greenberg J.H.: "Universals of Human Language", Stanford UP, Stanford, 1978.
11. Hakulinen A., Ojanen J.: "Kielitieteen ja fonetiikan termistöä", SKS, Forssa, 1976.
12. Hakulinen A., Karsson F.: "Nykysuomen lauseoppia", SKS, Jyväskylä, 1979.
13. ヘルマン H.、小熊 均訳: 「詳説 言語心理学」、誠信書房、東京、1978(1975)。原本: Hörman H.: "Psycholinguistics", Springer-Verlag, 1971.
14. 池原 悟: 「日本語語彙大系 1・意味体系」、岩波書店、1997 年。
15. 池上 勝之: 「新和英中辞典(第 6 刷)」、研究社、東京、1997(1933)。
16. Ingo Rune: "Lähtökielestä Kohdekieleen", WSOY, Juva, 1990.
17. 石綿 敏雄: 「現代生活の語彙量」、佐藤 喜代治 編集: 「講座日本語の語彙、第 7 巻 現代の語彙」、明治書院、1982。』。
18. 石綿 敏雄、荻野 孝野: 『結合価から見た日本文法』、水谷 静夫: 「朝倉日本語新高座 3、文法と意味 I」、朝倉書店、1983。
19. Itkonen Esa: "Maailman kielten erillaisuus ja samuus", Gaudeamus, 1996.
20. Jackendoff Ray: "Semantics and Cognition", MIT Press, Cambridge, 1983.
21. Jackendoff Ray: "Semantic Structures", MIT Press, Cambridge, 1990.
22. Jakobson R.: "Beitrage zur allgemeinen Kasuslehre: Gesamtbedeutung der russischen Kasus", in: Roman Jakobson: "Selected Writings II. The Hague, 1971(1936).
23. Jämsä Tuomo: "Suomen kielen yleisimpien verbien semantiikkaa", Oulun Yliopisto, Oulu, 1986. (博士論文)
24. 亀井孝・河野六浪・千野栄一: 「言語学大辞典・第 6 巻・述語編」、三省堂、東京、1996。

25. Kangasniemi H.: "Sana, merkitys, maailma", Finn Lectura, Helsinki, 1997.
26. Karlson Fred: "Suomen peruskielioppi", SKS, Jyväskylä, 1983.
27. 基本語用例辞典→4. 文化庁。
28. 金田一 春彦・林 大・柴田 武: 「日本語百科大事典」、大修館書店、東京、1988。
29. 金田一 京助 編: 「新明解国語辞典」、三省堂、1972。
30. 児玉徳美: 「言語のしくみ」、大修館書店、1991、
31. 国立国語研究所(宮島 達夫): 「動詞の意味・用法の記述的研究」、秀英出版、東京、1975(1972)。
32. 国立国語研究所: 「日本語教育指導参考書 4、日本語の文法(上)」、大蔵省印刷局、1978。
33. 国立国語研究所: 「語彙の研究と教育 上・下」、大蔵省印刷局、1985。
34. Koller W.: "Einführung in die Übersetzungswissenschaft", Quelle und Meyer, 1979.
35. 近藤 いね子、高野 フミ編: 「プログレッシブ和英中辞典」、小学館、1986。
36. 広辞苑→49. 新村 出
37. Kotimaisten kielten tutkimuskeskus: "Suomen kielen perussanakirja", Painatuskeskus, Helsinki, 1995.
38. 國廣 哲彌: 「意味論の方法」、大修館書店、1981。
39. 国広 哲弥: 「理想の国語辞書」、大修館書店、1997。
40. Laalo K.: "Säkeistä patoihin", SKS, Vaasa, 1990.
41. Lado R.: "Language Testing: The Construction and Use of Foreign Language Tests. Longman, 1957.
42. Leino Pentti: "Suomen kielen paikallissijat konseptuaalisessa semantiikassa", HYskl, Helsinki 1990.
43. Lyons, J.: "Semantics", Cambridge University Press, Cambridge, 1979(1977).
44. Marr D.: "Vision", W.H. Freeman, San Francisco, 1982.
45. 松村 明 編: 「大辞林、第二版」、三省堂、1995(1988)。
46. Mustajoki A.: "Mielestä kieleen", Yliopistopaino, Helsinki, 1993.
47. Nida Eugene A.: "Towards a Science of Translation", Leiden, 1964.
48. 新村 出 編: 「広辞苑、第三版」、岩波書店、1991(1955)。
49. 大久保 愛: 「乳幼児の言葉の世界」、大月書店、東京、1993。
50. Pinker S.: "The Language Instinct", Harper Perennial, New York, 1995.
51. プログレッシブ和英中辞典→37. 近藤 いね子
52. 佐久間 鼎: 「現代日本語の表現と文法」、増補版、厚生閣、1966 年、
53. Sapir Edward: "Language", HBJ, New York, 1921.
54. 柴田 武、国広 哲弥、長崎 善郎、山田 進: 「言葉の意味 1、辞書に書いてないこと」、平凡社、東京、1992(1976)。

55. 新明解国語辞典→31.金田一 京助
56. 新和英中辞典→17.池上 勝之
57. Taylor J.: "Linguisic categorization", Clarendon, Oxford, 1991 (1989).
58. Tesnière L.: "Eléments de syntaxe structurale", Klincksieck, 1959.
59. 角田 太作: 「世界の言語と日本語」、くろしお出版、東京、1991。
60. Vygotski L.S.: "Ajatteli ja Kieli", Weilin+Göös, Espoo, 1982. ロシア語の原作:
"МЫШЛЕНИЕ и РЕЧЬ", 1931.
61. Wagner K. H.: "Kontrastive Linguistik", in Arnold H.L.: Grundzüge der Literatur-
und Sprachwissenschaft, Band 2, München, 1974.
62. 渡辺 実: 「日本語史要説」、岩波書店、東京、1997。
63. Weinreich U.: "Explorations in semantic theory", in Sebeok(ed.), Current trends in
linguistics, 3, Theoretical Foundations, Mouton, 1966.
64. 安井 稔: 「新言語学事典」、研究社、東京、1993(1971)。

用例作品

- (阿川弘之) 阿川弘之:「山本五十六」、新潮文庫、1978。
- (暗夜行路・前)* 志賀 直哉:「暗夜行路・前」、岩波文庫、1921。
- (或る女・前)* 有馬 武郎:「或る女・前」、岩波文庫、1913。
- (新しい繊維)* 桜田 一郎:「新しい繊維」、現代の教養・学問の前線、1966。
- (B) つか こうへい:「小説熱海殺人事件」、角川文庫。
- (ベースボールマガジン)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (文) 文化庁:「外国人のための基本語用例辞典」、大蔵省印刷局、1971。
- (文芸春秋)* 国立国語研究所編:「総合雑誌の用例」、秀英出版、1956。
- (ブロンテ) エミリ・ブロンテ(阿部知二訳):「嵐が丘」、岩波文庫。
- (中央公論)* 国立国語研究所編:「総合雑誌の用例」、秀英出版、1956。
- (ダイヤモンド)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (田園の憂鬱)* 佐藤 春男:「田園の憂鬱」、岩波文庫、1917。
- (婦人倶楽部)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (婦人の友)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (藤原正彦) 藤原正彦:「若き数学者のアメリカ」、新潮文庫、1977。
- (福永武彦) 福永武彦:「草の花」、新潮文庫、1986。
- (二人の友) 森 鷗外:「二人の友」、新潮文庫。
- (冬の宿)* 阿部 知二:「冬の宿」、岩波文庫、1936。
- (護持院原の敵討) 森 鷗外:「山椒大夫・高瀬舟」、新潮文庫。
- (群像)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (破戒)* 島崎 藤村:「破壊」、岩波文庫、1906。
- (平凡百科 2) 「平凡社大百科事典」、平凡社、1984-1991。
- (平和)* 国立国語研究所編:「総合雑誌の用例」、秀英出版、1956。
- (放浪記)* 林 芙美子:「放浪記」、新潮文庫、1930。
- (本日休診)* 井伏 鱒二:「本日休診」、新潮文庫、1950。
- (家の光り)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (岩) 新村 出 編:「広辞苑、第三版」、岩波書店、1991(1955)。
- (ジット) アンドレ・ジッド:「狭き門」、岩波文庫。
- (実業の日本)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (実話雑誌)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (科学朝日)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (改造)* 国立国語研究所編:「総合雑誌の用例」、秀英出版、1956。
- (蟹工船)* 小林 多喜二:「蟹工船」、岩波文庫、1929。
- (硝子戸の中) 夏目漱石:「硝子戸の中」、角川文庫。

- (研) 池上 勝之:「新和英中辞典(第6刷)」,研究社、東京、1997(1933)。
- (帰郷)* 大仏 次郎:「帰郷」、新潮文庫、1948。
- (銀河鉄道の夜)* 宮沢 賢治:「銀河鉄道の夜」、岩波文庫、1926。
- (李陵)* 中島 敦:「季陵」、新潮文庫、1943。
- (汽車・酒) 個人のテキスト文章ファイルからの例。
- (こころ)* 夏目 漱石:「こころ」、岩波文庫、1914。
- (虞美人草) 夏目漱石:「虞美人草」、岩波文庫。
- (桑の実)* 鈴木 三重吉:「桑の実」、岩波文庫、1913。
- (末枯)* 久保田 万太郎:「末枯」、新潮文庫、1917。
- (明星)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (道草) 夏目漱石:「道草」、岩波文庫。
- (三浦哲郎) 三浦 哲朗:「忍ぶ川」、新潮文庫。
- (門) 夏目漱石:「門」、岩波文庫。
- (文鳥) 夏目漱石:「文鳥」、岩波文庫。
- (むらぎも)* 中野 重治:「むらぎも」、新潮文庫、1954。
- (明暗) 夏目漱石:「明暗」、岩波文庫。
- (日本及日本人)* 国立国語研究所編:「総合雑誌の用例」、秀英出版、1956。
- (鶏) 森鷗外:「阿部一族・舞姫」、新潮文庫。
- (仲子・上)* 宮本 百合子:「仲子・上」、岩波文庫、1926。
- (野菊の墓)* 伊藤 左千夫:「野菊の墓」、岩波文庫、1906。
- (農業世界)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (農耕と園芸)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (オあヘンリ) オー・ヘンリー(大津栄一郎):「警官と讚美歌」、岩波文庫。
- (オール読物)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (思出の記・上)* 徳富 健次郎:「思出の記・上」、岩波文庫、1901。
- (恩讐の彼方に)* 菊池 寛:「恩讐の彼方に」、岩波文庫、1919。
- (落城)* 田宮 虎彦:「落城」、新潮文庫、1948。
- (三四郎) 夏目漱石:「三四郎」、岩波文庫。
- (生) 個人のテキスト文章ファイルからの例。
- (青銅の基督)* 長与 善郎:「青銅の基督」、岩波文庫、1922。
- (世潮)* 国立国語研究所編:「総合雑誌の用例」、秀英出版、1956。
- (生命の暗号を解く)* 高瀬 良夫:「生命の暗号を解く」、現代の教養・学問の前線、1965。
- (世界)* 国立国語研究所編:「総合雑誌の用例」、秀英出版、1956。
- (新) 金田一 京助 編:「新明解国語辞典」、三省堂、1972。
- (真空地帯・上)* 野間 宏:「真空地帯・上」、岩波文庫、1952。
- (シットー) アラン・シットー(河野一郎訳):「長距離走者の孤独」、新潮文庫。

- (小) 近藤 いね子、高野 フミ編:「プログレッシブ和英中辞典」、小学館、1986。
- (小説新潮)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (小説春秋)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (潮騒)* 三島 山紀夫:「潮騒」、新潮文庫、1954。
- (主婦と生活)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (春琴抄)* 谷崎 潤一郎:「春琴抄」、岩波文庫、1933。
- (週刊読売)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (スクリーン)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (スタンダード) スタンダード(桑原武雄、生島遼一訳):「赤と黒」、岩波文庫、1958。
- (大) 松村 明 編:「大辞林、第二版」、三省堂、1995(1988)。
- (立原正秋) 立原 正秋:「冬の旅」、新潮文庫。
- (多情仏心・前)* 里見 弓亭:「多情仏心」、岩波文庫、1923。
- (高野聖)* 泉 鏡花:「高野聖」、岩波文庫、1900。
- (田辺聖子) 田辺 聖子:「新源氏物語」、岩波書店。
- (太郎手紙文例) 一太郎ワードプロセッサーの手紙文例。
- (哲学以前)* 出 隆:「哲学以前」、新潮文庫、1929。
- (闘牛)* 井上 靖:「闘牛」、新潮文庫、1949。
- (東洋経済新報)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (トルストイ) トルストイ(中村副):「アンナ・カレーニナ」、岩波文庫、1989。
- (つゆのあとさき)* 永井 荷風:「つゆのあとさき」、岩波文庫、1931。
- (吾輩は猫である) 夏目漱石:「吾輩は猫である」、岩波文庫。
- (笑の泉)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (野火)* 大岡 昇平:「野火」、新潮文庫、1951。
- (野球界)* 国立国語研究所報告:「現代雑誌九十種の用語用例」、秀英出版。
- (友情)* 武者小路 実篤:「友情」、岩波文庫、1919。
- (雪国)* 川端 康成:「雪国」、岩波文庫、1937。
- * (国立国語研究所:「動詞の意味用法の記述的研究」、秀英、1972)